遠地輝武著

石川啄木の研究

改造社版

遠地輝武著

石川啄木の研究

改造社版

私の啄木觀（序に代へて）

私は啄木の同時代の一人で、忠實な讀者の一人でもあつた。然し、私の眞に啄木を理解し得たのはつゐ、この一二年のことであつた。啄木の持つ積極性と消極性との矛盾が理解されるまでは、私には啄木が解らなかつたのである。

人は啄木の思想家的要素と藝術家要素との矛盾を指摘して、その何れかに重點をおいて見ようとする傾向がある。然し、實際は、この矛盾があつたればこそ、啄木の藝術の現實性が一層深められてゐるのである。啄木の持つ現實性は、二つの矛盾の中で養はれてゐる。一つは社會的矛盾であり、他は生理的矛盾である。この矛盾が理解されゝば、思想家としての啄木と藝術創作家としての啄木とが、一つのものであることが理解されるであらう。

然し、さうかと云つて、私は矛盾があるからその藝術家が尊いと云ふのではない。思想と藝術とが統一した形で表現されてゐる偉大な藝術家の系列をも私達は聯想出來る。たゞ、啄木の持つ矛盾の中に、彼の上に襲ひかゝつてゐた時代の苦惱と、彼特有の生理的條件とを知ることが出來

るのである。こゝに啄木を理解する鍵がある。

啄木の惱んだ矛盾は、その一つとして、私達の時代に關係のないものはない。その惱みは一層深く、その矛盾は一層烈しくなつてゐる。啄木の和歌の一つを讀むだけで、私達は彼を苦しめてゐた二つの條件を知ることが出來る。こゝに啄木の藝術家としての現實性がある。

秋田雨雀

一九三四、七・一一

生きた泉を汲みとるために

明治の全期を通じて、歌人（乃至詩人）としてよく一身に時代を具現し得たもの、啄木に若くはない。彼の道は、なほ現代にまでつながつてゐる。

彼によつて、はじめて歌のなかへ新しい生活と社會が取りあげられ、この古い藝術形式は劃期的意義を與へられた。だが、そのこと自身彼に取つては悲劇だつた。はじめ新しい形式の詩を志し、次に小説に志した彼は、どつちにも成功せずに「悲しき玩具」たる歌に成功したのだ。このことには無限の興味がある。

生活派的文學者として、彼は小説の二葉亭や泡鳴と共通したものを持つ。自分でも、泡鳴の蟹罐詰業遠征について「故人長谷川二葉亭氏の露國行の眞意を眞に解する事の出來なかつた文壇の人人は、岩野氏の此行に對しても全く冷淡であつた。（中略）此一事は（中略）實生活を顧慮する事を屑しとせざる現時の文學者批評家の、卑怯な、空想的な態度には關係してゐないと言へぬ。」（一年間の回顧）と書いてゐる。

數へるに堪えないほど多い明治大正の文學者藝術家のなかで、かう云ふ意味の藝術家が如何に尠いかは、むしろおどろきに値ひする。その理由はどこにあつたか？　それはともかく、その尠い一人として、昭和の時代に入るにつれて彼は著るしく光芒を強めて來た。ハイネが新しくよまれる時、彼の歌もまた新しくよまれなければならないのだ。實生活に即いてゐた點では、彼のはうがむしろ一層われわれに近いとさへ云へよう。彼を苦しませ、また闘はしめたところの反動的重壓は、今われわれのうへにもある。彼の生活と業蹟から生きた泉を汲み取る爲めに、彼の新しい研究は必要とされてゐるだらう。

遠地君の勞作については、ただ荒筋だけ著者から聞いてゐるにすぎないが、孜々として倦まないこの誠實な詩人兼研究家の仕事の價値と意義を、ぼくは友人の一人としてかたく信じたい。

一九三四七月

藤森成吉

自序

いまほど啄木がわれ〳〵の時代に鋭烈な批判的繼承を要求してゐる時代はない。しかも、今年は彼の生誕五十周年にあたり、この記念すべき年に、貧しいこの勞作を上梓することの出來たのを私は深く幸福に思ふ。

この書物は私が詩をつくりはじめてから十數年にわたる間の、最初の仕事らしい仕事ともいふべきものであつた。私が啄木の研究を思ひ立つたのは一九三二年の初夏である。それから急に興奮してきた何年かぶりに啄木を讀みはじめ、同じ年の秋の終り頃からやつと筆をとることが出來た。が、昨年六月末、漸くこの稿の第何回目かの推敲を終つた頃から、遂に日本のプロレタリア文學運動に劃期的な方向轉換がはじまり、私は一先づ新段階の理論的討論がどの方向に落着するかを待機の狀態でまたなければならなかつた。今「社會主義的レアリズム」の提唱を巡つて、日本のプロレタリア文學運動がどういふ激浪と鬪ひつゝあるかは、こゝに贅言するまでもない。それは嵐と時間の中の一ケ年を經て、いはゆる新情勢に對する新しい領野の開拓を持ちはじめ、か

つてない峻嶮な格鬪の世界においてレアリズム文學の創造的實踐に邁進しようとしてゐる。そこで私はこの春の初めに、新たな段階における啄木の意義について一項を書添へ、更に全般の修正と補訂とを加へたが、それでもなほ若干の不備をまぬがれないまゝで、この書を公にするに到つたものである。

それにしても私は本書を讀んでくれるひと／＼に對して、次の言葉を序するであらう。

私は世のつねの青年の如く啄木を愛誦した。だが、はじめ私の愛誦した啄木は彼の小說の隅々から頭をつき出してゐるロマンチックな小英雄であり、その詩歌の中の果てしない議論と感傷性とであつた。この廿歳的なヒロイズムとセンチメンタリズムとは、今でも彼がこの國に幾百萬かの愛好者を有する所以であり、また、彼を研究しようと欲するもののつねに念頭において忘るべからざるものであらう。しかし乍ら、やがて時代は私たちの前に新しい啄木を展開した。特に一九二九年において中野重治氏が啄木に關する意義深い感想を發表し、以來われ／＼の側の詩歌人による啄木の研究は、極めて明確に彼の思想及び藝術上の變遷、それと時代の考察に對する彼の苦闘との經緯等を明らかにして來た。私はそれらの諸研究に敎へられつゝ新しく彼を眺め、新しく彼を愛好するやうになつた。實際、彼はしば／＼私の前に驚異の天才として現れ、且つ甚だ微笑

ましき經寶ですらある如くに考へられることも否めなかつた。

啄木に關する硏究書は、すでに甚だ多い。その數多い硏究書の中に、更に私がこの一冊を加へようと欲するのは、從來われ〳〵の側からの硏究書ですら斷片的、部分的であつたのみならず、若しそれ世のいはゆる啄木硏究家たちによつてなされた數ある硏究は、全くたゞ興味本位の面白さ以上に出でないものが多いのに對して、私は彼の全貌をその成長の段階に應じて傳記的に描出し、特にその文學的遺產の諸問題を重視しつゝ系統的批判的に硏究することの必要を痛感せずにはゐられなかつたからである。

だから、私はさうした欲求から、全く私の思ふ通りに書いてみた。が、こゝで私の思ふ通りに書いたといふ意味は、徒らに啄木硏究の文獻を涉獵する好事家の方法を止めて、われ〳〵の藝術學的方法を手引きに、思ひのまゝに書いたといふことに外ならぬ。しかも一向意の如く完全な硏究となり得なかつたことは、私の未熟の致すところとして、大方の批判を仰かねばならない點である。

最後に、私は本書の中では相當やかましく現代短歌の問題を論究してゐる。このことは現代短歌の諸問題が、結局は、われ〳〵自由詩人の活動によつて以外に解決され得ないといふ私の確信

から、敢て人の議論にまで論難したものであるが、それにしては未だ議論が甚だ素朴に落ちてゐることは、これからの私の研究に残さるべき課題として見ていたゞき度い。特に本書を得るにあたつて、最初から最後まで畏友渡邊順三氏の御世話になり、しかも短歌の問題を論ずるにあたつて、しば〳〵同氏を引合ひに出してゐるのは、氏が日本のプロレタリア短歌運動の代表的先輩であると同時に、日頃の親しさに甘えた私の我儘からでもある。

尚、本書を完成するにあたつて、いろ〳〵の助言や激勵をいたゞいた郡山弘史氏、小熊秀雄氏、新井徹氏、龜井勝一郎氏、森山啓氏等に感謝したい。又、本書のためによろこんで序文を下さつた先輩秋田雨雀氏、藤森成吉氏には十分の謝意を表するものである。

一九三四年七月

遠地輝武

目　次

三、啄木の文學的遺産とその繼承

一、啄木の研究について

一、なぜ、啄木を研究する必要があるか？

すぐれたる詩人の仕事を見てみる時、我々はいつでもその詩人の出發が時代の迫害や、壓制に對する雄々しい解放の歌を「宣戰」することによつて始められてゐるのを見る。ホイットマンがさうであつた。彼がアメリカ・ブルジョアジーの新しい意氣や、英雄的な氣魄を代表してそれまでの地主的な舊勢力と鬪ひつゞけてゐたことはあまりにも有名であるし、又、ハインリッヒ・ハイネが「青春ドイツ」の先頭に立つて、既存の政治權力に反抗し、たゞ常に「現存するものへの顧慮なき批評」へと進まうとしたのも我々の忘ることの出來ない事實である。

このことは日本の詩人に於てもあまり異なるものではない（註一）。我々は明治にはじまる日本の新しい詩の歷史を繙いて、そこに幾人かの親しみ深い詩人を見出すことが出來るし、しかも我我の親しみを感じるそれらの詩人が、いつでも彼等の詩の仕事を現實の苦惱に向けて深く掘り下げ、そこから彼等をとりまく時代の環境に對して激しい反抗の意氣を示してゐる點で、甚だよく一致してゐることに氣付かずには居られぬものだ。

こゝに人々は石川啄木をもつて反逆の詩人と呼び、その詩歌と共に彼の短い苦惱の生涯を愛惜

せぬものは尠い。しかし我々が啄木を愛し彼に親しみを覺える所以も、その苦惱にみち〳〵た人生の全體に對する考察、物質的にも精神的にも彼に與へられた多くの矛盾や焦燥竝びにそれへの反抗性が、我々の時代のそれにたゞならぬ近さを感じさせ、且つ、そこから我々の胸に數々の考ふべき問題を與へずには置かないからだと考へられる。このことは今我々が啄木を研究して行く場合に、非常に重要な意義を持つものである。何故か？ いふまでもなく、今日我々は一九三四年代の日本社會に於て現實の眞實を歌はうとし、いはゆるプロレタリア文化の領域における「生きた人間」の生活――リアリズム文學（詩歌）を建設しようとしてゐる。我々は保守と僞瞞とにみちみちた資本主義社會のあらゆる矛盾を剔抉し、つねに文化・文學の領域に於ける封建的なもの、ブルジョア的なものへの否定的な立場をとり乍ら、全體としてはそれの……、同時に過去文化が蓄積し來たり、又、蓄積しつゝあるところの一切の事象を批判的に攝取して、それを發展的に解決すべき眞理の擁護者に外ならない。全く我々の頭上には最早やブルジョアジーが遂にそれをなし得ない藝術創造の發展、過去文化・文學遺産の正しい繼承、及びそれをプロレタリア運動の實踐的方向と結びつけていふところの具體的歴史的な現實の内在的諸矛盾、すなはち所與の時代の複雜な全體性を文學的詩的に形象することの重要な任務が、それ自體の發展と鬪爭に於ける鞭の道として負はされてゐるのである。だが、我々に負はされたこれらの歴史的任務及び必要

性は、畢竟それがプロレタリア詩を我がものとして自己階級の解放のための文化的な攻防の具足にまで高めようとする日本プロレタリアートの止み難い欲求と云はねばならないし、又、その故にこそ、われ〳〵は反抗的な過去詩人の苦悶や、それらの詩人がその時々に於て示し得た時代の現實に對する積極的・消極的な見解（イデオロギー——技術——文學的形式の諸關係）について、その歴史的制約性などを考察してみることが、今日、我々のプロレタリア詩建設の途上に極めて重要な當面の實踐的課題として提出されて來るのだ。

けだし、我々が詩人・石川啄木を研究してみる必要も、全く彼の苦悶にみち〳〵た生活、その時代の現實に對する積極性と消極性（時代の制約性）とを選り分けて、何が我々の詩製作の實踐に役立つか及び彼のイデオロギーと文學的技術との關係等々を見究めようと欲するに外ならない。と同時に、それと關聯して、特にこゝで我々が附言するなら、彼が現在に於ても甚だ多くの愛好者を有し、しかもそれらの愛好者の間に、未だ社會思想家としての彼が甚しく歪曲して認識され、追隨されてゐる事實からこの「進歩的詩人をその誤れる追隨者共から彼を正當に取りもどすとにある。」——昔さわることによつて象を知らうとする三人の盲目が居た。——と、かつて中野重治氏はその論文によつて彼が最初に啄木の正系を見究めた「啄木に關する斷片」の中で語つてゐる。——一人は耳にさわり、一人は尾にさわり一人は脚にさわつた。第一の盲目は言つた。「象とは巨大な團

扇の如きものだ。」第二の盲目に言つた。「否、象とは巨大な壁の如きものだ。」第三の盲目が言つた。「否！ 否！ 象とは巨大な圓柱以外の何ものでもない。」

我らをして我らの愛する啄木をかゝる盲目的曲解者共から奪還せしめよ！ 我らをして彼の詩業の中に複雑を殘そるその觀念的虚無主義とナロドニキツームとに拘らず、彼の眞實の姿を、彼の方向を明確に感じとらしめよ。必然こそ最も確實な理想である。彼の理想を復活せしめよ。彼の相貌をして石碑の建立の必要性に限らしめるな。」（註二）と。

それにしても、こゝに我々は何を啄木から學びとるかについての具體的な研究に移る前に、一應、どういふ啄木を念頭において彼を理解して行かねばならないか、すなはち、彼の明治詩歌史上における位置、その理想の方向、その理想等々について、及び、どういふ方法によつて彼を研究することが最も正常であるかに關する、若干の豫備知識を持つてゐることにしよう。

註一、本書第九頁以下頁参照。

註二、中野重治著「藝術に關する走り書的覺え書」二四一頁「啄木に關する斷片」参照。

二、どういふ啄木を念頭におくか。

——特に彼の思想及び理想の方向について——

明治の詩歌史上に、啄木がどんな位置を占めてゐるかは極めて明瞭である。一九〇〇年（明治二十八年）日清戰役を經て第一次產業革命を飛躍的に發展せしめてゐた日本資本主義は、その資本主義發展のみづ〳〵しい歌ひ手として、若い浪漫的感傷詩人を生んだ。彼等はそのうち若い市民的インテリゲンチャの心情をもつて、たゞ歌ひ、且つ歌ふことによつて當時の現實にいかめしく殘存してゐた封建的イデオロギーへの反抗を示した。が、これらの夢想的な詩人たちが、何をその與へられた世界で夢想しようとはおかまひなく、やがて日本資本主義が日露の役を經て更に大いなる產業革命（重工業を中心とした）の段階に突き進んだ時、彼等の一群は後退してブルジョア化した。啄木はこれらの若々しい浪漫詩人として、「明星」に育てられ、しかもこの「明星」一派が退いてブルジョア化するや、彼等と別れて現實に向つたといふよりも、彼をして夢想を破らせたもの、考察に向ひ、特に日本自然主義の敗亡期に當面するや、その疑惑を自然主義の本體に向け、あらゆる苦悶を經驗しつゝ彼の所謂社會主義詩人の「宣揚」に立ち到ることが出來た詩人であつた。まことに啄木こそは、日本における社會主義的詩歌史上の最初の一頁を占める詩人であり、生活の激浪と暴風の中によく生き、よく戰ひ、且つ數限りなく悩みつゝ、藝術家の反抗を身をもつて示し得た苦悩の子でもあるのだ。

が、それにしても彼の理想や理想の方向は？　といふよりも、こゝで我々の注意するのは、當

然、人生を思考する啄木の態度及びその苦惱や反抗の性質についてでなければなるまい。すなはち若し、啄木の努力が人生に對する苦惱ではあるけれども、それが何等歴史的現實の内在的な矛盾を批判的に把握しようとする努力、その故の苦惱、その故の反抗でなければ、それは我々にあまり意義あるものと云へないであらうし、又、それと違つた苦惱や反抗の詩歌から、我々は決して深さや、擴がりを、及び我々の時代への近さをも感じ得ないであらうからだ。

　では、再び啄木の人生を思考する態度は？　その苦惱や反抗の中にかくされた彼の理想や理想の方向は？　だがそれを知らうとする前に一體、歴史的現實の客觀的な眞實を把握しようとする努力なき詩人――さうした詩人の苦惱や反抗がかつてあるであらうかといふことから考へてみて、それから我々が念頭におくべき啄木を考慮してみよう。

　確かに、いはゆる現實の客觀的眞理への到達を意欲することを放棄し乍ら、そのくせ苦惱や反抗を與へられた世界で歌ひ得た多くの詩人がかつてあつたし、今も存在してゐる。我々は極めて手近かな詩人たちを拾つてみても、そこに多くの「よき詩人」として尊敬されつゝある人々を數へることが出來る。例へば第一には藤村に於て、第二には朔太郎、犀星に於て、そしてその亞流たちがすべて師匠たちの弱點を掘り下げて證據づけるように、明治大正の詩歌史を彼等の色とりどりなブルジョア的虚飾でおほひつくさうとしてゐるところに於て……

先づ藤村について簡單に見てみよう。彼はその詩集（註一）の序で言つてゐる。

「新しきうたびとの群の多くは、たゞ穆實なる青年なりき、されどまた僞りも飾りもなかりき、青春のいのちはかれらの口脣にあふれ、感激の涙はかれらの頰を傳ひしたり。こゝろみに思へ、清新橫溢なる思潮は幾多の青年をして殆んど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。

われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの聲に和しぬ。」

これで見ても明らかな通り、今から見てあんなに優しく思はれる藤村の詩も、その當時にあつては「彼の環境とその推移とそれが齎した新しい教養とが彼の中にかき立てたところの、みづみづしい感情と感動とを、それを堰きとめてゐた石壁に孔をあけて思ふさきに流し出すことでもつて」（註二）合圖された「僞りも飾りもない」解放の叫びであつた。それは彼がそれまで「抑壓され、監禁されつゞけて來た」狂せんばかりの苦悶、そこから生み出された反抗のしるしであり、從つて、それこそ客觀的には「舊來の詩歌觀、倫理觀、考へ方一般に對する、かう云ふやり方での宣戰だつた」と評すべきものであつて、若し我々が藤村の詩に、何等かの歷史的な示範をもとむるとするなら、勿論、我々はこの苦悶と反抗とを、彼が齎らす唯一のものと考へなければなるまい。

けだし我々の愛する藤村はそこに在るし、又、そこでこの親しみは極限される。なぜなら、このやうにして、一體藤村の詩作が既存の詩歌觀、倫理觀及び考へ方一般に對する宣戰であつたとしても彼は少しも、それを自身で意識してはおらなかつたし、殊に大切なことには彼がそんなに欲求して止まなかつた新しい感情の解放も、それがこの現實に於ける何物に由來するかは、遂に最後に到るまで彼の理解しなかつたところであり、且つそこには詩を客觀的現實の眞を極める仕事として理解することの出來ない詩人が、つねに自ら暴露せずには居れない「歴史的本質」への無理解さを、たゞ色濃く露呈してゐるに過ぎないとの批判をまぬかれ得ないからだ。

　實際、藤村は何よりもまづ歌ひ、歌ふことにのみ彼の「感激の涙を頬に傳へた」のであつた。「一方から、それは既成の詩歌觀、倫理觀、考へ方一般に對しては、客觀的には、即ち存在としては、——戰ひだが、それ自身のための——主觀的の、即ち主張としての——戰ひではなかつた。從つて彼は主として戀愛、そして軟弱なものとして當時目隱し的に排斥されてゐた感情の解放を、それとして歌つたのであつて、戀愛を蔑視するもの、彼にとつて忽せにし得ない強力な眞實を軟弱だとして排棄するものに對する反感や、反抗やは、それ自身直接には彼の對象となり得なかつた」（註三）のである。しかも我々はこのやうにして藤村が歴史の顯現する複雜な内在的矛盾の抉摘に、いひかへるなら客觀的眞實に對する一歩手前なもの、すなはちたゞ「彼の意味に於

かゝけろ」だけでの感情解放を遂げて、一先づ日本の新しい詩型の初期のアカデミズムを完成した功績は忘れないとしても、斯ういふ彼の反抗、苦惱、そして斯うした仕方での人生に對する思考の態度を、我々の方法として、從つて我々の詩作の實踐に何ものかをプラスするものとして肯定することは許されないし、又、これをそれ以上に過大評價することも許さるべきものではない。

ところで、藤村のかゝる苦悶に對して、朔太郎や犀星らがどんな苦惱を持ち、又どういふ反抗や憤怒を彼等が持つてゐたかをみてみよう。

一九一六年（大正五年）、この二人の「よき詩人」たちは共に起つて感情詩社の運動をおこした。それはいふまでもなく藤村泣菫等によつて築かれた初期の詩型を、そこに盛り切れなく溢れ出て來た新しい感情をもつて叩きつぶし、その新しい感情を盛りきるための新しい詩形式を確立するための戰ひであつた。「古い形に盛られた古い感情は歌はれつくした。そして新しい感情は古い形に盛り切れなくなつて居た。」かくして、當時この古い形をたゝきつぶすための仕事を、感情詩社の詩人たちがどんなに眞劍にやつたかは、人々の知つて居る通りであるが、しかし、こゝでも大切なことにはそのたゝきつぶされた古い形の跡に、どういふ新しい形が、新しい形を必要とした現實とのどういふ關係で創り出されねばならなかつたかといふことに對して、全く彼等がその無知を示しつゝあつたといふ點であつた。そのことについても中野重治氏は、極めて正しい見

解を述べつゝ我々に教へてゐる。

「古い形はたゝきつぶされた。そして新しい形が創られた。新しい感情と感動とはのびのびと手足を伸ばして行つた。だがこの時もやはり、その新しい感動がどこから來たかは考へられなかつた。新しい感情はそれとして歌はれ、詩人にその新しい感情を與へたものをどうにかしようといふこと、與へられた感情を歌ふだけでなくその與へられたものへの感情を歌ふといふことは考へられなかつた。（いふまでもなく新しい感情がのび〳〵と手足を伸ばして行つたといふことは、のび〳〵とした感情が手足を伸ばして行つたといふこととは違ふ。）新しい感情はむしろ、辛い、淋しい、不幸な、我慢のならないものを多く含んで居たのだ。萩原朔太郎氏に就て言へば『月に吠える』と『青猫』との殆んど全作品がそれを示してゐる。『月に吠える』が現れ、『青猫』が現れた時、人々は感心し、けれども彼等を感心させた表現を必要とした感情がどこから來たかを明らかにしたかつた。（だから彼等は模倣した。間違つて、そして描く。）彼等がそれを明らかにしなかつたばかりでなく當の萩原氏自身も明らかにしなかつた。もし氏がそれを明かにしたのであつたなら、恐らく私等は別な『青猫』を持つただらう。そこには恐らく幾分の憤怒が盛られただらう。實際には憤怒は盛られなかつた。憤怒は『郷土望景詩』に至つて初めて洩らされた。鋭くめづらしく『洩らされた』といふよりも吐き出された」（註四）

では、そこに吐き出された憤怒とはどんな憤怒か？　そして、それは誰に向つて投げられて居つたか？　その苦悶、憤怒、反抗性は我々の書き分けることによつて、次の如く表式化される。

（一）一小都市のよき家庭に育つた詩人の一人としての朔太郎氏は、その故にいやがおゝでも唯心的な孤獨な詩人とならねばならなかつた。（彼は從つてその辛い、淋しい、不幸な自身の環境に孤獨な苦悶を抱きかゝへしめられる。）

（二）しかし乍ら、かゝる苦悶にも拘らず、この小都市はその諸要素をあげて唯心的孤獨に住む朔太郎を壓迫し、氏は益々苦悶し乍ら、そこから一方の吐け口に「超俗性」を見つけると共に、他方その苦悶の中から一つの「反抗性」をその芽生えとして發備せしめることが出來た。が、この場合、氏の「反抗性」が「超俗性」よりも弱かつたこと、氏の完成して行つたのが前者ではなく後者に屬してゐたことは云ふまでもない。

（三）かくして氏は「憤怒」し、「反抗」したけれども、その鬪ひは何故に水が恐らしいかをたしかめようとする狂水病者の心理をもつて、その狂水病者の心理を見究めようとし、氏が自分自身で育つてゐるやうに「燈火の周圍にむらがる蛾のやうに、ある花やかにしてふしぎなる幻像にあざむかれ、そが見えざる實在にふれようとして、むなしくかすてらの脆い翼をばたばたさせるに過ぎなかつたことは云ふまでもない。かくして、こゝには物の本質を最後の一片まで突き

つめて考へることを厭がる朔太郎の危険な憤怒と、その憤怒を感じる詩人たちが、たゞ従前の如き安穏な「環境」でおかれなくなつたことを證明してゐる外は、氏の「憤怒」や「反抗」の性質が、従つて人生を思考する氏の態度が、結局朔太郎の置かれてゐる環境そのものに向けられたところの、そして絶えずかゝる憤怒を感じてゐる詩人の心理を、全く理解せず又理解しようとしない者に對する憤怒であり、反抗であり、思考の仕方であることとの以外に何ものでもないことを物語つてゐるに過ぎないのである。

實際、この憤怒、反抗は「狐どもに追ひつめられた虎の憤怒であり」「反抗」である以外には何ものでもない。殊にそれは氏自身が常に感じて止まなかつた孤獨な、辛い、淋しい、悲しい苦悶として、若しそこからこれを掘り下げて行く方向が歴史的現實の眞に近づくための努力に向けられてゐたなら、必ずや、全く別個な反抗となり、憤怒となつたであらう所の。しかしそれがさういふ方向にむけて掘り下げられて行かなかつた所に、畢竟、それは人生を思考した苦悶や反抗ではあるけれども、逆に眞理を愛する我々には親しみ難い、そこで喰ひ違ひを生んだところから、我々と氏の仕事とに遠い距離を與へしめずにはおかなくしてゐるのだ。——云ふまでもなく、この反抗は搾取されつゝあるものの、それ自身が、必然に持たねばおれない反抗とはならないで、働きつゝあるもの、搾取されつゝあるものを眺め、傍觀するブルジョア的「自由人」の憤怒的自

嘲となつて終る。それは自己を嘲ふと共に、他を嘲ひ、そこを飛び越すことなくして、超脫へ、ニヒリストの類似へと急ぐ。そして、それがすべてになつて「消滅する小ブルジョア的」反抗の終局を結ぶのである。我々にとつては、たゞこれら日本の自由詩家たちが、過去の極端な詩歌の定型律を破壞し去り、口語詩の新しい型を完成させて、物の實感を詩に歌ふための、從來の煩瑣な手續をなくしてくれたこと、及びその小ブルジョア的反抗にもかゝはらず、反抗し、憤懣することの道すがらに、眞實なものへの接近が約束されつゝあることを敎へてくれたことを、彼等がプロレタリア詩に與へた唯二つの大きな遺產であつたことを忘れてはなるまい。

けだし、我々は斯くして今や明治大正の「よき詩人」と呼ばれるおほむねの詩人たちが各ゝその稟質に應じて多かれ少なかれ苦闘し、反抗を示し乍ら、遂に彼等がその頭にいたゞいた直接の障壁を見出すことなくして終つてゐるのを見ることが出來る。それは歷史をつねに正しく認知する努力から、自らを回避したブルジョア詩人の罪惡である。殊に日本のブルジョア詩人たちは、日本のブルジョアジーが未だ健康な青年であつた時代にすら、その歷史的役割を潑剌として果し得なかつた如く、遂に詩人たちも亦それとしての健康なブルジョア詩を生んでゐない。それは明治の新しい詩運動がブルジョア詩開發の運動には相違なかつたけれども、そこには未だ多くの封建的な諸要素がぬぐひ去ることなくその內部にふくまれて居つたからだ。では、それは一體何に

由來して居つたか？　といふことも、一應心得ておくことにしよう。けだし極めて簡單にいふなら、それはブルジョア革命としての明治維新がブルジョア・デモクラシーを十分に確立してゐなかつたことに外ならないから――すなはち「明治維新の變革では、ブルジョアジーが獨自な階級としてその獨自な闘爭を展開したといふことがなかつた。のみならずブルジョア階級がたゞにその仇敵たる地主階級を徹底的に打破しなかつたばかりでなく、かへつて明治の新政府そのものが封建的な武家的地主政府の性質を多分におびてゐて、そこから逆に日本資本主義の成長を培養し、ブルジョアジーが帝國主義の段階に入つたことに應じてかへつて、それが野合してゐる地主的封建的な絶對主義を正面に押し出してゐるのが、明治維新、およびそれにつゞく資本主義日本の今日に到る歴史であつた。だから日本には地主階級を打ち破つて權力を握り、ブルジョア・デモクラシー樹立のために、徹底的にそれを戰ひとらうとした進歩的ブルジョアジーもなかつたし、況んや進歩の友としてのブルジョア文化の歌ひ手――詩人も現はれて來なかつた。勿論、一時日本にも民衆詩派（自稱ブルジョア民主主義詩派）と稱する一群の無知な詩人たちが出て、ホイツトマンやカーペンターなどの仕事をかつぎ出したことはあつたが、それも決して本質的なブルジョア民主主義の闘爭をやつたのではなく、從つて民衆の闘ひのために詩をつくつたといふのでも決してなかつたのだ。

さあ　日にやけた顔の私の子供らよ
達者でしつかりとついて来い　得物を用意しろ
ピストルは持つたか　研ぎすました斧は持つたか
開拓者たちよ　おゝ開拓者たちよ

私たちはこゝに手間どつてゐられないのだから
愛する人々よ　私達は行進せねばならぬ　危險の正面に立たねばならぬ
私達は若くて元氣な人間だ　すべての人々が私達をあてにしてゐるのだ
開拓者たちよ　おゝ開拓者たちよ

おゝ　お前ら若者達　西部の若者らよ
かくも逞り　元氣にあふれ　男らしい誇りと友情とに充ちたものども
私はハツキリと見るのだ　西部の若者たちよ　お前達が最先頭とともに歩いて行くのを
開拓者たちよ　おゝ開拓者たちよ

老年の人達は足をとゞめたのか
彼らは海の向ふでつかれ果て　意氣銷沈して彼等の過程を終へたのか
私達はその永遠の仕事と重荷と教訓とを引受けるのだ
開拓者たちよ　おゝ開拓者たちよ

私達はすべての過去を背後に殘し
更に新しい　更に偉大な　變つた世界の上に進出するのだ
溌剌として力強く世界を　勞働と行進との世界を私達はつかむのだ
開拓者たちよ　おゝ開拓者たちよ

私達は間斷なく枝隊をくり出し
崖をくだり　山路を越え　峻姐な峯々を登り
不可知の路を行きながら　征服し　固守し　向ふ見ずのことをやり　危險を冒すのだ
開拓者達よ　おゝ開拓者達よ

私達は原始林を伐りたふす
私達は自分らを惱ます河を塞きとめ　その中にある富源を深く掘るのだ
私達は廣漠たる地上を測量し　處女地をおこすのだ
開拓者達よ　おゝ開拓者たちよ

私達はコロラド州の住民だ
巨人のやうな峰からのもの　大山脈と高い高原からのものだ
鑛山から　また谷間から　狩人(かりうど)のそば路から　私達は來たのだ
開拓者達よ　おゝ開拓者達よ

――ホイットマン「開拓者」(中野譯)から――

まことに、この「何ものをも恐れぬ新興階級の面だましひ、封建的なもの地主的なものを一掃して全土を資本の下に征服せうとする、ブルジョア・デモクラシー樹立のために戰ふアメリカ・ブルジョアジーの」(註五)晴れ渡つた、奔騰する瀧水のやうな「決意」こそ、日本ブルジョアジーがそれを持たなければならなかつたところの、しかし、持たうとして遂に持ち得なかつたも

のである。しかもこゝに日本ブルジョアジーの、從つて日本のブルジョア詩の特徵があり、それはすでに述べ來たつた藤村、朔太郎等の特徵として、それ〲に彼等が彼等の意味での完成、發展を遂げしめて來た。そしてそれらは今やげに純粹なる、純粹なる藝術至上主義の袋小路で、ファッショ化の姿に變貌をとゝのへつゝある日本のブルジョア詩として、それが今日に到るまでのそれ〲の時期で示し得た代表的な相貌に外ならぬことを、我々は知つておかねばなるまい。

さて、我々は大分なが〲と明治大正期におけるわが國のすぐれたるブルジョア詩人について、その人生を思考する態度、その苦惱及び反抗の本質について見て來た。

ところで今や我々がそれを念頭におくべき石川啄木も、斯ういふブルジョア詩人の一系列乃至はそれ以下のものとして、彼の人生に對する思考の仕方を、その苦惱及び反抗を徒らな身邊雜事的、末梢感情的、乃至は現實の暴風から自身を防衛することによつて、いはゆる頽廢的なナンセンスの世界に逃避したものたちと、同一に理解しなければならないであらうか。否、斷じて否であると私は考へる。

第一に、彼がそこに捩ぢ向けた苦惱が「單に完成せる藝術を創ること、そのこと（言ふまでもなくかやうなものは事實ない）を目指さずして、直ちに人生の全般的考察を目指した點」で、

第二に、彼がこの現實に存續する「現在の家族制度、階級制度、資本制度、知識賣買制度の犧

性」について、及び「國家組織――道德の性質」等々について、それを見究め、且つ彼の苦惱の本質をそこからつかみとらうとする努力を示し得た點で、

第三に、時代閉塞の現情を認知し、終に「明日の考察」に到らねばならなかつた彼、そしてそこから彼が眞實の苦惱を苦惱し、觀念的にではあるが反抗の血くだを膨きたゝせてゐる點で、

第四に、アナキズムの誤謬を發見し、「一切の美しき理想は皆虚僞である。」そして、「そこに殘る唯一の眞實――『必要』！　これ實に我々が未來に向つて求むべき一切である。」と叫んだ日から、彼の思ひつめた胸には最早や科學的社會主義の明らかな未來が輝いてゐたことを認知し得る點で、

第五に、かくして彼がそこに到達し得た地點から歌ひあげた多くの詩歌の中に、よし觀念的虚無主義とナロードニキズムの痕跡が多分に殘滓されてゐやうと、彼の求むる眞實の姿が、我々の求めて止まない客觀的眞實と極めて近くに存在してゐる點で、從つて明治の詩人中たつた一人彼によつて我々のプロレタリア詩運動が前ぶれされてゐることを確認することの出來る點で、

第六に、その他等々……の理由から、我々は啄木の努力をその苦惱や理想の方向を、全然、他のブルジョア的な明治の詩人たちから、區別して考へねばならないことを知るものだ。

實際、啄木の苦惱は、「つとめて苦惱」したハイネのそれと對應するものであつた。一八〇〇

年代（第十九世紀）の初頭に「生れて間もたいいたいけなプロレタリアートの底流を内包」しつつ著しく勃興して來たドイツ・ブルジョアジーが、その「既存の一切への顧慮なき批評」を必要とした時、パリに舉げられた七月革命（一八三〇年）ののろしに拍車された「若きドイツ」の一群の詩人たちは、その先頭にハインリッヒ・ハイネの名をかゝげて「既存の政治權力への反抗」を闘つた。當時、ハイネの揭げて進まうとした「現存するものへの顧慮なき批評」への努力は、その批評が「それの結果を恐れないことを意味すると同時に、現存するもろ／＼の權力との衝突をも同じく恐れない」ことを意味してゐたこと、おまけに、その眞實の綱領が、その時いまだ幼なくいたいけなかつたドイツ・プロレタリアートの成長の上に、やがて彼自身のドイツ・ブルジョアジーそのものへの批判を潜伏させてゐたことは言ふまでもない。（註六）

――かくして「時代の矛盾と激動を體驗して、自國における『精神のバスチィユ』たるものに對し、最後的な迷信の『三人の×』に對して闘ふことが出來た」（註七）ハイネ、「極めて厚顏無恥なる方法によりキリスト教を攻撃し、既存の社會事情を誹謗し、あらゆる規律及び道德を破壞せんとすることと明白なるに鑑み」て、その著書の流布を嚴禁されたハイネ、一八三〇年代のドイツが、この革命思想家、詩人・ハイネを持ち得たことは、それがドイツの世界に誇るべき名譽である如く、我々は一九〇〇年代の初頭の未だ幼弱だつた日本プロレタリアートの萌芽期に進歩思

想家・詩人石川啄木を持つたことを、日本のプロレタリア詩運動の最初の誇りとして記憶し、ながく語りつゞけねばならぬと考へるものだ。

啄木がその晩年において社會主義者であることを止めたとする説がある。明治四十四年五月、啄木は或る日土岐氏と「隠遁」といふことについて語つた。「此の頃はもう養生する金もなくなつたし、何か書きたいにも書く程の勇氣は出ないし、實に下らない世の中になつた」（土岐氏宛手紙）頃である。當時、啄木の頭の中にはある大きな問題、一生つゞきさうなその問題をだん／＼考へたくないといふ氣分が濃厚になり「僕は何よりも金が欲しい。そしてその金を持つて、隠遁したい」といふ風なことを、土岐氏に述べたといふ彼の記錄を、私も或る偶然な機會から見ることが出來たが、これが果して彼が社會主義者であることを止めたとする説を生んでゐるのかどうかは知らない。我々は必ずしもかゝる説を根據なきものと否定することは出來ないが、だからといつてかゝる風說の肯定を速斷しようと欲するものでもない。こゝで土岐氏と「隠遁」について語つた啄木の心情は、それが病苦に堪え難い或る日の彼の刹那的、感傷的心情に外ならぬと解すべきであらう。と、同時にまたよし啄木が社會主義者たることを欲しなくなつたとしても、一度、明日の考察」に到達し、火を吐くやうな情熱をもつて自己の社會主義者を宣し得た彼の輝ける思想的苦悶を少しも傷つけるものにはならないと信ずる。我々は啄木を必要以上に過大評價すること

をさけなければならないとしても、今彼の欲した「隠遁」の心境について思考する時、そこにふかぶかと横はる「思想」と「肉體」との斷層を、現在の問題として十分重視することの出來るものだ。兎まれ我々は啄木の曲辯者に對しては斷乎と戰ひ、彼等の好んで蒐集し得た資料と、我々の時代の科學的な研究方法とをもつて、彼が如何にその短かい生涯を自ら好める「反抗」のほてりで燃えつゞけ、且つ、それ故に己の病苦をもラヂカルに苦悶し得たかを見究めて行かねばならぬ。それが啄木研究者に與へられた現在の意義であり、又彼の遺した文學的遺産を正しく繼承する方法を探りあてる唯一の道でもある。

註一、全巻末付録集。

註二、三、四、五、中野重治著「前掲書」二〇九頁（第十號景詩に現れた憤怒）及び同人「ブルジョア詩の批判」（「綜合プロレタリア藝術講座」第四巻）參照。

註六、中野重治著「前掲書」二九三頁。（ハインリヒ・ハイネを斷片する）參照。

註七、森山啓譯「ハイネ詩集」三八一頁。（ハイネに關する斷片）參照。

三、啄木の研究方法について

我々の啄木研究は次の如くなされる。――それは自然及び人生のあらゆる事象を、最も赤裸々なる眞實に於て、根柢から認識し得る歴史的社會的方法、――唯物史觀の立場に立つてのみ可能といはねばならないからである。

卽ち、そのために我々は何よりも先づ啄木が時代のどんな環境に生き、それと闘つて來たかを見なければならない。前にも述べたやうに、一八八五年（明治十九年）彼が東北の片田舍に生れてより、漂泊と病苦と貧窮との中に、その若くして苦惱にみちた二十七歳の生涯を終る一九一二年（明治四十五年）迄の期間は、日本の若い資本主義が二つの大戰に勝ち、その資本主義的基礎を世界帝國主義國家間の環につなぎとめるための着々たる準備工作に忙殺されてゐた時期であつた。戰役ごとにその歩幅をひろめ、地歩を强固にして來た日本資本主義は、しかし乍ら日露の役前後より（正確には三十年代の初めより）、遽にその進歩性をとゞめて保守的段階に入り、一方に於ては封建的地主的な舊勢力とのブロック的關係を强固化して自己の支配權を確保することにつとめると共に、他方、必然に社會主義運動…………………、未だいたいけな日本プロレタリアート……………斧鉞をふるつた。しかも、それはかゝる反動期を形成することによつて更に「自己の內部整理と質的轉換とに沒頭」すること十年、やがて歐洲大戰に際會して勃然と自身の相貌を世界帝國主義の花形に粉飾しかへるに到る、歴史的にも、社會的にも甚だ

興味ある期間であつた。

けだし、このことは文化・藝術（文學）の領野に於ても全く同様で、一八八〇年代の最初の二三年以後、そこに流行しはじめた「政治文學」の中で、はじめて日本ブルジョアジーの眞の使徒たる文學運動の源流を見てから、それは次第に國内に於ける產業革命の進行に促進されて、雄飛の途をたどりつゝあつた。先づ文學者の名をきらひ、「文學は男子一生の事業と爲すに足らず」と宣した二葉亭によつて、かへつてそれが「經國の大業」なることを明らかにされた。透谷の頭に咲いた「觀念的理想主義」の花は、それが大地に根を下して咲かなかつたが故に、遂にいはゆる俗人山路愛山の卑俗な實證主義を駆逐することを得なかつたとしても、それは今や彼とは全然別個な我々によつて正しく蘇らせられつゝあると共に、當時、それが彼の抱懐した本當の花ではないにしろ、彼によつて合圖され、そこから出發した若々しい自然主義的ロマンチシズムの絢爛な滿開を見ることが出來た。——獨歩は山林の中にある自由に憧れ、眞劍に開墾事業を夢想してゐる。更に、明星派の浪漫詩人たちは現實の片側だけを眺めて、資本主義發展の途上に數々の夢を歌ひ、そのうら若い小市民的インテリゲンチャ的心情のまゝに、これまで彼等を監視し、抑壓しつゞけて來た封建的イデオロギーの桎梏からの解放を勇敢に戰つてゐる。しかも、やがて現實の進行はこれらうら若い詩人たちの夢想にもかゝはらず、その夢を打破して自然主義を登場させ、

それの掲げる旗印のまゝに、封建思想、封建道徳との闘爭、ブルジョア道徳の確立、個人主義の確立に向はしめてゐる。かくして、自然主義こそは、人生に於けるあらゆる相貌の剔抉と暴露に進まねばならなかつたにもかゝはらず、遂に日本の自然主義はその方法をあらゆる事象に適應することから拒まれ、たゞ徒らに現實暴露の悲哀をのみ多くかち得て、その進むべき道から逸脱しはじめて行く時、こゝに我々はその背後をとりまく時代の環境を、人生の全般に對する考察を自身の問題として眞劍に考へはじめる詩人・啄木を持つのだ。

かくて、我々の啄木研究は、かゝる時代の歴史的背景と密接なる聯關に於て次に示す三つの手續きから究明しなければならない。

第一には、そのうら若い浪漫的感傷詩人としての彼であり、

第二には、自然主義に、從つて藝術と人生乃至は社會組織と關係に疑問を持ち、それを究明し、批評しようとした彼であり、

第三には、彼が自分を社會主義者なりと宣した晩年の時期についてゞある。

即ち、この手續きによつて、我々は先づ彼の思想及び思想の變遷について考へなければならない。なぜなら、それを檢討することなくしては、決して彼の詩歌についてもそれを正しく理解しすることとは出來ないし、又、そこから學ぶべき何ものをも引出すことが出來ないからだ、否、我

我は斯う云つたからとて、勿論、決して彼の思想とその藝術との間に何等か別個のものゝ介在してゐるやうに考へるのではない。反對に彼の藝術が、未だ充分に醱酵し得ずして終つてゐるにもかゝはらず、その思想の進展の跡をたどる時、全く明らかにその藝術の母體にまで透徹し得ると考へるからだ。

繰返して謂ふ。我々は啄木を過大評價することからいましめねばならぬ。

かくして、我々は以上に示して來た觀點に立つてのみ、我々の愛する啄木の苦悶、その反抗、その人生を思索する全風貌を、そこにくまなく浮彫することが出來るであらう。我々は啄木の本質を採り、彼の生涯の各時期に於ける内面的連絡及びその特殊性についても、こゝにそれを明確にしなければならぬ。

尚、參考までにこの研究に於て私の特に留意したい事柄を附言すると次の如くだ。

(一) 日本ブルジョアジーの勃興期に於けるロマンチシズム文學の特殊性について、――しばしばプロレタリア文學の問題として、ロマンチシズムの問題が提起され、特に社會主義的レアリズムの問題との關聯に於て革命的ロマンチシズムの討論がある今日、ブルジョアジーの勃興期に於ける一つの映像としての興隆的ロマンチシズムをプロレタリアートの勃興期に於けるそれとの關聯において考察してみることは決して無駄でないと考へるから。

二）　自然主義文學運動の日本に於ける特殊性に就て、及び特に「幻滅の悲哀」について——啄木がその故に苦悶し、その故に反抗の眞實へ到達することを得た、その手引きとも云ふべき自然主義を考察することなしには啄木を完全に理解することは困難だし、特に啄木を研究することによつて、日本自然主義の複雜な映像並びに反動期における「作家と生活」の關係を考慮することが、今日の作家詩人にとつても具體的な現實問題となつてゐると考へるから——。

（三）「社會的必要」といふことと、詩歌の內容と形式、イデオロギーと技術等の諸關係について——これらの關係を明らかに理解しておくことは、我々がプロレタリア詩を作つて行く上に最も大切な根本條件の一つである。特にその論文「食ふべき詩」に於て「兩足を地面に喰つゝけてゐて歌ふ詩」や「實人生と何等の間隔なき心持をもつて歌ふ詩」を欲して止まなかつた啄木、又、「短歌滅亡論」の流行に對して、さういふ論者の「歌そのものが行き詰つて來たといふ事實に立派な裏書をしたものだ」と喝破した彼、及び「現代の言葉に近い言葉を使つて、それで三十一字に纏りかねたら字あまりにするさ、それで出來なければ言葉や形が古いんでなくつて、頭が古いんだ」とあつさり、それまで死守されてきた短歌の定型を率先して破つて行つた彼を考へる時、この問題は非常に興味深いし、現實問題としてプロレタリア短歌の詩への解消の問題が提起され最近また社會主義的レアリズムの問題の提唱によつて更にこの問題が複雜化した今日、これ

らの解決が何よりも自由詩人としての我々の上に當面の重要な課題となつてゐることを痛感してやまぬから――。

（四）その他（啄木の文學的遺產についてのもろ〳〵の研究及びその歷史的繼承の問題について）

そしてすべて留意されるこれらの問題は、當然、我々のプロレタリア文學運動が到達してゐる現在の地點との聯關に於て檢討したい考へであることは言ふまでもないが、別な箇所でも述べた通り、この研究が一九三二年秋より初められたものであり、從つてプロレタリア文學運動が唯物辯證法のための鬪爭を課題として戰つてきた時代の反映を若干とゞめてゐることは、それの修正の完璧を期し得なかつた私の遺憾とするところ乍ら、くれぐれも讀者のよき解釋を希望してやまない。又この研究が、廣汎な意味では、これからプロレタリア詩をつくらうと考へてゐる若い詩人たちへの手引書を兼ねるやう、留意されてゐることも、こゝに附言しておいた方がよいだらう。

二、啄木の生涯・その思想及び藝術の變遷

一、浪漫詩人以前

啄木の出生――明治における「産業革命」――明治文學（詩歌）の出發――幼少年時代の啄木

石川啄木が若々しい日本の浪漫派詩人として明治の詩壇に登場したのは、彼がその處女詩集「あこがれ」を公刊した一九〇五年（明治三十八年）前後に屬してをつた。勿論、ずつと以前から彼は多くの詩と歌とを發表して、早くから一部の人々に認められて居つたが、それらは未だ幼くしてたゞ反抗好きな少年啄木の聰明さと、そこに芽生えつゝあつた彼の生活意志への俊敏な半面とを示してをつたにすぎず、從つて我々に特別な近さを覺えしめる啄木とはまだ大分距離があつた。實際「あこがれ」以後、啄木の仕事は漸く一箇の詩人としての風格を持ちはじめ、且つその成熟への第一歩を踏みはじめたものであつたし、又、今我々が研究したいと考へる啄木も、それから彼が二十七歳の若い生涯を終るまでの短かい期間内の仕事に屬してゐる。けれども、勿論そのことは決して我々が「あこがれ」以前の啄木を理解しておく必要がないといふことではなく寧ろ反對に「あこがれ」以後、當時の日本資本主義のたゞならぬ發展に數々の夢想を與へられた

彼や、又、引つゞいて自然主義を考察し、それが行きつくべき地點について考へはじめるところから、自己を「社會主義者」として實するに至つた彼を、その眞實な姿で理解するために是非必要である。特に、この必要性は、彼がそのもとに生長し、且つ成熟したところの事情と環境とに於て、それを客觀的に理解しようと欲するものに、より現實的な問題として提起されて來る。何故か？　云ふまでもなく「すべて人間は、一定の社會的環境の產物である。新しい何ものかを創造する天才は、すべて彼以前に仕上げられたものを基礎として創造する。天才は眞空から發芽したものではないのである。またそればかりではない、ある天才の偉大さを眞に定めるためには、吾々は先づ、彼以前になされた業績や、社會の智的發展の程度や、この天才を生み、そして彼に心理的および生理的營養物を與へた社會形態やを、よく知らねばならぬ。」（註一）卽ち、我々にとつては、いつでもかくの如き歷史的社會的方法によつて評價することなくしては、一人の詩人の仕事、その人生を考察し、苦惱し、反抗する努力を正しく理解することが出來ないからだ。「あこがれ」以前、少年啄木がどんな社會的環境の中で生ひ立ち、又、どんな教養、思想、夢想をはぐくまれつゝ、彼がその素質に於て好める反抗性を眞面目に感傷しつゝあつたかを眺めておから。

啄木は一八八六年二月二十日（尤も此のデイトは戸籍上のことで、實際はその前年明治十八年

十月廿八日、水曜日に生まれたと云はれる）東北の田舍の貧乏な寺（岩手縣岩手郡玉山村大字日戸常光寺）に生れた。名は一。父は石川一禎。同じ年同郡澁民村寶德寺へ移つたが、それは「新體詩抄」（註二）の登場によつて日本の新しい詩の運動がそこに出發を合圖された四年の後であり、又、有名な「小說神髓」（註三）の發表によつて坪內逍遙が日本の新しい小說に寫實主義の道を開かうとした翌年であつた。

ところで、當時の社會的情勢を見るのに、その頃、日本の資本主義は未だ幼く、封建的藩閥政府の庇護をうけて、輕工業を中心とする急テンポの産業革命を遂げてをつた。特に、生れて間のない日本のブルジョアジーは自由黨左翼の政治的欲求を最前線に、封建的士族ブルジョアジー、官僚、新地主、貧農、プロレタリアート等、多樣な、反撥しあふ、且つ互ひに交錯する利害關係に立つた、あらゆる諸階級層を動員して自由民權運動のために闘ひ、一八八九年の憲法發布を控へて、新興階級の理想と創造とに燃え上りつゝあつた（註四）とは云へ、勿論かゝる産業革命の進行――新興ブルジョアジーの擡頭によつて、彼等が、その後、幾度となく反撥して來た貧農及び獨立の小手工業者から、その生産手段と自由とを束縛してプロレタリア化させ、おまけにそれらの貧農、プロレタリアートを自己の勢力下につなぎとめるための、あらゆる手段を用ひるに至つたことはこゝで言ふまでもないであらう。

啄木はかゝるあはたゞしい新興日本ブルジョアジーの擡頭期を背景にして生れ、且つそれを充滿に感じつゝ生長し來たつたのであつた。小學校を首席で卒業（神童の名あり）。中學校に入つて十四歳（一八九九年）の時、當時日本の詩歌壇に最も積極的な役割をつとめつゝあつた「新詩社」（註五）――明星派の運動に加つた。翌年十五歳の時には、足尾銅山の鑛毒被害者のために義金運動を起し「巨額の金員」を義捐した。しかもこの年（一九〇〇年）は、既に封建支那との戰爭に勝ち、第一次産業革命を飛躍的に成就させた日本ブルジョアジーが次第に自己の生産制を支配的な位置につかせると共に、又、その政治的指導權を確保するために、早くも自己の内部に現れた解放運動の芽生えを牽制するための新法律案として有名な「治安警察法」を制定した時にあたつて居つた。のみならずこの新法の制定を契機として、その頃からそれまで（明治の前半に於て）進歩性にみち／＼てゐた日本ブルジョアジーが、就中、世界資本主義諸國家の反動的な帝國主義的段階に入つたことに應じて、これまでのやうに地主階級と正面から對立する勢力でなくなり、藩閥政府とブルジョア政黨との野合――その後に於て日本資本主義が帝國主義の段階に入り、その政治的勢力がはるかに地主勢力を凌駕するに至つても、遂に、ブルジョアジーが永劫の障害物として打倒しなければならない地主階級を倒さなかつたことは、わが國資本主義發達の過程に特徴を與へるものとして我々の記憶すべきこと柄である。同時に、我々はかくして日本資本主義が

その發展の道すがらに於ける彼女の顔を、國際資本主義の舞臺に向つては、つねに慓悍と武器とをもつて挑び、又、自分が生み落した私生兒――プロレタリアートに對してはあらゆる新式の法律をもつて防衛する術を覺え乍ら、はじめ彼女が自己の指導權を確立するために妥協した地主勢力を、今日では「その帝國主義的支配を維持し、勞働者階級の大衆的反抗を禦壓するために、あらゆる反動物を利用せざるを得ぬ」（註六）立場から、かへつてそれを前面に押し出しつゝある點も、それが當時の野合の中に約束されてゐたことを忘れてはなるまい。そして啄木は翌年十六歳の時、更に中學校の大ストライキを指導して勝たせたが、勿論云ふまでもなく、この時、啄木をして斯くの如きストライキを指導せしめたものが、上述の如き現實的背景の彼に影響を及ぼした結果によること、及びそこには早くも彼の感じ易い聰明さや、特に反抗好きで生活意志に充たされた彼の性格の芽生えが充分保證されつゝあつたことを我々は留意すべきであらう。

　かくしてやがて十八歳の時、啄木は早くもその病を得乍ら「あこがれ」の時代を迎へるが、――――では、我々は今やこの「あこがれ」にはじまる彼が、そこではどういふ世界に眼目をおいてゐたか？――といふことを見る前に暫くその頃までの日本の文學界がどう云ふ足どりで發展して來てをつたかを探り乍ら、啄木の方向を究明してみることにしよう。

註一、リアザノフ著「マルクス・エンゲルス傳」（「岩波文庫」―長谷部譯）第九頁參照。

註二、拙稿「明治・大正詩史」（「プロレタリア文學講座」第二卷）參照。
註三、明治十八年五月發刊。小說の本質、變遷、種類、目的、文體、結構、性格、描寫方法について述べ、日本ブルジョア文學の出發を合圖したもの。
註四、服部之總著「明治維新史」參照。
註五、與謝野鐵幹主宰、雜誌「明星」を發刊。
註六、佐野學著「日本歷史」（南宋書院版）第一七二―一七三頁參照。

一體、明治にはじまる日本の新しい文學がどう云ふ現實から生み出され、また、どう云ふ足どりで發展してをつたか？――田山花袋はその著「近代の小說」の中で書いてゐる。

「私が初めて新しい文學に接觸した時には、まだ明治の文化は全く渾沌としたものであつた。私などでも漢文や漢詩をつくることを學んだ。和歌を讀むことを學んだ。所謂發句といふものをつくることを學んだ。一方では新しい舞踏が物議を釀してゐるのに、一方では國家を憂ふるといふ志士が袴を偶短かに穿いて、犬殺しの持つやうな太いステツキを持つて街頭を往來した。維新の破壞の悲劇の跡が、まだあつちこつちに殘つてゐて、大きな邸の立腐れたまゝになつてゐるやうなのをもそこゝに見かけた。私等の眼には何が何だかわからなかつた。何れが本當だか、何れがうそだか、全く見當がつかなかつた」（註一）と。

こゝにはいろ／＼なことが雜然と語られてゐる。そして、そのいろ／＼のことは雜然たるまゝに、まざ／＼と我々の眼に映るやうである。が、それにしても、こゝで我々の氣付くことは、何よりも、わが明治の新しい文學運動が、かゝる社會的渾沌の中から、雜然たるまゝに生み出されてゐるといふことだ。實際、前にも述べた通り「近代の日本の幕は、一八六八年のブルジョア革命によつて切り落された。この革命は、從來の絕對專制支配の封建的社會組織の一部を廢棄せしめて、當時まだ幼稚だつた、しかしすでに發展の道をたどりつゝあつた商業資本主義に飛躍の道をひらき、つゞいて産業資本主義への進路を用意した。

かくして革命後十五年にして、輕工業に於ける産業革命が進行すると共に、國内に自由民權運動が擴まり、」（註二）はじめるや、漸くその渾沌の中から新しい文學運動の出發を見ることが出來たのであつた。當時、一八八二年七月に「新體詩抄」が刊行せられ、又つゞいて坪内雄藏の「當世書生氣質」、矢野龍溪の「經國美談」等が出現したのは有名であるし、殊に當時の藩閥政治に對する多くの興隆的インテリゲンチャの反抗を見、小室屈山の「自由の歌」安藤和風の「自由の歌」さらに「民權田舍歌」等々が一般に愛誦せられると共に、その意味での政治詩（政治文學）が「その時代の指導的勢力をなして」ゐた事實は、我々の忘るべからざることである。

ところで、では、かくしてその出發を合圖された明治の新文學がどう云ふ足どりで發達しはじ

めてをつたか――云ふまでもなく、我々はそれを一概に断定することは出來ないとしても、新しい明治の文學が、畢竟、明治に於ける新しい形式の探究から出發してゐたことを明らかに見ることが出來るものだ。即ち、そのことは何よりも先づ、「新體詩抄」の著者たちによつて、最も正直に語られてゐるのが訊かれる。彼等は謂ふ。

「明治ノ歌ハ明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、コレ新體ノ詩ノ作ルトコロナリ」（「新體詩抄」序）

又

「方今ノ學者ハ詩ヲ賦スレバ漢語ヲ用ヒ、歌ヲツクレバ古語ヲ引キ、平常ノ語ハ鄙トナシ、俗トナシテコレヲ採ラズ。コレ謬見トナサザルヲ得ンヤ……、宜シク平常ノ語ヲ少シク折衷シ、以テヤヤ新體ノ詩歌ヲツクリ、充分ニ吾人ノ心ニ感ズル所ヲ吐露スベキナリ」（同上）

これを見ても明らかなやうに、彼等は打倒された封建的日本の上に建設されるブルジョア日本の新生活を歌はうとして、そこから新しい詩歌の出發を宣言しようとしてゐる。けだし、――「明治ノ歌ハ明治ノ歌ナルベシ」――この新しい生活は、彼等にとつて、勿論、それまでに完成してゐた短歌的形式の傳統の範圍でも部分的には歌へないことはないが、しかし彼等がその「心ニ感ズル所ヲ」そのまゝに「吐露」するためには、「宜シク平常ノ語ヲ少シク折衷シ、以テヤヤ新

體ノ詩歌」として表現しなければ、必然的に傳來の形式から喰み出すもの、そこに盛り切れぬものゝあることを感じたのも當然であらう。——我々はこれまでもつねに新しい社會が生み出す、新しい心理內容が、それに適應する新しい表現形式を求めてやまなかつた事實や、又、かゝる新形式の誕生がつねに歷史の進展にさからう舊きイデオローグたちの非難の中から培育せられて來た事をあまりにも多く知つてゐる。例へば、アメリカ・ブルジョアジーの新しい心理を表出して「野蠻」とけなされたホイットマンに於て……、フランス・ブルジョアジーの新しい心理を表出して「印象派」とけなされた美術家たちの一群に於て……、等々、そして「新體詩抄」の著者たちは、かくしてこの新しい明治社會が、そこに生み出したところの新しい心理の表現形式を求めてやまなかつたブルジョア日本が、何處にその必要を感じてゐたのか、その因つて來たるところから所謂「新體の詩」形式を探りあてたのであつたが、しかし、それにしても新しい生活を求めて又、必然に向つて進まねばならぬところまで追求して、そこから舊詩に對する新しい詩の建設に向はうとしなかつた彼等は、舊來の詩が常に漢語を用ひ、古語を引用し、口語を卑俗なものとした部分にのみ反對し乍ら、遂に口語をもつて詩の新體の基本としなければならないやうには少しも考へなかつたのである。しかも斯くの如く舊詩に對する詩形上の反對が單に部分的であつたといふことは、また、畢竟明治の新しい社會心理が、舊い心理に反對する上でも部分的であつたこ

とに對應して、そこに新しく生れた日本の新體詩を徒らに卑俗と古雅との混合より出でなかつたといふ特殊なものとして存在せしめてゐる。殊に我々が注意するのはかゝる事態のよつて來たる原因が、基本的には明治維新に出發するブルジョア日本の半封建性――即ち地主階級を打破して權力を握り、ブルジョア・デモクラシーを徹底させるといふ意味での進歩的なブルジョアジー及びその使徒としての進歩的ブルジョア詩人を生み得なかつた處にあることは云ふまでもないし、またその故にこそ、明治の詩人たちがそこに持つべき苦悶の世界をも極限されて、彼等がたゞ與へられたる世界の、その世界でのみ通用する感情や感覺を伸び／＼とのばすことを必要とし、そこに文學革命を遂げ來たつたといふよりも、たゞ新しい形式をつかみさへすれば、何等かの新しい社會的內容をもつかみ得るといふ安易さに於て文字面を改革し、寧ろ技巧の獲得に何よりも多くの努力を注いでゐることを見落してはなるまい。我々は斯うした努力の仕方を硯友社の運動に於て如實に見ることが出來る。

のみならず、こゝで更に我々の留意するのは、凡そこのことが從來のプロレタリア文學の場合とは全く反對であるといふことである。即ち、プロレタリア文學にあつては、問題は何よりも現實の複雜にして多樣な姿を如何にその本質に於て（謂ふ意味は客觀的現實の眞に接近する意味に於て）把みとるかといふ所に中心點が置かれてゐる。從つて、作家たちの苦悶は先づ現實社會の

何を如何に描かくべきかといふことから、それを目的意識的にとりあげて行かねばならないことは云ふまでもない。が、我々はそのよき意圖にもかゝはらず、かつて、しばしば謂ふ所の「イデオロギーばかり」（藝術に於ける内容と形式との關係を「辯證法的な統一」の問題として考へず、一應はそれを不可分な統一體として考慮し乍ら、なほ、プロレタリア的イデオロギーを全面に押し出しさへすれば、プロレタリア文學の新形式がひとりでに確立するといふ風な考へ方から左翼的な言辭で眞實を蔽ひかくしたやうな作風の謂）の偏向を犯し、徒らに文學に於ける新しい内容の探究にのみ夢中になり過ぎたあまりに、かへつてそれとは不可分離な統一に於て考慮せられねばならないプロレタリア的形式の確立を等閑にして來たのに反して、明治の新しい文學的働き手たちが、いづれもその形式的技巧的革命を愛するのあまり、全くそれとは不可分に考へられねばならない内容上の問題を、たゞ與へられたる世界の、與へられたるものとだけして、それを卒業したかの如くに考へ、おまけに今日のブルジョア文學に於ける無意識の作用――卽ち、「勿論完全な無意識といふものはないけれども『藝術は何と言つても自覺によつて進歩した』ものである」といふ考へから生み出されて來るところの形式主義の過根を育てゝ「形式と内容とを共にわがものとする相對的過程、及びそれが絕對的眞理に至る一つの環であることを、我々の藝術的實踐に於て證明する」代りに、時代の眞實を「何もの」かでぼやかし、單に直觀とか、無意識とか、イン

スピレーションとか云ふものに多角な彩どりを與へるためにのみ、より多くの無駄な努力を拂つてゐることを忘れてはなるまい。（今日、創作技術の問題が重視されてゐるのは意義深い）

かくして、明治の文學は全くその新しい生活を本質に於て捉へようとする努力の代りに、新しい生活が與へた感情や感動だけを、たゞ多角に彩色するための努力だけで（或はさう云ふ方面にのみ多くの力を注ぎ乍ら、）その形式の探究から出發した。が、勿論すでにしばしば繰返すやうに文學は歴史的現實の眞理を把握する仕事である。從つて文學形式が如何なる場合にも、たゞ形式としてのみ發展することが決してないやうに、その各形式の探究といふことも一概にそれだけが單獨でなされたとのみ言ひ得るものでは決してなく、多くの明治の文學者たちが、その生活に對する深い惱みをなやみ（例へば前にも述べた通り、長谷川二葉亭が「文學は男子の一生の事業となすべきにあらず」と言ひ放つた如き――）そこから生み出して來た諸種の生活態度、社會觀、人生觀などが必然に、「この時代の日本の生產關係、生活狀態を不充分ながらに反映して、後の時代に於て完成された諸種の文學上のイズムを生み出すために盛んに醱酵作用を起してゐた」（註三）ことは自明である。

天には自由の鬼となり
地には自由の人ならむ

自由よ自由　やよ自由
汝と我のそのなかは
天地自然の約束ぞ
千代も八千代も末かけて
この世のあらむ限りまで
二人が中の約束を
いかにぞ仇に破るべき
さはさりながら世の中は
月に村雲花に風
まゝにならぬは人の身ぞ
話せばながいことながら
……………………
……(中略)……………
……………………
自由のためには昔より

数多の人の生き別れ
また死に別れするものを
わが東洋の人じやとて
土地に變りはあるなれど
などか心に變るべき
人の自由といふものは
天地自然の道なるぞ
つとめよ勵め諸ひとよ
卑屈の民といはるるな
……（下略）………

——小室屈山「自由の歌」より——

當時、小室屈山がこの詩によつて「ブルジョア日本の心理生活の一部分が目標としてゐた想念」、卽ち自由黨などに代表せられる新興日本ブルジョアジーの理想や創造を明らかに示し得たことは——それがよしホイットマンなどに比較してみて大きな距離を感ぜしめ、又、それを當時の政治活動（自由民權運動）に比較して遙かに立遲れを示してゐたとは云へ、我々には甚だ興味あるも

のと云はなければならないし、又、同じ頃、坪内逍遙がその有名な「小説神髓」の序文で書いてゐる點も決して見落してはならないものである。即ち謂ふ。

「近來刊行せる小説、稗史はこれもかれも、馬琴、種彦の糟粕ならずば一九、春水の贋物多かり蓋しこのあひだの戯作者流はひたすら李笠の語を師として意を勸懲に發するを小説、稗史の主腦とこころえ、道徳といふ模型を造りて力めて脚色を其内にて工夫なさまく欲するからに、強ち古人の糟粕をば甞めんとするにはあらざれども、もと其範圍廣からねば、覺えず同轍同趣向の稗史をものすなるべし。是れ豈に遺憾ならざらんや。……古來、我が國のならはしとして、小説をもて敎育の一方便のやうに思ひて、しきりに契誡勸善をば其主眼なりと唱へながら、なほ實際の場合に於てはひたすら殺伐慘酷なる、若しくは頗る猥褻なる物語をのみめでようこび、他のかたくるしき筋の事は目を住めてだに見る人稀なり。併して作者の見識なき、總じて輿論の奴隷にして流行の犬ならざるなければ、競ふて時好に媚むとして彼の殘忍なる稗史をあみ彼の鄙猥なる情史を綴り、世の流行にしたがふものから、勸善といふおもむきの名義もさすがに拋棄がたさに、しひて勸善の主旨を加へて人情をまげ、世態をたわめて、無理なる脚色をなすこととなりけり。此に於てか拙劣なる趣向はますます拙くして、大人、學者の眼を以てはほとほと讀むに堪えがたかり是れ併しながら、作者もたゞいたづらに稗史を弄して、眞の稗史の主眼をさとらず、彼の習的た

る舊慣をむなしく墨守なすに因れるのみ。豈に笑ふべきの極ならずや。云々」

けだし、我々は「小說神髓」の解くところが、新しく生れ出た日本ブルジョアジーの心理を表出して、封建的、卑俗性の打破、ブルジョア道徳の確立、その文學實踐に於けるリアリズム的方向への示唆にもかゝはらず、なほ日本に於けるブルジョア文學の黎明期が、その主要目標を現實に於ける眞理の探求としてゞはなく、たゞ單に與へられたる現實を與へられたるがまゝに新しく形式化さうとした所に、その建設の道が開かれつゝあつたのを見るし、且つ、それが亦次第に國内のブルジョア的生産關係の發達につれて、そこに移入されつゝあつた雜多な外來思想――フランスの自由思想――イギリスの功利主義哲學、ドイツの國權主義的國家觀及びキリスト教的精神等の影響をうけて發展し、所謂、興隆的浪漫主義時代の文學建設へと飛躍するのを見るものである。當時森鷗外、上田敏、山田美妙齋等が英獨佛のロマンチシズム文學を、内田不知庵、矢崎嵯峨の舍、長谷川二葉亭等がロシヤ文學を、その他によつて北歐文學が飜譯され、移植されつゝあつたのは知られてゐる。

――啄木が當時どういふ成長をなしつゝあつたかを、もう一度ふりかへつてみやう。

ふるさとの山に向ひて

云ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

この歌によつても知られる如く、彼は毎日、あの鶴飼橋上から眺める一連の北上山脈を愛し、空を愛し、又、閑古鳥のなく日を感傷しつゝ純白な日々を過してをつたに違ひない。歌集「一握の砂」の中で彼はしばしば当時のことどもを思ひおこしてゐる。

そのかみの神童の名の
かなしさよ
ふるさとに来て泣くはそのこと

友として遊ぶものなき
性悪の巡査の子等も
あはれなりけり

己が名をほのかに呼びて
涙せし

十四の春にかへる術なし

教室の窓より遁げて
たゞ一人
かの城址に寝に行きしかな

晴れし空仰げばいつも
口笛を吹きたくなりて
吹きて遊びき

夜寝ても口笛吹きぬ
口笛は
十五の我の歌にしありけり

われと共に

小島に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

かくして啄木がその愛する口笛をヒューノ＼と吹きならし、小島に石を投げつゝ遊んでゐる間に、明治の文學も漸くブルジョア日本の新しい文化的武器として自己を成育させ、その内容に自然主義的ロマンチシズムを盛つて、上述の如き躍進の端緒に向ひはじめるのだ。そして勿論啄木が自身で生活した文學的環境とは、具體的にはそこからであつたし、又、その潮流の中に於て、初めて「あこがれ」にはじまる彼の姿もはつきりと見究め得られるものである。

註一、田山花袋「近代の小說」（春陽堂文庫）參照。
註二、松山敏「日本プロレタリア文學運動についての報告」——雜誌「ナップ」第二卷第七號參照
註三、秋田雨雀「プロレタリア前史時代の文學及び演劇」——「プロレタリア文學講座」第二卷（白揚社版）參照。

二、浪漫詩人時代

第一次產業革命時代——浪漫主義文學運動——放浪詩人啄木——浪漫詩人としての啄木の思想——その詩歌

さて、我々はいよ／＼明治のブルジョア文學が、日本の新しい文化的武器として、その内容に自然主義的ロマンチシズムを盛りつゝ飛躍しはじめたところの、そしてそれこそ啄木がそれを生活した最初の文學的環境とも云はるべきところの時期について見てみよう。

すでに述べて來た通り、明治維新の…後僅かに十五年にして「新體詩抄」の登場を見、又、「小說神髓」の提唱を生んだ日本のブルジョア文學は、しかし、それが眞にブルジョア日本の强力な文化的武器として、自身の歩幅を持ちはじるまでには、その間にまだ十數年の久しい幕あひを持つてをつた。——新しい明治の文學が眞に强力なブルジョア階級の勃興の歌として、その潑剌たる姿を擡頭さすのは、一八九四年——一八九五年（明治二十七、八年）に於ける封建的支那との戰爭に勝ち、この戰爭をきつかけとして輕工業に於ける産業革命を成就する時期からである。云ふまでもなく、戰捷によつて勝利したブルジョア生産制は、次第にその位置を支配的なそれに高める同時に一方それはその地盤に於て政治的にも自己の指導權を確保せずには置かなかつた。即ち、かゝる新興ブルジョアジーの驀進的な氣魄が、つねにその心理の歌ひ手たる詩人、文學者たちの胸をゆすぶつて迸り出ないといふ理由は決してなく、多くの詩人たちは恰かも彼等の胸々に堰きとめられてゐた瀧水が奔騰するやうに、そのみづ／＼しい感情と感動とをもつて歌ひはじめた。彼等は何よりも歌ひ、たゞ歌ふことに急いだ。

では、どんな歌をうたふことに？——それを知るために、我々は今少し具體的に當時の現實の客觀的相貌について究めてみよう。

すでに、封建的支那との戰捷によつて、自己の生產制を支配的な位置につけ得た日本ブルジョアジーは、特に戰後の企業熱の勃興と共に急速度の產業發展に向つて行つた。が、この軍事的勝利及び產業革命の進展は、しかし乍ら日本ブルジョアジーにとつて、一方國際資本主義との間に矛盾衝突をもたらす結果としての所謂「三國干涉」の苦汁を與へられると共に、他方「漸く階級として成立しはじめた日本プロレタリアートが、最初の未熟な非組織的な、…………………………時期」として迎へねばならなかつた。それは云ふまでもなく、日本ブルジョアジーが自身で經驗した最初の十字架であり、且つ彼等の所謂「臥薪嘗膽」の試練でもあつた

然るにこの複雜多難なる現實の相貌は、必然的に當時の文化的擔當者——即ち、この時代に於て、はじめて日本の資本主義的生產機構の中へ多數に動員せられた庶民階級出のインテリゲンチヤ（註一）の心理を刺戟せずにはおかず、彼等は凡そ左に示す如き三つの思想系列に色分けされた。

第一には、國際主義的傾向の心理の表出者としてのインテリゲンチャ、

第二には、國粹主義的傾向の心理の表出者としてのインテリゲンチャ、

第三には、社會主義的傾向の心理の表出者としてのインテリゲンチヤ、
けだし、凡そ詩人たちの何よりも歌はうと欲したものが、これら何れかの心理に立つて、ブルジョア日本の新しい氣候を、――從つて我々が謂ふところの自然主義的ロマンチシズムの花を爛漫と咲かせようとしたものであつたことは、最早や云ふまでもないであらう。

ところで、先づこの第一のものから見てみよう。云ふまでもなく、これは當時の企業熱の勃興と共に、急テンポをもつて發展した産業資本主義の上に花咲いた心理であつた。それは民友社を中心として花咲き、且つ誰よりも險しく北村透谷の胸に、つゞいて島崎藤村、上田敏等「文學界」一派の人々に傳はつて日本の早い自然主義的ロマンチシズムの運動を開發した。が、一體、透谷の頭の中に咲いた觀念論的理想主義はイギリスに咲いたものゝ映像であつた――と、中野重治氏も云つてゐる通り、――イギリスに於てはそれが大地から咲いた。けれども日本では大地から咲き得なかつた。大地がなかつたのである。それは遂に美しい剪り花であり、むしろ一莖の造花であつた。だから、それは愛山の小汚い實證主義に敗れた。透谷の咲かせようとした本當の花は、實はこの小汚い實證主義を生み出したものゝ進路の上に咲かなければならなかつた。が、その咲く時は來なかつた。小汚い實證主義を生み出した日本の資本主義が特異の發展を遂げたことを人は知つてゐる。だが透谷の敗れたのは日本の資本主義にであつて、それのために小汚い實證主義

がかつぎ廻つた一個の俗學者山路愛山にではない。」（註二）

こゝで謂ふ意味は次の言葉を添えることによつて、更にハツキリと裏付けることが出來るであらう。卽ち、何よりも注意するのは、透谷によつて代表せられるこの系列の詩人達、卽ち當時の日本文化の指導的部分としての彼等が、何れも多かれ少なかれ、キリスト敎的敎育をうけた進歩的な青年に外ならなかつたこと、それである。云ふまでもなく、「この事は（キリスト敎的精神が一時的にとは云へ日本文化の指導的部分となり得たことは）日本に於けるキリスト敎が封建時代に於て激しい壓迫をうけてゐたといふこと、及びブルジョア社會が未だ（當時に於て―ブルジョア自身の道德を持ち得ないでゐたといふことに强い關係を持つてをつた。」（註三）然るに、時代の進展はこれらのロマンチスト達に長くキリスト敎的精神に安住することを得しめず、かへつてこのキリスト敎的精神すらが「次第にブルジョア社會の中に解消され、ブルジョア生產を是認して、これを支持するものとなりつゝあつた」のを見なければならなかつた時、彼等は澎湃として背敎者の群に投じ、自ら反キリスト敎的態度をとらざるを得なかつたのである。――全く透谷の敗北もそこに所以してゐた。彼ははじめ政治家として、そこに自身を投じようと試みた。しかし當時（明治二十年代の後半）の政治界が、そこに搖り動かしつゝあつた自由平等の思想は、彼をしてその思想を追求する途上に、必然にキリスト敎的思想へと驀進せしめずにはおかなかつた。

そこで彼は政治家としての自己の欲望を捨て、まつしぐらに宗教界へと自己を投ずることゝしたが、しかしそこでも自身を滿足せしめることの極めて尠ない中で、早くも當時の現實が生み出しつゝあつた多くの社會的矛盾に逢着し、それに憤りを感ずることから、斷乎として「人生のための理想」を追求する仕事を、その文學的實踐によつて滿たさうとしはじめたのであつた。けだし透谷がかくして「人生に相渉るとは何の謂ぞ」に於て山路愛山の俗人的見解を駁撃しようと試みたのも、この「理想」の故であつたし、又、しかも彼が遂にそれを駁撃し得ずして人生を相渉らねばならなかつた所以が、こゝに在るとすればその敗北を「決して小汚ない實證主義のかつぎ廻つた一個の俗學者山路愛山に勝ち得なかつたがためではなく、日本資本主義の特異な發展そのものに勝ち得なかつたがためである」とする中野氏の見解も、畢竟、この「理想」の故に、彼がそれをあくまでも固執しようとして、それと、すでにブルジョア化しつゝあつたキリスト教的理想主義との間に、遂に解くことの出來ない矛盾を感じて、それに敗北するのやむなきに到つた彼を意味するものに違ひない。

かくて、我々は再び繰返し謂ふことが出來る。――透谷の頭の中に咲いた觀念論的理想主義の花は、英國に咲いたものゝ映像として敗北するの外なかつた。それはイギリスに於ては大地から根を下して咲き得たところの、しかし、日本に於ては遂にその資本主義發展の特異性の故に、た

だ俗悪な實證主義を育てそれはその後に發展を示した商業主義日本及び産業主義日本の理論だけをなし得たと共に、それによつて打破されたところの美しい剪り花であつた。たゞ、我々はそれにしてもこゝで透谷がそれを與へ、之をうけつぐものによつて甚だしく間違へられ乍らも、それが明治三十四、五年以後、一方に於ける社會主義思想の發展と相俟つて、その派の文學者達と共に自然發生的な社會主義文學を創造し、その多くがキリスト教的な人道主義の立場から日本に於ける自然主義文學運動の黎明期を闘つたことを忘れてはなるまい。

第二の系列に屬するもの――卽ち、我が國のロマンチシズム運動に於ける國粹主義的傾向の心理がどこから生み出されて來たかを見てみよう。

だが、このことは非常に明らかである。さきに述べた通り、日清の役後、日露の大戰に至るまでの十年間は日本の資本主義が輕工業を中心とする産業……を一旦完成させた後をうけて、戰後の企業熱勃興と共に急速なテンポをもつてする産業發展の時期であつた。同時に、それは又資本主義の發展に基く、……………………勞働者階級の心理が刺戟され、ために早くも勞働者の覺醒、いはゆる勞働運動、――社會主義運動の萠芽的な時期としても迎へられた。

ところで明治に於ける我が國のブルジョア的産業の發達は、それが以前からの…………の下に、温室的な成長を遂げてゐたのであつたが、戰捷によつて日本ブルジョアジーが益々この

……勢力の頼るべき實力を知ると共に、又、資本主義今後の發展が必然にその力を利用し、それとの鞏固たる結合によつて支持せられねばならないことを知るや、彼等は自身の國際的、民主的感情を次第に國家的國粹的感情に結びつけて行かずにはをれなかつた。殊に、當時の「三國干涉」による臥薪の思ひは、まだ世界資本主義の舞臺に乘り出すべくあまりに幼弱であつた日本ブルジョアジーの心理を刺戟し、そのために益々强固に國家的國粹的感情を自己本來の民主的、國際的な感情の中へ織り込んで行つたことは云ふまでもない。かくして、當時、樗牛の胸に血を湧き立たせた日本主義、或ひは國家主義的思想はこのブルジョア的感情の代表であつた。それは明らかなやうに、當時の日本ブルジョアジーが、その與へられたる現實（國際資本主義との矛盾）に對する、激昂する不滿として、從つて與へられたるものを更に發展せしめんがために求めて止まなかつた理想――それへの憧憬ではあつたが、少しもそれを與へたものゝ、自身で、持つてゐた矛盾――そこから解放しようとして求めてやまない理想や、眞實への憧憬では決してなかつた。しかも、このことは全く樗牛の苦悶が――そして彼によつて代表せらるる當時のロマンチシズムがその如何なる性質のものであつたかをよく物語つてくれる。實際、これこそ當時の日本資本主義の臥薪嘗膽的發展の姿を如實に反映して、それまで彼等をしめつけてゐた封建的商業ブルジョア觀念を追放しそこからの脫却、そして近代的產業資本主義社會のイデエへと發展しようとして藻

描きつゝある、そのもがきに外ならないであらう。だから、それはそれまで跋扈してゐた封建的商業ブルジョア觀念による擬古的な作家群——硯友社一派の、彼等がそこで何等かの發展的な希望をつなぎ乍ら、しかも遂に何等明確な希望及び目標を意識し得ないで苦惱してゐたのと違ひ、彼によつて誰よりも新しく社會人としての個人の心理、態度などを問題として扱ひはじめてゐる點で、又、今迄の文學がたゞ華やかな外形的描寫に追隨して來たのに反して、社會の暗黑面に注意し、そこに深く掘りさげて行かうとした點で、全く截然と新しい時代を區別づけてをつた。同時にそれはしかし乍ら未だ重工業的な產業革命の成熟を見ず、從つて徹底的に自然な征服することや機械を動かす人間の力を知らなかつた彼が、斯樣にして社會の裏面を、個人主義の徹底を目圖することに激しい情熱をゆすぶり乍らも、遂にその自我への限りなき憧憬と愛慾を追求する中で、運命や神を信じ、遺傳や環境に對するそれに打ち勝ち得ない感傷的氣分を味識しながら、次第にその吐け口を個人主義的宗敎觀（ブルジョア的宗敎觀）に求めて行つたことは、これも前者（國際主義的傾向の心理の表出者）の敗北と同じく、その故が日本資本主義の發達に於ける特異性に對應する結果として生み出されたものであることは云ふまでもないであらう。

　まことに、樗牛の胸にわき立つた徹底個人主義思想——それの國家主義思想への轉換、更に晩年に於ける彼が日蓮主義をかつぎ出すまでの思想的變貌の跡は全く右に述べて來た事情をよく物

語つてゐる。彼は謂ふ。
「人は其體を以て生活すると同時に、其心を以て生活するものなるを證するに非ずや。眞正の幸福は肉體の上にあらずして精神の中に存するを證するに非ずや」
又、その「作家の道徳と觀念」（廿四）の中で、
「人生の經營する處は、平等を主として差別を客とし、種族を主として個體を賓とす。人類全體の事爲の上に、個々人の性格は幾何の價値ありや」
斯う云ふ樗牛が、そのあたるべからざる意氣と抱負とをもつて紅葉、露伴の寫實主義に大きな風穴をあけるべく乘出して來てから、更に「文明批評家としての文學者」の中で、ニイチエ（この血迷うたドイツの國家主義思想家）を紹介し、その絶對的自我主義を讃美してやまなかつた所は實際、若しその時、彼に當時の日本社會で早くもその階級結成を急ぎつゝあつた日本プロレタリアートの姿を見出すことさへ出來てをれば、必ずやそれがこの軌道で燃え上る意氣や抱負として意義付けられたであらうところの、然し、それを見得なかつたがために、たゞ「個人のための歷史との戰ひ」に邁進して、その「神經衰弱なる個人主義」（超人の哲學）の擧にのしあげるに過ぎなかつたところの彼のセンチメンタリズムで終焉したとは云へ、我々はなほそのセンチメンタリズムが時代の現情に不滿を感じてやまなかつた當時の青年の心理を熱狂的にとらへ得たこと、及

び、それが一方に於てはブルジョア日本の發展に無限の感謝をもつて迎へられたのにも拘らず、他方彼がそこにのしあげることによつて遂にそこから乘り超えることの出來なかつた自身の超人主義に苦悶し、且つそこから逃がれんがために所謂日蓮主義へと轉化して行つたこともあながち謂のないことゝは考へないものである。

尙、我々はこの第二のものが、一見第一のものとは相矛盾するかに見え乍ら、やがて日本資本主義が、その相貌を帝國主義的形態にぬりかへ、且つそれが世界帝國主義の花形となつた時にも、共に甘んじてブルジョアジーの意向に屈服し、そのあらゆる諸政策を支持する立場をとつて來た點で、鞏固に受傷してゐることを見落してはなるまい。

第三のもの――即ち、日本に於ける社會主義思想の發端が、當時に發生したプロレタリアートの階級結成に刺戟せられて、その心理イデオロギーを代表し、ブルジョア日本に對する勇敢なる反抗的氣勢を示しつゝあつたものであることも凡そ自明であらう。

知られてゐる如く、この最初の草分けは片山潜によつて發刊せられた「勞働世界」に於てそれを見ることが出來た。つゞいて一九〇一年(明治三十四年)には、片山潜、幸德秋水、西川光次郎、木下尙江、安部磯雄等によつて社會民主黨が組織された。又、日露戰爭の直前、新聞「萬朝報」に據つた黑岩淚香、幸德秋水、堺枯川等が盛に非戰論を唱へ、一九〇三年には日本に於ける

最初のプロレタリアートの新聞「平民新聞」の發刊をも見ることが出來た。この「平民新聞」に於て、一九〇五年八月七日より三日間、同紙上にレオ・トルストイの「非戰論」が發表され、更に、同年十一月十三日の創刊一週年を記念して、マルクス・エンゲルスの「共産黨宣言」が發表せられたことはあまりにも有名である。（後年啄木がこれらの論說・宣言を筆寫し、彼の社會主義研究に資したことも有名である。）この後者のために新聞は發賣を禁止され、幸德、西川の兩人は起訴されると共に、更に「平民新聞」は日露戰爭後、その發刊を停止された。このことは日本に於けるプロレタリア運動の無限の困難さを物語る以外にはないであらう。

ところで、今この系列に屬するインテリゲンチャ作家の仕事を見るのに、彼等はすでに述べた通り、所謂文壇の傍流にあつて自然發生的な社會主義文學を創造してゐた。それは今日に於ける日本プロレタリア文學運動の先驅的胚胎をなすものであつた。が、勿論、當時のこの先驅的な社會主義文學（それは普通文學史家たちによつて「社會文學」と呼ばれてゐるものである。）は、日露の役後、…………によつて暫くそれを後繼するものを失ひ、例へば日露戰爭の當時に非戰論の思想を創作化した「火の柱」を公にして、時代を風靡してゐた軍國主義的風潮に勇敢な反抗を示した木下尚江の如きも、何時の頃ともなく政治的には全く淪落して「靜座法」の教師になり下るやうなことになつたが、それにしても我々は當時彼等がその眼を向けつゝあつた社會的矛盾の

剔抉――文學分野に於ける自然主義的レアリズム運動の萌芽的提唱等――それが一方戰爭の直後に次ぎ〳〵と移植されたロシア文學、その他の海外文學の影響と相俟つて、當時すでにその雄圖を準備し終つてゐた日本文學の寫實的傾向と結びつき、そこに廣汎な日本の自然主義文學運動をまき起す烽火となつてゐることを忘れることの出來ないものである。

「しかも、凡そこれらの情勢は當時の詩分野に於ても全く同じであつた。詩人たちはそれ〳〵彼等を取まく複雜な時代の環境や風潮の中に在つて、その理想や憧憬をうたつた。それは彼等が身をもつて感じつゝあつた現實の矛盾を、それとして苦悶する感情や感動のまゝに赤裸々に歌つたのであつた。先づ藤村を先頭とする純情な抒情詩人達は彼等の自覺し得たブルジョア的個人主義の立場に立つて、個人の解放と社會的矛盾に逢着した詩人の感傷を、――更にそこから次第にその眼を現實にむけることによつて勞働の歌といふよりも勞働を詠ずるといふ風にも。又、土井晩翠、與謝野鐵幹等はその思想的立場を置く國家主義的ブルジョアジーの讃歌を、――薄田泣菫や蒲原有明等はその民主的挑戰的な感情を神秘的、象徵的に、――そして、それは未だ「社會主義詩集」と題するその名にふさわしい程プロレタリア的ではなかつたけれども、僅かに當時の勃興しはじめた社會主義運動の情勢に應じて兒玉花外が自由と平等とを夢想してやまなかつたものゝ心情を歌つたとする社會主義詩を、――更にそれを歌ふことによつて、日本のロマンチック詩人の最頂

點を示し、しかも狀び移つて直ちに反動化したところの與謝野晶子が個人主義的立場から非戰論者の詩「君死に給ふことなかれ」を等々――

かくして我々は一九〇〇年代の初頭に、その全盛を極めた我が國のロマンチック文學時代が、それを田山花袋に語らしめるなら「今までのわるく塞がれてゐた溝の通りがよくなり」一方に於ては自然主義を花咲かすための苦痛を抱いて孜々と勉學につとめつゝあつた若き作家群が未だ「しいん」と靜まり、他方、日本のロマンチシズム文學運動の最後を彩つたところの明星派の詩人たちが、その「時代の趨勢をわきまへない」無知な運動にもかゝはらず、「當時の文壇を動かして、一時、小說の光を失」はせ「詩」をもつて之に代らしめた如き「面白い現象」を呈した時期として即ち、言葉を違へるなら、一般的には空想的「自我解放」の思想をもつて提唱されたロマンチック文學が、それとしては日本の文學運動の最前線を闘ひ乍ら、しかもそのあまりに空想的理想主義的であつたために漸く排斥せられ、それに代るべき思想「科學的精神」によつて、正しく「人間の生活を視る」ことの必要、及び、それへの實踐的な闘ひが、早くも現實に向つてその活動を開始しつつあつた時期として、それを理解することが出來るものだ。しかも、これが明治に於ける日本のブルジョア文學の新しい段階を示すものであり、且つそれが日本ブルジョアジーの新たに仕入れた文化的武器であつたことは云ふまでもないであらう。

――けだし、啄木がその處女詩集「あこがれ」に收めた多くの詩篇を發表し、次第にその詩人としての天稟を認められつゝあつたのはこの時期（主として一九〇四年――一九〇五年）に屬してをつた。云ふまでもなく、こゝで彼が明星派に憧れ、その詩人としての出發を浪漫的感傷詩人として歌ひ出してゐたそのことの中には、すでに當時の數多い浪漫詩人たちと同じく、その歌が資本主義の發展によつて與へられた數々の夢想に外ならなかつたこと、しかもそれはかゝる資本主義社會の慌たゞしく發展する現實を正視する暇さへ持たなかつたところの、しかしそれにもかかはらず彼がそのほしいまゝなる感情や夢想を歌ふことによつて、當時の社會に未だ嚴として存在し、絶えず彼をしめつけてゐたところの封建的イデオロギーへの强い反抗を示めすに充分であつたこと、及び、その意味で、彼の詩が一ツの大きな社會的積極性を持ちつゝあつたことを明らかに感ずることの出來るものだ。

果して「あこがれ」にはじまる啄木の思想及び藝術の方向は？　それを我々はいよ〳〵俎上にあげてみよう。（註五）

註一、從來のインテリゲンチャが士族出身のものであつたのに反して、この時期に庶民階級（官吏、新興中商工業者、農民の子弟）出身のものが生産機構を占むるに到つたのは注意すべきことがらであつた。「これら等のインテリゲンチャの多くはブルジョア國家の教育制度によつて教育された、新

しい讀書階級を構成してゐた。從つて自然主義文學運動の覇權時代の文學の創作者も、また讀者も、この階級に屬する人であつた」（秋田雨雀）と。

註二、中野重治著「藝術に關する走り書的覺え書」第二七七頁參照。

註三、秋田雨雀「プロレタリア前史時代の文學及演劇」參照。

註四、明治廿九年二月「太陽」に發表の論文である。

註五、こゝで當時の啄木年譜を若干拾つておくことは必要であると思ふ。

一九〇三年（三六年——十八歳）二月——東京に病む、嚴父に携へられて歸村、澁民村に病骨を養ふ。

同　年十一月——病ひ衰ふと共に詩境漸く熟し來り、一日ふと四八六の韻律を得。

同　年十二月——始めて啄木と署名す。（與謝野氏に乞ひて得たる雅號）

一九〇四年（三七年——十九歳）二月——姉崎博士を盛岡市旅館に訪ひ夜更けまで語る。

同　年八月——北海道へ初度の旅、十月「毎日病ある姉の枕邊にて旅の思ひにふけり居り」、旅より歸郷、十日にして故郷を立ち出京の途につく。

一九〇五年（三八年——二〇歳）——一月、漸く詩人として名の出る一方舊友を失ふ。

同　年四月——「神よ願くは余をして生活の條件のために心を要せしむ勿れ‥‥これあるうちは余は永久に詩人たらむとして苦闘せざるべからざるなり」、云々にも拘らず、父が寺を失ひて、一家の生活上の責任が彼にかゝる。

同　年五月――詩集「あこがれ」出版。上田敏序詩、與謝野寛跋、生活の窮壓にへこたれ郷里に歸る。六月、堀合節子と結婚、十月「厨に米無くなりゆく日を數へながら晏然として何鼠輩を學んでも居られず、この苦悶懊惱の中に詩の眞味味に深し。」

一九〇三年（明治三十六年）三月十九日付、金田一花明氏宛の手紙の中で、啄木は自身の詩に關する感想の一端をもらしてゐる。

「詩に於て自然の聲と情の響きと私はいづれをも取ります、尙ぶべきは Heavenmont Genius で、決して人まねの僞情詩ではありません。要するに左甚五郎の作つたものは、鼠でも葡萄でもはた獅子でもいづれも皆生きてゐます。ライダルの雜木林も、ウオズヲルスに歌はれると天品の詩となり、長安の貧家の妻でも李白の筆によれば情緒高愁の愛女となります。何れ吾等の尙ぶべき處は他人の畑の瓜も梨もとらずに自分の園に適した豆なり栗なりはた林檎なりサフランなり無花果なり葡萄なりを植ゑてたえず培ふて吾も樂しみ、又隣の人をも樂しませるといふ事と思ひます。そして若しも甘い果物でも出たら外國へ貿易へ出すなり、大阪の博覽會へ出すなり、それは當人の勝手でありませう。

理窟は兎もあれ、私は兄の自然詩に大いに難有味を持つ一人です。」

この短かい感想の持ち主から、我々は何をどう云ふ風に感じることが出來るであらうか？　そ

れは云ふまでもなく幾種類かの風貌に書き分け得る詩人啄木の聰明な横顔にほかなるまい。すなはち、——

第一には詩に自然の聲を聞き、自然詩に大いに意有味を感じる啄木である。

第二には詩に情の響を聞き Heavenmaent Genius を倚び、人まねの偽情詩を排撃する啄木である。

第三には詩を自分でも楽しみ、又隣人をも楽しませ、うまく行つたら海外貿易へ出さうと夢想しつゝある野心家啄木である。

そして、勿論これらの啄木は決してそれを個々に切り離し、バラ〳〵にして考へることは出來ないが、それにしても我々に興味あることは、かゝる啄木の風貌を圖式化してみることによつてすでに此の頃から如何に彼が時代の心理を丸のみにした「時の子」であり、且つ、大きな野心家だつたかを伺ひ知ることが出來るものだ。先づ、第一の啄木に於ては當時すでに時代の趨勢がそこに向つて突き進むべく用意をしてゐた自然主義の聲に、彼が早くもその冷理な眼をひた向けようとしつゝある點で、第二の彼には彼の聰明にもかゝはらず、未だ批判的にすべての社會的事象（現實）を考察し得ないこの少年詩人が、たゞ時代の風潮をやゝ鵜呑みに、しかし自己及び天才を信ずる限り最も野心的な少年としての自身を、當時のロマンチック社會風潮の最前線に置かう

と努力しつゝある點で、更に第三の彼れはこれは二つの積極を合せた、謂はゞ思想的に雜多な啄木が詩を我がものとして如何に自らを樂しみ、又人をも樂しませう、うまく行けば海外へも持ち出さうと夢想する大野心家であつたかを覗ひ知ることの出來る點で——。けだし、凡そこれらのことは我々が啄木を見て行く上に非常に大切である。なぜなら、彼がこゝに示しつゝある二つの側面——一方、自然主義に眼を向けようとする限りに於ける現實主義的な啄木と、他方、なほ未だ觀念的、空想的な「自我解放」への思念に全力を注ぎつゝある啄木との、二律の風貌こそ、全く「あこがれ」時代の啄木が絶えず無意識にではあつたが、右顧左眄したものであり、同時にそれは彼が後年その二つの矛盾を自己の内面に感じることによつて、そこから彼をとりまく現實の矛盾に氣付き、彼及び彼の隣人をしめつけるもの、それへの戰ひを宣言せしめたところの、彼の生涯をつらぬく苦悶の實體をなすものであつたから。

　では、それを我々は更に彼自身で語らせよう。三十七年一月十三日付の手紙を、啄木は當時の新歸朝者として嘖々たる名のあつた姉崎潮風氏宛にかいてゐる。

……先生の故樗牛氏に與へられたる前後二回の開書、太陽誌上で拜見致し候時、稚き迷ひに胸悶えたる小生には、云ひ知らず尊き光の影と仰がれ候ひき。人が三寸匣底に似たる形式の網中に小さき眠りを貪れる間に立ちて、生と光とを夢深く埋めたる長夜の暗を打掃ふべく叫ばせ玉ひた

ることの天来の響の、如何に鋭く、又強く、新しき呼吸を我らの上に植えられしよ。殊更に、所謂道學先生の、若々しき心を萎靡する教育におひ立ち候身の胸には、如何の希望をか吹き込ませ給ひし。……」

又、同月廿七日付の手紙に

「『戰へ、丈に戰へ』の御高論、すぐる頃太陽一號にて拜見の榮をえ候。勇心禁ぜず、潜かに、まのあたり訓戒詞を受くるの思ひして、幾度びか繰り返し候ひけむ、烏許がましき事は申上ぐべき限りに非ず候へど『一點の惰情は即ち萬事を殺すの原頭』なるを思はず、やゝもすれば奢として情眠を貪り、安逸の夢に就かんとする我等、憮然として思はず襟を正さざるをえず候。『今の一生は前後只一度の此生』、永生のたづき遂にこの生を措いて何處にか求めうべき……」と書き、更に言葉をつゞけて言ふのであつた。

「既に靈の囁きに聞き、永生の悲願、久遠の榮光に身を捧げは、一路信仰の赴く所、戰の一語は避くべからざる我等の運命なる者、茲に至つて小生は彼の日蓮が所謂此土寂光の願念、ワグネルの勇ましき愛に多大の同情なき能はず候。先生の說き給ふ所に、禮して以てわが生涯を貫く精神たらざる可らずと感じ申候、あゝただ結果と云ひ、貧と云ふ者の、古來幾多の熱血者を驅して其健鬪の歷史を暗中に葬り去りたる事少なからざるを思へば、卷を掩ふて涕泣日暮を忘るゝの悲風

とゞむべからず候、嗟々」

こゝで我々は啄木が如何に熱烈な樗牛の追隨者、讃仰者であつたか、そのもとめてやまぬ「此土寂光の觀念」そ、ワグネルの「勇ましき愛」が、如何に當時の版圖にもえ上つた日本資本主義の「自信」を反映するところの國家主義的、國粹的心理を表出してをつたか、又それにも拘らず彼が現實に於て經驗しつゝあつた「貧といふ者の」苛酷な束縛がどう云ふ風に彼を「涕泣日暮を忘るゝの悲風」として感ぜしめてゐたかを考へて見ることは、まだ暫くやめよう。それを我々が一つ一つ批判的に見て行くよりも、彼が思惟する觀想はそれを彼に語りつゞけしめることによつてひとりでに彼の苦悶、その性質についてまでも明らかにすることが出來るからである。

明治卅七年五月、啄木は「澁民村より」と題して、岩手日報に書いた。

「近時戰局の事、一言にして言へば吾等國民の大慶この上の事や候ふべき。臥薪十年の後、甚だ高價なる同胞の貴財と生血とを投じて贏ち得たる光榮の戰信に接しては、誰か滿腔の誠意を以て歡呼の聲を揚げざらむ、吾人如何に寂寥の児たりと雖ども、亦野翁酒樽の歌に和して、愛國の赤子たるに躊躇する者に無御座候。」

明らかなやうに、この短かい感想の物語るところは、當時の啄木が如何に日本資本主義の軍事的「成功」を支持する「愛國の赤子」」（註一）だつたかを物語るに充分である。が、云ふまでもな

くとのことは勿論、當時の彼が未だ現實を全體として見得ず、單に資本主義發展の歡に夢を與へられたところの、片側の世界にのみ眼を向けてゐたことから來てゐた。しかも啄木がかゝる戰捷の報道に心からなる祝杯を舉げ、それに滿足し乍らもなほ「勝ちて胄の緒をしめよ」の諺通り、その勝ちたる後のことまでも考慮してやまなかつたのは、畢竟、世界資本主義の舞臺に乘り出すべく、靜かに時の來たるを待ちつゝあつた日本資本主義そのものゝ反映といふべきであつたらう。

彼は述べてゐる。

「戰勝の光榮は今や燦然たる事實として國民の眼前に巨虹の如く横はれり。此際に於て、因循姑息の術中に民衆を愚弄したる過去の罪過を以て當局を責むるが如きは、吾人の遂に忍びざる所、たゞ如何にして勝ちたる後の胄の緒を締めんとするかの覺悟に至りては心ある者宜しく挺身肉迫して叱咤督勵するところなかるべからず候」

又、「勝敗眞に時の運とせば、吾人は、トルストイを有し、ゴルキーを有し、アレキセーフを有し、ウキッチを有する敗戰國の文明に對して何等後へに瞠若たるの點なきや否や。……嗚呼今の時、今の社會に於て、大器と呼び、天才を求むるの愚は、蓋し街頭の砂塵より綠玉（エメラルド）を拾はんとするよりも甚しき事に存候。吾人は我が國民意識の最高調の中に、全一の調和に基ける文化の根本的發達の希望と、愛と意志の人生に於ける意義を擴充したる民族的理想の一日も早く鬱勃として

現はれ來らむ事を祈るの外に、殆んど爲す所を知らざる者に御座候。」

かくして、我々はこゝに全く自信をもつて現實を——帝國主義化しつゝある日本資本主義をそのまゝの姿で肯定し、しかもその上に築かるべき國民的自覺のあまねく行渡らぬ不滿や「實に時勢を洞觀する一大理想的天才」の出でざる不滿を、それとして自身の苦悶の題目とする啄木を見ることが出來るものだ。——同じやうな感想を、啄木は別の所でも次の樣に述べてゐる。

「明治三十八年は、世界に於て、日本に於て、また我が一身上に於て、實に多事を極めたる年なりき。世界第一の海戰もこの年に戰はれた……かくて三十八年の多事なる經驗は、抑々吾人に何事の教訓を殘して行きたるか。我この點に就いて、特に二三の語るべきもののあるを見る。

軍事を外にしては、我が大和民族は未だ決して大なる國民に非ずてふ經驗は、吾人の最も悲しとする過去の教訓の第一也。何が故に然か曰ふや。答へて曰く、帝國は未だ一の民族的代表者、天才的一大人格を有せざればなり。……空前の戰勝國たりし日本は、遂に不幸にして軍事に於けると同じ勝利を民族競爭場裡に獲得する能はざりき。これ……實に……同胞を代表すべき一人の天才を有せざりしに起因する大和民族の不幸也。……記せよ、五千萬大衆、吾人にして一人の天才を有せざる限りは、屈辱と泣寢入とは、更に幾年幾十年幾百年の間、吾人の歴史の上に繰り返さるべき先天の祕星にてある也。我今に當りて切實にニイチエと共に絶叫せんと欲す。凡庸な

ろ社會は、一人の天才を迎へんがためにはよろしく喜んで百萬の凡俗を犧牲にすべき也、と。我が民族が大國民たりうるの日は、乃ち大天才の出現すべき日にあらむのみ……。」

「乙巳の年は吾儕にとりて、又我が一身にとりて得意とすべきこと少なからざりしに拘らず、その殘しをる教訓は頗る悲しむべきものなりき。民族としての吾人は、未だ求むるものを得ずして悩みつゝあるの確證を得たり。我が一身に於ても、イブセンの所謂世界の最も強き者は最も味方の少きものなりの語をいと痛切に感じたるは此年なりき。……自己一人を信じ得る如くに信じうべき人、この世に自己一人の外になし、……幾億の有生皆我にとりては、單に我と共に生くるの人に過ぎざるのみ。我彼等の凡てを愛す。而して同時に之を惡む。その間別に親疎なし。たゞ茲におのづから一種別人間あり。天才之なり。我はたゞ天才を畏敬し愛慕し、之に同情し感化す。これ實に又自らを偉大に向上せしむる所以に外ならざれば也。誤解する勿れ、これ決して利己主義にあらず、昔より名將は士卒の爲めにも一命を擲つことあるを知れば也」（註二）

こゝでは、最早や我々は啄木が當時（三十九年）如何なる態度をもつて現實を支持してゐたかを繰り返し述べる必要はないであらう。このドイツの血にうえた有產階級的理想主義——卽ち、個性の獨裁權を極度に宣揚したニイチェ流の個人主義思想、そこに現はれる大工業資本主義的及び未來の帝國主義的イデオロギーの支持こそは、まことに時代が啄木に負はしめた可憐な制約性

であり、且つ、その故にこそ、これまで封建的軍閥主義に對する市民的浪漫的反抗の歌を歌ひつつあつた「明星派」の運動が、こゝで固定化し、退嬰化し、保守化し、有産者化するの結果を導いたものであるが、しかし、それにしても我々が注意深く啄木の云ふところを聞く時、亦、こゝにはそれが反抗と云ふには極めて微弱ながら、それら固定化しつゝあるもの、退嬰化し、保守化し、有産者化しつゝあるものに對する彼の訣別が覗へぬことはないやうだ。即ち、

「誤解する勿れ、これは決して利己主義にあらず、昔より名將は士卒の爲めにも一命を擲つことを知れば也。」と、斯う啄木が云ふ時、我々は若し彼の眼に………を自己階級の絶大な負擔として……背負はされつゝあつた日本プロレタリアートの姿が映つてさへをれば、それは必然士卒の爲に一命を擲つ名將を求める彼ではなく、反對に、士卒と共にその欲求を戰ふべき名將を彼自身の中に見出したであらうことが、容易に感じとることが出來たであらうからである。眞に啄木の悲劇は彼が民族的代表たる天才を求めてやまなかつたことではなく、如何なる種類の天才が民族的代表たり得るかを理解しなかつたところにあつた。が、勿論、我々のこの望みは、未だ日本のプロレタリア運動が幼弱な時代をしか知らない啄木には、容易にそれが得られる由もなく、彼は明治四十一年、北海道に於ける放浪生活の時代の日記に書いてゐる。

「――明治四十一年一月四日。

大北堂から『太陽』『新小說』『趣味』の三雜誌を屆けて來た。夕方本田君に誘はれて蕎亭（小料）で開かれた社會主義演說會へ行つた。樽新の碧川比企男君が開會の辭を述べて、添田平吉の「日本の勞働階級」碧川君の「吾人の敵」何れも餘り要領を得なかつたが、西川光二郎君の「何故困る人が殖ゆる乎」「普通選擧論」の二席、勞働者の樣な恰好で古洋服を着て、よく徹る聲を張上げて諤々乎として話す所は誠に氣持がよい。臨席の警官も傾聽してゐたらしかつた。十時頃に閉會して茶話會を開くといふ、自分らも臨席して西川君と名乘合をした。歸りは雪路橋に追驅けられながら、櫻庭保と一緒だつたが、自分は社會主義は自分の思想の一部分だと話した。

この日『明星』新詩社名簿が來た。新詩社のやり方は一種の臭味があつて可かぬ」（註三）

かくて、當時の啄木には未だ日本プロレタリアートの姿が「自分の思想の一部分」でしかなかつたが、しかし乍らそのために彼は苦しみ（その苦しみはすでに新詩社のやり方に「一種の臭味」を感じはじめつゝあつた所にも表れてゐる。）一方に於ては半分だけ社會主義を信じ、他方の半分に於ては時代を支配し得る偉大なる天才的英雄の輩出を待望することとこれを久しくしつゝ、遂に同じ年の一月三十日には次の如く書かねばをれなかつたのである。

「今日以後の日本は明星がもはや時勢に先んずることが出來なくなつたと思ふが如何。自然主義反對なんか駄目駄目駄目。」（註四）

又、同年二月にかいた彼の注目すべき感想「卓上一枝」の中では次のやうに述べてゐる。
「一切の習慣と云ひ道德といふ社會的法則も亦、新しい肯定の世界にありては何等存在の理由あることなし。道德とは、弱者の卑怯なる自衛的制約のみ。然らずば、墮落せる凡人社會にのみ必要なる防衛劑のみ。自ら思想し自ら司配する獨立の個性にありては何の要かあらん。」
「矛盾あり、撞着あり、茲に爭鬪を生じ、血を見、涙を見る。慘たる哉、人生は宛然として混亂を極めたる白兵戰場なり。」
「我等生を享けて世に處す。笑ふ可きか、はた泣く可きか。笑ふ者には泣くべき時來らむ、泣く者には笑ふべき日到らむ。噫、我等生を享けて此の混亂の世にあり、笑ふべきか、はた泣くべきか。人は、人の生るゝを吉とし、人の死するを凶とす。然れども一日として人の生れざる日なく一日として人の死せざる日なし」
「一切の矛盾、一切の撞着、凡そ人生を混亂せしむる一切の因は皆此人生自らの兩面に胚胎し、而して一切の混亂は、此兩面を調節したる最後の理想的人生の豫想によりて解決し得らる。此立論は予が唯一の哲學なりき。此一家の哲學を立てゝ予は一切の懷疑霧散したりとせりき。」
「然れども悲しい哉、予の哲學は予に敎ふるに一事を剩したり。曰く、笑ふ可きか、はた泣く可きか、笑ふべきものならば生きもせむ。泣くべきものならば寧ろ死して墓田に眠を貪るに如かじ

予、此生死の大獄を解く能はずして、弊衣破帽、徒らに雲水を追ふて天下に放浪す。心置くべき家もなく縋るべき杖もなし。」

「予は、予の半生を無用なる思索に費したるを悲しむ。知識畢竟何するものぞ。人は常に自己に依りて自己を司配せんとす。然れども一切の人は常に何者かに司配せらる。此『何者』は遂に『何者』なり。我其面を知らず。其聲を聞かず。之を智慧の女神に問へども默して教ふる所無焉」

こゝには未だ後の思想に影響を與へた多くの樗牛的超人主義が殘滓してゐるとは云へ、我々には明らかに當時の自然主義に對する一般的な非難に對して、それに反抗する彼の動搖を感じることが出來るし、殊に彼がこれを書いた明治四十一年といふ年がどんな年であつたかを考へて見ることは後に譲るとしても、我々はこゝに一切の人は常に何者かに司配せらるることを痛感し、その「何者」が、遂に「何者」であるかを考慮しはじめてゐるところのこの浪漫詩人の胸にどんな方向がそれとして運動しつゝあつたかも、充分感得することの出來るものである。

ところで、注意せよ！　といふよりも、我々は右に於て大略、啄木がその胸に宿しつゝあつた浪漫主義について、その社會的性質、その苦悶の方向等々を知ることが出來た。だが、何よりも興味深く感じられることは、彼が當時に抱きつゝあつたこの國粹的思想にもかゝはらず、これが從來の封建的桎梏から感情を解放したい市民的インテリゲンチヤの心境を代表してゐた點である。

云ふまでもなく、これは彼が時代に示した唯一の積極性であつた。殊に彼がその年少にもかかはらず、氣慨にみち〳〵た政論、文明批評等々を試みて、そこに俊敏、聰明な自身の姿を示し得てゐるのを興味深く考へられる。けだし、それは彼が當時の社會的轉換の激浪時代に生きて、必然的にその眼の文明批評の方向に引きつけられた結果であらうし、又、その早くから新聞記者生活を經驗したことにもよるであらう。然し乍ら、我々にとつては、彼が新聞記者生活をし、早くより文明批評に筆をそめたと云ふことよりも、全くその批評の内容がどうであつたか、及び、その批評する高さに立つて、如何なる藝術（詩歌）を生み出してゐたかゞ大切でなければならない。

では、彼の詩歌は？　それを彼の思想との關聯に於て、次に考察してみよう。

註一、啄木が當時の諸感想にもかゝはらず、次のやうな日記を書いてゐることは、はなはだ興味深いことである。

「明治三十九年四月二十日。晴、土、――待ちに待ちたる徴兵檢査が愈この日になつた。學校は缺勤、午前三時半に起床、好摩から六時に乘車して沼宮内町に下車、檢査場なる沼福寺に着いたのが七時半頃、檢査が午後一時頃になつて、身長は五尺二寸二分、筋骨薄弱で丙種合格、徴兵免除、豫期したる事ながら、これで漸く安心した。自分を初め、……………(十五字伏)…………。…、…(十六字伏)……………。新氣運の動いてるのは、此邊にも現れて居る。四里の夜路を徒歩で歸つた。家に着いたのが十

時頃。二階への梯子を這ふて上る程つかれて、足が痛くて動かなかつた。道すがら初蔦、初蛙をきいた。一家安心。」（「改造」、一九三三年二月號三一一頁――「啄木の日記」（吉田孤羊）。この……意味が何であるかは解らないとしても、しかし……せられるやうである。何れにしても興味ある日記といふべきであらう。

註二、「古酒新酒」參照。

註三、「啄木の日記」（吉田孤羊）前掲「改造」一三四頁。

註四、明治四十一年一月三十日付、金田一京助氏宛手紙の追記參照。

さて、我々はいきなり啄木の詩について檢討する前に、一應次に示すやうな「藝術表現に於ける時代の制約性」に關する、若干の理解を深めておくことにしよう。

――凡そ、詩人（藝術家）の仕事は、何時、如何なる時代の例をとつて見ても、そこに必ずその詩人の生活した一定の時代の影響――その歴史的制約をうけてゐないものはない。なぜか？云ふまでもなく、詩人の仕事が何時でも一定の歴史的時期に於ける、その社會の社會心理――階級心理を具體化するものに外ならないから。人間が歴史と環境の産物である如く、詩も亦歴史とそれを生活する詩人の環境より生み出されたるものである。のみならず特に我々の忘れてはならないことは、この社會心理――階級心理そのものが最後的にはその社會の生産形態と深い關係を持ち、結局、心理の表出そのことが、その社會の生産形態に對して置かれてゐる詩人の階級的位

置によつて決定されてゐるといふことであらう。とは云へ、勿論我々がこのことによつて社會心理、階級心理が全部的に直接生產形態に依據してゐると考へるのも間違ひであることを知らねばならない。例へば多くの場合、プロレタリアートの心理の中にも多分に農民的な要素の含まれてゐることはあり得るし、又、前衛的勞働者分子の心理の中にさへも、ブルジョア的或は小ブルジョア的な心理がしばしば夾雜されてゐることが見出される。又、特に、勞働者と資本家との關係は、それを今更言ふまでもなく、社會的物質的生產に於て、兩者の關係が全然相反するものであり、且つ、勞働の形態は基本的には最も新しい機械生產であるが、だからと云つて、勞働者の言葉、文學、生活、習慣等にあらはれる心理・イデオロギーが直接機械による生產、その勞働形態から導き出されるものではなく、そこには過去からの多くの名ごりや、現在の階級對立の中でブルジョアジーの側から絕えずふりかけられて來る彼等の心理、イデオロギー的要素、その他の諸階級層の混合したそれらの影響が、プロレタリアートの心理、イデオロギーに反映してゐることは、我々の日常に見、かつ、感じてゐる通りである。そこで、これらの諸關係についてプレハーノフは特に文學作品に於ける時代的制約、階級的制約の問題を明示してゐる。

「藝術作品は極めて僅かな割合でのみ、與へられた社會の生產形態に直接に依據してゐるにすぎない。それは、他の中間、すなはち、社會の階級構成と階級利害の地盤の上に成長する階級心理

とを通じて、間接にそれに依據してゐる」と。

けだし、このプレハーノフの原則は、今、我々が啄木の詩歌を見て行く場合にも、しば／＼考慮されねばならないことだ。卽ち、先づ彼の詩歌がどこに時代の制約をうけてゐるか、又、どの階級の心理に立つてそれを歌つてゐるかを見て行く上に於て、及び、特に彼の詩歌を見てみる時我々は彼がその晩年、自らを社會主義者として宣した時代に於てすら、なほかつさうであつた如く、しば／＼浪漫詩人として當時の彼がみづ／＼しく歌ひあげつゝあつた多くの詩歌と、彼が文明批評家として示し得たその思想との間に全く相違した兩端を見出し得るやうに考へられるが、果してそれが全く別個な彼であるか否かを見て行く上に於て等々

では、この樣なことを考慮に入れて、當時の詩を一つ二つ拾つてみよう。

にごれる浮世の嵐に我怒りて、
孤寥、荒磯のしじまにのがれ入りぬ、
捲き去り、捲きくる千古の浪は碎け、
くだけて悲しき自然の樂の海に、
身はこれ寂寥兒、心はたゞよひつつ、
靜かに思ひ——岸なき過ぎ去し方、

あてなき生命の船路に、何處へとか、
わが魂孤舟の楫をば向けて行く、と。

夕浪瀬く、底なき胸のどよみ、
その色、香、皆不朽の調和もて、
捲きては碎くる入江のこの束の間――
沈む日我をば、我また沈む日をば、
凝視めて叫ぶよ、無始なる時、さらば
無終の光よ、渾てを葬むれとぞ。

――「ひとつ家」(甲辰六月十九日)――

すでに我々は啄木が優れたる文明批評家として、その言葉を吐けば熱烈火の如き理想の憧憬と時代を司配し得る天才の待望を唱導してやまなかつたことを知つてゐる。

ところで、この詩はどうか。なる程、この一つの章句から赤裸々な言葉では、彼がその文明批評の筆にした如き言辭は見出せないやうだ。しかし彼がこゝで美なるもの、理想なる姿を求めやまない心情にもかゝはらず、このにごれる現實には、如何に多くの凡俗が蟠居し、彼を孤獨に追

ひそり苦しめてゐるかが感じられるであらう。それは全く文明批評家としての彼が「凡庸なる社會は、一人の天才を迎へんがためにはよろしく喜んで百人の凡俗を犠牲にすべき也」てふニイチェを引合ひに絶叫した時の孤獨感と同じである。

　　にごれる浮世の嵐に我怒りて
　　孤寂、荒磯のしじまにのがれ入りぬ、
　　身はこれ寂寥兒――、

實際、この怒りは「にごれる浮世の嵐」に堪え切れぬ怒りであり、そしてこの寂寥兒は、いふまでもなく更にその怒ることにすら、切なく、淋しく、堪え切れなくなつてゐるところの「寂寥兒」に外なるまい。それは理想を求め、美しい世界を夢想してやまない彼の心情をあまりにも多く疵つけるところの――さう云ふ世界が彼をひし／＼としめつけることに對して、無限の憤激を感じるところの怒りであり、また、そのための孤獨感であることも云ふまでもないであらう。だが、それにしても、これはどんな理想を夢想するもの丶怒りか？――といふよりも我々は啄木が時代に對するこの憤激の吐け口をどこに求めてゐるかを見てみよう。果して彼はどこに憤激を向けて行つたか？　それは彼を憤激させるものへ、その憤激をそれとして投げつけ、美しいもの、理想なるもの丶現世的建設に、それの欲求として闘つてゐるであらうか？　全く否である。それ

は彼が自身で歌つてゐる如く、徒に、彼をしてこの憤激を、憤激としてそれを感じとらせるものに投げつけないで、たゞ「荒磯のしづまにのがれ入り」その孤家に、彼の堪え切れぬ憤激をいたはり、いこはせようとするところの、全く、彼が自身の置かれてゐる階級的位置を暴露するための怒りにすぎなかつた。では、それはどんな階級か？——云ふまでもなく憤激を買はせるものと、それを買つて立ち上ることの出來るものとの中間におかれた、それこそ、當時の日本資本主義の發展によつて、漸く絞めつけられはじめた中間階級がそれであり、又、すでに再三述べて來た如き、啄木がそこに置かれてゐたインテリゲンチャ階級がそれである。けだし、我々は當時の啄木が孜々として生産につとめてゐた詩歌こそ、全くかゝる階級人の苦悶を歌ひつゝあつたに外ならないこと、及び、かゝるインテリゲンチャ的苦悶にもかゝはらず、彼がその美なるもの、理想なるものを求めてやまない心情の中で、つねに憤激をもつて闘ひつゝあつた空想的な「自我解放」の思想が、必然に當時の興隆的な市民の感情を代表するものとして、時代に對する積極的な役割を持つてゐたことを留意しなければならないものだ。

　ところで、我々はそれにしてもこゝで當時の啄木の詩を、藤村、泣菫等のそれと對應させて見ることを甚だ意義深く考へる。なぜなら當時、藤村はすでに時代の底流を闘ひつゝあつた現實主義にその視野を向けはじめてをつたし、又、泣菫が興隆する市民階級の先頭に立つて、その民主

的な感情解放のために闘ひつゝあつたのと、啄木を對應させて見る時、我々はより明確に彼の姿を、その眞實に於て理解することが出來るからだ。――藤村はその詩「勞働雜詠」の中で歌つてゐる。

左手に稻を捉む時
右手に利鎌を握る時
胸滿ちくれば火のごとく
骨と髓との燃ゆる時

土と塵埃(あくた)と泥の上
汗と膩の落つる時
緑にまじる黄の莖に
烈しき息のかゝる時

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて

野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稻の穗を

思へば名も無き賤ながら
遠きに石を荷ふ身は
夏の白雨過ぐるごと
ほまれ短き夢ならじ

生命の長き戰鬪は
こゝに音無し聲も無し
勝ちて桂の冠は
わずかに白き頬かぶり

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて

野邊の鹽山を鳴らすかな　　、
刈り乾せ刈り乾せ初の稻を

——藤村「勞働雜詠」(畫の一部)——

明らかなやうに、こゝで藤村の歌つてゐる農民生活の苦闘は、それが苦闘といふよりも、農村の平和、農民生活の欣びの中に、それが埋めかくされてゐるといふ方が正當であらう。これはつねに農民生活を傍觀し、彼等の現實に負はされつゝあるところの苦痛を、自身の身をもつて感じとれない階級の眼にうつる現實である。そして、かゝる現實が、あらゆる生産制をわがものとするブルジョアジーの現實でも、亦、今日それと反撥して必死に闘ふプロレタリアートの現實でもないことは自明である。が、それにもかゝはらず、我々がこの詩に深い關心をもち得るのは、藤村がかゝる現實を歌ふことによつて、それまで自己の姿を全く藝術表現の中から見ることを失つてゐた農民に、何はともあれ彼等の置かれてゐる現實的な姿を與へてゐるといふことでなければなるまい。けだし、このことは藤村がかつて當時の軟弱なものを蔑視する社會へ、その蔑視される軟弱な抒情の戀愛詩をうたふことによつて投げつけたと全く同じ反抗である。かくして、こゝで藤村の歌ふところが、よし未だに不充分な農民に過ぎなかつたとしても、我々はそこからすでに彼がかゝる現實に眼を向けはじめてゐたこと、及びかゝる方法で歌ふことによつて、彼がよく、

その現實への反抗を示し得たところを、その時代に對する積極的態度として、注目せずにはをられぬものだ。

ところで、かゝる藤村にかはつてこの反抗を、それとしてうけついだ詩人は薄田泣菫である。

彼は歌ふ。

葉は落ちぬ、
小野の榛の木、
灰いろの
影のたゞよひ。
落穂ひろひ、――
かなしびは
たゆげに動く。

尋めあゆむ
「きのふ」の落穂
ひろひしは

唯粃實（しひな）のみ。
おちぼひろひ、——
とみかうみ
かつ涙ぐむ。

今日もはた
南へ、海を
夢の鳥
かへりぬ、ひとつ。
おちぼひろひ、——
うらぶれて
わが世は寂びぬ。

初冬の
日はわびしげに

われとわが、
世を傷ぶかに、――
見入りては
また涙ぐむ。

――泣菫「落穂拾ひ」――

こゝで泣菫が何を歌つてゐるか明らかである。これは勿論藤村をうけ繼いだものではあつたが、決して彼の「平和な農民生活」をそのまゝ繼承したものではなかつた。明らかにその現實は「たゞ粃實のみ」を拾ふ「とみかうみ、かつ涙ぐむ」悲慘な農民の生活であり、且つそれはこれを歌ふものゝ民主的な感情によつて示されるところの反抗――さういふ意味で藤村をうけつぎ乍ら、依然として、之を歌ふ詩人の小市民的な傍觀性を失ふことの出來ぬものであつた。けだし、詩人泣菫については、白秋が云つてゐる。

「『南畝の人』では藤村に見るごとき農夫生活の平和と苦鬪と悲哀とを歌はうとして單に小引で止み、英杜戰爭に義憤を發した『ああ杜國』の長詩篇は對社會的感覺に鋭き才人の一面をいち早く明らかにして却つてその本性に非ざる理由で非難された」と。

我々はむしろ彼を非難したものこそ、かへつて非難さるべきものであつたことを明らかに知つ

てゐるが、しかしこゝではそのことについてはこれ以上述べることをしまい。兎まれ泣菫の示した反抗は、彼が誰よりも鋭くその眼を無産農民の上に注ぎ、それに同情するものゝ立場から戰ひの歌を宣言しつゝあつた所に、すでに藤村の及び難い彼の時代への積極性を物語つてゐる點に我我は留意すればよいであらう。（註一）

然るにこれらの詩人に對して啄木は？　我々の何よりも言つておき度いのは、全く彼がこれらの詩人の後を繼いで出作ら、未だその繼ぐべきものを十分に繼ぎ得ない亞流としてたゞ他人の畑の瓜や梨―を追隨してゐるといふことでなければならまい。――彼は歌ふ。

青垣山を繞らせる
天さかる鹿角の國を忍ぶれば
涙し流る。――今も猶、錦木塚の
大公孫樹、月よき夜は夜な夜なに
夏も黄金の葉とかはり、代々に傳へて
新らしき戀の譚の筬の音の、
風吹きゆけば、吹きくれば、枝ゆ靜かに、
月の光の白絲の細布をこそ

織ると聞け。

「鹿角の國を懷ふの歌」の一節（三八、一二、五）

又、

散り、また散りぬ、かくながら、春はまた來ぬ
人の世のいのちの花の散りゆけば、
殘るはたゞに蒼白き追憶の影、
冷えわたる胸は涙に朽ちぞゆく
あゝ花散る日、うらぶれの
つかれににぶき眼あぐれば
朧ろに霞む春の空、今暮れかゝる
北遠く鐘こそ響け、幽かにも

――「花ちる日」の一節（三九、三、一九）

かくて、しば／＼泣菫、有明への亞流を見る我々は「若しも彼が明治三十年代に死んでゐたならば、彼は一個の浪漫的感傷詩人として死に、彼の名は今我々を遠く去り、當時の浪漫的感傷詩人と共にたゞ年代史の上にのみ並べられるであらう」（註一）ところの啄木を見るのであるが、そ

如何にしても彼が時代の大きな歷史的轉換期に立つて、浪漫主義から自然主義へ——そこに開かるべき頑丈な風穴をつくるべく闘つてゐたこと、及び、當時漸く現實に展望を持ちはじめてゐた日本の大資本及び帝國主義のイデオローグ達に對して、全くゆるみなき觀念上の武裝を用意しはじめてをつた彼を、決して見逃してはならないであらう。

——我々は詩作に關する二三の感想を引用して、當時の啄木が來たるべき時代の詩のために、何を如何に準備しつゝあつたかを想起してみよう。

「詩作のことに就き一言申上度きは、嘗て試みたる四四四六の新調の外に、近來また五六六を一句とする最新調を發見しえたる事に御座候。日本の詩に押韻の法の不可能なるは今更申す迄もなく、從つて、其吟誦の要約として音樂的性質を與へんとせば、種々の格調を以て異なる詩想に調和せしめざるべからざる儀と存じ、さてこそ力をこの方面に注ぎ居候。在來の七五、五七等の外に小生が「鶴飼橋」に套用したる泣菫氏の八六調その他七八調、七七調、四七六調、五八五調等等、多々ある先進諸氏の經營に對して、小生は大に感謝致し居候。小生のそれに果して永遠の生命あるべきや否や、小生はたゞ今後必ず出現すべき天才に向つて、材料を作り置かんと存じ候。五六六調の試作として「錦木塚」の一長詩計畫致し居候」（註三）

「兄の御說の如く、平易な詩必ずしも惡詩でない。「又同樣にむづかしい言葉を用ゐても惡い筈が

ない。要するに詩の高下は文字の難易以上である。」

生の詩は今漸く一段落を告げて、新らしい時期に入らんとしつゝある。明星の七月號に出た生の「アカシヤの蔭」を兄は見られたか。あれは随分苦心慘澹の餘に出た作だが、思ひ切つて平易な語を用ゐた所もある。一體自分から考へれば、自分の詩だとて別に特別な文法や言語で書いたのでないから、讀む人にわからぬといふのは不思議な位だ。且つまた、多くの讀者をえ、早く大名を擧げたいために詩を作る樣な事は、到底自分らの藝術良心が許さぬ。

露伴の「心のあと」御覽になつたさうだが、あれは大に注目すべき明治詩界の大作たると共に又、格調、用語の選擇に於て少なからざる失敗を含んで居るのも事實だ。それはとも角、日本には哲理詩や、宗教詩が今迄殆んどなかつたのに、あの作の出たのは、實に愉快でならぬ。生は露伴の詩に於て、有力な同盟者を得た樣な氣がする。

一體美は宇宙乃ち神の影で、また、それの神秘を闡くべき鍵である。で、廣き意味に於て何らかの信仰なくして眞の詩人たる事は出來ぬ。(これは詩許りでなく凡ての事業もさうだが)但しその信念には程度がある「自然」に滿足する人と「自然を司る力」を求むる人との差は茲に於て生ずる。生が鐵幹よりも泣菫有明を好み、テニソンよりもバイロン、シエレーを好み・・・とするのは全くこれがためだ。ターレントよりゼニアスは高價だ。地平線下と地平線上とは天と地だ。」

（註四）

「初號（雜誌『小天地』――筆者註）に岩野泡鳴兄などの詩を載せ候ことについて、江戸表の先輩諸先生方の中には御機嫌よからざるお方も有之やに承はり候が、萬あるべからざることゝは存じ候へども、如何あるべきか、尤も平野萬里兄などよりは、この事に關し、堂々たる反對の御手紙を頂戴いたし候ひし、乃ち『泡鳴などの詩は詩と思はず』とのお言葉に候ひき、この樣な事に關しては小生小癪乍ら少しく言ふてみたき事も有之候へども、當分さしひかへ居候。……明星誌上岩野君に對する前後二回の評論は、少なくとも、詩壇の或る一黨派のためのみならず、廣く國詩の發達に忠實ならむとする批評家の言としては、多少矛盾撞着したる所なく候ふべきや。小生としても岩野君の『厭信』の愚劣――少なくとも、小生の胸中の理想の詩人が斯ういふことをしたりと考へての上の判斷によりて、――且つ自己の品性を傷くるものたることとは、敢て公言するを憚らず候。……岩野君は或は新詩社の誰よりも言語上の知識について劣り居るかも知れず候。然し乍ら、岩野君の如き性格の人にありては、自己と他とを比較して見るなどゝ云ふことは出來ざる相談なるべく、またよしや、假りに自己の言語上の知識が淺薄なるを知り居るにしても、一度心絃に天來の響を聞ける時、彼は果して、自己の修辭が不完全なりとの理由を以てその興を空しく逸し去ること、よくなし得べきや否や、たとへ修辭に缺點ありとも、既にその内容に於て詩

實に造詣する所ある程のならば、眞に詩を愛するものは、決してその修辭の一缺點のみを以てその詩の價値を悉皆沒し去る樣の事は無き筈と存ぜられ候。」（註五）

「露のポテムキン號はオデツサに於て謀叛を起し候由、痛快の事に候、日本の精神社會にポテムキンの如き『自由』の堅艦は無之候ふべきか……」（註六）

以上、我々が長々と引用して來た啄木の感想を、讀者はそれがたゞ詩の格調を新造することに汲々たる彼としてみたり、乃至は哲理詩や宗教詩の新出現を拍手して迎へる彼としてのみ見てはならない。又、況んや泡鳴を辯護する彼が如何に詩の內容に新しい時代のそれを要求してゐたかも、之を見落してはならないであらう。我々にとつて、こゝで必要なことは何よりも啄木をしてかかる要求や辯護を欲せしめたものゝ所以が何處にあつたか、及びそのひた寄せに發展する現實との鬪爭に於て、そこで彼が血まみれに鬪ふ方向がどちらかに向ひつゝあつたかを正確に感じとることに在る。實際、それを感ずることによつて、初めて我々の引用も無駄にはならないであらうし、又、特にそれを感じとることによつてのみ、我々は浪漫詩人としての啄木を隈なく見渡し得ると共に、且つ、そこから袂別して「實社會と文學的生活との間に置かれた間隔」を埋めるべく次第に「藝術と人生乃至は社會組織との關係を究明しよう」として行つた石川啄木の眞實を見究めることが得られるものだ。

「――小生は更に一つの喜ばしき新報道を兄に向つて書き得るを悦び候。そは外でなし。今迄小生は生活その他のために心を苦しむ事多く、何日となく自分の天職を忘れむとする樣の傾向有之候ひし所大に感ずる所あり、生活の方は命さへ續けば粥喰つてもよしといふ意氣込にて今後は大に『復活したる自覺』を以て文學のために努力する決心を起し候、小生は樂天家に相成候、人は仲々死ぬものに非ず必ずどうにかなるものなりといふ信仰を以て、大いにやるべく候。この覺醒が小生のために決して安價なるものに非ざるは兄も諒とし玉ふならむ、天下初めて太平也、何卒御安心被下度候」（註七）

これを書いた啄木が、當時その貧窮と放浪生活の中でどんなに苦鬪してゐたかは知られてゐる一九〇六年（三十九年）四月澁民小學校の代用教員を拜命して月給八圓、六月第二詩集の出版と寶德寺後燈問題の用向きを兼ねて上京、一九〇七年四月、小學校でのストライキ煽動、代用教員罷免、五月、北海道に放浪、函館商業會議所の雇、六月、同市彌生小學校の代用教員（月給十二圓）、九月、札幌の「北門新報社」で校正係、同月小樽に渡り「小樽日報」の創業に參加、十二月そこで事務長と喧嘩して退社、一九〇八年一月「釧路新聞」へ入社等々――だがこゝで啄木が「復活した自覺」をもつて決意したものこそ暫く彼が置き忘れてゐた文學的欲求の復活であり、又彼をして自然主義に反對する「明星」と袂別させて、勃然と、そこに立ち上らしめたものであるこ

とは言ふまでもない。

註一、藤村、泣菫の詩については拙著「近代日本詩の史的展望」(耕進社版)を參照されたし。
註二、中野重治「啄木に關す斷片」(「藝術に關する走り書的覺え書」)第二二八頁參照。
註三、明治三十七年一月廿七日、嘲風氏宛手紙參照。
註四、同　年八月三日、伊東氏宛手紙參照。
註五、同三十八年十月十八日、櫻翠氏宛手書參照。
註六、同　年六月、伊藤氏宛手紙參照。
註七、明治四十年九月二十一日、宮崎郁雨氏宛手紙參照。

三　思想的苦悶時代

轉換期(第二次產業革命の展望)――自然主義文學運動――苦悶の詩人啄木――社會批評家としての啄木――その詩歌

我々はすでに啄木が若い浪漫派の詩人としてその時代に示し得たさま〴〵な苦鬪を見て來た。
又、然し乍らその激しい苦鬪にもかゝはらず、彼の抱きつゝあつた數多くの夢想が一ツ一ツ破壞せられ、從つてそこから夢想をすてゝ現實に向つて行つたといふよりも、止むなく現實に向つて

ひたむきに急がざるを得なかつたところの新しい方向をも十分に感じとることが出來た。

だが、一體啄木の新方向とは具體的にはどんな方向であつたらうか？　こゝに我々はそれを明らかに知るために、當時啄木の夢想を一ツ／＼ぶち壊して行つたもの——日本資本主義がどういふ足どりで發展してをつたか、又、そこで日本の文學運動がどんな闘ひを展げつゝあつたかを眺めながら、それとの關係に於ける啄木の反抗乃至はその社會主義考察に向へる嵐のやうな苦悶の心情について究明することにしよう。

すでに述べて來た通り、日清の役後臥薪の十年間を經つゝ發達して來た日本の資本主義はいよいよ堅實な步調をもつて、その發展の道をたどつてをつた。それは殊に日露の役に大勝することによつてより寬闊たる發展の基礎を築くことが出來た。——卽ち、既設の諸事業の擴大合同等による產業の大規模化、大資本化等々、……生產及び資本の集積竝びにその集中に加へるに金融資本の發達によつて益々助長せらるるに至つた近代的大工業、大經營の發達は、舊來の家內的な諸產業を併呑し、小工場を蠶食すると共に、又、その過剩な生產品の吐け口を海外市場、特に植民地、半植民地に開拓せざるを得ぬ狀態にさへ進められた。が、もとより明らかな如く、後れて發達して來た日本の資本主義が、當時、すでに帝國主義的に成熟してゐた先進資本主義諸國に圍まれて、之と對抗しその國際市場の開拓を安易に得られるといふことは、決して有り得べくもない。

從つてこのことは必然に日本の若い資本主義を早老の狀態に導き、そこからして、一方、國內の社會主義運動を激しく搖り動かすと共に、他方、早くもこの早老的な資本主義日本を未曾有の反動期に入らしめずには置かなくなつた。極度な財界……は無產階級の上に…………を押しかぶせる。おまけに、日本資本主義が如何なる場合にも打倒することをしなかつた…………………、…………もつて勞働者運動のあらゆる芽生………行く。「……ために勞働者階級の反抗意識あるものは、四十年二月に於ける足尾銅山の例の如く、……………の止むなきに至つた」事實をさへ見たが、しかしそれにもかゝはらず、日本資本主義は、主觀的には彼女のかち得た「戰捷の覇氣を內におさめ、靜かに來たるべき日の發展を期して」着々と、その「內部の整理と質的轉換とに沒頭」しつゝ、今日の帝國主義日本を築きあげる基礎工事を完成させてをつた。しかも、かゝる客觀的情勢は、全く文化文學の分野に於ても、それの如實な反映を見せない理由は一つもない。卽ち、すでに「若い興隆的ブルジョアジー及び特殊な條件のもとに勃興する地主、そのおのおのゝ快朗な昂揚的氣分」（註一）を內包して開花したところのブルジョア・ロマンチシズム運動、及びそのブルジョア文學としての理論的・形式的基礎の一應の確立の後をうけてそこに花咲きはじめつゝあつた自然主義運動こそ、まことにこの新情勢と對應して必然的に生み出されたものであつたし、從つてそれは客觀的には「堅實なる產業革命と內的整理との

形式において現はされてゐたところの、發展的ではあるが極めて客觀主義的なブルジョアジーの心理イデオロギーを代表することによつて自身を特質づけるところのものであつた。――かくて、實際啄木の夢想を一つ一つ破壊して行つたものが、この現實の發展に伴ふ自然主義運動の勃興及びこれをその眞實に於て把握せうとした啄木の苦悶の中に宿されてゐたものであることは云ふまでもないが、それにしても、我々は當時日本の自然主義運動が、何をかかげて鬪ひを宣戰してをつたが、殊にその客觀的態度なるものゝ中にふくまれてゐた諸特質が如何なる方向と形式とに於て現はれつゝあつたかを見究めながら、具體的な問題に這入つて行くことにしよう。

一體、では日本の自然主義運動は、どう云ふ鬪爭題目をかゝげて鬪つてをつたか？　その特質は？……。

云ふまでもなく、當時、日本の自然主義はそれが新しく國際的資本主義の地位をかち得た產業ブルジョアジー及びその同盟者として、十九世紀末葉から二十世紀の初頭にかけて勃興した地主階級の發展的な心理を反映して、そこにその合言葉を封建的思想道德との鬪爭――そのスローガンが物語るところのブルジョア道德の確立、個人主義の確立といふ點においてをつた。それは從つて過去が蓄積し來たり、今も蓄積しつゝあるところの醜悪な人生のあらゆる相貌をくまなく暴露し、剔抉し去ることによつて、彼等のいはゆる「個性の解放」「個性の自由」の全き解決に向は

うとしてゐたものであつた。――これは、けだし自然主義がその方向として必然に向はねばならない常規の道すじである。だから、かゝる自然主義が若し常規的に進展し、その「あるがまゝの現實」を「あるがまゝに體認」する方向へひるむことなく驀進させられてをつたら、必ずや日本の自然主義も「フランスの自然主義がゾラをそのルーゴン・マッカール叢書の中に於て社會の考察に向はしめたと同じく、その同一の運命に於てあらゆる現實のくまなき剔抉に、更にそこからすすんで『社會の考察』に向はねばならない約束を負はされてゐる筈であつた」。だが、果して日本では自然主義がその常規の道で發展し得たであらうか？　否である。凡そすべてのブルジョア・デモクラシーの要求――個人主義確立の鬪爭を現實に向けて、そこで闘ひとらうとしたものはその要求の如何にかゝはらず、たゞ暴風と暴雨のやうな威嚇的鎮壓をもつてことごとく阻止され、凋落させられ、しかも徒らに現實がそれ自身の應答として齎したところの『幻滅』をもつてむくひられねばならなかつた。何故か？　日本の資本主義そのものがすでに常規的な發展の道を阻止され、歪められ、たゞ不義することによつて自身の存在する基礎を業固に確保しようとしてゐたに外ならなかつたがために……。即ち、その禍根はすでに明治維新の革新が不徹底に終つた所から宿され、第一にはブルジョア個人主義確立の運動に參加したものゝ心理が雜多な夾雜物に汚されすぎてゐたゝめ及び第二には最も基本的に當時のブルジョア權力がそれ自身の確立のために封建

的地主的な舊勢力とのブロックをつくることなくしては、到底それをかち得られなかつたところから必然に彼等との闘爭を客觀主義的な態度たらしめると共に、且つそのことの中にそれぐ\「幻滅」や「悲哀」を宿さなければならない歴史的條件を置いてゐたから・・・。

かくて、我々はそこに日本の自然主義運動が、何故現實を暴露することによつて新しい現實を捉へなほさねばならなかつたか、又、特にその新しい現實を捉へなほさうとする欲求がどこから來るかを資本主義そのものゝ發展と象應して考へ得なかつたものによつて育てられ、たゞ徒らに「現實暴露の悲哀」を悲哀し「自覺の悲哀」を幻滅することによつてのみ、それを意義づけてゐる姿を、この運動の發展の上に見るものであるが、では、それにしてもかゝる自然主義運動が日本ではどのやうな順序で提唱せられ、それが文學運動に於ける創作上の實踐にうつされて來たかを次に見てゆかう。

先づ「露骨なる描寫」（明治三十七年發表）に於て、現實を露骨に描寫することゝ自然主義文學とを履き違へた田山花袋の有名な評論についてや、又、獨歩の「牛肉と馬鈴薯」、天外の「はやり唄」（共に卅四年發表）、花袋の「重右衛門の最後」、獨歩の「酒中日記」、荷風の「地獄の花」（共に卅五年發表）等々に於て、すでに自然主義的な文學創造の提唱がいち早くから行はれ、所謂「技巧化され虚飾化された人生のメッキ」をはがすこと乃至は醜悪なる暗黒面を何憚ることなく觀察

することが徐々に努められはじめた萌芽期の自然主義的文學及び評論については、こゝで言はないとしても、我々は明治卅九年十月の「太陽」誌上で發表された長谷川天溪の「幻滅時代の藝術」については、これを見逃してはなるまい。卽ち、そこで彼は謂つてゐる。

「乙女を見て、その身邊に、星を見、菫を見、薔薇の花を見、其動作に馥郁たる香を嗅ぐが如き卽ち處女さへ見れば、何時も盛裝せる花嫁の幻像を眺むるが如き、青年時代は既に過ぎ去りぬ。卑俗と超俗との區別を立て俗を見れば直ちに醜惡の幻像を見るが如き青年期はすでに過ぎぬ。時勢は老人化したりその眼中よりは總ての幻像消え去りて殘れるは只これ素地のみ。」

「幻像の勢力を有したる時代に生れたる遊戲的分子を排除して、眞實其の物に基礎を定めたるもの、これ將來の藝術たらざるべからず。幻滅時代の世人が欲するものは、眞實を描きたる無飾藝術なり。」

又「現實暴露の悲哀」の中で、

「げに恨めしきは知識ならずや。吾れ等成人は、今日少年時代に歸りて、美麗なる幻像世界に嬉戲せむと欲するも、旣に現實を味ひたるが故に、望みても爲し得べからざるに非ずや。……創世紀に於ける蛇にも似たる惡太郎は、邪見の棒を振り廻して、仲好く飯事する少年少女を苦しむ。少年少女の樂しめる凡ての幻像は、惡太郎の一喝と共に破れて、有の儘の現實は頗る殺風景の眼

に映じ、可憐の少年少女は、泣いて其の保護者の家に歸る。保護者たる父兄を有する彼等は幸なり。吾れ等現代の人々は幻像を失ひて後、歸るべき家なく、倚るべき保護者なきに非ずや。實に宗教も哲學も、其の權威を失ひたる今日吾れ等の深刻に感ずるものは幻滅の悲哀なり。現實暴露の苦痛なり。而して此の痛苦を最も好く代表するものは、所謂自然派の文學なり。」

「吾れ等は唯吾が觀たる現實界を基として人生を説くを以つて滿足せざるべからず。これ自覺的現實主義にして其の哲學界に現れたる最近の形式はプラグマチズムにして、文藝界に表れたるは自然主義なり。……現實暴露の悲哀は畢に彼れ等を狂死せしめたるなり。彼れ等自然主義の一派は、醜陋、鎖末、非理想的、非藝術的、非道德的、肉的、性慾的を面白がりて描寫するに非ず、其處に僞なき現實を認めたればこれを描き、而も背景は深刻なる悲哀の苦惱なり。……この無滅增進の悲哀を背景とせるもの實に近代文藝の生命なり、又、此の背景を離れて血肉ある文藝は成立せざるべし」と。

こゝで天溪がそれを支持し、又、彼自身への誹謗者に對する頑固なる防衛と逆襲とをもつてむくひてゐるところの自然主義が、當時の浪漫派運動の固定化、有產者化、虛飾化に對する熾烈な現實主義的反抗であることは明らかである。

「……げに慢めしきは知識たらずや。……吾れ等現代の人々は幻像を失ひて後、歸るべき家なく

倚るべき保護者なきに非ずや……」

この苦悶こそ、全く「既に現實を味ひたる」ものゝ再び浪漫的空想的な自我解放の夢想に安住し得ない誇りを雄々しくも宣揚する「科學的勝利」の主張であり、しかも、それがブルジョア的生産の促進增大を要求する彼等のブルジョア的精神を直接、間接に反映するところの斯うした逆說的な主張――詠嘆であることは今更言ふまでもないであらう。が、注意せよ、凡そブルジョアジーにとつて科學が人間生活の本質を見究めることに役立てられ、且つそれが人間全體の福祉を齎らすためのものとして意義あらしめられるといふことは決してない。なぜなら、彼等にとつて科學が自己の利益を增大させるか、或はそれが自己を守る最も精銳なる武器たることに利用される以外は、そのことが人間社會に最も大きな不幸を招く結果をもたらさうとも、少しもそれに係はり知らぬことは、我々のあまりに多く知つてゐる通りであるからだ。ところで、今我々は一體天溪の提起する自然主義が、つねに作家達の現實を「あるがまゝに」認知する方法として、それをあらゆる事象に向けて用ふべきであるやうには强調されず、たゞ「あるがまゝに」現實を認知したことそれ自身によつて、無減增大の「悲哀」を感じ、且つ「悲哀」を感ずることとそのことが現實を「あるがまゝに」認知することであるかの如く誤まられてゐる點、――特に、若しこの「悲哀」を彼等に感ぜしめるものが何であるかを、その「科學的方法」によつて剔抉しさへすれば、

必ずやそこでは「悲哀」またゞの「悲哀」として感ずることのみに終るべきではなかつたであらうと考へられる點等については、いまそれを改めて吟味しないとしても、彼等の「科學的勝利の宣揚」そのことの中には、例へば新しい時代がもたらした新たな倫理觀、――醜悪な行爲に對する新たなブルジョア道徳觀を確立しようとする努力及びさう云ふ仕方でのブルジョア藝術の資本主義への從屬が隙間にはかられつゝあつたことを忘れてはなるまい。

しかし同じことは、當時西歐の自然主義理論を比較的正しく傳へて、日本の自然主義運動を指導し得たと謂はれる島村抱月の理論についても言ひ得る。彼は謂ふ。

「要するに純自然的なる此の派にあつては、我れまづ生命となつて新自然を作らんが爲に我を沒し、而して斯くの如き自然の前に無條件の降服をなす。自然といふ中に既に我れが見えざる生命となり、感情となつて合體したのである。自然といふ此の新しい意義があつて始めて自然を絶對の宗師と仰ぐの理由が生ずる。これ文藝上の特標であつて、また自然主義の本意では無からうか」

「さらば自然と眞とは何であるか。……自然主義は文學をして道徳應用の門に降らしめたものではない。眞といふことを特に標榜するのは、在來の文藝が漸く套窠に陥つて單なる空想の遊戲、形似の遊戲のみとならんとするのに對し、反動的に他の一面を提唱して、文藝に實際的意義の價値加はらざるべからざる所以を明らかにしたに過ぎぬ。更に之を事實に近づけて言へば、たゞ遊

び事をして人に娯樂を與へてゐるやうな藝術では無意義で劣等であるやうに思はれて、眞面目にやる氣がしない。もつと嚴肅な意義が見出したい。そこで人生の眞相を露呈せしめよう。科學の眞理を敷衍しよう、社會問題を研究しようといふが如き實際的意義を標榜して來た。所詮眞は美を完成する一材料たるに外ならぬ。最も多くの美を有價ならしむる範圍に於て眞は文藝上の價値を有する。」

「彼等が憧憬の本體を今一度現實に返せ。現實の生に返せ、自然主義は此の叫びとも聞かれる。吾人は此の意を贊する。」

かくて「在るがまゝの現實に卽して、全的存在の意義を髣髴する觀照の世界」を描き出すことが抱月の、その人生觀上にも、實生活上にも求めてやまないものであつたが、それとゾラが「第二帝政治下に於ける一家族の自然的及び社會的歷史」として、彼の有名な「ルーゴン・マッカール叢書」を描き出した態度と比較して見る時、我々は前者の中に含れたその「初めからトリキアリズム、日常茶飯事に墮落し得る可能性を充分に示してゐた一點と、後者がその『實驗小說』の中でも述べてゐる如く『我々の任務は社會的罪惡の原因を探ること』にあるとしてゐた點との相違を從つて自然主義に對する日本の文學理論の局限性を意味深く考へずには居られないものである。」

「私は小說を書かうとする時は、篇中にどんな事件を起し、どんな人物を出し、どんな風に始め

どんな風に終るべきかを考へないで、先づ主人公の性格を明らかに心理的に描き出すことに專念し、その性格を描き出さんがためには、その人物の氣質と、その生れた家族と、その受けたる感化と、その住める境遇とを深く考へ、次に主人公の關係すべき人物の性格や、習慣や、職業などもよく研究する。この研究によりて小說中に書くべきことは、自ら定まるのである。而して若し第一流の劇場の光景を描き、第一等の料理屋の有樣を描かなければならない時は、私は先づこれらの劇場を熟知するに至るまで、これを實地に觀察することに努める。かくて、二三ケ月間熱心に研究觀察すれば、私は描かんとするところの生活狀態を知悉し、その眞の色彩と、香氣とを吾が小說に與ふることが出來るやうになる。殊に私が描くところの社會は、私の生涯と最も密接なる關係を有する社會で、私は重に我が心裡に生きたる記憶を筆端に喚び起して描いたので、私の描いた人生は、眞實の人生であつて、空想の人生ではない。私が活きた記憶を喚び起すは容易であるが、記憶を綴り合すべき絲を求めることは困難である。で、私はこれを績るに空想の絲を以てせずして、論理の紐を以てする。私はいかなる小事でも、そのことより、論理的に自然的に又必然的に生ずべき結果があるはずであると信ずるが故に、人間の性格及びその境遇から生ずる結果を示すことに、最も苦心する。私はかの些細の手がかりより、探り探つて複雜なる關係に辿り入り、遂に祕密なる大罪を發見する探偵と同じやうな方法を以て小說を作る。若しもどうしても

事實の關係を發見する事が出來ない場合には、私はこれに就いて思考することを廢止する。何故ならば、私は必ずその關係を發見することが出來ると信ずると同時に、時が來なければ、發見することが出來ないと考へるを以てである。かうして二三日待つと天氣の爽かな朝、食事に坐つてゐる時など、ふと、前にどうしても探り出すことの出來なかつた關係の緒を發見して、今までのすべての困難は立派に除去せられるのである。事柄の關係の未だ發見せられず、困難關に踞る間は、何となく不安であるが、困難が除去せられると共に、心は平和を回復し私の仕事より苦しい分子は全く消失して殘るところはたゞ、筆をとつて書くと云ふ氣樂な仕事ばかりである。云々」――我々はこゝでゾラが示し得た、彼の自然及び人生に對する科學的態度を、決して見落してはならない。なぜなら、この偉大なる自然主義作家の胸にあつたものこそ、今や、ブルジョア科學に反抗して現實の客觀的眞實に肉迫しようとする我々の科學的方法を前ぶれし、且つそれを實踐的に鬪ひにうつしたものであると共に、又、自然主義文學を性慾文學と間違へて隆昌させた日本の流産的自然主義運動を見て行く上に、是非とも二ツを對應して考究せねばならない大切な問題であるからだ。

かくて、然し乍ら、日本の自然主義運動はその流産的な、全く人間の精神的慾求、願望、鬪爭等を無視した半端な現實主義文學活動にもかゝはらず、甚だ多くの優秀な作家たちを動員した。

島崎藤村はゾラの寫實的精神と、ドストイエフスキーの强い忍耐力とを學んで、「破戒」を發表し、鮮明な自然主義者としての自己の姿を表すと共に日本文學の文章學上の一大達成をさへ示してゐる。さきに「重右衞門の最後」に於て遺傳性をもつた狂暴な不具者の死を描いた田山花袋は一九〇七年（明治四十年）に自己の性生活を取扱つた「蒲團」を發表し、つゞいて「生」「妻」「田舍敎師」「一兵卒」等に於ては、家庭生活、人間生活の切斷面を主として描き、互ひに相剋する新舊の時代相をこの作者の所謂「平面描寫」によつて丹念に描いてゐる。特にこの中の「一兵卒」は、一九〇四——五年の戰爭を取材し、戰場で病み、疲勞と饑えとのために死んでゆく一兵卒の姿を描いたものであるが、それは今日プロレタリア作家が描かうとする……的作品と、どの樣な相違を示してゐるかを見るに興味深いものである。それに就いて秋田雨雀氏は言つてゐる。

「この戰爭が起る前に、あれほど烈しく戰爭に關する議論が行はれてゐたに拘はらず、この作品には、その反戰的要素が殆んど反映してゐなかつた。このことはあの階級對立の曉の時代に於て自然主義者達がその何れの側に立つてゐたかと云ふことを示してゐるものである」と。

尙、半獸主義、刹那主義を主張した岩野泡鳴の活動についても、我々はそれを忘れてはなるまいし、現實社の門から出て、後には手堅い寫實主義の手法を墨守した德田秋聲、多分に封建的趣味を持ち乍ら、幾らかの社會主義的視野をもつて人生を見て來た上司小劍、地方地主階級出の正宗

白鳥、戯曲及び、舞臺の上に自然主義運動を達成させた小山内薫、島村抱月等々の功勞も、我々には決して忘れられないものとしてあげられる。

詩歌の領野に於ても、このことは全く同樣であつた。

「眠れる心の跡や、消えたる夢をたづね出す如き、我等の實生活に遠い、又は交渉淺きものを主なる詩の生命とするが如きは、寧ろ、藝術の範圍をせばめる古い作家の態度と言つてよからう：……かゝる迂遠なる人生の事實に滿足することが出來ないで、直ちに實生活の眞に穿ち入り、人生の根柢を叩かんとして起り來つたのが、所謂詩壇に於ける新運動である。……それを助長し培養したのは大家と呼ばれる人に少くして、かへつて新詩人の努力を俟つことの大なるは忘るべからさる事實であらう。」（註一）

又、

「江戸ぶりの俗謠詩（泣菫、雨情、夜雨の詩を難じて言へる言葉――筆者註）を今更作るのは、近松時代の淨瑠璃を今更作り出すと同じことで、要するに愚なる話である。明治の世の聲として聞くに足らぬ。……昔の香りを忍ばんとすれば、今に存在してゐる俗謠で澤山、明治の人なら、明治を歌つてこそ、明治の詩人である」。「明治の香ある俗謠詩を作らんとするに今のやうな詩では困る。昔から固苦しい和歌が田植歌に唄はれたことはきかず、さるに依つて茲に言文一致の詩

を要求するのである。自分の言ふ言文一致體と言ふのは、卽ち、明治に生れて漸く完全に近づいた今日の散文家が書いてゐる言文一致（明治の香ある文體）を以て詩とするのである。吾人はこれを言文一致詩と言ふ、云々」（註二）

斯う當時の批評や感想でも言つてゐる通り、その頃の若い詩人たちは忽ち捲き起された新運動の旗の下に結集し、時代がもたらした新しい環境と、そこで培はれたところの新しい教養とを以て、その胸々をゆすぶり、且つそこから湧き出すみづ〳〵しい感情や感動を歌ふことによつて、詩歌の新しい時代を開つて行つた。

先づ、片上天弦が「詩歌の根本疑」（註三）を論じ、新しい詩を生むための彼の苦悶を投げつけたことは有名である。彼は謂ふ。

「複雜にして變化無限なる所謂主觀の反應感が如何にして一定の形式の中に收められ、而して其の感味の表現に遺憾なきを得るか、この問題は須く將來の詩人の自から解決すべきものである。吾等の疑ひは實にこの相扞格せんとするこの二者の調節抱擁が幾何の度まで遺憾なく行はれ得るかと云ふに在る。否、更に斯くの如きことは其の根本に於て可能であるか否か、二者は永久に其の極めて不充分なる接觸の狀態をもつて終始するのではないか、而して詩歌そのものがまた斯くの如くにして永久に一種の不十分なる文藝の形式として存在すべきものではなからうか、詩歌は

その根本の制約に於て、終に相逢はざるべき二者の抱擁せんとする甲斐なき力を豫想するものではないか。吾等は實に斯くの如く疑ふを禁じ得ざるものである云々」

が、これに對して、若冠川路柳虹が早くも天弦の危惧したものを大膽に切開すべく、詩の實踐をもつて答へたことは我々の忘るべからざることであらう。卽ち、彼は、「醜を描かんとする自然主義の企圖のもと」に新詩「塵溜」を發表し、所謂現實の悲哀を悲哀として表すと共に、詩の形式に於ける新しい一大達成を示した。所謂言文一致の詩——口語詩——後には自由詩と云はれ、詩を自由に歌ふために、過去が制約してゐたあらゆる形式上の束縛から解放したところの形態がそれである。

又、服部嘉香は英國自然主義の平明素朴な精神とその「散文主義(プロセイズム)」をうけついで「我國言文一致詩の諸家の福音と思はるゝ」ものを主張したし、島村抱月がその「現代の詩」(註四)を論じた中で、現實生活の切實に觸れんとするホイットマンの詩型にふれ、それと(一)現在の詩の直接性の缺如(二)詩と散文との境界の撤廢、(三)クラシズムの破壞等々との關聯に於て論議してゐることも忘れてはなるまい。

殊に、泡鳴がその「自然主義表象論」においてかゝげた八つの原則——

一、宗教的形式の脫却

二、懷疑と煩悶
三、神經と自然との燃燒流化
四、刹那的性慾の發現
五、心熱
六、新法語と新用語
七、思想と技巧との純化
八、新リズム

を提唱し、又、相馬御風が「詩界の根本的革新」において詩の用語、詩調、詩の行と聯との制約の破壞を提出したのは意義深いものであり、更に、これらの多かれ少なかれ、自然主義的な諸詩論を詩の實踐に移して行つた加藤介春、前田林外、福田夕咲等の努力は、それを見落してはならないものであつた。

かくして、日本の自然主義は、その悲哀に滿ち〳〵た姿をひきづつて、新しい欲求として鬪ひ今はそこを切り拔けて更に進むか、そこを頂點として引下るかの時期にまで到達した時、これら自然主義作家、自由詩人たちのさうした苦衷にもかゝはらず、遂に彼等が彼等に新しい欲求を與へた現實——日本資本主義そのものゝ正體が何處にあるかを考へ得なかつた彼等の社會的無知のためと、及びそこに新なる陣容を築いて資本主義そのものを……するためにあくことなき反抗を

企ててゐた勞働者階級への大彈壓に驚かされて、この勞働者階級の發展力との結合によつてのみ自己の正統性を意義づけたところの日本の自然主義は、永劫に自身の敗北の歌を、文壇に於ける餘裕派の反動性、詩壇に於ける頽唐的象徴派の反動性として、その姿を明治の文學史上にとゞめねばならなかつたのである。

我々は繰返して言ふ。常規に進展し得なかつた日本の資本主義は、自然主義をも常規的には進展させなかつた。日本の自然主義は遂に自然主義作家、詩人をたゞ彼等の所謂現實暴露の悲哀に導いたにすぎなかつた。しかも敗北者達はこゝで次の樣に語る。

「明治四十年から四十二三年にわたる間の自然主義運動の猛烈であつたことは、今更こゝにそれをくり返すまでもない。自然主義と言ふ言葉は何處でも彼處でも言はれた。變な意味さへ用ひられた。否、そればかりではなかつた。その尖つた方面は、飽くまでも實行につゞいてゐたために――今までのやうに單なる小說の運動ではなしに、社會運動と相連接した形が歷然としてその上にあらはれてゐたがために、後には政府の注意をもひくやうになつて、不健全、不道德な、危險な思想であるやうに考へられて行つた。例のほんの芽であつた幸德秋水等の社會運動とつゞいて行つてゐるやうにさへ思はれた。」(註五)

又、つゞいて「あれで、あの……がなかつたら、もつと烈しくあの社會運動につゞいて行

くやうになりはしなかつたかしら？」
「何ともわからんな？」
「屹度さうなつたよ」Kは考へて「たしかにさうなつた。さうすれば、今とはまるで違つた形になつたかも知れない？」
「さうかも知れたい」
私も深く頭をそつちの方へ持つて行つてみた。しかし、それは疑問でないことはなかつた。何と言つても、自然主義は藝術上の問題であつた。それは實際の方にもふれて行つてゐるにはゐたけれども、何處かそこに一皮かぶつたところがあつた。それにあの社會運動とは根元が違つてゐるやうなところもあつた」（註六）
かくして、日本の自然主義までがその敗北の姿を藝術の殿堂裡ににげこませ、所謂世紀末的な頽廢の現象を伴ひつゝ墮落して行かうとした時期に、かゝる自然主義を思索し、檢討しはじめつつ、そこからあの「……」に衝撃をうけて社會主義思想へと發展して行つたところに、石川啄木の業績を見るものであるが、では、我々はそこに到るまでの啄木の苦悶を、彼自身に語らしめ乍ら研究して行くことにしよう。

註一、明治四十年十一月十五日版「文庫」所載泊人評參照。

註二、「詩人」第二號（明治四十年七月號）所載「萬の葉」（森川葵村）「言文一致の詩」參照。
註三、明治四十年六月「早稻田文學」所載の論文である。
註四、「詩人」明治四十年十一月號所載の論文である。
註五、田山花袋「近代の小說」春陽堂文庫一四二頁——一四三頁參照。
註六、田山花袋前揭書一四四頁參照。

〇北海道に於ける久しい放浪生活後、啄木が「新しき文學的生活」を求めて再度目の上京をした當時の心境には注意すべきものがある。明治四十一年四月十七日付の手紙で彼は書いてゐる「——津輕の瀬戸を渡りて將に一年、商業會議所の雇、代用教員はまだしもなり、昨秋初めて、新聞記者生活に入り、校正子、三面主任、編輯長、噫、新聞も亦營利事業に候ひしぞかし。營利の犧牲となりて、終日筆を揮ひ候へば、筆が敵の思あり、夜、燈を剪つて机に向へども、また筆を握るの心なし、これ啄木の精力衰へたる爲のみにもあらざるべしと存候、呵々、

函館の百二十有餘日、札幌の二週間、小樽の百十日、釧路の七旬餘、——雪の北海道を横斷して釧路の華氏零下二十何度と云ふ寒さに首ちゞめたるは今年一月二十一日夜に候ひしが、氷れる海を初めてみたり、誤つて飲み習ひたる酒は醒めても不平は消えず、今月三日、飄乎として酒田川丸に投じ・・・單身二十五六日頃に中央の都域に入る筈。

新しき文學的生活"小生の運命を極度まで試驗する決心に候。」(小笠原迷宮氏宛)

又「考へても見てくれ給へ、此度の上京は、實際、啄木一生の死活問題だ。——……

君、僕は此度の上京の前途を、どうしても悲觀することが出來ぬ。若し、失敗したらと云ふことも考へては居るが、僕はどうしたものか、失敗する前に必ず成功（?）する樣な氣がする。理窟もいらぬ、何派、彼派も要らない、ただまつしぐらに創作だ。」(同日、岩崎、吉野氏宛)

又、同年四月二十二日付、大島氏宛の手紙に「現時の生活に適合して生存へむ事は、死よりも何よりも、遙かに遙かに至難の事の如く見候。敗れたるを勝ちたりとする、異りたる心を持ち候者は、敗れたるを敗れたりとする人よりも、苦しみ多き事、十倍百倍なるを具さに知り候ひぬ。私が自ら勝ち誇りて、獨り超として心天外にゆくの時は、乃ち既に、創痍全身に洽ねく、顚と云はず、手と云はず、足と云はず、血糊膵く塗らざるなき時に御座候。一切を無意義なりとする怖るべき思想、時として電光の如く私の心を過ぎることあり、疲れ果てたる心は、かくて一瞬時の安逸を貪らむとす。此境には、責任もあることなし、義務もあることなし、又向上もなく、努力もなし、既にして絕對の『孤獨』てふ云ふべからざる苦痛面相接して到る。此時は全身の血忽ち氷り、惡寒骨に徹するを覺え候。

事に臨んで自ら膽の小ならざるを誇り候私は（文字不明）歩を斷頭臺上に移す事あり共、笑を含

んで死に續く位（文字不明）は出來うべく候。然し乍ら此の一切の虚飾落したる絶對の『孤獨』の前には、一切の空しき如く私自身も亦唯空しく候。

既にして此暗灰色の霧の中に幽かに物の影の動くを見る。この影は、幼時の追憶に似たる、仄かなる『ロマンチツクの影』に候。かくて一葉もつけざる『孤獨』の大樹の枝々に、いろいろなる空想の芽を吹き候。空想は空想を生みて盡くる所なし。然して此の空想が一度『欲望』と手を握るに至つて、捕捉し難き空想が漸次實際に近づき來る。遂には自己の前途猶多少の希望あるが如く思はしむるに至り候。かくて、私は、起きて顔を洗ひ、飯を食ひ、立ちて歩み、又物を言ひ候。

……………………………………

然し乍ら、一切の理想といひ希望といふもの、畢竟、不確實極まるイリュージョン――極言すれば人生の虚僞に過ぎざらんとするを覺知いたし居候ては、矢張り平然として路行く人に伍して前に許り進むこと能はず……所詮私は『生活』に適合する能はざる人間にして、人生の落伍者也、身も心も宇宙の浮浪漢なりと云ふ感じが、一種の暴風的歡喜を伴ひて私の心を荒し申候。此の暴風的歡喜は、畢竟するに自暴自棄の聲に御座候。一種の狂的發作に御座候、――自暴自棄に疲れたる心は、やがて又『一切虚無』の怖しき思想に一瞬の安逸を貪らんとし、やがて又、再び孤獨の

寂寞に涙もなく泣かむとするにて候。

………………………………………………

之を横に見たる時「人生」は際涯なき平面なり。前後左右、唯これ波瀾重疊なる未解決の血の海なり。未解決なり。故に其唯一の結論は「虚無」、之を縱に見たる時「人生」は初めあり、而して終りあり……個人全解放の時代は、かくて私の最後の理想の時代に候ひき。

縱はどこまでも縱にして、横はどこまでも横なり。私の心中には此の二つの大いなる矛盾あり遂に相一致せず。既に野心見なるが故に、私は常に……を欲す。「現狀打破」は私の今迄殆んど盲目的に常に企て來れる處に御座候。

これらの手紙の中で、啄木が何を苦悶し、又何に「一生の死活問題」を賭して、彼の「新しき文學的生活」を決意してゐるか、及びその新しい文學的生活を求めて上京する前途に何が故に「必ず成功（？）する樣な氣」がしてゐるかは明らかである。

卽ち、我々はすでに苛酷にしめつける現實に向つて、久しくそれを司配し得るところの一人の天才を待ちこがれて止まなかつた啄木を知つてゐる。――しかも彼がその求める天才とはどんな天才であつたか、又それを求めさせるものゝ正體が何であつたかを、遂に根柢から理解し得るにまで至らないで、たゞ無暗にしめつける現實と理想との渠溝の中にあつて、「常に……を欲し」、

「盲目的」に「現狀打破」を求めて止まなかつた心情をも、我々のとくにそれを見て来たところのものであつた。

「一切の生活幻像を剝落したる時、人は現實暴露の悲哀に陷る。現實暴露の悲哀は涙なき悲哀なり。何となれば人一切の幻像に離れたる時、唯虚無を見る。虚無の境には熱もなし、涙もなし、唯沈默あるのみ。此の境に入れるものは所謂平凡なる悲劇の主人公たり。」

「吾人は自然派の小說を讀む毎に一種の不安を禁ずる能はず。」

「吾人は自然主義に對する世論の囂々たるを厭ふ。先づ一切の不確實なる成心を除去して然る後靜かに思ふ可き也。乞ふ問はむ「人生を支配する者、汝なりや將た彼なりや」」

「自然主義は、我によつて我の中に見たる自然の我を以て、一切の迷妄を照破し、一切の有生を率ひて、一先づ『自然に歸らしめんとする運動なるのみ。』」

「噫、春來らんとして大風雪到る。家々戸を閉し、息をひそめて爐を擁す。爐中蓋し炭火の氣熾んなるべし。不知、人此境にありて、果して何事をか思念する。」

「目を上げて社會を見るの時、我が目殆んど皆裂けんとす。目を落して靜かに社會を思ふの時、我が心、惝怳として黯然たり。不知、此社會を奈何、一念茲に到る毎に、我が耳、……の聲を聞き、我が目、……の血を見る。人は自然に……。我等は人に……つべきのみ。自然に背く、

者は眞と美に背く者なり。見よ、一羽の鳥だに大空を翔るの翼あるに非ずや」（註一）

かくして、この觀念的な苦悶にもかゝはらず、その苦悶の内容となるものが「觀照と實生活との實際的な統一――即ち、言葉をかへるなら、彼がそこに置かれてゐた現實と自己との間に介在する誤魔化し難い矛盾の統一を要求する心情に他ならぬ。」ことは明らかであるし、又、そのことこそ、彼が「一生の死活問題」を賭して、その「新しい文學生活」の中に――從つて再度の上京にあたつて、之を確保しようとしたところのものだつたのである。

ところで啄木の斯うした心情、乃至はその止み難い欲求にもかゝはらず、當時の自然主義運動はどうであつたか。それはすでに前章で述べた通り、多くの作家達は徒らに現實暴露の悲哀を悲哀し、幻滅するのみで、少しも、彼等に幻滅をいだかせたものが何であるか、又は、その幻滅を抱かされるものへの怒りを、それとして投げつけることの正しさに就ては考へようともしてゐなかつた。

たゞ、作家達は自然主義そのものについて議論する。饒舌に何の怒りも懷疑すらもなく、議論することによつて、その日を安穩に送り迎へる。と、そして、かうした狀態が、又早くも上京して間のない啄木を激怒させたのは無理もないことであつた。

「東京は、其日暮しの議論をする人の澤山ゐる所です。自然主義についても敵味方兩方から隨分

耳章魚にきかされました。然し、私はいや議論はやめました。天下をねらふ野心兒は、須らくおとなしくしてゐるべしです。兎に角東京の人は急がしさうです。(五月廿九日大島氏宛)

「喜劇の價値は、劇中の人物の眞面目なるだけ、それだけ大なり。此原理にして眞なる限り、東京は蓋し大なる喜劇の舞臺なり。

——東京には、その日暮しの議論を毎日、毎日眞面目になつて吐いてる人無數にあり、此等の人は一生喋つて死ぬ人に候。……(現今立派な議論とは實際の人生と成るべく縁の遠い議論のことなり)……

誤まられたる自然主義の影響と云ふべき、デカタン的氣風は文學を語る青年の間に澎湃たり。彼等に於ける唯一の眞摯なる事は肉慾を語ることなり。深く深く眞面目に告白し得ざる人は無論憐れなる不幸の人なれど、告白と廣告とを間違ひたる彼等も亦憐むべし。……

善、惡、神聖、墮落、清、濁、これら一切の古きマガヒ物の尺度を捨てて、我自ら深く眞面目に思想せざるべからず。思想することと議論することとは別なり。思想せざる人も議論す。

僕は自然主義を是認す。然れども自然主義を以て唯一の理想なるが如く言へる人々に同ずる能はず。

デカタン的氣風に隨喜するものは痴者なり、然れども又これを以て竊敗呼はりするのも同時に

論者なり。……

僕は一切を是認す。然れども輕々しく結論するを欲せず。眞の作家は、人の眞理を知悉すると共に、時代の心理を透觀せざるべからず。……」（九月九日藤田、高田兩氏宛）

―ここで我々は自然主義を是認し、一切を是認し乍ら、なほかつ「輕々しく結論するを欲しなかつた」啄木が、本當に何を彼の結論に欲したかについては言はないとしても、「人の心理を知悉すると共に、時代の心理を透觀することが眞の作家の進むべき道である」ことを認定して、如何に

―ここから彼の向ふべき道への確信を喜びつかむことが出來たかは次に示す手紙で明らかである。

「君、も一つ君に安心して貰ふことがある。僕は三年も田舍にゐて、殆々本も讀まなかつたオクレを、八ケ月間かゝつて取り返した。正直に云ふが去年上京する時、僕は小説家になつて乾度成功してみせる樣なことを言つてゐたが、今から見ればアレは嘘だ。當時の僕は生活に適合せぬ男だと云ふ、所謂現實暴露の外に何も持つてなかつた」（四十二年三月二日、郁雨氏宛）

「君、上京して以來八ケ月間かゝつて、僕は今迄なくしてゐた自信をみつけ出した。僕は正月に

―なつて、急に何と云ふこともなく心中に賴むところが出來た。……」

「そして今こそ一個人としても、作家としても立派な自信を得た。君、これからだ。これからこそ初めて僕はすべてに戰ふ勇氣と自信がある。……僕は今初めて僕の思想を統一しアラユル物に

對して直視することが出來るやうになつた」（三月三日郁雨氏宛）

では、我々は啄木が斯くの如く自信をもつて、「戰ふ勇氣」をかち得、且つそこに彼の思想を統一して、そのあらゆる物に對する直視——挑戰の叫びをどう云ふ叫びとして發したかを彼自身の表現によつて探つてみよう。

明治四十二年十一月に彼は書いてゐる。

「到頭私は、餘りに利己の念の熾んな自分の性質に激しい倦厭の情を感ずるやうになつた。畢足下足、放たれることとの出來ない『利己の艮』ほど苦しい縛が何處にあらうか。私は一日でも可いから、自分に對すると同じ熱心を以て（必要を感じて）、人の爲に盡してみたいと此頃思ふことがある。」

又、「問題がより大きい時、或は其の問題に眞面目に立ち向ふ事が其時の自分に不利益である時我々は常に、何等かの無理な落ち着きを拵へて自分の正直な心を胡魔化し、若くは、回避しようとする。止むを得ないことではあらうが、一度『自己の徹底』とか『生活の統一』とかいふ要求を感じて來た時に見れば、それは云ふまでもなく一種の恥ずべき卑怯である。

……………………………………

長谷川天溪氏は、嘗て其の自然主義の立場から『國家』と云ふ問題を取扱つた時、——一見無

造作に見える苦しい胡魔化しを試みた。（と私は信ずる。）謂ふが如く、自然主義は何の理想も、解決も要求せず、在るが儘を在るが儘に見るが故に、秋毫も國家の存在と、牴觸することがないのならば、其の所謂、舊道德の虛僞に對して戰つた勇敢な戰も、遂に同じ理由から名の無い戰になりはしないか。從來及び現在の世界を觀察するに當つて、道德の性質及び發達を國家と云ふ組織から分離して考へる事は、極めて明白な誤謬である。――寧ろ、日本人に最も特有なる卑怯である。」

「國家！　國家！

國家と云ふ問題は、今の一部の人達の考へてゐるやうに、そんなに輕い問題であらうか？（單に國家と云ふ問題許りではない。）…………

今、私にとつては、國家に就いて考へることは、同時に『日本に居るべきか、去るべきか』と云ふ事を考へることになつて來た。

凡ての人はもつと突込んで考へなければならぬ。今日國家に服從してゐる人は、其の服從してゐる理由に就いてもつと突込まなければならぬ。又、從來の國家思想に不滿足な人も、其の不滿足な理由に就いて、もつと突込まなければならぬ。」（註二）

次、これと同じ筆法を田山花袋氏に向けて、

「田山氏も亦嘗て『自然主義を單に文藝上の問題として考へて見たい』と云ふ意味のことを何かで述べられた。氏の立場としては諒とすべき言葉であるが、一方から見れば、其處に、『衣物』を回避した態度がないと言へない。…………………………――どうも、思ふ事が明瞭に言へないが、引きくるめて言へば、氏は人生を『描くべき事實』として取扱ふこと、即ち氏自身『文學者なり』と云ふ自信にあまり熱心なる爲に、文學者と云ふ職業を離れたる赤裸々な田山氏自身と人生との關係を不問に付して置くやうな傾向がないかと思ふ。――否、確かにあると思ふ。：：私は田山氏と人生との間に、常に一定の距離が保たれてゐるやうな感じを不滿足に思ふ。田山氏は文學を人生に近づかしめた。さうして遠ざからしめた。

（まだ言ひ足らぬが）さうして其處に、私の今の心持から言へば田山氏の人としての卑怯があると思ふ。私は田山氏の作を讀む毎に眞面目な心持を要求される。然し未だ嘗て、それ以上を要求された事がない。（或は作者はそれ以上を望まぬのかも知れないが）」（註三）と

更に、明治四十二年の文學運動を回顧した中では、

「自然主義は文學を解放した。……一度解放された文學の主潮は、然し乍ら、色々の理由から、まだ行くべき處まで行かずに、途中で停滯し、弛緩しようとする傾向を作つた。

何を以て停滯頽廢の傾向と云ふ。それは現時の文學的主潮に、呼吸を合してゐる人達が各自、あの當時の自分の狀態を回想したならば、其處に何となく氣脫けのした、敵を失つたやうな（戰鬪力の散漫した）、一段落のついたやうな、心持のあつたことも發見して必ず私の言を承認すると信ずる。」

かくして、「遠い理想のみを持つて自ら現在の生活を直視する事の出來ぬ人は哀れな人です。然し現實に面接して其處に一切の人間の可能性を、忘却する人も亦憐れでなければなりません。人生――狹く言つて現實と云ふのは、決して固定したものではない。隨つて人間の理想と云ふものも固定したものではない。我々は時々刻々自分の生活（內外の）を豐富にし、擴張し、然して常にそれを統一し、徹底し、改善して行くべきではないでせうか。……現在の日本には不滿足だらけです。然し私も日本人です。そして私自身も現在不滿足だらけです。乃ち私は自分及び自分の生活と云ふものを改善すると同時に、日本人及び日本人の生活を改善することに努力すべきではありますまいか。……自己の生活の改善、統一、徹底と云ふことは、やがて自己を造ると云ふことではありますまいか。」（明治四十三年一月、大島氏宛の手紙）

更に、その「性急な思想」の中で

「……日本は其の國家組織の根柢の堅く、且つ深い點に於て、何れの國にも優つてる國である。從

つて、若しも此處に眞に國家と個人との關係に就いて、眞面目に疑惑を懷いた人があるとするならば、其の人の疑惑乃至反抗は、同じ疑惑を懷いた何れの國の人よりも深く、强く、痛切でなければならぬ筈である。そして、輓近一部の日本人によつて起されたところの自然主義運動なるものは、舊道德、舊思想、舊習慣のすべてに對して反抗を試みた…………………………………に對しても、其疑惑の鋒先を向けねばならぬ性質のものであつた。然し我々は、何を其人達から聞き得たであらう。其處にも亦呪ふべく憐れむべき性急な心が頭を擡げて深く、强く、痛切なるべき考察を回避し、早く旣に、恰かも、夫に忠實なる妻、妻に忠實なる夫を笑ひ、神經過敏でないところの人を笑ふと同じ態度を以て、……と云ふものに就いて眞面目に考へてゐる人を笑ふやうな傾向が、或る種類の青年の間に風をなしてゐるやうな事はないか。少くとも、さう云ふ實際の社會生活上の問題を云々しないことを以て、忠實なる文藝家、潑剌たる近代人の面目であると云ふやうに見せてゐる、或ひは見てゐる人はないか。……有る。——少くとも、我々をしてさう云ふ風に疑はしめるやうな傾向が、現代のある一隅に確に有ると私は思ふ。」と、

斯う啄木が喝破する時、我々は全く明らかに彼がその浪漫主義と訣別した同じ軌道で、自然主義を考察し、且つ、更にその同じ軌道で遂に常規的な發展を遂げ得なかつた日本の自然主義運動そのものとも訣別せずにはおれない姿を見ることの出來るものである。

では、かくて再び啄木のかち得た方向は？……と云ふことよりも、我々はこゝで啄木の當時の「思想が極めて穩健になり、すべて具象的な見方になつて來て、その倫理觀は、自ら自己現實說に近づき國家主義に傾いて來た。」と云ふ、彼の知己であり、その年譜の編者である金田一氏の理解が正當であるか否かを考へてみることによつて、それを究明してみよう。

だが、この解決は極めて簡單である。卽ち、一例に就いて見るなら、すでに見て來た如く當時の文藝界に於て「自然主義――觀照と實行」と云ふこと程、それが物のわからぬ自由主義者の感激と、それにもまして物のわからぬ國家主義者の憤激とを招いたものはなかつた。啄木もそれに就いて言つてゐる。

「要するに、議論は何人にも出來ることとなり。脫糞すると同じ。故につまらぬ事の限りなり。創作家と稱する人々の社會も亦面白し。ゴク少數者を除外例とし、大體を二分するを得。第一種の人は勤勉なる鈍物共なり、田山花袋君などを筆頭とし、酒を飲めば必ず醉ふもの、女と云ふものは常に弱き者、などと云ふことを知れる若き有望なる鈍物無數なり。これらの人は一生汗を流して死に、死んで批評家に惜まれて忘られる人々なり。第二種の人々は老若無數の變種を含む。一言にして言へば覺めざる人々なり。（一）古き夢よりさめざる人あり。（二）若き夢よりさめざる人あり。（三）覺むることを怖れて、夜が明けても寢てゐる人あり。（四）夢のさめ方が何人も同じな

ろを知らで何とかして自分一人特別な覺め方をしようと無用なる苦痛をしてゐる人あり。(一)は坪内博士、後藤宙外など筆頭なるべく、(二)は年若くして文學に志ざす人の大多數なり(三)は泣菫、鐵幹、有明の徒、(四)は胃腸の如く大體の人に少しづつ必ずあり。代表者はやゝ當らざれども泡鳴などか。此等の外に覺むると云ふことを知らざる聖代の逸民あり。最も愛嬌に富みたるは此種の人々にて隨分多數なり、文壇の餘興的人物としてこんなのも或ひは必要ならむ。最も無邪氣なる例は兒玉花外などなるべし。此等何千人と云ふ覺めざる人は皆それ相應に寢言を言ふぞ面白き」と。

ところで、問題は何故これらの好論家たちを分類することによつて、啄木が自身を彼等と區別づけてをつたか。及び、かゝる區別づけを必要とするに至るべき根據を持つてをつたかを見究めてみることである。

――そのことは、けだし、こゝで我々が覺めざる第二種の人々については言はないとしても、當時の「勤勉なる鈍物」共が、自然主義を單に文藝上の問題とのみして、「其處に或物を回避した」――その或物の存在に對する、啄木の態度を、彼等と比較してみる事によつて明らかにされる。即ち、先づ、或物とは何か――それが日本資本主義の發展それ自體であらうことは自明である。しかるに、若し、日本の自然主義者が自然主義の方法を資本主義發展そのものの上に用ひず、そ

れを回避し、そこに「一定の距離」を設けたとすれば、かゝる文學が現實の虚僞を蔽ひ、――しかもかゝる意味で文學を「人生に近づかしめ」且つそれは本質的には「實人生」から遠ざからしめるものであることは云ふまでもないであらう。言ひかへるなら、それこそ現實に反抗しないばかりか資本主義發展のための偉大なる擁護者としての文學であることは明らかである。

然るに啄木の場合はどうか。「……に就いて考へることは、同時に『……に居るべきか、去るべきか』を考へしめる問題であつた。」――この言葉は、すでにそこで、この解き難き――しかも解かざる可からざる新たな難題――矛盾を現實そのものの中に發見しようとしてゐたことを證明してゐる。そしてそれはその通りであつた。最早やそこでは彼のかつて抱いてゐた至上の「自意識」――その姿をかへた「唯一者」の要求は全くかなぐり捨てられ、その代りに現實は動くと云ふこと、従つて理想は進展すると云ふこと、そして最後に「現實に面接」することにのみ「一切の人間の可能性」を確認し得ると云ふ――従來の空想的題目から離れて、ひたすら現實的實證的認知に進むべき道を切り開きつゝあつたのだ。しかも、現實の中にかく一切の人間の可能性を發見するものが、何を資本主義の發展それ自體の中に見出し得るものであるかは明らかである。我々は當時の啄木に、未だ多くを望めなかつたとしても、そこには日本の自然主義者が頭強に見抜き得なかつた不明を、明らかに見抜き、その使徹純正なる思想をもつて、…………………を示さうと

する啄木を見得るものである。——けだし、これが國家主義的に傾き、穩健な思想家になりつゝある啄木であつたか否かは、最早や云ふまでもない。

我々はこゝには、金田一氏が指示すると、全く反對の啄木を見るし、又こゝから次第にその方向を、その立脚點を明らかにし、遂にかの有名な前代未聞と稱せられる……………に面接して「其處に…………………」を發見し得る力をもつてゐた彼自身を示すことによつて、唯物論的な我々のプロレタリア詩人の、日本に於ける黎明を格闘する社會主義詩人としての彼の登場を見ることが出來るのである。

かくて、我々にはここらで、この苦悶の時代に於ける啄木の詩を眺める必要が生じて來る。

註一、「卓上一枝」(現代日本文學全集「石川啄木篇」三九〇頁)參照。

註二、「きれぎれに心に浮んだ或る日の感想」參照。

註三、同上參照。

啄木がその思想の發展の途上で、自然主義を考察し、そこであらゆる苦悶を經驗し乍らどんな詩を生み出すことにつとめておつたか、又、その生み出したものと生み出さうと欲してゐたものとの間にどんな矛盾があつたか、及びその矛盾にもかゝはらず彼が生み出した詩作が、どういふ風に歷史的には評價せられねばならないか、等々について以下若干それを究明してみよう。

が、凡そ、云はるべきことはすべて非常に明瞭である。

即ち、すでに我々が啄木の苦悶のよつて來たる所を見、且つ、彼が自己と社會との間の誤魔化し難い矛盾の解決を得るために、資本主義の組織そのものに就いての批判へ赴かずに居れなかつた所にこそ、全く啄木をして「新しい詩の眞の精神を味はしめる」ものであつて、從つてそこから彼の浪漫派と訣別した新しい詩作活動が生み出されてゐたことは明らかであつた。

「食ふべき詩」について、明治四十二年十一月の論文で語つてゐる。

「『食ふべき詩』とは……兩足を地面へくつ付けてゐて歌ふ詩と云ふことである。實人生と何等の間隔なき心持を以て歌ふ詩と云ふことである。珍味乃至は御馳走ではなく、我々の日常の食事の如く、然く我々に『必要』な詩と云ふことである。

——斯う云ふ事は詩を既定の或る地位から引き下す事であるかも知れないが、私から云へば、我々の生活に有つても無くても何の增減のなかつた詩を、必要なものの一つにする所以である。詩の存在の理由を肯定する唯一の道である。」

かくして、彼は全く、彼みづからの生活の必要のため、新しい詩を需め、それを實人生と實現實との間の矛盾の統合のために置かうとしたのであつた。それは自然主義に影響されながら、すでに自然主義を超克してゐた。そして、彼は語りつゞけるのである。

「饑えたる犬の食を求むるが如くに唯々、詩を求め探してゐる詩人は極力排斥すべきである。意志薄弱なる空想家、自己及び、自己の生活を統一なる理性の判斷から回避してゐる卑怯者、劣敗者の心を筆にし、口にして、僅かに慰さめてゐる臆病者、暇ある時に、玩具を弄ぶやうな心を以て詩を書き、且つ讀む、所謂愛詩家、及び自己の神經組織の不健全なことを心に誇る偽患者、乃至は其等の模倣者等、すべて詩の爲に詩を書く種類の詩人は極力排斥すべきである。

——眞の詩人とは、自己を改善し、自己の哲學を實行せんとするに、政治家の如き勇氣を有し自己の生活を統一するに實業家の如き熱心を有し、さうして常に科學者の如き明徹なる判斷と野蠻人の如き率直なる態度を以て、自己の心に起り來る時々の變化を飾らず、偽らず極めて正直に記載し、報告するところの人でなければならぬ。」

即ち、謂ふ所は我々が單に「詩の爲に詩をかく」至上藝術家たるべきでなく、彼が其處から必然に向つて進んだと云ふよりも、向つて進まざるを得なかつたところの文明批評家として、それと同一の立場から、詩——を從つて自己及び現實の中間に介在する諸矛盾を「極めて平氣に正直に記載し報告する」詩人として有らねばならぬことを主張するものであり、且つ、それは若し、そこに日本の自然主義作家達が「進歩したる日本人の反省」——眞實を求めて行つたら、必ずやそこから一切の矛盾を解決する「鍵」を見出して、フランスの自然主義が歩んだゾラの道に、更

には、ハイネがその生涯のいかなる時代に於てよりも「純粹藝術」乃至は「無意識」の思想から遠くはなれてゐた時代に「ドイツの自由をうたふべきことを要求」したと、同じ道に立ち向はせたところのものである。（「啄木とハイネ」參照）

では、啄木の斯うした心情は、その詩作の上にどう表はれてをつたか。謂ふまでもなく、當時の彼が最早や詩作に耽ることよりも、より多く「資本主義の組織そのものの批判へ赴かずに居れない詩人」となつてゐたにもかゝはず、少數の詩の中で歌つてゐる。

屋根又屋根、眼界のとゞく限りを
すき間もなく埋めた屋根！
低い屋根、高い屋根、おしつぶされたやうな屋根、
或ひは空にぬけ出ようとしてゐる屋根！
その上に忠實な教師の目のやうに
秋の光がほか／＼と照りわたつてゐる。

とらへやうもない。
然し乍ら、魂の礎石までゆるがすやうな

あゝ、あの都會のとゞろき・・・
初めてこの都會に來て此の景色を眺め
この物音をきいた時、
弱い田舍者の心はおびえた――
廣さ、にではない、高さ、にではない、
又、其處にいとなまるゝ、文明の尊さにでもない。
あのはかりがたい物音の底の底の――
都會の夜のふかさに。

今また此處に來て此景色を眺め
そしてこの物音をきいて
よわい、新しい都會の歸化人の心はおびえる――
獅子かひが獅子の眠りに見入つた時の心も――
おのはとらへがたき物音の底の底の――
入れども／＼はかりがたき

都會の夜のふかさに。

すべての生徒の慾望をひとしなみにみる
忠實なる我が教師よ、
そなたはそなたの慾望と生徒の慾望を
またひとしなみに見るか

花は精液の香をはなちて散り、
人は精力の汗を流して死ぬ。
それらは花と人との慾望のすみてか。
教師よ、そなたの愛は——
雨とふり、日とそゝぐそなたの愛は、
人の…………………

見よ、數えきれぬ煙突！

その下には死なうとする努力と死なまいとする慾望と…‥
あゝあの黯然たる物音
人間は住居の上に屋根を作つて
その上に日が照る
屋根は人間の最上の智慧!!
そして又反抗、又運命、その上に日が照る。

あゝ我は歸らうか? はた歸るまいか?
あの屋根! 限界のとゞく限りを
すき間もなく埋める屋根の下へ、

——「無　題」——

こゝで何よりも先づ言つて置きたいことは、この詩が決してそんなに優れたものではないと云ふことである。しかし、それにもかゝはらず、この詩に於て啄木は彼の現實に對する態度、詩作に於ける彼の方法を遺憾なく發揮してゐる。即ち、こゝで啄木がどう云ふ態度で現實を視、近代的文明都市「東京」と對座してゐるかを見よう。言ふまでもなく、彼は都會そのものゝ廣さに、

又、高さに、そして其處にいとなまれつゝある文明の尊さには少しも、おびやかされない。彼をおびやかすものはたゞ「あのはかりがたい物音の底の底の、入れども、入れどもはかりがたい都會の夜のふかさ」だと云ふ。だが、我々には然るにかゝはらず、その都會の、何等それを歌はうとする詩人とはかゝはりなく存在し、たゞ都會自體が多くの死なうとする努力、死ぬまいとする慾望を下積にして生活してゐる姿——謂ひ換へるなら、一個の生活的存在として客觀化された都會と都會の慾望——そこに在る苦惱を「ひとしなみに」包む大氣と、それらとは何のかゝはりもなく、然も都會の生活それ自體を傍觀することから、その「物音の底の底のひびき」に恐怖しつつある詩人が、徒らに眺めることによつて吠えつつ、又、永嘆しつゝある姿を思ひうかべないであらうか。僅かに啄木の態度は、それを傍觀することによつて、少しもその底の底の深さのよつて來るところが何に起因してをつたか、及びその深さを感じとらしめるものの欣びから、或ひは悲しみから、或ひは深さそのことに對する憤りから詩を感じ、かゝる心理をそれとして歌ひ上げることを欲しないところのブルジョア的客觀主義——究極に於いては彼が感じるところの觀念的な都會のエピグラムを從前とは違つた方法で寫實することに終つてゐるのだ。

もう一つの彼の詩について、このことを今少し掘り下げて考へてみよう。

おのれより富める友に戀されて

或はおのれより強い友に嘲られて
くわつと怒つて拳を振り上げた時、
怒らない心が
罪人のやうにおとなしく
その怒つた心の片隅に
目をパチ／＼して蹲つてゐるのを見付けた——
たよりなさ。

あゝそのたよりなさ、
やり場にこまる拳をもつて、
お前は
誰を打つか
友をか、おのれをか
それとも又罪のない傍の柱をか。

——「拳」——

この詩に於て、我々が啄木の中の優れた詩人を感じるのは、歌はれた「怒り」が眞實だからと

云ふだけではない。成る程、斯う云ふ風に振り上げたる拳のやり場に困る心持は我々の日常に往往經驗するところのものであるし、又、その限りに於て「かゝる怒りの」リアルな體樣が全くそのまゝに描き出されてゐる。が、それにもかゝはらずおのれより富める友に憐れまれること、又おのれより强い友に嘲られることが、何故に怒らねばならない原因をつくつてゐるのか、及び、何よりも自分を友よりも貧しい狀態に置いてゐる現實——そこで憐れまれて怒るものの怒りをなげつくべき目標を、啄木が知つてをつたらうかを考へさせられるのだ。けだし、この疑問は甚だ無駄である。すでに怒り乍ら、その怒りのまゝを發現させない彼の片隅の心持こそ、現實に堆積する諸矛盾をはつきりときざまれてゐた心理であり、しかも、その故にこそ、怒るべき友が實は怒るべき友でないこと、殊にそれが自分でも、又傍の罪なき柱でもないことを感得し乍ら、啄木が振り上げたる拳のたよりなさを觀照する心理は、全く自己と現實との間の矛盾をそれとして認知しながら、その矛盾に向つて拳を振りあげることを知らなかつたブルジョア・リアリストの悲哀である。從つて、我々はこゝでも單に振りあげたる拳のエピグラムのみを、それとしてリアルに感じとらしめられるだけのものであるが、だからと云つて、決して我々がこれをもつてすでに我々の見て來た文明批評家としての啄木と、こゝに表れた藝術家としての啄木とを、乃至は、啄木の主觀的な世界觀と、彼の表現に於ける客觀性とを對立さして考へることは許されるものでは

げさせるものゝ不可避性を見てとり、且つ眞實に怒つてゐるところに彼の革新家としての姿を見出し得ることが出來るし、このことは、我々が次の時期に於ける啄木の思想及び藝術の發展の足跡をみてみる時、よりはつきりとして來る。特にそのことは、之を當時の他の詩人達の詩と比較してみる時より明瞭となつて來る。

「コン畜生、畜生奴
よくもよく〳〵——ちやんなんかの妾
親の恥、又親類の恥
第一はこの姉の恥ぞよ、
思ひ知れ、たゝく音
ぶつ音、わめく音
ドタバタ〳〵と二階より
「姉だつて妾、妹に
意見はあるまい——さあ殺せ」
「てまいまだほざくか、ちやん妾」

たゝく音、わめく聲
「わしはお爺さん、てまへのは
なんだちやんではないか
かいしよなし」

——前田林外「きき耳たてて」——

ちやんと云ふのは何者であらうか？　若しそれがちやん／＼（支那人）であると云ふなら、ここには民族的避見と、お爺さんに隷属することを満足とする一個の色情狂的な奴隷心理、及び最も重要なことには日本の自然主義がそのことによつて、特長づけられたところの「日常茶飯事的な色情性」が——勿論それを雑駁な日常語（口語）で描くことによつて、従前の詩形式への反抗を示してはゐるが——遺憾なく發揮せられてゐると云ふべきである。

暗い扉が閉ぢられてゐる
その前で盲目どもがわい／＼燥ぐ
まつくらな室だ。

どんどんと一人が叩く

するとまた二人が叩く
今度はみんな寄つてどん／＼と
割れる程叩き出す
「をかしな扉だ」
「まつ暗い扉だ」
「開けてくれ」
と喚く、

けれども扉はいつまでも動かない
「死ぬんぢやないか」と誰かゞ云ふ
その聲がふるえてゐる
云ひ合したやうにみんなが默る
其間、長い恐ろしい沈默が續いた。――
「死ぬんぢやないか？」とまた。――
けれども「否」と言ふものがない。

そこで皆低く唸るやうに泣きだした。

暗い扉はやつぱり閉ぢてゐる

――「暗い扉」三木露風――

こゝで露風の意味する「暗い扉」が何ものであるかは、明らかである。又「暗い扉」――この現實に向つて、それを叩くもの、叩きつゝ「死の恐怖」におしだまらされて了ふものが、當時の自然主義作家そのものであること、及びこゝではそのことを歌ふことによつて、何が、かくこの「暗い扉」を叩かせるかを少しも考慮し得なかつた露風の弱點が――謂ふところの「幻滅の悲哀」が――如何にそれとして暴露されてゐるかも明らかである。

かくて、我々は今や、啄木が全く、當時の幻滅家達とその例を異にしてゐた事實を知り得たものであるが、また、ここにそのことと關聯して、我々の忘れず、考慮しなければならない點は、では彼のかゝる詩の取材に於ける積極的な努力が當時の彼の詩形式にどう影響してをつたか、――を見てみねばならない點であらう。

もう一つ短い詩をあげてそれをみてみよう。

絶間なく動いてゐる須田町の人の中に

絶間なく目を配つて立つてゐる騎馬の巡査

見すぼらしい銅像のやうな――

白痴の小僧は馬の腹をすばしこく潜りぬけ
荷を積み重ねた赤い自動車が
馬の鼻先を行く。

數ある往來の中には
子供の手を曳いた巡査の妻もあり
實家へ金借りに行つた歸途
子と彼の馬上の人を見上げて
おのが夫の勤務をおもふ。

こゝで騎馬巡査の勤務狀態やその家族の生活風景などを歌ふ啄木が今日どう評價されねばならないかに就いては語るまい。が、それにしても我々はかつて詩型上の努力を藤村、有明等の七・五、八・七調から八・九、六・七調へと、幾つかの新調に發展させた啄木をおぼえてゐる。ところで、こゝに見る口語詩調はどうか？　このことを啄木が單に「時代の風潮に從つて――」と、

見るのは間違ひである。なぜなら、新しい詩の形式は、いかなる場合にも、形式のみとして發展するものではなく、新しい時代の發展と共に、その新しい時代の内容を感じ、且つ、感ずることによつて、そこに詩人の胸から、はみ出してくる必然的な心理を表現するところに、いつでも新しい發展があり、それに伴ふところの新しい形式が生み出されるものであるからである。すでに我々の見て來た口語詩運動もそれであつた。しかも當時の口語詩家達が、少しもそれを感じなかつた時、——そして、たゞ形式革命のためにのみ、新しい形式を生み出したものであると考へてゐる時、——啄木がここに示した自由詩型を、當時の形式主義者共に反抗して生み出してゐることは忘るべからざることである。

　それに就いて彼は言つてゐる。

「私がその手續き（從來の詩型——筆者註）に段々慣れて來た時は、同時に私がそんな手續きを煩はしく思ふやうになつた時であつた。」

「用語の問題は詩の革命の全體ではない。」

「所謂詩であつてはいけない。人間の感情生活の變化の嚴密なる報告、正直なる日記でなければならぬ。」

「文學者が呉服屋や美術商や、玩具屋でない限り、（新しい試み）と云ふことは無意義ではあるま

いか。事新しく言ふまでもないが、文學は自己の發表である。試み、試みと自分で言ふ人は、發表の形式の研究者であつて、發表すべき自己その物を閑却してゐる人のやうに見えないことがないでもない。」

又、當時の象徴詩家に對して、

「若し、象徴と云ふ事が單に形を變へ、言葉を變へて表はすと云ふことにすぎなかつたら、それは無用の手數である。言葉の遊戲である。まやかしである。――私は唾棄する。」

かくして「我々の要求する詩は、現在の日本に生活し、現在の日本語を用ひ、現在の日本を了解してゐるところの日本人によつて歌はれた詩でなければならぬ。」と云ふことを、啄木が叫んだ時、我々はそこにこの日本人が「其の國家組織の根柢に於て世界の何れの國よりも堅く、且つ深い日本であることを考へ……い。」と、叫ぶ彼を直ちに思ひ浮べるものである。

けだし、かゝる日本人が當時啄木をおいて日本の詩界になかつたことは明らかであるし、又、啄木がそれに…………………………………たのが、明治四十三年六月に於ける、…………事件に際會してからであつたのだ。

では、我々は愈々そこに啄木を求めて彼を追求してみよう。

四　社會主義詩人時代

反動時代（産業革命の進展）――自然主義運動の凋落――
革命思想家としての啄木――その詩歌――啄木の死

さて、我々は愈々啄木がその最後の思想に到達し、そこから自身を社會主義詩人として宣言することを得しめた彼の晩年について語る機會を持つことが出來た。けだし、彼のこの最後の思想は、それが明治四十三年六月に發覺した、あの有名な「…………」に際會して、それを考慮しはじめた彼の苦悶の結果であることはすでに述べて來た通りであるが、それにしても、我々はこゝで、その「…………」が歴史的には何を意味してをつたか、――何故この社會主義運動が……………………、それを……………………………………………………が下されたか、及び…………下に置かれた當時の日本の文化・文學運動が又どういふ方向を向きはじめて居つたか等々を探鑿し乍ら、……………………………貧困と病苦との中から起ち上る勇氣を示すことの出來た啄木について研究して行くことにしよう。

では、一體それは何故に？……。われ〳〵はあの「…………」の内容については、じつさいそれを知る由もない。が、さきにも述べた通り、日露の役後、日本の資本主義はにはかに重工業に

於ける第二次産業革命の過程をたどりはじめた。然かもこの産業革命の進行は、また、必然的に日本の勞働運動を剌戟し、そこに、日本プロレタリアートの階級結成を促進せしめずには置かなかつた。が、もとよりブルジョアジーにとつては、凡そ彼女が自身で生みつけたこの私生兒ほど恐るべき獅子心中の蟲はない。卽ち、…………………」も、全く當時の……に置かれてゐた日本の勞働者階級が、自身の憤激をそれとして…………社會運動の現れであつたし、又、それに對する……………………、それを下すことによつて日本の勞働者運動を根こそぎに閉ぢこめ、……………………………とするための仕事だつたことは自明である。まことに明治四十三年の日本社會を、その根柢から震慴させた「……」とは、………………………………………………。

ところでこの事件が當時の日本の文化・文學の領野に及ぼした影響は？――云ふまでもなくこの徹底的な鎮壓によつて日本文化の正常な發達は阻止され、一方、そこに一群の「無口な紳士群」を生み出すと共に、他方、その大部分は貴族や大ブルジョアジーの子弟によつて唱導された人道主義の運動を見ることが出來た。先づ多くの自然主義者たちは、その自然主義の方法によつて人及び社會を見ることを捨て去り、遽かに「自己の趣味的對象として封建時代の遺産を鑑賞することを思ひついた。所謂餘裕派、低徊派の文學者たちがそれで、彼等はそれまでかへりみられなか

つた俳句や和歌に對して遙かに再吟味を開始し、そこで小ブルジョア紳士的な「趣味の生活」「娯樂の生活」を營むことによつて、それ〲に人及び社會に對する不平や憤懣を持つことから逃避し乍ら、たゞ「口數の少ない」つとめて守る「沈默」と「苦笑」の生活の中にうずもれて行つた。當時、夏目漱石をはじめとする多くの文學者たち、——高濱虚子、鈴木三重吉、森田草平等がかかる低徊派にとぢこもり、又、日本に於ける寫實主義文學の先驅といはれた永井荷風、阿部次郎、小宮豊隆等がそれに近づきつゝ、その文學的な理論づけにつとめたことは有名である。更に谷崎潤一郎が餘裕派の文學から享樂主義の傾向へ、最近には惡魔主義、獵奇趣味の洞窟の中へ陷し去つて行つたのも、明らかにそれが現實の壓力に對する反抗を持ち得ないものの、常規的に落ち込んで行かねばならなかつた道であることを我々は知つておかねばなるまい。——秋田雨雀氏は述べてゐる。

「然し、夏目漱石は個人としてはブルジョア社會に於ける一個の紳士として生活してゐたし、社會に對して、人に對して可なりな不平や怒りを持ちながら、勿論これを社會機構や階級の問題として取り上げようともしなかつたし、またその不平や怒りを荒々しく相手に投げつけるといふこともしなかつた。口數の少い、沈默勝ちな彼は、社會に對して人に對して懐いてゐたすべてのものを内攻させ、それを一度自分の趣味で整理してこれを創作の方に流し込んでゐた。可なり鋭い

皮肉屋であつが、その皮肉も制作を通じて見るとユーモアを帯びたものとして表現されてゐる。『猫』『坊ちやん』『草枕』がブルジョア及びインテリゲンチヤに對して絶えず喜びを與へてゐたのは、これ等の作物の持つ輕い皮肉や上品な趣味が彼等の生活を靜かに反省させ苦笑させるものが多かつたからであらう。『三四郎』や『門』などには多少作者の哲學、人生觀といふやうなものが次第に色濃くなつてゐるが、作者の見てゐる社會と信じてゐる社會と、實際の社會との隔りは益々深くなつて、彼は全く自己の觀念の中に社會を勝手に創造してゐたとしか思へない點が多かつた。『行人』『心』などを經て最後の大作『明暗』の頃になつては、この作者の社會觀、人生觀に、彼の生理的異情の徴候を思はせるものさへあつた。夏目漱石は比較的短かい期間に可なりな多作をしてゐる。そしてそれ等はブルジョア社會によつて愛讀されたが、漱石の社會觀、人生觀、乃至道德觀は決してブルジョアのものではなかつた。勿論新しい時代に影響を持つものでもなかつたのである」(註一)と。

かくして、こゝで我々の知り得るところはこの「醜い現實を憎むが故に美しい夢を愛する」(註二)詩人漱石の「餘裕派」が如何にたゞ「現實の一角を磨り減らして得た」焦燥の産物だつたかを明らかにし得ることであらう。

ところで、かゝる「餘裕派」に對する人道主義派は？　云ふまでもなく、この貴族や大ブルジ

ヨジーの子弟たちの頭に描いた人道主義は、それが單なる文學運動に過ぎなかつたといふ點で特徴を持つてをつた。これはたゞ進路を失つた日本の自然主義文學に新しい風穴と廣い曠野を與へたが、それにもかゝはらず、又、これが日本に於ける「封建的・貴族的イデオロギーの最後の開花（註三）として、明らかに近代的貨幣資本家になりきつたものゝ上に咲き、後にはプロレタリア運動と相剋的な關係を持つて、自身の消極的な反動性を暴露したことは注意すべきである。——

この「白樺派」の運動についても秋田氏は述べてゐる。

「日本に於て一九一一年頃に武者小路實篤、有島武郎その他によつて始められた人道主義の運動は、果してこの「帝政ロシアに於けるナロードニキの運動と同じく『人民の中へ』に行く運動であつたらうか？　否な、然うではなかつた。その理由は澤山あるが、その最も著しいものを舉ぐれば、ナロードニキの運動は一つの社會運動であつたのに、所謂『白樺派』による人道主義運動は單純な文學運動に過ぎなかつたといふことである。例へば、武者小路がユートピア的『新しい村』を始めたり、有島が所有地を農民に解放したといふやうな事實があつたとしても、それは白樺派の文學運動とは直接的な關係を有するものではなかつた。それはこの文學運動の一員の個人的行動に過ぎなかつたことは、有島が土地解放の際に述べた彼自身の言葉によつても明かである」（註四）

又、「武者小路、有島とともに白樺派の文學運動に參加した人々は長與善郎、志賀直哉、木村莊

太、倉田百三、千家元麿等で、大部分は貴族やブルジョア出の青年であつたが、彼等に一貫した指導精神があつたかといふと、決して然うでなかつた。白樺派といへば、直ちに武者小路を聯想するが、彼の持つてゐるやうな『人類の意志』とか『宇宙の調和』とかいふやうな觀念的な思想がグループに共通なものでは決してなかつた。例へば有島は既に早くキリスト教的社會觀に幻滅を感じ、虛無主義的色彩を帶びたアナルヒストであつたし、長與には全く統一あるイデオロギーは見られなかつたし、志賀は自然主義の繼承者らしい人生觀及び方法論を持つてゐた。倉田は僅かに武者小路に類似したものを持つてゐたが、それとてもあとでは神秘主義的な狂信者となつてしまつてゐる。――白樺派の文學がプロレタリアの文學運動の黎明期に於て、これと對抗して反動的な役割をつとめてゐたことを忘れてはならない。武者小路が、やゝ後の時期に於いて、須佐之男命や大國主命や日蓮や楠正成を書き乃至は報德宗の二宮尊德を擔ぎ出して、フアッショ的態度を取つても私達には決して不思議ではない。云々……」

しかも、これらの情勢は當時の詩分野に於ても全く同しで、例へば

低徊的自然派として横瀨夜雨、山崎紫紅、前田林外等が、

東洋的象徵派として三木露風等が、

邪宗類唐派として北原白秋、伊良子淸白、木下杢太郎、長田秀雄等が――

その他、野口米次郎、平野万里、野口雨情、福田夕咲、正富汪洋、高村光太郎等が色とりどりの詩人として活動し、彼等の反自然主義的な頽廢の歌々によつて、すさび行く當時のインテリゲンチャの心情を表出しつゝあつたことに言ふまでもない。（しかし彼等の大半は歴史的にいつて、反動的な存在に外ならなかつた。）

かくして、一九一〇年に於ける支配階級に「極刑」をもつて……された日本の文化・文學運動は、その恐怖下におかれた日本プロレタリアートの一時的な靜穩と共に、全くその反抗的な影を沒したかの觀さへあつたが、やがて大杉、荒畑、堺、高畠等の無政府主義的或はマルクス主義的な機關誌の發刊と相俟つて勃然たる民衆派の運動を捲き起し、それが今日のプロレタリア文學運動につながる勞働者文學、第四階級の文學運動の前夜となるのは、一九一四年——一七年の世界大戰及び一九一七年に於けるロシヤ、プロレタリアートの勝利が日本社會に大きな激動を與へた頃からである。

註一、秋田雨雀「プロレタリア前史時代の文學及演劇」（前掲書）參照。
註二、小宮豐隆「夏目漱石集の爲に」（「現代日本文學全集」（一九））參照。
註三、小宮山明敏「現代日本文學史（一）」（「マルクス主義藝術學研究」）參照。
註四、秋田雨雀「前掲書」參照。

それにしても我々はこゝでこの「…事件」が啄木の思想にどう云ふ影響を與へたか――特に彼がその最後の到達點として示し得た科學的社會主義に到るまでの、數々の苦悶の道程を具體的に見てゆくことにしよう。明治四十三年の秋に彼は歌つてゐる。

つね日頃好みて言ひし
革命の　語をつゝしみて
秋に入りけり

今思へば
げに彼も亦　秋水の
一味なりしと知るふしもあり

人がみな恐れていたく貶すこと
憚れえざりし
さびしき心

これらの歌々から感ぜしめられるものは、當時啄木が如何に激しいショックをあの…事件か

ら受けたかを知るのに都合よいだらう。

「つね日頃好みて言ひし革命の語をつゝしみて秋に入りけり」この驚きは、實際「かの頑迷な武士道論者」の比ではなく、全く「少い時から革命とか暴動とか反抗とかいふことに一種の憧憬を持つてゐた」啄木に、そしてたゞロマンチックな氣分でこれら革命とか暴動とか反抗とかいふ言葉を好んで濫費してゐた彼に、それを抑し黙らせる驚きであつた。急に彼が「零砕な小遣で古本屋をあさり、これまで出た限りの社會主義的な本を得ては耽讀」するようになつたのもその頃（彼の年譜作製者は特に『此頃、或出來事の刺激を受けて考へ方に嶮しい變化を生じた』と言つてゐるが、こゝで『或出來事』といふのは『……』をさしてゐたことが察せられる。）からである。しかも、それは「所詮、行く所まで行かなければ、引返すことの出來ない熱心をもつて、嚴しく突つこみ乍ら」であつた。當時、彼はこの事件に關係した記錄の整理に一日を費したり、その事件の特別裁判一件書類を手に入れて耽讀してゐる。更に深まつて來る反動の空氣の中で、自分を敢て社會主義者と宣し、自己思想の進展を誇らかに人に傳へてゐる。こゝにその頃（明治四十四年一月）の年譜と照應し乍ら彼の記した日誌の意味を參酌して見ることは、あながち故人の遺志に反することではないだらう。（註一）

〔一月三日〕…………無政府主義者の特別裁判に關する内容を聞き、又、…………か

ら辯護士に送つた陳辯書を手に入れたといふ意味のことを書き「……………………………………

……………。」(大島氏宛手紙參照)

〔一月四日〕右の陳辯書の複寫。(大島氏宛手紙參照)

〔一月五日〕右の陳辯書を寫し了る。こゝで…………………………、幸德が、

火のない部屋でそれを書き乍ら、寒氣に指先がこゞへて三度筆を落した………、…………

……………………………點にあつたらしい。そして、この陳辯書に現

れた限りでは、…が決して「……………………」であらうと思はれ

る點、又「………！ こんなことが思はれた」といふ意味のことを述べてゐるが、それは陳

辯書に於ける「………」について述べた所で「………は、支那の文字で、支那は甲性の

………………………革命といふのだから、………………………

いふのでせうが、私共……………如何には頓着なく政治…、………

…されねば、………申しません。…………………。………

……………………………。……………………

…………………………、………………………、……

…………………………。………………………、…

……………………………………………。

維新の變革に際しても、木戸や西郷や大久保が起したのではなく徳川氏初年に定めた封建の組織、階級の制度が三百年間の人文の進歩社會の發達に伴はなくて、各方面から朽廢を見、破綻を生じ、自然に傾覆するに至つたのです。此舊制度舊組織の傾覆の氣運が熟しなければ、百の木戸、大久保、西郷でも、どうすることも出來ません。…………江戸の引渡しですらも、勝、西郷の如き人物が双方へ一時に出たから、良かつたものゝ、此千載稀な遇合が無かつたら、どんな大亂に陷つてゐたかも知れぬ。云々」(註二)に所感あつたものと思ふ。

〔一月十日〕クロポトキンの「青年に訴ふ」を讀む「ク翁の力ある筆は今更のやうに頭にひゞいた」といふ意味の感激。

〔一月十一日〕友人米内山氏から「東北の田舍でも酒の賣れなくなつた」といふ話を聞いて感慨にふけつたり、「平民の中に行き度い」と考へたり。

〔一月十三日〕土岐哀果と逢ひ、雜誌刊行の計畫。

〔一月十六日〕雜誌を文學に於ける社會運動といふものにしようといふことに哀果と意見一致。

〔一月十七日〕「明日」それが話題であつた。

〔一月十八日〕知られてゐる通り、この日は………特別裁判宣告の日であつた。この日程彼は

「頭が昂奮」したことは無かつたといひ、又、「昂奮の後の疲勞」を感じたこともなかつたやうである。又、「家に歸つて寢たい」とも思ひ、「・・・は駄目だ」と、「そんなことを漠然と考へ」たともある。それらの斷片的な言葉を拾つて見ても、彼が如何にこの事件に激しい關心を持つてゐたかゞ察せられるようだ。

夕刊の一新聞に幸徳が法廷で微笑した顏を「惡魔の顏」と書いてゐたといふ意味を記し、それには彼の意見を述べてゐない。

〔一月十九日〕雨、寒。

〔一月廿日〕判決言渡しの翌日である。この日は東京は朝から大雪で終日降りやまず、彼は、降りしきる雪を窓から眺めて、「妙に叙情詩でもうたひたい」といふ意味のことを述べてゐるが、こで叙情詩をうたひたい彼の氣持は、かつて「革命の語をつゝしみつゝ秋を迎へた」と同じ心情ではなかつたかと考へられる。

〔一月廿一日〕「人間が澤山ある。あまりに澤山ある。それが不愉快だ」といふやうな感想。

〔一月廿三日〕……關係記錄の整理に一日を費す。

〔一月廿四日〕斷罪の日。「梅の鉢に花が咲いた」と。(おのれの苦惱に堪へがたき日にこのやうな抒情的な氣持になるのは啄木の悲しいセンチメンタリズムであつた。

〔一月廿五日〕死刑囚死骸引渡しの日。

〔一月廿六日〕「七千枚、十七册、一册の厚さ約二寸五分位の」（大島氏宛手紙）特別裁判一件書類を耽讀。「頭の中を底から掻き亂されたやうな氣持。」

〔一月卅日〕「我々……………………………」――こんな言葉が口に出たといふことを彼は語つてゐる。

以上、私がいろ〳〵と綴り合せて、その意味を參酌してみたところでは、まだ「××事件」に對する啄木の心理――その衝激の內的過程を知ろには不充分であらうが、それにしても、彼が何を「………………」と考へてゐたかは解るし、又、それは同年一月九日付で、彼が友人瀨川氏に宛てゝ書いた手紙を見ればはつきりとするであらう。

「さうして僕は必ず現在の社會組織、經濟組織……………………………。これは………なくて、過去數年……………………ある。僕は他日僕の所信の上に立つて多少活動したいと思ふ。僕は長い間自分を社會主義者と呼ぶことを躊躇してゐたが、今ではもう躊躇しない。無論社會主義は最後の理想ではない。人類の社會的理想の結局は……………な い。（君、………………知らずに…………ゐる。僕はクロポトキンの著書を讀んでビックリしたが、これほど大きい、深い、そして確實にして且つ必要な哲學は外にな

い………決して暴力主義ではない。今度の…………………………。そして僕の苦心して調査し、且つその局に當つた辯護士から聞いたところによると、…………………………………………………………………………。）然し…………はどこまでも…………、……先づ社會主義者、若しくは國家社會主義者……………。僕は僕の全身の想心を今この問題に傾けてゐる。「安樂（ウエルビーング）を要求するは人間の權利である」僕は………舊思想、舊制度に不滿足だ！」

又、「たしか一年前に私は、私自身の「自然主義以後」――現實の尊重といふことを究極まで行きつめた結果として自己そのものゝ意志を尊重しなければならなくなつた事――國家とか何とか一切の現實を承認して、そしてその範圍に於て自分自身の内外の生活を一生懸命に改善しようといふ風なことを申上げた事があるやうに記憶します。それは確かにこの私といふものにとつて一個の精神的革命でありました。その後私は思想上でも實行上でも色々とその「生活改善」といふことに努力しました。併しやがて私は、その革命が實は革命の第一歩に過ぎなかつたことを知らねばなりませんでした。現在の社會組織、經濟組織、家族制度……それらをその儘にしておいて自分だけ一人合理的生活を建設しようといふことは、實驗の結果、遂に失敗に終らざるを得ませんでした。その時から私は一人で知らず〳〵の間に Social Revolutionist となり、色々の事に對し

てひそかに socialistic な考へ方をするやうになつてゐました。丁度そこへ傳へられたのが今度の…事件の發覺でした」（註三）
「雜誌の目的は、單に文學雜誌たるのみでなく、保證金を納めさる雜誌としての可能の範圍に於て、現代の社會組織、經濟組織、政治組織乃至いろいろの制度に對する根本批評を青年が進んでやるやうな機運を作りたいといふにあります。…我々は嘗て我々の好きなロシヤの青年のなした如くに、我々の目を廣く社會の上に移し、出來得べくんば、我々の手と足とをも他日その方に延ばしたいと思ふのであります。我々は文學本位から一歩踏み出して『人民の中』に行き度いのであります」（註四）
かくして、今や我々がこれらの手紙から感ずる處のものは、そこで彼が使用してゐる言葉のいろ〳〵な定義上の混亂にもかゝはらず――注意せよ！この言葉の混亂が未だ科學的社會主義「マルクス・レーニン主義」の何の文獻をも手にすることの出來なかつた時代の、しからしめたことは明白である――彼が自らを社會主義者であると宣し、何よりも…………一つの空想であること、社會體制…………「實際家」でなければならないこと、又、かくて彼が「人民の中へ」行かうと欲する、眞實の意味をも、十分に見てとることの出來ることとである。
のみならず、當時の彼が單に彼の病苦と貧困のみならず、彼をとりかこむ現實の不快な空氣と

どんなに絶望的な不調和を感じ乍らこれらの思想を闘ひ得たかは、次の記錄がそれをよく物語つてゐる。

〔二月四日〕帝大病院青山內科に入院、慢性腹膜炎の手術のためである。

〔二月十日〕昨日のやうに思はれるのに今日で入院してから一週間目である。氣分に平生と變らないが、昨日と今日、午後に少し熱が出た。水もまた少したまつたらしい。

家からの新聞、郵便物を持つて今日は妻だけ一人來た。そこへ社の寺崎老人が見舞旁々加藤さんの手紙をもつて來てくれた。手紙には賴んであつた金の拂ひ殘りが三圓某入つてゐた。恰度寺崎老人の歸つたあと、隣の綏囊の男が、煙草で咳が出ると看護婦に云ひ出した。予はかくて室內に於て禁煙せねばならなかつた。夕方にはこらへきれなくなつて廊下に出て一本のんだ。丸谷君が並木君の歌と矢口君の前金とを持つてやつて來た。函館の新聞には無政府黨の死刑囚人の一人が死刑前に卷煙草を三本のんで「これでいゝ」と言つたことが何からか轉載されてあつた。煙草！夜に左の目にツベルクリンを注入された。（註五）

〔二月十五日〕やつぱり、「予は強固なる唯物論者である」と云ひ切つてゐる。

〔三月十五日〕退院、「全快を意味せざる退院者啄木は、三月十五日から、再びもとの弓町の床屋の二階にかへつて、毎日〳〵發熱と闘つた。新しい本も買へなかつた彼は、土岐氏から借りたク

ロポトキンの自傳『革命家の思ひ出』を讀んだり、幸德秋水らの機關紙『平民新聞』にのつたトルストイの日露戰爭論『爾曹悔改めよ』を筆記したりするのが勢一杯の仕事であつた」(註六)と云はれる。

〔四月十七日〕雜誌の發刊斷念を思ひ立つ。その理由の第一は「雜誌が今やその最初の目的をはなれて全く一個の小さい歌の雜誌にすぎぬ」(手紙參照)ものとなつたこと――そして啄木はこの終日いらいらと怒りつぽくなつてをつた。

〔四月十八日〕年譜では「少々の手違ひで雜誌が出しがたくなり、十八日に至り到頭絕望、發行を斷念す。」と。

この日啄木は土岐氏と會つて、自分から雜誌をやめようぢやないかと切り出した。土岐氏もやめようかと云つたが、「未だ未練があるらしく」何度もその話を持ち出したのを、やめよう〳〵で啄木はもみ消してしまつた。

「話はごく簡單であつた」と彼はその時のことを記してゐる。

〔四月廿二日〕よほど生活が苦しかつたらしい。「金! 生活の不安がどれだけ慘酷なものかは友達は知るまい」病長びくので悲觀。

〔四月廿四日〕每日平民新聞やこの派の出版物をしらべる仕事の一として、同新聞所載のト翁の

日露戰爭論を寫し始む。

〔四月廿五日〕「さうして予の前にはもう饑餓の恐怖が迫りつゝある！　起きては卜翁の論文を寫し、寢ては金のことを考へ」乍らこの日を過したといふ意味のことが記されたり、又、卜翁を評して、彼が科學を知らなかつた、と云ふより「嫌つた」といふのは、かへつて彼を偉大にした第一の原因であらうが、それは又彼の思想の弱點であつたと云ふ風に言つてゐるのは啄木の批評の鋭どさを感ぜしめるものだ。かくして、

〔四月廿六日〕「底の知れない、一生免れることの出來ないやうな悲しみが胸一杯」となり、

〔四月廿七日〕この頭の中にある大きな問題、一生つゞきさうな問題を考へたくないといふ氣分がだん〳〵濃厚になるばかりのやうだ。「此頃はもう養生する金もなくなつたし、何か書きたいにも書く程の勇氣は出ないし、實に下らない世の中になつた」（土岐氏宛）

〔五月一日〕土岐氏と「隱遁」といふことを語つたと云ふ。彼はともかくも金が欲しく、若し金が手に入つたら「隱遁」したいと、

〔五月七日〕「理性主義（新道德の基礎）」といふことについて考へ、言論に自由のない日本ではさうした名目の下に新しい道德運動を起してはどうかと空想したり、又、「岩手縣へかへつて『農民の友』といふ週刊新聞を起すことを想像した」りし乍ら、その心の動搖について物語つてゐる。

かくて、この絶望的な不調和が、それにもかゝはらず、彼をして當時の詩を生ましめたことは、亦、甚だ意味あることでなければならなかつた。

註一、明治四十四年は啄木がその生涯を通じて、最も激しくその思想の肉體の間に苦吟した年であつた。この年に彼が書き遺してゐる日誌は、彼の思想、特に……事件によつてうけた彼の衝動や心理的激動のあとを辿るのに貴重な文獻だと思ふ。或る機會を得て、この日誌を見ることの出來た私は、そこから部分的にノートしたものを、こゝでそのまゝ發表したかつたが、その後、啄木の日誌については、いろ〱の問題がある由を知り驚いて折角のノートをひつこめねばならなかつた。たゞそれにしても年譜と對照し乍らその意味だけを傳へるだけなら必ずしも啄木の遺言に反することではないと考へ、それも自分の文章に必要な部分だけを引用したが、勿論引用した部分は手紙その他ですでに發表された部分ばかりである。啄木の日記が今日まで公表せられないことは兎に角遺憾である。

註二、「解放」第五卷第十一號（大正十五年九月）幸德秋水書簡集參照。「革命の性質」について述べた文章はこの書簡集より引用したものである。

註三、大島氏宛手紙「四十四年二月九日付」

註四、孤舟氏宛手紙、「同二月十四日付」

註五、六、吉田孤羊「啄木の日記」（改造第十五卷第三號）參照。

では、その頃の啄木の詩について見乍ら、更に我々は彼の思想と藝術との關係について探つて

みよう。後は歌つてゐる。

われは知る、テロリストの
かなしき心を――
言葉とおこなひとを分ちがたき
たゞひとつの心を
奪はれたる言葉のかはりに
おこなひをもて語らむとする心を、
われとわがからだを敵になげつくる心を――
しかして、そは眞面目にして熱心なる人の常に有つかなしみなり。

はてしなき議論の後の
冷めたるココアのひと匙を啜りて、
そのうすにがき舌觸りに、
われは知る、テロリストの

かなしき、かなしき心を、

われはかの夜の激論を忘るること能はず、
新しき社會に於ける「權力」の處置につきて、
はしなくも、同志の一人なる若き經濟學者Nと、
われとの間にひき起されたる激論を、
かの五時間に亙れる激論を。

「君の言ふ處は徹頭徹尾煽動家の言なり。」
かれは遂にかく言ひ放ちき。
その聲はさながら咆ゆるがごとくなりき。
若しその間に卓子のなかりせば、
かれの手は恐らくわが頭を撃ちたるならむ。
われはその淺黑き、大いなる頭の

——「ココアのひと匙」——

男らしき怒りに濺れるを見たり。

五月の夜はすでに一時なりき。
或る一人の立ちて窓をあけたるとき、
Nとわれとの間なる蠟燭の火は幾度か搖れたり。
病みあがりの、しかして快く熱したるわが頰に、
雨をふくめる夜風の爽かなりしかな。

さてわれは、また、かの夜の、
われらの會合に常にたゞ一人の婦人なる
Kのしなやかな手の指環を忘るること能はず。
ほつれ毛をかき上ぐる時、
また、蠟燭の芯を截る時、
そは幾度かわが眼の前に光りたり。
しかして、そは實にNの贈れる婚約のしるしなりき。

されど、かの夜のわれらの議論に於いては、
かの女は初めよりわが味方なりき。

――「激論」――

ここに歌はれたものの中からは、彼がその思想的發展の途上に殘した多くの觀念的虚無主義と、ナロードニキズムの跡を見るにもかかはらず、我々は明らかにその社會的環境との不調和に反抗する激しい啄木の意志の表現を見ることが出來るものである。しかもそれは最早や、今迄の啄木には全然見られない激情の彼であり、且つそこには未だ勞働者階級の姿は見えないとしても、この觀念的情熱をもつて、現實の桎梏に反抗し、その輝く瞳に未來の空想を描いたインテリゲンチヤが「果てしなき議論」に疲れてすゝる「ココアのひと匙」にも、なほ反抗の苦汁を、それとしてなめつくさうとする姿を見るのである。

われは常にかれを尊敬せりき、
しかして今も猶尊敬す――
かの郊外の墓地の栗の木の下に
かれを葬りて、すでにふた月を經たれど。

實に、われらの會合の席に彼を見ずなりてより、
すでにふた月は過ぎ去りたり。
かれは議論家にてはなかりしかど、
なくてかなはぬ一人なりしが。

或る時、彼の語りけるは、
「同志よ、われの無言をとがむることなかれ。
われは議論すること能はず、
されど、われには何時にても起つことを得る準備あり。」

「彼の眼は常に論者の怯懦を叱責す。」
同志の一人はかく彼を評しき。
然り、われも亦度々しかく感じたりき。
しかして、今や再びその眼より正義の叱責をうくることなし。

彼は勞働者――一個の機械職工なりき。
かれは常に熱心に、且つ快活に働き、
暇あれば同志と語り、またよく讀書したり。
かれは煙草も酒も用ひざりき。

かれの眞摯にして不屈、且つ思慮深き性格は、
かのジュラの山地にバクウニンが友を忍ばしめたり。
かれは烈しき熱に冒されて、病の床に横はりつゝ、
なほよく死にいたるまで譫語を口にせざりき。

「今日は五月一日なり、われらの日なり。」
これ、彼のわれに遺したる最後の言葉なり。
その日の朝、われはかれの病ひを見舞ひ、
その日の夕、かれは遂に永き眠りに入れり。

あゝ、かの廣き額と、鐵槌のごとき腕と、
しかして、また、かの生を恐れざりしごとく、
死を恐れざりし、常に直視する眼と
眼つむれば今も猶わが前にあり。

彼の遺骸は、一個の唯物論者として
かの栗の木の下に葬られたり。
われら同志の選びたる墓碑銘は左の如し、
「われには何時にても起つことを得る準備あり。」

——「墓碑銘」——

こゝに私は彼のどの詩よりも「唯物論者」としてのたくましい姿を見る。たゞそれにもかゝはらず若しこの勞働者を啄木が眞に歷史的發展の產物として、辨證法的に理解してをつたら、それを描くに、かく彼のインテリゲンチヤ的心理の表現のための對象としてのみこの勞働者を扱はなかつたであらうし、又、從つて彼の生涯を通じてその頭におしかぶさつてゐた貧困と病苦とへの闘ひにも、つねに彼がたゞおしかぶさつてくる外部からの重壓に不調和を感ずることとだけで終ら

ないで、恐らくは、その貧困と病苦から立ちあがらしめた彼、更に大衆の先頭に立たしめること の出來たであらう自身を見出し得たらう。勿論、しかし、このことは、そこに到らなかつた啄木 に罪悪があるのではなく、一つには日本の勞働運動の未だに歴史的な展望をもたなかつた時代の 環境がしからしむるものであり、且つ、一には勞働者の生活を描き得るものが唯物辯證法の立場 に立脚することによつてのみ得られるプロレタリア作家の特權であることを、こゝで我々は理解 しておけばよいであらう。とまれ、かくして彼、われ〳〵はこゝに彼の全集の最後に飾られた 「明日の考察」を眺める機會に到達するのである。

○

「時代閉塞の現狀（强權、純粹自然主義の最後）及び明日の考察」

こゝで彼は、先づ當時の日本青年を圍繞してゐた空氣――即ち、日本の資本主義的帝國主義の 反動的な空氣の中に置かれてゐた當時の青年達が、その國内に瀰漫してゐた國家的……に何の 矛盾をも感じることなく見逃して來たことから問題を提示し、明瞭に述べてゐる。

「我々日本の青年は未だかつて彼の强權に對して、何等の確執をも釀した事が無いのである。從 つて國家が我々に取つて、敵となるべき機會も未だかつてなかつたのである。」しかし「今日我々 の中の誰でも先づ心を鎭めて彼の强權と我々自身との關係を考へて見るならば必ず其處に豫想外 に大きい疎隔の横はつてゐることを發見して驚くに違ひない。」――即ち「彼の早くから我々の間

に寛入してゐる哲學的虚無主義の如きも（それすらも唯）……愛國心の一歩だけ進歩したものである。……それは一見、彼の強權を敵としてゐるやうであるけれども、……寧ろ當然敵とすべきものに服從し……彼等に實に一切の人間の活動を白眼を以て見るが如く、强權の存在に對しても亦全く沒交渉なのである。——それだけ絶望的」だつたのである。

そして尙彼はこまかく時代閉塞の現狀を述べた後語りつゞける。

「我々靑年を圍繞する空氣は今やもう少しも流動しなくなつた。强權の勢力は普く國內に行き亙つた。現代の社會組織は其の隅々まで發達してゐる。——さうして其の發達が最も、完成に近い程度まで進んでゐることは、其の制度の有する缺陷の日一日明白になつてゐることによつて知ることが出來る。戰爭とか、豐作とか、饑饉とか、すべて或る偶然の出來事の發生するのでなければ振興する見込みの無い一般經濟界の狀態は何を語るか。——」又、「斯くの如き時代閉塞の現狀に於て、我々の中最も急進的な人達が如何なる方面に其の『自己』を主張してゐるかは旣に讀者の知る如くである。」と、そして更に彼は語る。

第一には「我々明治の靑年に……靑年自體の權利を認識し、自發的に自己を主張し始め」しめたものが樗牛によつて促された個人主義の自覺であることを。しかも樗牛に於ける個人主義が遂に旣成の强權に對して反抗し得ず、「——其の思想が魔語の如く當時の靑年を動かしたに拘ら

す、彼が未來の一設計者たるニイチェから分れて、其の迷信の偶像を日蓮と云ふ過去の人間に發見した時、「未來の權利」たる青年の心は、彼の永眠を保つまでもなく早く既に彼を離れ始めてゐた」ことを、

第二にはこの失敗のよつて來たる處が「一切の『既成』を其儘にして置いて、其中に自力を以て我々が我々の天地を新らたに建設しよう」とした處にあつたこと、及びその不可能を知ることから反動的に宗教的慾求に赴いて行つたが、しかも「彼の純粹にて且つ美しき感情を以て語られた」宗教的實驗そのものすらもたゞ「其遠神清淨なる心境に對して限りなき希求憧憬の情を走らせる」のみで、遂には「科學の石の重さに」打ちひしがれたことを、

第三には前記の二段階を經ることによつて、科學を味方とし得た自然主義こそ「一切の美しき理想は皆虚僞である」ことを認知させたことを——、そして、そのことこそが又自然主義の我々に教へた最も重大な教訓であつたとも——、

かくして、啄木の「明日」に關する見解は初めて積極的に展開せられるのであつた。

「かくして我々の今後の方針は、以上三次の經驗によつて略ゝ限定されてゐるのである。即ち、我々の理想は最早や『善』や『美』に對する空想である譯はない。一切の空想を峻拒して、其處に殘る唯一つの眞實——『必要』！　これ實に我々が未來に向つて求むべき一切である。我々は

今據も嚴密に、大膽に自由に『今日』を研究して、其處に我々自身にとつての『明日』の必要を發見しなければならぬ。必要は最も確實なる理想である。

更に、既に我々が我々の理想を發見した時に於て、それを如何にして如何なる處に求むべきか『既成』の內にか、外にか。『既成』を其儘にしてか、しないでか……それはもう云ふまでもない。今日の我々は過去の我々ではないのである。從つて過去に於ける失敗を再びする筈はないのである。」「斯くして今や我々青年は、此の自滅から脫出する爲に、遂に其の『敵』の存在を意識しなければならぬ、時期に到達してゐるのである。それは我々の希望や乃至其の他の理由によるのではない、實に必死である。我々は一齊に起つて先づ此の時代閉塞の現狀に宣戰しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元祿の回顧とを罷めて全精神を明日の考案——我々自身の時代に對する組織的考案に傾注しなければならぬのである。」

と、斯う啄木が叫んだ時、其處にはも早や、ウトピストでもなく、アナルキストでもなく、ニヒリストでもない啄木——一個の輝ける科學的社會主義思想家としての彼の姿を見なければならないのである。

遂に、啄木はこゝに初めて、一切の空想を自ら奪還し、抽象化された「美」と「善」とを止揚して、確實に「必要」を把握した。我々にはその「必要」が何を意味するかは、も早や言ふまで

もない。そして、金田一氏はその頃の彼の年譜に記してゐる。

「この頃（明治四十四年七月頃）であつたが、も少し前であらうか、杖につかまつて休み〳〵、弓町から森川町まで歩いて金田一氏を訪ね、今、自分が思想上の一轉機にあること、竝びにアナキズムの重大な誤りを發見したと云ふことを物語つて、態々安心してもらひに來たのだと言つた。そして、『自分の今到達した思想の傾向については自分ながらまだ適當な名を知らない。強いて言へば——こんな反對な二名稱を結び附けるのが可笑しいけれど、外に自分は今云へないから假に云ふならば』と云つて、社會主義的帝國主義と云ふ表現を用ひ、そして病床に跪座して火を吐くやうに、現在の社會組織を呪咀した口から、涙ぐましく一切の現實を此儘肯定しようとする血の出るやうな言葉が響いた」と、

かくて、明治十九年に生れ、日清、日露の兩役を經て四十年代に於ける我が國支配階級の最も反動的な時期まで、それと相竝んで歩んで來た石川啄木は遂に、時代の制約によつて、たゞ我々の仕事の前ぶれをさせたのみで四十五年四月十三日に、その勝つことの出來ない肺患をもつてたふれた。——その枕頭には彼がその生前買ひたい〳〵と望み、やつと買ふことの出來た或る強壯劑がまだ半分ばかり殘されてあつた。——が、彼が言はうとして、言ひつくし得なかつた、又、なさうとして、なし得なかつた數々の仕事は、今それを正しく繼承することによつて、我々のプ

ロレタリア詩人達が、彼の未明の遺産を築き上げてゐる。なぜなら、プロレタリア詩人のみが、必要」の中に眞實を求め、資本主義的な、あらゆる虚僞の現實に反抗して立ち上りつゝあるプロレタリアートの進軍の歌のうたひ手であるからである――。

特に附け加へるなら、今、日本の現實はかつてない闇黒に直面して、この國の進歩的な詩人に數限りない苦惱を負はせてゐるが、それにつけても明治四十年代の闇の時代に、よく生き、よく思想し、遂にあの科學的社會主義の思想にまで到り得た啄木の崚嶮な姿が、今日のわれわれに深い親しみをよびかけて來る。

三、　啄木の文學的遺產とその繼承

一、啄木の文學的遺産とその問題

――プロレタリア詩の問題と關聯して――

我々はすでに永々と啄木の生涯、その思想及び藝術上の變遷について見、そこから資本主義社會の矛盾に敏感であつたばかりではなく、進んでそれを解決しようとする積極的な意志をさへ示すに至つた詩人――革命思想家としての彼をも見究めることが出來た。

今や我々に殘された仕事は、この進步的詩人の築き遺した仕事がどの點で積極的であり、又、どの點で時代の制約をうけてをつたか、その他、――所謂、彼の遺した文學的遺產を、我々のプロレタリア詩運動との關係に於て批判的に究明してみることにある。

一體、何處に彼は優れてをり、何處に時代の制約をうけることによつて我々の時代との距離を持つてゐるか――と云ふことを考察する前に、我々はこゝで若干どの點を問題にすることによつて彼の文學的な遺產を歷史的に我々の問題として繼承し得るか、その問題の所在を探究してみることにしよう。

第一に考へられることは政治と藝術との關係に對する彼の認知――卽ち文學（詩）の「黨派性」

に關する彼の見解についてゞある。

レーニンは「黨の文學」について述べた中で言つてゐる。

ブルジョアジーは無黨派性に賛成するより他にしかたがない。なぜならブルジョア社會に反對するあらたな闘爭が存在しないといふことは、このブルジョア社會の自由の闘士達の間に黨が存在しないことを意味するからである。自由のために『無黨派的な』闘爭をなすものは、この自由のブルジョア的性質を知らない人であるか、あるひはこのブルジョア的秩序を聖化する人であるか、もしくはこの秩序に對する闘爭を、その『完成』を永遠の彼方におしやる人である。またそれと反對に、意識的にしろ無意識的にしろ、ブルジョア的社會秩序の味方にたつてゐるものは、無黨派性の觀念に共鳴しないわけにはゆかないのである。

――無黨派性はブルジョア的觀念である。明確な黨派性は社會主義的な觀念である。この原則は大體においてブルジョア社會のすべてに適用される。

――我々社會主義者はこのやうな僞瞞を暴露し、虚僞の看板をはぎとる。だが、それは無階級的な文學および藝術を目ざすためではなくて（このやうな文學および藝術は社會主義的な無階級社會においてはじめて可能となるだらう）、表面だけは自由な、しかも現實においてはブルジョアジーと結んでゐる文學に對して、プロレタリアートと公然と結びついた、眞に自由な文學を對置

するためである。

――文學は一般的プロレタリア的事業の一部分とならねばならぬ。全勞働者階級のすべての階級意識ある前衞によつて運轉されるところの、單一な、偉大な、社會民主主義的（現在の言葉で云へば……主義的――筆者）機構の『齒車とネヂ』にならねばならぬ。文學は組織された計畫的な、結合された社會民主主義的……構成部分とならなければならぬ。

――文學は黨のものとならなければならない。」と。

かくして、今日プロレタリア詩人たちの、それと鬪ひつゝあるものが、詩作の仕事を「一種の排泄作用」であるとし、又、それを「生活行動と藝術衝動との安全瓣」的役割なりとして、詩の純粹性（特に小說やその他の散文と違つて、詩は純粹な詩人の感覺によつて自然と社會とのあらゆる物象から感じ取るものをエキスにしたものであるからと云ふ立場で主張する詩の純粹性）、詩の無黨派性を主張することによつてブルジョア的秩序への隷屬を暗默に支持するブルジョア詩人たちの假面を剝ぎとり、その仕事の中で文學（詩）の黨派性を確立しようとする努力にあること言ふまでもない。

ところで、啄木の頭にはどう云ふ黨派性があつたか？　殊に彼がその歌を「悲しい玩具」として投げ出した中には、どう云ふ時代の制約があつたか？――等々について、それを今日の我々の

詩に於ける黨派性の問題と關聯して考察してみることは、單にそこから我々の詩の歷史的な發展の姿を見出すばかりでなく、詩の階級性、歷史性、その辨證法的差別、詩に於ける政治的指導的地位の「明確性」を明確にするために意義あることゝ云はねばなるまい。卽ち、我々の何よりも最初に問題とせねばならない所以もそこにある。

第二に考へられることは、詩歌の創作に於ける彼の方法と、我々の方法に於けるレアリズムの道、――明確に言ふなら創作方法に於ける唯物辨證法の問題との關聯についてゞある。

云ふまでもなく、詩の仕事も亦、他の藝術の仕事と同じく、客觀的現實に於ける眞を映す――乃至は眞實に接近するための藝術家の努力の中に現はれる仕事でなければなるまい。そして、この眞實を映すと云ひ、眞實に接近するといふことが「この社會が如何なる方向に進んでゆくか、この社會に於て何が本質であり、何が偶然的であるかを認知すること」によつて「この複雜極まりない社會的現象の中から本質的なものを取り出し、そしてそれが必然に進んで行くその方向の觀點からそれを描いて行く」ことの中に得られるといふことは自明である。

けだし、今、我々がかゝる認知に立つて、この「現實への接近のあらゆる種類の無數のニュアンスを作つた、生々として多面的な認識としての辨證法」を我々の詩の製作の實踐に適用すべきことの意義深さを見出しつゝある時、ふりかへつて啄木の詩歌がどんな方法によつて歌はれつゝ

あつたか、特に彼がそこに示し得た進歩性と、時代の制約との關係を見破ることによつて、所謂プロレタリア短歌を建設すると共に、更にそれをプロレタリア的自由詩型にまで發展せしめ得た舊プロレタリア歌人同盟の詩人諸君の仕事がどう評價せられねばならないかを見ることは、全く重要な問題と云はねばなるまい。即ち、我々が第二に問題としたい所以である。（＊）

＊ この問題の設定は「社會主義的レアリズム」の問題が提唱せられる以前の方法となつてゐるので、「三度び、啄木の歌について」の文章を留意されたい。

第三に考へることとは、人がしば〳〵啄木を指して農民的思想家と呼び且つ議論してゐること。

このことは勿論彼がその思想の途上に示した「ナロードニキズム」の跡から、その議論を生み出したものと考へられるし、又、殊に私は明治四十四年五月七日に、彼が岩手縣へ歸つて「農民の友」といふ週刊新聞を起すことを空想したことのある事實を知つてゐる。從つて、私は決して啄木を農民詩人と呼び、彼が「人民の中へ」と欲した思想の中での、農民解放への夢想を否定するものではないが、それにしても、たゞ恐れるところは何よりも、無批判な評價がなされること、それである。今や、我々のプロレタリア詩運動の中でも「農民詩」に關する問題は非常に重要な一つの課題に掲げられてゐる。啄木を農民思想を批判し、彼の意志を我々によつて繼承することは何より重要である。――第三に我々が問題とする所以である。

第四に啄木會の意義・任務について、それを今日再吟味してみることの何よりも重要なことはいふまでもないであらう。

人も知るやうに、詩人の仕事を追慕し、たまたま一人乃至は數人の愛好家が寄つて、その仕事の特別な研究に專念するやうな例はあつても、啄木會の場合のやうに、その詩人の仕事を追慕し、憧憬するのあまり、愛好者たちの自發的な文學グループが、全國的に組織されるやうな例は、日本に於てはかつてない。否、このことはたゞに日本に於てのみならず、世界的にも極めて類例の少ない、稀有のことゝ言はねばなるまい。——日本に啄木會が組織せられ、全國的な文學グループが組織されたことは、日本の詩人が世界に誇るべき最大の一つである。

ところが最近に於ける啄木會の事情は？——こゝに一つの手紙がある。

「啄木會は昨年末以來（一九三二年末）殆んど解散の狀態になつてゐます。そのうちの二三の主な連中はそれ〴〵發展した形で仕事についてゐますし、殘つた連中は駄目になつてしまひました。こんなことになつたのも指導的な分子の方針がよくなかつたのでせう。いろいろ考へさせられる問題がありますネ。」（渡邊順三氏より）

では、何を我々は考へさせられねばならないであらうか？——日本の詩人が世界に誇るべきものを失つたことについてか？　それも一つ。——なぜ二三の連中が發展した形で仕事につき、殘

つた連中が駄目になつたかについてか？　それも一つ。――又、どこに指導的分子の方針がよくなかつたところがあつたか、卽ち、一體啄木の愛好者達が啄木の何處を愛好し、それをどう指導することによつて、駄目にならせずに終つたらうかについてか？　それも一つ。――更に、最早や解散の狀態になつた啄木會を再組織する必要があるか、ないかについてか？　それも一つ。――等々いろ〳〵考へてみることによつて啄木の愛好者達の階級性を分析し、且つそのことの中から彼等の方向を探り出すことこそ、今、我々に與へられた重要な問題と云はねばなるまい。

以上、大體四つの問題を我々は啄木の遺產の中からつかみ取つて來る。けだし、我々はこれらの問題について、それを充分に見究める時、啄木がいかにその生涯の苦悶をはらひのけて「我々の中に明らかに生きてゐる」かを感じとることが出來るであらう。

慥かに、啄木は今も我々の中に生きてゐることを私は痛感する。

では、その生きてゐる啄木を、次に示す諸論文と感想によつて、どう云ふ風に生きてゐる啄木であるかを見てみよう。私の希望することは、出來るだけ自由な形式で――謂ふことはあまり堅苦しい論文口調ではなく、しかもこれを讀んで吳れることによつて、これから讀者がプロレタリア詩を書いて行くための手引ともなるやうに書いて行き度いことである。

追記――

「序文」でゝもお断りしておいた通り、この文章は一九三三年三月頃にかいたもの故、こゝでの問題の設立の仕方には、今から見ると若干の不備をまぬかれがたい状態においてゐる。これをそのまゝにすませるのは、私の甚だ遺憾とするところであるが、現代の諸問題との關聯において、「詩の純粹性と黨派性」(再論)、「詩の創作技術について」「啄木と農民詩の問題」(再論)及び「啄木における現段階的意義」等々に就いて若干補訂してゐるので、その部分と參照の上で理解されたいものである。

二、詩人・革命思想家ハイネと啄木

——詩の黨派性の問題と關聯して——

一、ハイネと啄木

啄木の苦惱にみちたにがい顏つきを思ひ浮べる時、私はいつでもそこにもう一人のにがい顏つきをした詩人を思ひ出す。それは苦惱と迫害との生涯をパリの宿舍で終つた漂泊の革命思想家・詩人ハインリツヒ・ハイネの横顏である。

ユダヤ人であることとのために、執念深く虐められたハイネ、決鬪で大學を追ひ出されたハイネ、ヘーゲルの口からヘーゲルを聞き、しかも一八三三年つひに「頭を混亂させる此の（ヘーゲル）哲學の最も頑强な反對者たる自由主義者」や「物の分らぬ政府（プロシヤ）の役人」どもが見拔き得なかつたものをとくに見拔いてゐた彼、「青年ドイツ」の先頭に掲げられた戰士、シレジアの織工のために「織工」の歌をうたつた詩人、追放と迫害と、そして漂泊と窮乏と病苦との中でパリで死んだ彼、——だが、私に聯想を促すものは、單に斯うしたハイネの經歷が、放浪と貧窮と病苦との中で早逝した啄木のそれに似てゐるからといふためではない。

太鼓を鳴らして人々を醒ませ
血氣の力で起床太鼓をうち鳴らせ
いつも太鼓を鳴らしながら前進しろ

斯うハイネがその「學說」について歌はずには居れなかつたものゝ中から、そこに私は、彼がたゞ常に「現存するものへの顧慮なき批評」を求めてやまなかつた心情と、そして「こゝに顧慮のないといふのは、批評がその結果を恐れないといふことを意味すると同時に、現存するもろもろの權力との衝突をも同じく恐れないといふことを意味する」と云つた、その……的なほてりを感じとらずには居れないものであるし、又、同時に、このハイネのはげしい心情を、啄木がそ

の「明日を考察」した中で、當時の日本の自然主義さへもが藝術の殿堂に遁亡し、時代の社會組織や、「國家」そのものを批判する力のなくなつたことを批判して、

「我々の理想は最早や『善』や『美』に對する空想である譯はない。一切の空想を峻拒して、其處に殘る唯一つの眞實、――『必要』！　これ實に我々が未來に向つて求むべき一切である……」

「斯くて今や我々青年はこの自滅の狀態から脫出する爲に、遂に其の『敵』の存在を意識しなければならぬ時期に到達してゐるのである。それは我々に（希望や乃至其の他の理由によるのではない。）實に必至である。我々は一齊に立つて先づ此の時代閉塞の現狀に宣戰しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元祿の回顧とを罷めて全精神を明日の考察に傾注しなければならぬのである」と叫び、且つ、それを求めてやまなかつた心情と對應して考慮せずにはおけないからだ。

しかも、更にこの「現存するものへの顧慮なき批評」と云ひ、「一切の空想を峻拒して其處に殘る唯一つの眞實、――『必要』！　が未來に向つて求むべき我々の一切である」といふことが、どこから生れておつたか？　それを考へ合す時、私は益々我々に近づくこの二人の詩人の激越な心情をひしひしと感じとらずにはをれないものだ。

なぜか？――云ふまでもなく、それは二つともそれを自分自身のために必要としたものゝ中か

ら生み出されてをつたから――。では一體、誰が自分自身のためにそれを必要としてをつたか？――イギリスに起つた産業革命は、ハンザの商人をして三十年戰爭の荒廢の中から立ち上らせた。この新しく勃興したドイツ・ブルジョアジーは次第にドイツの實權を自己の手に收攬し、既存の一切への顧慮なき批評へと進まねばならないのであつた。しかも、この進まねばならないドイツ・ブルジョアジーこそそれを自分自身のために必要とし、ハイネをしてその必要を叫ばしめたものであつたし、同時にこの「顧慮なき批評」が、ブルジョアジー自身の底流に内包しつゝあつたいたいけなプロレタリアートの成長によつて、眞實に既存の一切への顧慮なき批評として見出さるべきものであつたことは、勿論、我々の知つてゐる通りである。

――啄木の場合に於ても、彼を圍繞する當時の日本の現實が、それと略一致することを我々はすでに十分見て來てゐる。

かくて、我々は「若きドイツ」がそれを圍む中世紀的、封建的な自己の環境と闘はねばならなかつた如く――從つてハイネがそのブルジョア革命のほてりの中から既存の政治的勢力への反抗を夢想せずにはおれなかつた如く、こゝにも啄木が明治維新に出發する日本ブルジョアジーの特殊な發展の中で、自身にかぶさる封建的な既存の政治勢力に反撥し、遂に「敵の存在を意識」することの必要を痛感せずにはおけなかつたと同じ心情を感じとることの出來るものだ。

私はかゝる啄木のにがい顔と、ハイネのにがい顔とを合せて聯想し、それを聯想することを愛する。

だが、こゝではその事情を暫くおき、この二人の進歩的な詩人がその詩作の上で示し得た黨派的見解を、我々のプロレタリア詩に於ける黨派性の問題と關聯して考究してみよう。

二、ハイネと「傾向藝術」

先づ、ハイネの頭にどんな黨派性が宿つてゐたか？　次に示す詩を見ることによつて我々はそれを充分に理解することが出來るやうだ。

新しい歌、もつとよい歌を
おゝ友だちよ、私は諸君のために作りたい！
われわれはこの地上にすでに
樂園をうち建てたいのだ。

われわれは地上で幸福になりたい
もう飢えにくるしむのは澤山だ

勤勞の手が獲得したものを
のらくらな腹に徒食さしてはならぬ

地上にはすべての人間のために
充分なだけのパンができるのだ
ばらも、天人花も、美も、樂しみも
甘豌豆も同じやうに。

さうだ、莢がはちければ
甘豌豆は萬人のものだ
天國なんか
天使と雀にまかしておけ

若しも死後われわれに翼が生えるなら
そのとき天上のお前たちを訪ねやう

そしてわれわれは——われわれはお前たちと
飛びきり上等の菓子を食べるであらう

新しい歌、もつと善い歌！
それは笛、ヴアイオリンのやうに快くひゞく
懺悔の歌は止む
弔鐘は沈默する

——森山啓譯「獨逸國・冬物語」から——

知られてゐる通り、この詩を作つた當時のハイネはその生涯の如何なる時代よりも、「純粹藝術」乃至「無傾向性」の思想からもつとも遠くはなれてをつた。卽ち、彼が他の詩の中でドイツの詩人たちに向ひ「人々の胸をかきたてるやうに、ドイツの自由をうたふべきことを要求し、詩人は大砲でなければならず、詩人の言葉は劍でなければならない」と叫んだのも當時のことである。

では、しかし乍ら、どういふ點で、又、どう云ふ風に、彼は當時の「純粹藝術」乃至「無傾向性」の思想から最も遠ざかつてゐるか。と云ふよりも、こゝでハイネの詩作態度から、それを

「一種の排泄作用」とするブルジョア的、形而上學的遊戯性が感じ得られるであらうかといふ風の問題にしてみたい。

だが、この答案は極めて簡單である。卽ち、全く否だ。そして單に「否」であるばかりではなく、我々はそこに叫ばれてゐるもの、主張として流れてゐるものゝ中から、一つの「傾向性」乃至は「傾向藝術」を感じさせられずにはおかないものである。

では、それはどんな「傾向性」であらうか？　言ふまでもなく、「われ〳〵は地上で幸福になりたい、もう飢えにくるしむのは澤山だ。勤勞の手が得たものを、のらくらな腹に飽食さしてはならぬ」といふ主張、――だから「天國なんか、天使と雀とにまかしておけ、そんなものは「若しも死後われわれに翼が生えるなら、そのとき天上のお前たちを訪ねやう」といふ主張――さうした言葉の中にふくまれてゐる處の、「傾向性」そのものである。ところで、ハイネの詩が、かかる「傾向性」を持つてゐる理由のために、我々はこの詩が「藝術」でないとか、或ひはこゝから「藝術を感じない」とか言ひ得るであらうか。斷じて否と云はなければなるまい。「われわれは地上で幸福になりたい、もう飢えにくるしむのは澤山だ」と、斯うハイネの歌ふ素朴な叫びの中からは、千八百三四十年代のプロシヤ王國の治下で壓制と迫害に痛めつくされてゐた猶太人の苦痛と、新興ドイツ・ブルジ

ヨアジーが自身の底流に內包してゐたドイツ・プロレクリアートの飢えかつえてゐた苦痛と、そしてそれは今も現實のプロレクリアートがそれとして經驗しつゝある苦痛をその姿のまゝで感じとられるし、しかもこれを歌ふハイネが、その現實的な苦痛を自身で經驗しつゝあるものゝ立場から歌つてゐる處には、全くそれを眞實として打たれこそすれ、我々は決して少しもかゝる「傾向性」或は「傾向藝術」を排撃する理由の見出し得ないものだ。否、寧ろハイネがかゝる「傾向藝術」の立場に立ち得たことは、彼のすぐれたる藝術家＝詩人であつたことを證明するものであると共に、それはまた、我々プロレクリア詩人がそこから甚だ多くのものを學びとられねばならない點である。

では、一體何をプロレクリア詩人たちは其處から學びとるか？

それは言ふまでもなく、ハイネの「傾向性」――「傾向藝術」そのものについての思想的內容を分析してみることによつてはつきりとして來る。即ち、彼は「傾向」といふ表題で、一篇の詩を書いてゐるが、その最後の節で歌つてゐる。

鳴らせ、響かせ、轟け、日毎に
最後の壓制者の逃亡する日まで
たゞこの方向にうたへよかし

されど汝の詩の言葉を
たゞ〳〵及ぶかぎり一般的にせよ！

この短かい詩の一節を見ても、慧眼な讀者はすでに氣づいたであらうやうに、こゝでハイネは一方では「最後の壓制者の逃亡する日まで、たゞこの方向につたへよかし」と、「傾向藝術」に對する支持を示し乍ら、又、その言葉の裏ですぐ彼の「特有な辛辣さとたゞしい詩人的な本能とをもつて、『傾向藝術』に對するはげしい不信の念を表白してゐる。」と云ふよりも、「傾向藝術」そのものが持ちつゝあつたところの抽象性、乃至は一般性――非藝術性に對して、辛辣な皮肉をなげかけてゐる。「されど汝の言葉を、たゞ〳〵及ぶかぎり一般的にせよ」このパラドックスが我我に有意義なのは、すでにハイネが「傾向的」なるもの、即ち換言するならイデオロギー的な文學（詩）が惡いといふのではなく、詩人がイデオロギー的であることのために、そこでつくり出す虛妄の意識がしば〳〵自己及び現實をゆがめ、從つて藝術を疵つけるの結果に陷入り易いことを知つて、「たゞ〳〵及ぶかぎり一般化」し、普遍化することの必要を感じとりつゝある所に在るのだ。たゞ、しかし乍らハイネのこの優れたる卓見にもかゝはらず、それが今日のプロレタリア詩人にとつて未だ不充分ならざるを得ないのは、一體彼に「傾向的」なるものを生み出さしめたものが何であつたか？　――人間の背後に在つて人間をうごかす特定の原動力と、その發展の方

則に對する認知そのものが缺乏してゐたところに在つたと云はねばならない。卽ち、ふり返つてもう一度前掲の詩を見れば明らかな通り、そこでハイネが「われ〳〵は地上で幸福になりたい」と欲する時、その「われ〳〵」が歴史上いかなる「われ〳〵」であるか、また如何に「勝利するわれ〳〵」であるかを分析することなく、——從つて明確なる階級分析の上に立つて、そこで所謂「勤勞の手」を持つものゝ勝利の要求を高かくかゝげ得なかつた所に、「傾向性」そのものに對する思想上の混沌があり、且つ、彼が遂に「明確な黨派性」に立ち得なかつた運命が宿されてゐるからなのだ。けだし、彼のこの不充分さが、當時のドイツ・プロレタリアートの階級的結成がまだ幼弱だつた、そのことからよつて生み出されてゐる不充分さであることは云ふまでもないし、それを批判的に發展させることによつて、今や詩の「傾向性」なる問題から、問題となるべき事柄を消し去りつゝあるものが我々プロレタリア詩人によつて生み出されてゐるところの嚴密な黨派性に貫ぬかれたプロレタリア詩そのものである。

三、啄木と「悲しき玩具」

ハイネを見て來た後、啄木の頭に宿つてゐたものを見てみることは、興味ある問題と云はなければならぬ。

——どう云ふ「黨派的見解」が啄木の頭を支へてをつたらうか？　一つの詩を掲げることによつて、それをみてみよう。

われらの且つ讀み且つ議論を鬪はすこと、
しかしてわれらの眼の輝けること、
五十年前の露西亞の青年に劣らず。
われらは何を爲すべきかを議論す。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたゝきて、
'V NARÓD!' と叫び出づるものなし。

われらはわれらの求むるものの何なるかを知る、
また、民衆の求むるものの何なるかを知る、
しかして、我等の何を爲すべきかを知る。
實に五十年前の露西亞の青年よりも多くを知れり。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたゝきて、
'V NARÓD!' と叫び出づるものなし。

此處にあつまれる者は皆青年なり、
常に世に新らしきものを作り出だす青年なり。
われらは老人の早く死に、しかしてわれらの遂に勝つべきを知る。
見よ、われらの眼の輝けるを、またその議論の激しきを。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたゝきて
'V NARÓD!' と叫び出づるものなし、

あゝ蠟燭はすでに三度も取りかへられ、
飲料の茶碗には小さき羽蟲の死骸浮び、
若き婦人の熱心に變りはなけれど、
その眼には、はてしなき議論の後の疲れあり。
されど、なほ、誰一人、握りしめたる拳に卓をたゝきて、
'V NARÓD!' と叫び出づるものなし。

——「果てし無き議論の後」——

云ふまでもなく、この詩を作つた啄木が、その當時（明治四十四年）、彼の生涯に於て、最も激情的であり、又、その由來を眞面目に考へてゐたことは知られてゐる。けだし、當時の啄木は彼の生涯の如何なる時代よりもイデオロギー的であり、その意味でのイデオロギッシュな或は「傾向的」な詩が作れねばならなかつた筈である。

ところで、今我々はこの詩を見てそこから果してイデオロギッシュな、或は、ハイネに見て來たやうな「傾向性」乃至は「傾向藝術」の思想を、自身に内包する處の啄木が感じられるだらうか？。不幸にしてこゝに我々は現實の苦痛を身に背負ひ切れぬ詩人のたゞ議論し、疲れ果て行く姿を見ることは出來ても（そして當時の啄木がすでに『敵の存在を意識しなければならぬ』ことを意識してゐたにしても）、その苦痛の中から立ち上り、世界をわがものとする確信、その革命性に於ける優位感を勝利の信念で貫かうとする闘志を少しも感じとることの出來ない。と同時に、そのことからして、藝術家＝詩人としての啄木に、未だ黨派的見解の極めて微弱だつたことをも考へ合はさずにはをれないものである。

とは云へ、だが、我々はだからと云つて啄木の詩を、多くのブルジョア詩と同列にながめ、「相變らずの身邊雜事、戀愛心理の加工、孤獨、末梢神經、無意味、感覺の少しばかりの時代的着色——云々」によつてそれを片付けてしまへるだらうか。否である。なぜか？　云ふまでもなく我

我はそこに彼の思想の發展の途上に多くの影響を與へたナロードニキズムの跡と、そして社會的環境と自己との絶望的な不調和に對する彼の積極的な反抗の意志を見ることが出來るし、特にその後者は、我々にとつて甚だ重要な教訓と云はねばならないから。

こゝに歌に關する彼の斷片的な感想がある。

「――私の不便を感じてゐるのは歌を一行に書き下す事ばかりではないのである。しかも私自身が現在に於て意のまゝに改め得るもの、改め得べきものは、僅にこの机の上の置時計や硯箱やインキ壺の位置とそれから歌ぐらゐなものである。謂はゞ何うでも可いやうな事ばかりである。さうして其他の眞に私に不便を感じさせるいろ／＼の事に對しては、一指も加へることが出來ないではないか。否、それに、忍從し、それに屈服して慘ましき二重の生活を續けて行く外にこの世に生きる方法を有たないではないか。自分でも色々自分に辯解しては見るものゝ、私の生活は矢張現在の家族制度、階級制度、資本制度、知識賣買制度の犧牲である。

――目を移して、死んだものゝやうに疊の上に投げ出されてある人形を見た。歌は私の悲しい玩具である。」

啄木にとつて、眞に彼に不便を感じさせるものに一指も加へることの出來なかつたこと、及び「それに忍從し、それに屈服して慘ましき二重の生活を續けて行く外にこの世に生きる方法」を

有たしめなかつたことは悲劇である。こゝで若し、彼が「……現在に於て意のまゝに改め得るもの、改め得べきものは、僅かにこの机の上の置時計や硯箱やインキ壺の位置とそれから歌ぐらゐなもので……いはゞ何うでも可いやうな事ばかりである」とするのではなく、この認知に立つて、眞に不便を感じさせるものを、この現實の軌道から取り除いて行く可きであるやうに理解してゐたなら、そこは最早や歌が單に「忙しい生活の間に心に浮んでは消えて行く刹那々々の感じを愛惜する心」の「悲しき玩具」たることなく、ハイネが「最後の壓制者の逃亡する日まで、ただこの方向にうたへよかし」と歌つたその方向に於て、壓制者を逃亡させるための歌として歌ひ得たであらうし、又、そこから歌を作る日の不幸を感じない「全く他の歌人の歌と意味を異にする」自身を宣明し得たであらう。

「僕にとつて、歌を作るのは不幸な日だ、刹那々々の偽らざる自己を見つけて滿足する外は滿足のない、全く有耶無耶に暮した日だ、君、僕は現在歌を作つてゐるが、正直に言へば、歌なんか作らなくてもよいやうな人になりたい。

　君は僕を解してくれたといふ、僕もさう信ずる、これだけ言へば君は更に僕の歌に對する態度も解つてくれたに違ひない。たゞ僕には其處に一つの悲しみがある、僕の歌は全く他の歌人の歌と意味を異にしてゐるのであるが、それでも兎も角歌といふものを作つてゐる以上、人から歌人

と見られることもあれば、自分でも歌人らしい氣持になることがある」」

この歌人らしい「氣持」そのものゝ中にこそ、啄木が遂にそれを取り去り得なかつたブルジョア的、半封建的偶像への屈服と、詩・文學の黨派性に對する暗默の無關心さが約束されてゐることを我々は知らねばなるまい。かくして、この歌人らしい「氣持」からではなく、我々を感動させる客觀的事象が、プロレタリアートの階級的必要性の結びつく所に、詩の表現を必要と感じて歌ふものが今日のプロレタリヤ詩人であり、しかもそれは「全世界をわがものとする確信」と、ブルジョアジーのあらゆる藝術的努力に對するプロレタリ藝術(詩)の歴史的優位性の確信とをそこに持つ詩人である。

四、詩の「純粹性」と「黨派性」

こゝで私は現代のプロレタリア詩人たちがどんな黨派性を闘ひとりつゝあるか――といふよりも、最近に於けるブルジョア詩の「純粹性」について、その本質を探りつゝ簡單に我々の問題にふれておかう。

すでに種々述べて來た通り我々がその詩作の心理、詩作の欲望を階級闘爭の必要と結びつけて闘ひつゝある時、これに反對するブルジョア詩人たちが、詩の「傾向性」「黨派性」を排撃する

立場から、彼等の詩の「純粋性」乃至は「無黨派性」についてのあらゆるデマゴギーを發散しつつあることを我々は知つてゐる。

彼等は曰ふ——詩は詩であつて詩以外の何ものでもない。詩人はその歌ひ度いことをうたふために、何等かの下心や成心をもつてしてはならない。なぜなら詩をうたふことに何等かの成心を持つことは全く詩の「純粋性」「眞實性」を失はしめることに外ならないからだと。

又、花園を荒すものは誰だ！　詩を政治鬪爭の用具にする者は誰だ！、プロレタリア詩は詩に……をしふることによつて裏返しにした奴隷社會の……讃美し、宣傳するものだとも。

最早や我々はこれらかず〳〵の物哀れな誹謗については多くの言葉を用ひまい。なぜなら、たとへ我々のプロレタリア詩が未だ幼弱で、そこには種々の偏向やブルジョア的逸脫が殘つてゐるにしても、全くこの的はづれな惡罵をうける資格はないし、そのことに就てよりも、詩の「純粋性」の絕大な讃仰者であり、詩の無意識の創作を强制してやまない多くのブルジョア詩人たちが、一九三〇年代の今日のあはたゞしい非常時の下で、どんな「純粋性」「無黨派性」をその詩から擁護しつゝあるかを見てみることの方がより敎訓的であるからだ。一つの詩作を引用してみよう。

昇れりこの意氣、櫻の黎明

産業立國、初めて今あり
産業日本、産業日本
産業日本、産業日本
フレー、フレー、フレー
輝ける吾が道、開けよこの翼
國是に一なり、時代と誇らむ

——北原白秋「日本産業の歌」より——

この詩が「詩の純粹性」を擁護し、その無黨派的立場からプロレタリア詩に挑戰してやまなかつた北原白秋氏の作るところであることは最早や言ふまでもない。又、こゝで白秋氏が何を歌つてゐるかも明らかである。

ところで、今我々はこの詩を見ることによつて、これを歌つた詩人の感情に何等の良心がないとか、或は眞に純粹であるとか云へるであらうか。否だ。凡そ一九三〇年代の日本の非常時的心理は詩人白秋によつて代辯せられたこの詩を、——從つて彼等の政治的イデオロギーを宣傳することによつて大衆を收奪することに成功し、慥かにその虚飾に滿ちふくれた腹を叩いて欣ぶに違ひないと考へられる程、こゝに我々は積極化したブルジョア詩の「黨派性」を見ないではおけな

いものだ。とは云へ私は勿論白秋氏が「純粋な詩」の作者たちよりも全く正直に彼等のブルジョア的「黨派性」を表出したことを笑はうとしてゐるのではない。全然反對に詩の純粋性を主張するブルジョア詩人たちの「純粋性」といふことそのことが彼等の「黨派性」であり、それはたまたま白秋氏が正直に積極的に表示してゐるに過ぎないことを言はうとするものである。しかも注意せよ！　ブルジョア詩に於るこの「純粋性」が如何に現實の客觀的眞實を歪曲するにふさわしい神秘の强請であるに外ならないかが、このたまたま正直な白秋氏の積極性に於て馬脚を表はしてゐるかを――。實際、詩人白秋によつて代表せられる日本のブルジョア詩人が、その詩歌の純粋性を强調するにもかかはらず、どれほど「客觀的眞實」への全き無知を宿してゐるかは、考へるだけでも馬鹿らしい程である。

時代は何時も風船玉だよ
そんなものに、かゝはつちやゐられない
だがまて藝術よ
そいつに拳銃を向けるのが
――男らしい決鬪といふ奴さ。

一人の投書家は「詩の純粋」のためには、斯う云ふ風に、その師匠のおろかさを代辯する。若

しこの投書家がその頭にねつ造してゐる愚かな「藝術」に拳銃を向けるよりも、彼が風船玉だとしか考へられない時代の現實をつきつめて考察し、その時代の必要と結び合して詩を實踐したなら、恐らくは「男らしい決鬪」といふことの男らしさをはつきりと認知し得たであらう。

かくて、今や私は我々の詩の黨派性について語らねばならない。それは、けだし簡單で、明白である。

マルクスはかの有名なマニフエスト綱領の最後で述べてゐる。

「プロレタリアは、自己の……他に失ふべき何物も持たない。そして彼は………全世界を持つてゐる」と。

このプロレタリアートの運命について彼の述べたところこそ、亦、我々の詩についても重要でなければならない筈である。なぜなら我々の詩も亦、その文學的な特殊な形態に於て全世界………筈であるし、その世界のすべてをわがものとする確信、ブルジョア藝術のあらゆる努力に對するプロレタリア藝術の歴史的優位性の確信こそ、プロレタリア詩人の全世界を…しようと意志する中に持つてゐなければならないものであるから……。

そこに、我々の「詩の黨派性」の輝ける旗はかゝげられる。そこに、プロレタリア詩人の建設し得る、あらゆる過去の偉大なる詩人の詩よりも偉大、且つ深刻な詩の沃野は開かれる。

だが、我々はここでも更にレーニンの語る言葉を忘れてはならないであらう。

「プロレタリア文化は何處からともなく飛び出して來るものではなく、またプロレタリア文化の專門家と自稱する人々の頭の中で作り上げられるものではない。これらのすべては完全な愚論である。プロレタリア文化は、人類が資本主義社會、地主社會、官僚社會の……に作り上げた所の知識の蓄積の合法的發展でなければならない」。

全く、このレーニンの言葉は、プロレタリア文學（詩）の建設の上にも、そのまゝ優れた言葉としてあてはまるし、――かくして、我々が求むる詩を「一般的なプロレタリア的事業の一部分」となし、「全勞働者階級のすべての階級意識ある前衛によつて運轉されるところの、單一な、偉大な、社會民主主義的（…主義的）機構の『齒車とネヂ』」とするために、あらゆる………とをふみくだいて進む時、はじめて我々は啄木やハイネが集き殘した文學的遺産を、正しく繼承し、發展し得たと言ひ得るだらう。

「我々の文學（詩）は黨のものでなければならぬ」（レーニン）

――一九三三、三、二五、――

三、詩の「純粹性」と「黨派性」（再論）

——併せて、「インテリの限界」といふことなど——

われ〳〵は右において簡單ながら詩歌における「純粹性」と「黨派性」について論じ、黨派性の優位を主張して來た。このことは右に述べられた限りにおいて、今日もそれを否定し得るわけのものではない。しかし乍ら、昨年末來この國のプロレタリア文壇をめぐつて社會主義的レアリズムの問題が提唱され、一方においていはゆる「純粹な詩的精神」といふ言葉が强調せられると共に、他方プロレタリア詩人たちも、かつて主張して來た藝術（詩）の「黨派性」云々を全く置き忘れたかの觀を呈してゐる。今この詩壇（文壇も同樣）的現象について、若干、補訂的に問題のあとをけみしておくことは必要であり、且つ極めて大切である。

いふまでもなく、社會主義的レアリズムの提唱は、藝術家の世界觀と創作方法との關係に關して、從來、われ〳〵が若干、藝術の政治への、イデオロギーへの依存關係を、直線的、且つ單純に考へすぎてゐたのに對して、「藝術の複雜性に關するかゝる單純化された表象（作家の藝術方法はイデオロギーから、一切の彼の——作家の全體としての世界觀から引離されない）の下にあつ

ては、我々は不可避的に作家に對する行政的命令に、單に思想的指導的影響が必要な場合に作家をひきむしることにならざるを得ない」ことが明らかにされ「藝術家が自己の作品中に現實の本質的な方面、その發展の見透し、傾向、目的をより深刻に、より正確に具體化すればするほど、益々彼の作品の中には辨證法と唯物論の要素が多くなるであらう……藝術家は自己の世界觀に依據する。しかしそれは決して一個人の世界觀ではなくして、特定の條件の下に於ける集團の、階級の、世界觀である。我々は藝術に於ける辨證法的唯物論に味方する。しかもそれにも拘らず唯物辨證法的創作方法なるスローガンは——誤れるスローガンである。それは問題を單純化し、それは藝術的創造とイデオロギー的目論見との複雜な關係、複雜な依存を、藝術家と自己の階級の世界觀との複雜な依存關係を絕對的に自律的な法則に變形してゐる」（キルポーチン）ことが修補されたのに外ならない。

從つてわれ〳〵が藝術において黨派性の優位を主張してゐることも、これがブルジョア藝術における「純粹性」の主張との對立關係において思考する限り、少しも過去の主張に修正を必要とするものではないが、ひるがへつてこれをわれわれの藝術創造における實踐的問題として考へる時、キルポーチンも述べてゐる通り、この黨派性の强調の故に藝術家と藝術家の世界觀との複雜な依存關係を絕對的に自律的な法則に變形する、いひかへれば黨派性の强調の故に藝術創造の仕

事を機械的に單純化し、いはゆる現實圖式の非藝術を要求する如き結果を招かずには居れないのではないかといふことが明らかになつたのである。だから、この新しい理論的段階を單純に考へれば、一見恰も藝術創造の仕事が樂になつたごとくであり乍ら、實は益々困難な新しい山頂に向つて突進せざるを得なくなつてゐるので、これだからこそ、藝術創造におけるイデオロギー――技術――形式の諸關係における創作技術の問題が今日、新しくわれ／＼の當面の重要な課題ともなつて來てゐるわけである。

然し、兎も角も作家たちは勿論これらの諸關係を十分に理解してゐ乍ら、文壇的現象としては全く恰も「黨派性」なるものを何處かに置き忘れたかの觀を示しつゝあることは事實である。或る詩人はその極めてまぎらはしい主張を次のやうに述べてゐる。

「存在するのは詩だ。太初から變らぬ詩精神だ。プロレタリア詩精神があり、純粹詩精神があるのではない。作品を包む表面的な面貌によつて恰もまるつきり違つた二つの詩の世界があるやうな誤りはこゝに正されなければならぬ。プロレタリア詩からかうした表面的偏向を排撃せよ。「純粹詩派」なるものゝなかできらきらする裝ひによつていぢけきつた純粹詩精神を新しき詩のもとに奪取せよ。前代この國に見られたあまりにも莫迦げたこの兩派の對立、或は無干渉からすゝんで、詩を再び詩にもちきたらすところまで來た云々」

實際、見ても解る通りこの論者の述べてゐるところは、そんなに理解し難いものではない。すなはち、この論者は從來のプロレタリア詩人たちが詩の黨派性を强調するためにいたづらに排他的にブルジョア詩をやつつけて來たことを非難し、同時にプロレタリア詩そのものゝ表面に現はれてゐた現實の機械的圖式的傾向をも批判してゐるのである。そしてその限りでは仲々正しく純粹である。しかし、だからといつてひろがへつてこの論者の詩學的根據なるものを考察してみるのに、「存在するのは詩だ。太初から變らぬ詩精神だ」と冒頭する限り、詩的精神のあれこれを一樣に塗りつぶし、かゝる詩的精神を生み出す詩以前に生活があり、その生活が進歩的であるか、保守的であるかによつて、やつぱり二つの世界の鋭烈な對立が、太初から格闘して來たことを忘却し去らうとしてゐる點は十分非難をうけねばならない。兎にかくして「黨派性」を主張するの故に、われ／＼が從來詩を劃一的に單純化し、變形して來たことは充分批判せられなければならないとしても、たゞだからといつてわれ／＼の詩的創作から、かつてわれ／＼が主張して來た「黨派性」の眞意を拔き去り、（といふ意味は現實と格闘する科學的批判的精神を拔き去り）詩を骨拔きなブルジョア詩と同一系列に塗りつぶさうとする、非黨派的精神を生み出すことを更にいましめねばならないことは、いふまでもないであらう。まことにレアリズム精神とは、作家たちが歴史的な現實の内在的諸矛盾、すなはち所與の時代の複雜な全體性を、最も具體的に把握しよ

うとする「格闘の精神」である。この「格闘の精神」とは、また畢竟、それが依然としてかつてわれ／＼の主張して來た「黨派的精神」に外ならないであらうことを私はこゝで十分强調しておき度い。

さて、藝術（詩）における「黨派性」を曲解してはならないこと、すなはち「黨派性」の强調の故に單に詩に「政治的課題」を折込めば足りると考へてはならないこと、及びわれ／＼の詩作において、「純粹詩精神」を强調するの故に、こゝでもいはゆる純粹性の亡靈にとらはれて、畢竟「純粹詩精神」の內面をつらぬく黨派的精神を消失してはならないこと等については、右に簡單に述べた通りであるが、これらの問題と關聯して「現代詩に於るリアリズムの問題」——特に詩作におけるインテリゲンチヤの限界といふことに關しても若干ふれておかねばならないと思ふ。

人も知る通り、「社會主義的レアリズム」の提唱と相俟つて、いふが如き「純粹詩精神」といふことの强調を見、又、このことに關聯して「詩人たちよ、觀念的公式的な政治的課題を歌はず、おのれにぎり／＼なところを歌へ、——こしらへものの過去を排棄して、まことおのれにいつはりない感情を歌へ」といふことが、極めて眞劍に主張されて來た。殊にこの「いつはりのない自己」から問題が發展して、或る論者は「インテリゲンチヤの限界」といふことを主張し、ひいては企

業の務は企業の人にまかせおくべきだといふやうな議論をさへ生んだ。私が前述において、ちかごろのプロレタリア文壇では恰もかつて主張して來た黨派性といふことが、全く沒却し去られたかの憾があると述べたのも全くこの「いつはらぬ自己」を巡つて、議論がわき路へそれ遂に「生きた個人」の內在的矛盾が頭を突上げて來たかの患をうけねばならなかつたからである。

しかし、一體それにしてもこのインテリゲンチャが「自己の限界」を自覺せよといふ主張は、我々にとつて仲々大切な問題といはなければならなかつた。なぜなら、實際過去に於る我々の種種な逸脫は、われ／＼が藝術における「黨派性」を强調し、主題の「積極性」を求めすぎたことにあるのでは決してなく、寧ろ、あらゆる逸脫の根源は、作家詩人たちが「己の自覺」にとぼしく、恰も「勞働者・俺たち」を「インテリゲンチャ・俺たち」と置きかへて來たことに在ると私は考へる。勿論この「置きかへ」も、實は我々がおのれにいつはり、徒らに革命的狂騷性にまいしてゐたがためではない。卽ち一般的にいつても智的なもの、意志的なものが特に多量に要求される社會では、その智性への觀念的必要といふことの理解と、更に意志的であるべしとの要求に對する觀念的な答案として、ひとは極めて正直に、その要求に猪突しようとする傾向を持つてゐる。この正直な氣持は、一面からいふなら決して意志的であらうとする己れにいつはりあるものではなく、極めて誠實、且つ良心的な行動でさへある。だから、われ／＼がかつて「黨派性」と

か「主體の積極性」とかの觀念的理解に答へて、一律に政治主義的な機械化乃至は圖式主義に陷つたことも、勿論、當時の社會的現實の要求に答へるインテリゲンチャの良心的な方法として悲しむべき妥當性をも有してゐたのである。しかしただこの妥當性、この正直さにはそれが妥當であり、正直なものであるといふことに限度をもつてゐた。我々は限度を乘り越えたといふよりもこの限度を知らなかつた。そこで一たびこの現實生活において、かつて經驗せぬ闇黑に直面した場合、今迄築いて來た己れが根幹から搖すぶられ、いはゆる敗亡の中の「己への自覺」に、——いひかへるなら闇のどん底に突き落された己れに立ちかへることが出來たわけである。今、インテリゲンチャがおのれに歸れ、おのれの泣きごとを掘り下げてネガティーヴな現實をラヂカルに歌へば、それは能動的進歩的たり得るではないかとひとが強調するのも、全く右に述べて來た所以に外ならないし、私は、けだし、繰返していふやうに、この自覺がかつて意志的な正直さのためにしば〳〵浮き足立てたおのれよりも遙かに正直な、いつはりのない眞實である點において實に「敗亡の中の勝利」たることを肯定せずにはおけない一人である。

　ところで、こゝにこんな文章がある。

「プロレタリア文學運動の唯一の據りどころ、賴みの綱としてゐたところの基本的なもの、一時的な壞滅、また我々の周圍にお互ひが手を組みあつてゐた諸團體の跡かたもない離散、いま我々

の身邊は、文字通り秋風落寞の感が深いのである。そしてこの未曾有の困難と敗退に直面して、從來のプロレタリア文學の陣營に立ち働いてゐた小ブルジョア出身のインテリゲンチャは、にはかにその階級的な基礎をもたない弱點を遺憾なく暴露して、醜くゝも自信を失ひ、希望を失ひ、そしていたづらな焦燥と懐疑とに身をもだえはじめたのである。現在の暗黒と行詰りとを、必要以上に過大評價し、その暗黒の底に輝く光明を無限の彼方に押しやつてしまふのである。そしてその泥沼の底に身を深く沈めて、その醜悪な泥沼こそ眞實であるかのやうに思ひこみ『深刻な苦悶』を苦悶してゐるのである。

　現實の困難な時期に直面して、たゞその暗黒面だけをとり出して、それを必要以上に過大評價し、そして自分のこしらへあげた怪物の影におびえて、立ちすくんでゐては、ますます困難な時期にうち負かされるばかりであらう。」と。

　この論者が過去の意志的な辨證法時代の産物――己れの樂天性の故に現實の闇を闇として見えない人間であれば、それは悲しむべきことだが、しかしこゝで述べられてゐることにも一應の考慮さるべき問題がある。

　實際、インテリゲンチャの限界を自覺せよ、おのれに立ち歸つて正直であれ――と、斯ういふ議論が一方で強調された時、これを肯定しようと欲しないものはまづなかつた。しかし乍ら、こ

のために論者が「企業の歌は企業の詩人にまかしておけ」と言ひ放つた時我々はその言葉の正しさを肯定しながらも、論者の胸にみなぎる一種の文學的懐郷病とでもいふ風なものの存在を疑惑せずにはおられなかつたものである。けだしこゝで懐郷病といふのは「大昔から人間の魂の上に不思議な影響を與へた、それは故國の地に幸福な光を投げる病氣である。それは又突然に過去の不幸と苦しみとの凡ての追想を消してしまふ病氣でもある」（聖書物語）いひかへるならインテリゲンチャが自己の吟味の中で「泣きごとを唄ふ」部分ばかりを徒らに見、かゝる泣きごとを破らうと欲する高らかな意志的精神を忘却しさらうとする病氣である。こゝに私は必ずしも現在の日本的現實の闇をいふが如き一時現象と見ようとか、或は「ハイネが自分の弱さやインテリの限界にもかゝはらず、その限界を破つて、おのれを眞に感動せしめたシレジャの職工達の生活を歌つた」又、「われ／＼の中でもすでに（ハイネのやうに限界を破つて歌ひつゝある詩人が）生れつゝあり、又生れるであらうところの、よき詩人たちについても語り得る」と述べた論者の、ハイネの時代と今日の日本的現實の闇との性格的な相違性を見ださうと欲しない議論に賛成するものではないが、かゝる懐郷病の傾向をいましめることに、やつぱり決然たる意志的必要性を欲せずにはおられぬものだ。

われ／＼はインテリゲンチャ的泣きごとを歌つてはならない。なる程、この現實においては、

たゞ泣きごとをしか歌へないであらう。兎に角、そのやうな自己及び現實の歴史的・具體的な内在的諸矛盾――かゝる諸矛盾に對して火を吐くやうな格鬪の意志的精神を歌ふことこそ、われわれが闇をつらぬき、闇とおのれの限界を破り得るただ一つの方法であらうと考へる。と同時、しかし乍らそれにしても次のことを考慮することを忘れてはならないであらう。卽ち實際的についてて、われ〳〵が如何に格鬪する精神の熱意を欲するとしても、それが現實に地盤を持たない限り結局それのむなしき空想に終るであらうことは云ふまでもなく、若しそれわれ〳〵が眞にこの闇を破り、いはゆるわれ〳〵の限界性を打破することに猪突するを欲するなら、やつぱりそれが現實的場面における勞働者階級との接觸、自己の勞働者化のための鬪爭、特にかつてわれ〳〵が失つた文學サークルの意義を思ひうかべる時、あすこそがわれ〳〵の唯一の勞働者的鍛練場だつたこと、われ〳〵の唯一の現實に外ならなかつたこと等を思ひ起さずには居られぬだらう。けだし私は今痛切にそれの喪失がおしまれてやまない一人である。

四、啄木の歌について

――創作方法の問題と關聯して――

一、はしがき

「歌の創作も亦、具體的、歴史的現實の內在的諸矛盾における眞を映す文學的方法の一つである。」と、斯う云ふ命題を前提する時、私は謂ふところの「定型律短歌」「自由律短歌」（所謂口語歌）の創作方法に關して、つねに一つの疑問を持たざるを得ないものだ。卽ち、それは「定型律短歌」が「現實の生活とは極めて縁遠い、古典趣味への回顧と傳統的な短歌的境地への逃避」――「封建的形式主義の固執」に外ならぬが故に、「それが專門的歌人の自慰的玩弄物としてのみ存在するものであり、從つて現代の青年に對しては何等の魅力を持たないものである」とか、又、「自由律短歌」が、古典的定型律短歌に滿足し得ない一群の青年によつて、そこに封建的イデオロギーに對するブルジョア・イデオロギーへの發展としてこれを生み出し乍ら、（その意味で彼等の自由律短歌が歴史的には一應の進歩的な役割を果してゐるとは云へ）なほそれらの「非定型派の作品は共通する基本的特徴は著しく主觀主義的、觀念主義的であり」、從つて彼等の所謂詩的感情の高揚といふことも畢竟空想の飛躍であるか、或は近代的感覺の陶醉的氣分の抒情に他ならないとかいふことについて疑惑を持つといふのではない（それなれば非常に明らかなことだ）。それよりも私の問題とするところはその一歩手前の問題といふか、或は一歩その奥の問題といふか、兎

も角も「定型律短歌」が封建イデオロギー的形式主義的の産物であり、又所謂「自由律短歌」（口語歌）がブルジョア・イデオロギー的形式主義的であるとかいふ、そのやうなレッテルを貼りつける前に、現實の眞を映す乃至は眞に接近するといふ我々の文學的詩的創造の事業が、それらの所謂「定型律短歌」又は「自由律短歌」の創作方法で可能であるか、否かに就ての考察すべき數數の必要を感ぜずには居られぬものである。

では、果して眞を映す方法とはどんな方法か？――それを、私は啄木の歌について、更に啄木の歌を繼承し、且つブルジョア短歌を批判的に研究することによつて、そこから短歌をプロレタリア詩へ解消させるべく、その通路を發見した舊プロレタリア歌人同盟の詩人たちの仕事について若干檢討してみることにしよう。

二、啄木の歌について

こゝに啄木が「歌のいろ〳〵」といふ感想の中で書いた、次のやうな文章がある。

――凡そすべての事は、それが我々にとつて不便を感じさせるやうになつて來た時、我々はその不便な點に對して遠慮なく改造を試みるが可い。またさうするのが本當だ。我々は他の爲に生きてゐるのではない、我々は自身のために生きてゐるのだ。たとへば歌にしてもさうである。我

我は既に一首の歌を一行に書き下すことに或不便、或不自然を感じて來た。其處でこれは歌それぞれの調子によつて或歌は二行に或歌は三行に書くことにすれば可い。よしそれが歌の調子そのものを破ると言はれるにしてからが、その在來の調子それ自身が我々の感情にしつくりそぐはなくなつて來たのであれば、何も遠慮する必要がないのだ。三十一文字といふ制限が不便な場合にはどしどし字あまりにやるべきである。又歌ふべき内容にしても、これは歌らしくないとか、歌にならないとかいふ勝手な拘束を罷めてしまつて、何に限らず歌ひたいと思つた事は自由に歌へばよい。かうしてさへ行けば、忙しい生活の間の心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じを愛惜する心が人間にある限り、歌といふものは滅びない。假に現在の三十一文字が四十一文字になり、五十一文字になるにしても、兎に角歌といふものは滅びない。さうして我々はそれに依つて、その刹那々々の生命を愛惜する心を滿足させることが出來る。」と。

我々はこの短かい感想の中からいろ／＼のことを考へさせられるだらう。即ち、第一には短歌といふ詩的形態の固定化し、形骸化しつゝあるのに對して、これを破壞するものが、新しい生活内容の必然に外ならないことを叫び乍ら、啄木が如何にこの感想を書いた當時、なほ短歌の傳統的形式の中に坐ることを不自由に感じなかつたものゝ多數なのに憤りを感じてゐるかゞはつきりと感じられる點、第二には、しかし短歌の固定化に對するかゝる憤りにもかゝはらず、詩人の仕

事を、從つて短歌そのものについても、未だ啄木がこれを社會の中において考へることが出來ずに、たゞ個人の生活の中に置いて、「消えゆく刹那々々の感じを愛惜する心」のための慰安物とし乍ら、そこに「歌を悲しい玩具」とせずにはおられない苦悶を自らの中に經驗しつゝあることが感じ得られる點、等々、そしてこの前者が啄木をして後代の詩人たちのために歌の革命の道を開かしめ、又この後者が同じく悲劇の方向を指示したものであつたことは、我々のすでに知る通りである。

ところで、では何がどんなに歌の革命の道を開かしめ、又、悲劇の友となる原因をつくつてゐるか？　といふよりも、こゝに啄木がその歌の中で、彼のどんな眞實感を歌つてゐるか、――その眞實感が果してどれだけ客觀的現實のまことゝとして把握されてゐるかを、一つ二つの歌を拾つて具體的に研究してみよう。

友も、妻も、悲しと思ふらし、――
病みても猶、
革命のこと口に絶えねば。

つね日頃、好みて言ひし、

革命の語をつゝしみて、
秋に入りけり。

秋の風、我等明治の青年の
危機をかなしむ
顔撫でゝ吹く。

明治四十三年の秋の
わが心ことに
眞面目になりて悲しむ。

明らかなやうに、我々はこれらの歌々から、その一つとして嘘を感じるといふことはない。そこには先づ病啄木の「病みてもなほ革命のことを口に絶えない」激情の風貌と、それに對置された悲しげな妻や友の不安に滿ち〳〵た横顔――及びさうした現實の中に置かれてゐる啄木が、尙且つかゝる現實そのものをやる瀬なく愛惜し、觀照し、しかも歌ふことによつてわづかに自慰することに滿足しようとしてゐる姿がはつきりと感じとられるし、又、この「病みてもなほ革命の

ことを口に絶えない」啄木が、明治四十三年六月のあの「……」に會つて、遽かにその「實行」といふことをしみ〴〵考へ得ない革命思想家・彼自身の、所謂インテリゲンチャ的傀儡性に激しい內的矛盾を感じて、最早や全く「革命」のことを口にするさへ謹しまねばならなくなつた自身に限りなく情愛を感じつゝ明治四十三年の秋を觀照しようとする彼の眞實感を、他の歌々から感じないでは居られぬものだ。我々は繰返して謂はう。こゝには噓はない。だが、それにしてもこゝに噓のないといふことは、啄木がその歌の眞實を個人の生活の中に置き、彼をして「革命のことを口にする」さへ謹しまねばならなく感じさせるに至つたものが何であるかといふ歴史的現實の客觀的主體から、あやしく眼をそらさうとした眞實感であることに我々は注意しなければならないのである。

――これは果して正しいであらうか？　といふよりもこれが果して客觀的現實の眞を把み、その複雜な內在的矛盾を實感として歌ひ上げるための正當な方法であると言ひ得るであらうか。否である。我々はこれらの歌々から、單に一人の進步的詩人の封鎖された感情と、その吐け口のない情態（一個人的眞實）を見出し得るとしても、遂に一人の詩人に……的な感情を抱かせずにはおかないものが何であつたかを考へるに至り得なかつたと同じ理由から何が故に歌を「三十一文字の制限」から解放するか、「又歌ふべき內容にしてもこれは歌らしくないからといふ勝手な拘束

を罷めてしまつて、何に限らず歌ひたいと思つた事を自由に歌へばよい」といふ必要が何處から生れて來るものであるかをその歴史的社會的な本質として理解し得ない、——さうした意味での創作方法上の不充分さを認めずには置かないものである。

けだし、歌の創作を「忙しい生活の間に心に浮んでは消えて行く刹那々々の感じを愛惜する心」の表現であるとする啄木の悲劇は、又、「何に限らず歌ひたいと思つたことを自由に歌へばよい」といふことに於てすら、眞に「自由の歌」としての實感を、內容、形式共に、のび〳〵と歌はしめないものであることを、我々は知らねばなるまい。かくして啄木の歌の不自由さ、その創作上の拘束を打破して、歌の眞實を我々の社會的生活の中に置き、そこから出發して具體的・歴史的な複雜極りない社會の內在的矛盾を眞實に把握しようと欲するところから、謂ふところのプロレタリア短歌をプロレタリア詩にまで發展解消せしめねばならない必要を見出し得たのが、舊プロレタリア歌人同盟の歌人たちの努力だつたのである。

——私は次の章に於て、プロレタリア短歌が何故プロレタリア詩に解消しなければならなかつたか、といふよりも、理論として詩への發展的解消を承認し乍ら、未だプロレタリア詩といふよりもプロレタリア短歌を歌ひつゝある詩人たちの、その創作方法に關する若干の問題に就てこれを究明してみよう。

三、プロレタリア短歌について

すでに述べて來た通り、啄木の歌の長所は古典的短歌の形骸化し、固定化しつゝあるのに對して、歌に新しい內容を設定することの自由及びそのためにはみ出す言葉が舊定型を打破する點に於ても自由なることを認容して、歌の時代性を强調すると共に、その革新といふことが單に形式上の改革によつてのみ可能とさるべきでないこと——卽ち、新しい內容こそ亦、必然に新しい形式を生み出す根柢となるべき意義を明示したところに在つた。この功績はけだし啄木をして、他の明治短歌の革新家共と、全くその類を異にせしめるところのものである。と同時に、我々はまたかゝる特長にもかゝはらず、彼がその歌の眞實性を我々の現實的生活に於ける複雜な矛盾の全體性の中に見出さうとするよりも、より多くそれを、「生きた個人」の內在的矛盾の中に置かうとしてゐる處に、實に眞實ではあるが、その眞實性を極少し去つたかの如き不充分さを殘してゐるのを見落すことの出來ないものだ。ところで、所謂プロレタリア短歌はどう彼の遺產を繼承してゐるか。一つの作品について具體的にそれを見てみよう。

堪へても堪へても溢れる淚で
新聞の寫眞もぼやけてしまふ

ああ——

今の君の顔こそ

はつきりと僕の胸に烙印(やきつけ)ておかねばならぬのに

×

新聞記事の上に思はず落した涙を

同志Kよ！

笑はないでくれ

僕達はこの涙を

前進への拍車とすることを忘れはしない

×

君の……を僕らの心臓に叩きこみ

君の遺志を前進への拍車とする

同志Kよ！

君の……を踏み越える無数の跫音(あしおと)を

君はハツキリきいて呉れるだらう

×

無氣味な沈默が
却つてみんなの決意をかたくする
目と目がかち合つて燃える焔が
みんなの胸に憤激を波立たせる

——渡邊順三「同志Kよ！」——

誰だつてこの歌を見て、これが我々のプロレタリア詩（謂ふ意味は形式的制約をうけずに、歌うとする內容を自由な言葉で使驅した詩）と考へるものはない。と同時に誰だつてこの歌を見て、それが謂ふところの自由律短歌（謂ふ意味は口語歌と稱する不自由なブルジョア短歌）と同樣に考へるものはないであらう。このプロレタリア自由詩とも、所謂自由律短歌とも區別さるべき一つの詩的形態を私はプロレタリア短歌と呼ばうとするものである。

ではこのプロレタリア短歌が啄木の短歌上の遺產をどう生かし、しかもどの點で我々に不自由であるか？　先づ言つておきたいのは渡邊氏のこの作は相當優れた作品であるといふことだ。明らかなやうに、こゝではこの歌の作者が「歌を一行に書く」ことの退屈さや、又三十一文字の型に嵌めこむための無駄な努力を揚棄し、更に「歌ふべき內容にしても、その歌ひたいと思つたこ

とを自由に歌つてゐる」點、及び「歌の眞實性を個人の生活の中に見出さうとする努力よりも、より多く歴史的社會的生活の中に置きかへようとしてゐる」點で、僅かに、啄木を批判的に繼承してゐることが認知される。ところで、にもかゝはらず我々にはこの歌がプロレタリア詩として、如何にも中途半端に感じられるのは何故か？　よく見ると、この作品は四つの部分に區切られて、それ〴〵に分離した處の獨立の內容を持ち乍ら、しかも題材たる同志Kへの哀悼に於けるプロレタリアートの階級的決意を、その中心的主題とすることによつて統一してゐる。これは極めて我々のプロレタリア詩（自由詩）とよく似た構成、テクニツクを用ひたやり方といふべきである。だが、似てゐるにもかゝはらず、我々がなほこの歌を我々の詩と同一に考へることの出來ないのは詩を幾つかの聯に區切つて、一つの主題を表現するといふことが、決してこゝで用ひられた如く、分離された內容によつて完結した章句を幾つかを並列すれば詩であるとするのではなく、一つの聯からよしその意味を十分に解することが出來なくても、その聯が次の聯或はその次の聯の前提をなし、各聯、各行が有機的な關係に於て構成されるところの、拔き差しのならない要素として、聯を區切られるところに、我々の詩的方法との相違性を見出し得るからである。

のみならず、我々の詩にあつては作者がその歌はんとする主題を、あらゆる多面な認知の上で概括し、且つ歌ふことによつて現實を生きた形象の眞實に置かうとするに反して、こゝでは作者

の主觀的觀照的感情がたゞプロレタリア的な言葉で獨白されてることによつて、あらゆるニュアンスの伴つた現實をなまなまと概括しようとする努力を全體的に缺乏させてゐるところに、――そして何よりも詩製作の上の「發想」といふ點で明かに我々の方法との全き區別が感じられる。

かくして我々は實際プロレタリア歌人の積極的なプロレタリア的努力にもかゝはらず、かへつてそこにはその作品に共通した本質的な特徴――觀照主義的、觀念主義の累積、及びその所謂詩的感情の高揚といふことが畢竟現實を飛躍し、且つ、それが謂ふところの自由律短歌の社會的無知、ナンセンシカルなのに對して、たゞ飛躍的な現實のプロレタリア的感情をそれに置きかへたといふ意味での近似的表現を見る外は、寧ろ、多分に自己陶醉的氣分の叙述に陷入るの他ならないといふ點で、尖銳にわれわれのプロレタリア詩と對立して來るものを感じないではおられないものである。

明らかに、プロレタリア短歌の悲劇は、それがプロレタリア詩（自由詩）にちかいといふことよりも、その詩作の方法が自由律短歌者のそれと似通つてゐるといふ點にある。しかも、かゝるプロレタリア短歌が、かつてその理論に於てプロレタリア詩への發展的解消をとげ、いはゆる短歌運動の歷史的任務をさへ終つたかの如き觀を呈してゐるのは、ひつきようこの「觀を呈してゐた」ところに問題の解決があつたと云ふのではなく、寧ろわれわれはこゝでは客觀的現實の眞を

映す乃至は眞に接近するといふ我々の詩的藝術的方法が、最早やレーニンの所謂「現實への接近のあらゆる種類の無類のニュアンスを伴つた、生々とした多面的な認識としての辨證法」を我々の詩製作の實踐に適用することとの以外にないことを物語つてゐたに外ならないものと解するのである。

實際、我々の謂ふところのプロレタリア歌人が、その理論において、短歌の終局を、認定し、プロレタリア自由詩、の開花を自身のうちに夢想してゐたことを知つてゐる。が、それはあくまでも觀念的に夢想してゐたにすぎないのであつて、彼等が遂にそれを詩製作の實踐に於て體得しなかつたところに、自らの悲劇をもつてゐたこと、及びこの悲劇の實踐的克服の過程に、依然としてその歴史的任務を未だ終局するに至らない、短歌運動の嚴在することを我々は理解しなければならないのである。（註一）

註一、斯う云つたからとて、我々は惰怠に、舊プロレタリア歌人同盟の諸君の仕事を無駄なものと考へてはならない。私は不幸にしてそれらの諸君がその理論的到達にも拘らず詩作の實踐に於て、未だ多くのブルジョア短歌者流を揚棄し去つてゐないことを認めずには居れないが、しかしその理論的影響が新しく擡頭しようとする工場農村の歌人たちに新しい詩作の認知と方法とを與へて、「短歌の清算」に大きな力を示しつゝあることをよく知つてゐる。

四、詩の自由について

かくて、今や客觀的現實の眞を映す乃至は眞に接近せんとする我々の文學的詩的方法が、プロレタリア自由詩の方法による外にないことを私は考へる。

即ち、こゝで我々が「プロレタリア自由詩」と云ふのは、歌ふべき詩の（內容、形式が共に）自由であると同時に、それを歌ふことによつて、現存するもろ〳〵の……との衝突を引き起すことをも敢て恐れない詩を意味する。從つて、我々は歌を三十一文字の定型に嵌め込み、封建的、古典的回顧趣味にとゞ籠らうとするもの「自由律短歌運動こそ正しきプロレタリア短歌運動である」として「短歌の內容に無產者意識をとり入れなくてはならないといふことに異論はない。だが現在のプロ歌人――マルクス主義歌人――のやうにストライキや、小作爭議や、ブルジョアに對する反抗、鬪爭ばかりが無產者意識ではなく、無產者の生活には戀愛もあり、充分滿足した生活もある。いくら無產者でも決して朝から晩まで不平ばかり言つてゐる筈もないし、鬪爭ばかりしてゐる筈もない。それらの種々相こそ現實の無產者の生活であつて、プロ歌人のいふやうな鬪爭や反抗は一部分にしか過ぎない」「マルクスにも戀愛があつた！」「資本主義は旣に搾から貸への發展をとげて信用主義社會に入つてゐる！」（土田杏村）と稱し、自らの無知を公然と反動文化の

支柱に役立てんとするものに對する、公然たる自由詩人としての闘爭を宣言する。そこに我々の詩・文學の黨派性の旗をも公然とかゝげる。

しかし乍ら、こゝで我々の詩が自由であると云ふことは、だからといつて決して詩が内容・形式共にアナキーであつてよいといふのではない。我々には現實をゆがめ、本質を揑造するといふやうなことがあつてはならない。ブルジョア詩人はしばしばさういふ點に到ると、それを作家の想像力や空想の力に歸し、結局詩を詩人の獨白する空想に到らしめることによつて現實を歪曲し去つてしまふ。我々は勿論、想像力や空想する力を否定しようとするのではない。しかし、我々の想像力や空想力をつねに刺戟し擴大し、豐富にするものが客觀的現實であり、その現實への肉迫のための內的複雜性が、詩人をして激しく眞實の創造へ立ち向はせるものであることを十分理解しなければならない。

かくして、我々は更にこの社會が如何なる方向に向つて進んで行くか、又この社會に於て何が本質であり、何が偶然であるか、等々を認知することによつて、この複雜極まりない社會現象の中から、本質的なものと偶然的なもの、及び有益なものと有害ものとを選りわけ、そして本質的なもの、有益なものゝ必然に進んで行くその方向と觀點からそれを現實への肉迫として歌つて行く時に、はじめて我々の詩が眞に自由な詩として、大きな步幅を持つことが出來ることを知るのである。

我々は詩を生きた人間の感情として歌ひ上げなければならない。生きた人間の感情——すなはち現在の歴史的瞬間に於ける勞働者農民の日常生活と鬪爭との中から、具體的にして全面的に泌み出されて來る感情そのものとしてゞある。

三月の午後
雪解けの土堤ツ原で
子供等が蕗のとうを摘んでゐる
やせこけたくびすぢ
血の氣のない頰の色
　ざるの中を覗き込んで
　淋しさうに微笑んだ少女の横顏のいた〳〵しさ
おゝ　飢えて寒さの中に
今も兇作地の子供等は
熱心に蕗のとうを摘んでゐる。

子供らよ！

お前らの兄んちやんは
何をして……縛られたのか
何の爲に……へ送られて行つたのか
姉さん達はどうして都會から歸つて來たのか
お前らは知つてるね
何十年の間、お前らの父ちやんから借金を捲きあげてゐた……は
お前らの生活を保護してくれたか？
おまんまのかはりに
苦がい蕗のとうを食ふお前らの小さい胸にも
今は……が燃えてゐる

天災だと云つて
いゝしらを切つたのはど奴だ！
「困るのは小作だけではない」
さう云つた代議士（地主）の言葉にウソがなかつたか

子供等よ！　いつ地主の子供が
お前等と一緒に露のとうを摘みに行つたか
いつ、地主のお贈に
ぬか團子が轉つてゐたか
修身講話が次から次へと…………現れて來たいま
お〻　お前らのあたまも「學校」…………

——長澤佑「露のとうを摘む子供等」から——

この詩は決して、我々の詩のとび切り上等な見本にはならない。今から見れば多分に圖式的ですらある。しかし、我々は少くともこの詩人が内包する詩的精神に、その詩の形式・内容共に、自由にして且つ何ものをも恐れることなく歌ひつゞけて行く努力を見得るであらう。

我々は斯くの如く、（よりいゝ努力をもつて）歌はなければならない。我々が啄木の歌をうけつぐ唯一の方法は、かくして我々の詩の根柢を社會的生活の間に置き、現實への肉迫のための生きた鬪爭として、これを押し進められる時にのみ可能であることを知らなければならないと私は考へるものだ。

——一九三三、四、一一——

追記。右の文章は部分的に修正したが、多分に機械的である。――一體、私は短歌が歴史的必然的に自由詩に解消すべきものであると今も信じてゐる。しかし、今日過渡的な段階において、プロレタリア短歌」を作つてゐる詩人たちが、その作品を自由詩であると稱することには全然反對するものである。

短歌が自由詩に發展解消するといふことは、昨日まで短歌を作つてゐた人が今日から短歌をつくらなくなり、直に自由詩の世界へ飛び込み得るとか或は飛び込まなければならないといふのではなく、今日、斯うして我々がいろ／＼と短歌の問題を論じてゐるうちに、短歌の作者が一人へり二人へり、比較的長い時間を要し乍らも段々に解消の實をあげ得るものと考へる。この文章はさういふ考へから、現代のプロレタリア短歌を批判的に檢討しようとしたものであるが、今日短歌の問題は、相當複雜な方向に移行してゐるので、あまり充分とは考へられないやうである。特にプロレタリア短歌の悲劇がブルジョア的自由律短歌への類似に在るといふ見方は、寧ろそれを形式方面からのみ眺めたうらみがあるので、この點は十分に批判しなければならない。私は短歌の形式（五、七、五、七、七）といふことを考へる場合、この形式を完成するに到つた內容の封建性といふことが、昔から變らぬ觀照主義（あゝと感じ、はれと咏ふ自己咏嘆）に依存するのではないかと考へてゐる。或る人はこの形式を民族性との關聯において見てゐる人もあるが、私はさういふ見方にもまだ多くの問題が殘されてゐると考へる。

兎まれ歌の問題はこれからである。この文章でも次の文章でも、私はプロレタリア短歌といへば問題の對象を渡邊順三氏の作品に向けてゐるが、これは同氏がその方面の代表者であるといふことの以外に他意ないことを斷つておき度い。

五、再び、啄木の歌について

――詩の機能に關聯し乍ら――

一、問題の提出

前章に於て私は啄木の歌を問題にし乍ら、若干プロレタリア短歌の不自由さについても觸れて來た。その時、私は「プロレタリア短歌」（今では斯う云ふ風に呼ばないで「短かいプロレタリア詩」といふ風に呼ばれてゐる。）の持つてゐる悲劇が、プロレタリア自由詩に接近してゐると云ふよりも、かへつてそれがわれ〳〵の排撃する所謂自由律短歌（ブルジョア的形式主義の産物）に類似してゐる點にあると述べた筈である。このことはいづれ後ほど明らかにする通り十分考慮さるべきではないかと思ふ。然るに最近多くのプロレタリア短歌作者は、彼等のプロレタリア短歌をもつて、「短かいプロレタリア詩」と、呼び、所謂ブルジョア自由詩に於ける一行二行の短詩に對應して、所謂「プロレタリア短詩」の必要性を强調してゐる。曰く

「自分達は短かい形式の詩で、現實をスカツと切つた斷面を見るやうな詩をつくりたいと思ひ、

さう云ふ考へで今の詩を歌つてゐる。」

又「ブルジョア詩に於ても、極めて短かい形式（形式と云ふよりも叙述と云つた方が適當であるかも知れない）の詩で、ブルジョア的實質とでも云ふ風なものを歌つた詩があるが、我々にあつてもさう云ふ端的な詩（短かい形式乃至は言葉の字數の少ない詩）がどし／＼生み出されてよい」と。

この問題については、私もそれに贊成する一人であるが、しかし一體我々のプロレタリア詩運動の内部に、果して謂ふ如き「現實をスカツと切つた斷面を見せるやうな短かい詩」が、特別に存在する可能性を持つてゐたらうかと云ふ疑問を、及びかゝる問題の提出の中には、所謂プロレタリア短歌作者たちが自身の發展を阻止するものから、それを打破して進み得なかつたところの事實を、不知不識に蔽ひかくさうとした或る種の合理化が宿されてゐるのではないかを私は考へずには居れない一人である。

こゝに私はこれらの問題を中心として、若干プロレタリア短歌の諸問題（謂ふところの短詩型のプロ詩なるもの）についての考察を致し、旁々、歌の創作を「忙しい生活の間に心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じを愛惜する心」の表現であると云つた、あの啄木の悲劇についてもう一度ふれてみたいと思ふ。

二、プロレタリア短歌の制約

一體、プロレタリア短歌がかつて詩（自由詩型のプロレタリア詩）に解消すると云ふことが云はれてから、私は其の後この問題が何等具體的な問題とされず、從つて少しも、新しい發展を見てゐないやうに記憶してゐる。卽ち、私の記憶に間違ひがなければ、最初、プロレタリア短歌が詩に解消すべきであると云はれた時、その理論的根據となるものは、大體左の二項目に該當してゐた。

一、從來プロレタリア短歌と呼ばれつゝあつたものは、その內容上から言つて、そこに必要とされるものがプロレタリア的な內容そのものでなければならないことは、少しも自由詩型のプロレタリア詩の場合と變るところはない。

二、殊にプロレタリア短歌がこの新しいプロレタリア的內容を盛るためには、從來、歌を三十一文字に書きつらねて來た重苦しさから全然解放し、自由に字あまりを用ひて歌はねばならないことは言ふまでもないし、又、そのやうに字あまりを用ひて出來上つた歌が、それを詩形式上から言つて何等自由詩型のそれと變りないことも自明でなければならないと――

かくして、プロレタリア短歌はその內容上からも、形式上からも全く自由詩そのものの中に解

消さるべきであつて、從つて、これまでプロレタリア短歌運動と稱し、そこに廣汎な歌の愛好者を結集させようとしたことの誤謬からも淸算して、これを全然プロレタリア詩運動そのものの中に抱括し、そこから歌の愛好者をプロレタリア詩運動の中に組織せねばならぬと云ふのが、當時から今も一般に理解されてゐる理論上の到達點であつた。

　が、これは果して正當な解決だつたと言ひ得るであらうか。今にしてみれば、私はこれを若干修正的に考へねばならぬ。なぜなら、なる程一應そこに言はれてゐる限りでは問題は解決したやうに考へられ乍ら、それにもかゝはらず、これが一を知つて二、三の解決にまで到つてゐないと考へると云ふのは、この解決の中に多分に形式主義的な理解がふくまれてゐて、全く詩を自由な形式で歌ふことと、所謂字あまりを用ひて歌つた短歌が、その外形上の類似性にもかゝはらず、眞に自由な歌として考へ得るかの問題に多分の混亂が宿されてゐるからである。即ち、そのことは次に掲げるプロレタリア短歌を分解してみることによつて明らかに理解出來る。

五月一日！(7)
今日の青空に(8)　響きわたる(6)　歌聲(4)
林立する(6)　……(4)
今日こそ(4)　俺達の(5)　示威の日(4)

ガッチリ　腕組んだ　女工さんの　顔までが
生き生きと　輝いて　ゐるではないか

×

今日ここに　腕組んだ　勞働者は
みんな同じ　憎しみを　胸に燃し
海を越えて　はるかな　全世界の　仲間にも　呼びかける
五月一日　この日の　闘ひこそ
世紀の　曉への　一筋の途だ

×

逞しい　幾萬の　足どり
眞黒い　行進の　怒濤
街上に　渦巻き流れる　歌聲
團結の力に　嵐となつて　示威する
五月一日
この日こそ　たゝかひの日

明らかなやうに、我々がこの歌の組立てから感じるものは、決してそれが單なる自由調ではない。必ずやそこには何等かの整齊をもつた音調が約束され、それが基軸となつて、歌の韻律を調へてゐることが十分理解されるであらう。

例へば、第一聯について見よ。そこには、六五調、六四調、五四調、四五調とでも云ふやうなものが、その韻律的基軸となつてゐるし、第二聯、第三聯に於ては若干の五五、七四を見る他は、これまた五四、五六、六五、六四の音調が整齊よく配列せられてゐるのが見受けられる。が、一體これは何を意味するであらうか。言ふまでもなく、それはこの歌の作者が、歌を三十一文字（五七五、七七）で歌ふ拘束から解放された代りに、歌の三十一文字が持つ、性理的な調律を繼承し、再びその肺活量の大小による音量の一息二息から來る美しさを格調化しようとしてゐるに他ならないものだ。これは彼等が一旦破壞した歌の定型を、かつてその定型が生み出されたと同じ性理的な出發點において、たゞそれをより複雜に重ね合すことによつて、原型を内部にかくしひそめたに過ぎないのである。しかも我々は全くこれと同じ方法を、所謂自由律短歌の骨子をなすものの中からも感じられる。卽ち、前回夕暮の歌を一二引例してみよう。

春だ春だよ（5）｜雪代だよ（6）｜谷川が（5）｜氣持よく（5）｜咽喉を鳴らして（7）｜ゐるではないか（7）

4　4　3　6　5　7　5　5
キンキン　裸體が　そばで　ふるへてゐる。水銀が　凍てついてゐる　私は　トゲになる。
5　4　5　7　7　5
私は　みるまに　トゲになる。觸れるもの　あらゆるものに　突き刺さる

——前田夕暮——

我々は決してこの歌の內容が前者と同樣プロレタリア的であると云ふ風に考へることはない。然るにこゝで用ひられてゐる言葉の調律は、全く前者が音量の調節に主眼をおいて、五九、五七、六五、六四、七七等の語數を反覆して來たと同じやうに、それは一見さながら自由の形式で歌つた如く見え乍ら、しかもその基調をなすものが前者と同樣三十一文字のより複雜た字あまりを用ふることによつて、歌を百字、二百字に歌ひあげてゐるに過ぎないことを容易に理解することが出來るであらう。けだしかゝる方法はまこと日本短歌が幾百年來襲踏して來た短歌的發想を固守したものと云ふべきであつて、若し、我々が眞に新しい時代の內容を、自由に藝術化さうと欲するなら、決してこれらの歌人達が頑固に把持しつゝあるやうな形式的約束の上に、詩を形象化するやうなことはしまい。そのことは更に次に示すプロレタリア詩を分析してみることによつて明らかにされるからだ。

5　3　6
貪慾な　……が　生きてゐたら
5　10　8
君達の　マグニットストロイに　氣絶するだらう

だが(2) 俺達の(5) 工場に(4) 連れて来て見ろ！(7)
たちどころに(6) 息を(3) ふきかへすに(6) 違ひない(5) 地球には(5) まだ(2) 無數の‥‥が(7)
その從者どもが(8) ぶ厚い唇から(10) ‥‥の(5) 牙をむいて(6) ゐるぢやないか(6)
それらの(4) 工場に(4) 勞く者の(7) 挨拶を(5) 今こそ(4) 全世界から(7) 君と(3) その仲間に(6)
送らねばならぬ。(8)

——中原龍吉「同志カルミコフ」により——

こゝには最早や何等の約束をも見ない。それは言ふまでもなく何等かの言葉の調律をもつて築かれたものではあるけれども、その調律は前の二者が歌をつくらうとして先づ歌の三十一文字の形式定型を思ひ浮べ、且つそれを暗誦することによつて詩を形象化さうとした發想とは全然意味を異にし、全く新しい內容そのものを如何に傳達するかが最も眞實な調律を生み出し得ることになるか、——謂ひかへるなら、新しい內容をそれとして傳へんがための、そこに必要な韻律——內容律を構成し、且つ自由に形式化さうとしてゐるに外ならない、それは全然前者と別物であろ。けだし、かゝる方法こそ全く我々のプロレタリア詩がそれを歷史に誇りとする最大の自由性とも云ふべきものであつて、それこそ、眞に現實の眞實に迫り詩の自由を愛するものゝつねに向つて進むべき途と云ふべきであらう。

現され、我々はかくしてプロレタリア短歌の悲劇が、全くその性理的な格調の上で築かれその内容における觀照性と共に形式的にも所謂自由律短歌の類似としてのみ存在することを理解し得る。と同時に又、かくして、我々がかつて理解したプロレタリア詩への解消論も、それがかゝる重點を理解しなかつた時代の誤れる產物にすぎないことを容易に知ることが出來る。從つて、今や多くのプロレタリア短歌作者たちが、彼等の所謂「短かいプロレタリア詩」によつて、「現實をスカツと切つた斷面」を見ようと、欲したことも、それが畢竟自己の短歌性の合理化以外にないことは言ふまでもないであらう。けだし「短かいプロレタリア詩」の問題は別個に考察されねばならない。我々には果して、謂ふ如き「現實をスカツと切つた斷面」を見ることが可能であらうか——それを私は次のところで考察してみよう。

三、「現實をスカツと切る詩」とは何か

先づ、何が「現實をスカツと切る」かを考へる前に、我々の考慮を拂はねばならないことは、文學に於ける詩と小說の機能についてゞある。このことは決してこの二ツの文學的ジヤンルの間に、何かの絕對的な區別を設けようと試みることではなく、我々が現在のプロレタリアートの必要のために「詩」をかき、「小說」をかくと云ふことが、それ自體、如何なる任務を持つてゐる

かを考察してみることでなければならない。

　では、一體詩といひ、小說といふものゝ任務とは何か?――と云ふよりも、我々はこの二つの文學的方法に於て、何れが現實の眞を映す仕事に適してゐるかと云ふ風に問題にしてみたい。言ふまでもなく、それは慥かに小說乃至は散文的方法を用ひる方が、詩に於てするよりも具體的であり、より客觀的であり得ると私は考へる。と云ふことは、勿論決して、詩が現實の客觀的眞理を映し得ないと云ふことではなく、こゝでは寧ろ詩的方法を用ふることが如何に現實の眞を映すに直接的であり、且つ端的であり得るかを考へて見なければならないやうである。即ち、例へば小說とは現實を概括するものであるが、小說のそれを概括する仕方は、決してある藝術家の、ある日、ある朝の、ある空氣に接して得たところの「刹那々々の感情」から出發して、それを抒情する仕事の中で現實を概括するのではなく、現實に於ける個々の現象の中から、何が最も眞實であるかを摘發し、ふるひにかけて、そこに殘された最後のものを概括することによつて、或る日、或る朝の空氣に接することから得なければならないところの「刹那々々の感情」にまで到らねばならない。

　然るに詩は? 詩も亦、勿論、現實を概括する仕事には違ひないが、それは小說の場合と全く相反し、と云ふよりも小說の場合にはしばしば捨て去るであらうところの、或る人間の、ある日

の、或る時間に於ける、或る事象に接した時のある刹那の感情が何よりも重要となつて來る。例へば、或る朝の空氣が非常に美しくすが〳〵しかつたとしよう。その時、詩人の胸を打つてくるものは、必ずや、このすが〳〵しく美しいものから出發して、そこからあらゆる心象や聯想をそのふるひにかけ、或ひは現實のよろこびを、或は現實の怒りを、それとして歌ひあげるに違ひなからうし、又、若し、その朝の空氣が濁り、不愉快なものであれば、その怒りが詩の全面をつらぬき、決定的な作用を持つことは當然である。かつて啄木は、「忙しい生活の間に心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じを愛惜する心がある限り、歌と云ふものは滅びない」と、云ふことを言つてゐるが、全く詩とは斯くの如き「我々の生活の間に朝な夕な浮んで來る刹那々々の感じを愛惜する心」の表現に他ならないことを考へずには居られぬものだ。勿論、我々は啄木がその刹那刹那の感じを愛惜し、それをそのまゝに消え去らしめて行く所に、(換言すれば彼が詩を單に脫糞作用として觀照してゐる所に)詩の不滅を感じたのと違ひ、全く我々にあつては單にその刹那々々の感じを愛惜することにとゞめず、それを組織し、且つ、それを基本として次々へ發展させることによつて、その刹那々々の新しい時代的意義を裏づけようとするところの階級的必要性から詩の滅びなさを承認するとは大分相違してゐるが、それにしても、こゝで全く重要なことには、現もあれ詩が短かい形式のもの、刹那々々の感情を組織することによつて、現實の斷面を見る仕事

に外ならないことを否定することは出來ない點であらう。

全く、我々の文學的方法に於て、一體、詩ほど刹那々々の感じを短かく、又、スカッと現實の斷面を切つたやうに表し得る方法は他にない。詩こそ、この現實の複雜な內容を最も端的に、最もスカッと切つたやうに表し得る唯一の方法であり、且つその詩こそはその內容が何ものにも捕はれ、恐れることのないやうにその形式も全く自由な——と云ふことは內容そのものゝ必要によつて生み出された——方法によつて形象化されたものでなければならないことも云ふまでもないことである。

ところで、では、こゝにもう一つ殘されてゐるブルジョア的短詩型の問題は？——なる程、多くのブルジョア詩人たちも、極めて、短かい形式によつて、優れたるブルジョア詩を生產してゐる。

十一月が鳥のやうな眼をしてゐる。

——尾形龜之助「十一月の電話」——

×

たんぽぽが咲いた
あまり遠くないところから樂隊が聞えて來る。

——同　　人「お可笑しな春」——

竹藪
麥畑
その中の出來事を子供に聞いた
子供であつた僕に聞いた。

——小野十三郎「最初の疲勞」——

×

月をめがけて吾等ゆく夢の脚

——草野心平「月の出と蛙」——

×

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

——同　人「生　殖I」——

×

田になげられた藥瓶の中に
小さいはつごひの二匹が重つてゐる
喉をふくらますと微かに月がゆれる

自分をふり捨てた男をまちながら
待ちきれずに　女は血をはいて死んだ

薬瓶の中の二匹は
弓形に流れる螢を眺めながら
あぶくのやうに重つてゐる

——同　人「水素のやうな話」——

×

我は張り詰めたる氷を愛す
斯る切なき思ひを愛す
我はその虹のごとく輝けるを見たり
斯る花にあらざる花を愛す
我は氷の奥にあるものに同感す
その剣のごときものの中にある熱情を愛す
我はつねに狭小なる人生に住めり
その人生の荒涼の中に呻吟せり
さればこそ張り詰めたる氷を愛す
斯る切なき思ひを愛す

——室生犀星「切なき思ひぞ知る」——

又、私もかつて「短かい詩」と云はれるだらう、次のやうな詩を書いたことがある。

ある朝、私は裏の竹林に遊ぶ
竹林は私から憂鬱を奪ひとる
私はみしみしと力を感じる
私ははちきつた聲で「おお」と叫ぶ
又、「おお」と叫ぶ
更に「おーッ」と叫んでみる
「おお」と木響は答へる
「おお」「おーッ」と更に答へる
私はからからと笑ふ
木響がからからと笑つて答へる
私は木響のひびきで竹林の深さを知る
私は竹林の深さにみわくされる
私はこんな明るい朝を持つたことがない

凡そ、このやうにして數へあげれば全くその際限はないやうである。しかも、見る通りこれらの「短かい詩」が、それ〳〵にある刹那の心境を傳へ、ブルジョア的なある現實感をそれとして表現してゐることは、又、プロレタリア短歌作者の言ふ通りで、附け加へるならこれらの詩が、それを何等かの既定の形に嵌めようとはせず、その內容に卽して形象化さうとしてゐる努力は、かへつてプロレタリア短歌のもつ短歌性よりも進步したものと云へよう。が、それにしてもかゝる短かい形式に於て、そこにブルジョア詩が一ツの詩的形式的完成を遂げてゐるにもかゝはらず、何故我々のプロレタリア詩が、未だ見る如きだら〳〵と長い形式でなければ歌はれて來てゐないか？――そこには勿論幾つかの重要な理由が宿されてゐる。

一、プロレタリア詩の持つべき內容が、今までのどの時代の詩よりも複雜なニュアンスを伴つた生きた生活であるといふことが一ツ――

二、しかも、その複雜な內容がすべて發展的なものであり、且つその發展的なものゝもつてゐる眞理を剔抉しようとする詩人の立場が個人主義的な觀點からではなくして、社會主義的な觀點に立たなければならないことの困難さが一ツ――

三、更に、現在のプロレタリア詩が未だ完成した樣式を備えてゐるものと考へてはならないこ

とが一ツ――

等々だから、我々は今後のプロレタリア詩がたほどんなに短かく（と云ふよりも端的に）なるかも知れない餘地を持つてゐることは、こゝで言はないことにしても、こゝでは決して「短いブルジョア詩」の短さが何に原因してゐるかを探整してみることを忘れてはならないのである。我我は短かいブルジョア詩の中にふくまれた「崩壊しつゝあるブルジョア心理」を見なければならない。況んや現代の……せる階級對階級の……に於て、如何にブルジョアジー及びその文化が沒落しつゝあるものであるかを見落してはならない。全く、かゝる「崩壊する心理」「沒落する文化」こそ、彼等の詩を無内容にし、その形式を歪曲した短かさにおしこめる決定的な理由であつて、若し、我々が「晝」と題して「晝の時計は明るい」（尾形龜之助）といふ十二文字の詩を見、（これは短歌よりも字數は少いが全く自由な形式で歌はれてゐる）斯う云ふ短かいブル詩があるから、我々にも斯ういふものがあつてもよいといふ風に考へるなら、その間違ひは、全く短歌の中の短歌性、及びそれとの關係において制約せられた形式上の極限と、自由詩における内容及び形式の關係を知らないものである。短歌と自由詩の區別を知らないものである。

兎まれ、我々の文學的仕事は客觀的現實の眞を映すことである。そして、この現實に於ける客觀的な眞理を映す仕事が、詩ほど端的にして、且つ、現實をスカッと切つたやうに映し得る方法

はないと私は考へるし、又、その詩の中で特に「短かい詩」と「長い詩」との區別を絶對に明らかにしようと考へることの無意味さをもこゝに斷乎として拒否せずにはおけぬものだ。

四、むすび

以上、私は極めて雜駁にではあるが「プロレタリア短歌」の最近の問題について述べた。(こゝで啄木の歌の創作に於ける彼の悲劇について述べる機會を、見失つてしまつたことは、少なからず不備である)この論說に於て、私が何よりも注意をうながしておきたいことは、まだいろ〳〵の問題がこの所說の中にふくまれてゐるといふことだ。が、私は「プロレタリア短歌」が「プロレタリア詩」に解消したといふので、未だ「プロレタリア的な短歌」を歌ひながら「プロレタリア詩」を歌つてゐるやうに誤解してゐる詩人や、又、プロレタリア短歌が詩に解消したから、短歌の愛好者にいきなり詩をかけと云つて困らせる詩人たちに、及び「プロレタリア短歌」の誹謗者たちに何ごとかの反省資料を與へ得たと信ずる。そして、私の目的はそれで一部達成されるのである。尙、私はこの小論に於て、若干「ブルジョア短歌」に對する從來の機械的、公式的な批評乃至は見解に對する、我々の偏狹についてもふれたかつたが、すべてが意に滿たず終つたことを附記しておき度い。

追補。この文章を讀んでみると、私が何かプロレタリア詩における「短詩」といふやうなものを否定してゐるかのやうな印象を與へてゐる。このことについて、私はつい最近にもある讀者から私が恰も短詩の運動を否定し、短歌の詩への發展解消といふことを機械的に理解してゐるものといふ風な誤解をうけた。これは私にとつて甚だ意外なことで、實は決して、短詩の運動を否定してゐるのではなく、現代のプロレタリア短歌を、「短詩」と呼ばうとする多くの短歌作者に對立してゐるだけである。

私は現在のプロレタリア短歌を、それがよし三行五行でかかれてゐるにせよ「短詩」といふ風に呼びかへやうとすることには贊成出來ない。それはたゞ肺カツ量の關係によつて、從來の五七五七七を三行五行に延長してゐるに過ぎないで、その歌の內容は依然として昔かはらぬ觀照主義の語呂合せにすぎないところに、强固な短歌性を固執してゐると考へるからである。

われ〳〵が自由詩と考へるものは、少くともこの觀照的氣分を揚棄して、現實の藝術的形象化のために全く自由な手法、發想を持つてゐる。だから若し短詩の運動といふやうなものが存在するとすれば、この自由詩のもつとも壓縮された形での、刹那的感情の表現でなければなるまい。しかし一體、「短かい詩」といつても、それが何行、何字まで位のものを「短詩」と指すかは疑

間で、本來詩といふ形式が小說などと比較して、短的な表現であるので、特に短詩の世界といふやうなものは、存在し得ないのではないかと考へてゐる一人である。實際「短詩」といふ風なことは行數上の比較の問題で、それより重要なことは、短歌と自由詩とのケジメを明らかにするとか、詩への發展解消といつたことを再度に吟味してみることが大切であると思ふ。

私は、その場合、最近の短歌論者がしば〳〵短歌の問題を短歌の範圍内で解決しようとするところに反對の意見を持つてゐる。なぜなら、日本の短歌が今日もなほすこやかに存在するといふことには、勿論、國情によるとはいへ、他方主なる原因の一つとしては自由詩の正當な發達が拒まれてゐるからである。兎まれ短歌の諸問題は、森谷茂氏も述べてゐるやうに、

「今日なほ、短歌から詩への解消の誤りを說く者もゐる。短歌運動とは短歌ほく滅運動であると考へるものと、やはり短歌を短歌とし短歌形式利用の中に短歌運動の主義を求めようとするもの、短歌とは何か、定型を破壞しても短かいものは、他の自由詩と相違するものがあると考へてゐるもの、このへんは未だ明確な結論にまで到達してゐない樣である。これらはなほ今後の研究の對象であらうと考へる」といふのには私も贊成である。私の短歌論――主として私は短歌と自由詩との相違性を見出さうと努力してゐるものであるが――斯ういふ意味で、何かの役に立てばと、しばしば考へてゐる。

六、詩の創作技術について

啄木の短歌について及び現代プロレタリア短歌の諸問題について、私は比較的多くの言葉をついやした。そのくせ詩の創作技術の問題に關しては、あまりふれてない氣がするので、こゝで簡單にその方面に關する現代の問題について考察しておくことにしよう。

創作技術の問題については、最近のソヴエート文壇においても相當重視されてゐる樣子だし、日本においても社會主義的レアリズムの問題の提唱後、極めて最近に、具體的な課題として討論を生みはじめて來た。とは云へ、勿論このことは決して、それがこれまで全然おろそかに放棄されてゐたわけではなく、創作技術に關する科學的研究の必要性はしば〳〵作家の創作方法上の問題として上程されながら、例の「內容と形式との交渉」に關する討論において、過去の文學理論が、一方內容さへ新しく心掛ければ、ひとりでに形式や表現上の諸問題が解決されるかの印象を、各作家詩人たちに與へてゐたことは全く否定し難いことがらであつた。なる程、この素朴な藝術論は、例へばコップの水がひとりで蒸發し去るやうな遲々たる自然的狀態で具體化し得る。しかしコップの水は、若しそれに衝擊を與へることによつて、突倒せば一層早くなくなると同樣

に、われ／＼が意識的に創作技術の問題をとりあげ、それをイデオロギーとの關聯において究明して行くとするなら、それがより急速に正當な進展に導かれることは云ふまでもないことである。然るにこれらの問題を、やゝ緩慢に見すごして來た（勿論それには藝術方法の問題が技術について論究するにまで熟してゐなかつた關係にもあるとはいへ）結果は、たまたま「創作技術」の概念と、「文學形式」の概念とを混同するかの如き初歩的な誤謬を、最近の論者にみること、更にわれ／＼が過去の討論において、しば／＼一つの作品におけるイデオロギーを問題にし、しかもそれと創作技術との依存關係については、少しもかへりみなかつたと同樣に今度は技術上の諸問題を、イデオロギーとの交渉において見ることを全然欲しないかの如き傾向を若干見るに到つては、甚だ遺憾にたえないことゝ考へなければならぬ。

ところで、私は最近ある作家の「創作技術論」をよんで、どうやらそこでも「創作技術」と「文學形式」との概念が多少混同されてゐるのではないかと、考へてゐた矢先、たまたまゴリキイの書いた「創作技術について」の感想をよみ、非常に教へられるところのあつた一人であつた。その文章の中でゴリキイは述べてゐる。

「われ／＼が天才的な文學者として認めるのは、すぐれた觀察や比較の能力と、もつとも性格的な階級的特異性を摘出する手法や、それらの特異性を一つの人格に包括して描きだす腕を持

ち、そして文學的形象、社會的タイプを創造することのできる作家である。描寫は――形象を創造する文學的技術のもつとも本質的な手法の一つである。技術――仕事の過程――を若干わが批評家たちのやうに形式の概念と混同してはならない」「あらゆる思索とひとしく、――文學者の思索は、言葉を組織する技術に外ならぬといふことを忘れてはならない。云々」

　これで見ると、つまり創作技術――生產力とは、いふまでもなくわれ／＼の文學的形象を創造する仕事の過程、（言葉と形象を形態化する勞働）に外ならないのに反して、形式とは所與の時代の所與の社會的勞働形式を終局において規定するところの生產力（技術）の發達によつて規定された、すなはち文學的技術によつて規定された仕事の完成態であると解するのが妥當のやうである。いひかへるなら、技術とは要するにわれ／＼のイデオロギーを實踐的に形象化へ移す仕事の過程を指し、形式とは實踐化された仕事の完成形態を指すものではないかと考へられる。然るにこれまでわれ／＼が一つの作品を指して、「技術がまづい」といつた場合でも、往々にしてこの邊りの概念が不明瞭、且つ全く、イデオロギー――技術――形式の諸關係において形式や技術を論じなかつたことは、充分いましめられねばならない。

　兎まれ、これは何れにしても創作技術の問題が今日我々の藝術（詩）創造の上に特に重要視されねばならなくなつたのは、社會主義レアリズムの提唱をめぐつて、われ／＼の詩的創造の方法が、

いよ〳〵具體的な過程にはいつて來たためであることを、先づ理解しておく必要がある。

一體、詩的創造の技術問題としてわれ〳〵の最も注意しなければならないのは言葉の形象の適確性についてゞはないかと私は考へる。なぜなら詩は小說における如く、題材を叙述的に描寫するものと違ひ、その題材がいちぢるしく叙事的な性格を持つ場合（例へば小熊秀雄氏の詩の如き）でさへ、「事物に對する詩人の感情の現實的な波動『感情の論理』を無視しては構成されない。だから、詩といふものは、事物を正確に認識し、それを形象的に描寫し得るといふ才能だけでは、決してつくれない。事物に對する感情を、生き生きと、要約的に、獨創的な言葉で表現し得る才能がなければならぬ。」（森山啓）しかるに、この場合、詩人にとつては、感情そのものが第一に大きな臭であるばかりではなく、しばしばこの感情を形象するにあたつて、詩人みづからが作つた臭におちいり、表現そのものを、おのれのつくつた獨創的な粉飾で、誤魔化し去らうとする危險を將來しがちなものである。例へばこゝに一人のシュール・レアリストの作つた詩を引用してみよう。

Sincerity であることは人間の偉大な努力で

いつも裸で生きてみんな吐き出すことである。

中庸であることは樹液の通はない枝で
詩人にとつては愛と不公平の死である。
他人の神經など認めないやうに振舞ふことが大切である
古い箴言でいへば＜劍を以て火を熬らす＞ことである
タンニン酸のないお茶のやうに
感情のつよい人間に出逢つて苦痛を傳染されるやうではならない

この詩は凡そ何が歌はれてゐるのか、私には理解出來ない。新井徹氏は述べてゐる。「これはまさに一聯の聱句のつらなりである。そこには機智と洒落と――作者のアタマに振子のとぶ距離を誇示してゐる。頭の振子云々の見解は作者の立場を如實に物語る言葉で、心臟と胃袋とを忘れて頭腦のみが肥大したインテリゲンチヤの特質である。新奇な言葉で耳目を驚かしながら、結局アタマの振子のゆれ工合を樂しんでゐるといふ外に、內容的に人の心を突いて來るものに不足してゐる」と。その通りであるかもしれない。しかし、これを作者の心理――イデオロギー――感情――表現――技術といふやうな關係で見る時、作者は極めて忠實に自身の感情の論理を心理的な波動の情態に應じて表現したと見るのが至當であらう。ただこの場合作者は單におのれの作つた感情の罠の中で、いだつらに迷盲することを樂しみ、殊にわれ〳〵の知性といふものが、事物を

観察し、比較し、研究しながら、人間生活における有益なものと、有望なものと有害なものとの識別に役立てるために必要であるといふことを忘れて、かへつてこの知性をもてあそび、いはゆる社會的條件の壓力のまゝに打ちひしがれた形で滿足してゐるところに、この作者の階級性、イデオロギーそのものを暴露してゐるのである。

創作技術とは要するにわれ〳〵のイデオロギーを實踐的に形象化へ移す仕事の過程を指すものであると私はこの文章の最初に述べた。しかし、イデオロギーを實踐的に形象化する場合、すなはち描寫する仕事は全くわれ〳〵のイデオロギーを確保するための、自己格鬪を意味してゐることを知らなければなるまい。例へば一つの言葉を選ぶ場合にもこの格鬪は、必要だし、又、必然的に起つて來る。なぜなら藝術的詩的形象において、われ〳〵は言葉を選ぶ自由を持つてゐると共に、又、それを選ぶ場合、しばしば自己の階級性や、イデオロギー的不明確性を暴露するのみならず、ともすればおのれの好きな言葉を選んで自然的現象、――感情の形象化に至るといふ安易性に陷入り易いこともまぬかれ得ないから――。然るに、勿論作家、(詩人)はいづれは各々の詩人が自ら好める言葉を蓄積して、所謂彼の個性的な詩のスタイル乃至は風格にいたるに外ならないであらうとしても、若しわれ〳〵が自身に「溫順」に、おのれの好める言葉をのみ無批判に選

ぶとすれば、結局われ〳〵がインテリゲンチャ詩人である限り、プロレタリア的題材を形象する言葉とは運命的に相對を持たねばならなくなることも自明である。しかもわれ〳〵がプロレタリア詩人であり、且つあらうと欲し、それへの創造的努力に精進すべき現實的必要性を必要とするなら、當然、あらゆる言葉の克服に努力し、妙な言ひ方ではあるが、甚だ樣な、肌つきの惡い言葉をさへ、その必要のためにはぐん〳〵と踏破しなければならない筈である。いひかへるならこれが私のいはうとするイデオロギーの創作的實踐化のための言葉との格闘であり、これを飛び超えること（それ自體が勿論われ〳〵の勞働者的鍛錬にまつこと以外には方法がないと考へられること乍ら）によつてのみ、インテリ作家は自己のインテリ的限界をも乘り超え得るわけだ。

あゝ春の宵の庭先きに梨の花が、ホンノリ、白々と咲く家で獨身の敎員が自殺してゐる
その屍は黃色くおごそかに横はり、つどひよるひとびとから感情の贅澤さを奪ふ。
をろん　をろんと白（犬）は原つぱのむこうで、縈つた暗がりの森に吠えついてゐる。

これは私の作つた「惡しき母」と題する詩の最後の一節であるが、私はこゝで犬の鳴き聲を「をろん、をろん」と表現した。この犬は毎日夕方が來ると、恰も遠吠えの出來そこねたやうな聲でなく。恰度隣りで獨身の敎員の自殺があつた日も私はこの犬の出來そこねた遠吠えを聞き、

早速「をろん　をろん」と自分の好みの言葉を選んで表現した。ところが小熊氏のいふのに、この表現にはリアリテイがない、これは當然、その「遠吠えの出來そこねた聲」と表現すべきで、その方が詩的に餘韻を持ち、人にひゞく感情も印象的に强いとの批判であつた。結局、私は私の言葉に甘え、甘えることによつて小市民的な自身の感情を忠實に表現し得てゐるとしても、それがプロレタリア詩人たらんと欲する私の道ではなかつたことを自己批判しなければならなかつた。われ〳〵はわれ〳〵が唯物論者であることを忘れてはならない。

「文學者の仕事は――とゴリキイは前掲の感想の中で述べてゐる――おそらく學者專門家――たとへば動物學者の仕事よりもむつかしい。學者は羊を研究する場合に、自分を羊そのものに再現する必要はないが、文學者はけちん坊を描く場合には自分を吝嗇家とし、貪慾を描く場合には自分を貪慾漢として感じ、意志薄弱者を描く場合には、强い意志を持つてそのやうな人間を描かねばならぬ」と。このことは詩人においても一向違はない場合を往々にしてわれ〳〵は持たねばなるまい。――藝術技術の問題は、かくわれ〳〵の詩が複雜化し、多様化するにつれてより大切な當面の問題となつて來るであらうが、私はこゝでは單にその主要性を强調すれば足りる。が、それにしてもひるがへつて啄木の歌をながめるとき、われ〳〵は彼が彼の心理に忠實に、そして、そ

の場合、一見甚だ無造作に見えながら彼がつねに彼の言葉を大切に用ひてゐることを甚だ尊く思はずには居られぬものだ。

――一九三四、六月――

七、農民思想家としての啄木

――農民詩の問題と關聯して――

一、はしがき

人は啄木の「農民思想」について、しばしばそれを賞讃する言葉を語つてゐる。（註一）こゝに私も農民思想家としての啄木、農民詩人としての彼の優れたる思想及び藝術を誰よりも正當に賞讃しようと欲するものである。誰よりも正當に――即ち、私の希ふところは、たゞ美辭をもつて無批判に彼の思想を賞揚したり、又、好事家たちの好んでする文獻の渉獵に、徒らな勞力を散逸しようとすると同じ轍をふもうと考へるものでは決してない。反對に農民思想家としての啄木が如何なる點にすぐれてをつたか、或は如何なる點で時代の制約を乘り越へ得ないでゐるかを批判

的に究明し乍ら、それを今日における我々の農民詩の問題と關聯して考慮し、今や我々が彼の遺産を承け繼いで到達しつゝある地點をまで簡單に述べておき度いと考へるものだ。

一、啄木とナロードニキ

二、啄木の農民詩（短歌）

三、農民詩に於ける我々の到達點

私は大略右の順序に從つてこれを述べて行き度い。

註一　大原外光著「啄木の思想と生涯」(啄木と農民思想)、吉田孤羊「石川啄木の農村觀」(昭和五年四月號「日本農業」)參照。――こゝでは兩氏の所論についてはふれないことにする。又、この文章が啄木の農民思想に就てより現代の農民詩の問題の究明により重點を置いてゐることを斷つておき度い。

二、啄木とナロードニキ

「何人が人民の友であるか？　そして彼等は社會民主主義のために如何に戰ふか？」について、レーニンが一八九〇年代のロシヤに於けるナロードニキの運動を批判したことは有名である。「若いロシヤのマルクス主義者の攻撃を斥けてゐるこの書のうちで――ロシヤのマルクス主義とナロードニキとの歷史的根柢を暴露しつゝ、レーニンはこの兩者が共にその起源を七十年代の革命運

動のうちに、當時の『農民社會主義』――この『農民社會主義は、特殊の形態を、即ち村落に於ける共同耕作經濟（Gemeinde-wirtschaft）を、從つてきた、こゝからして社會主義的農民……可能性を信じてゐた』――のうちにもつものなることを指摘してゐる。この『古いロシヤの農民社會主義』はロシアに於けるブルジョア制度の影響のもとに『分裂』を經驗して一方に勞働者社會主義（即ちマルクス主義――）をつくり、他方『小ブルジョア的急進主義』に、即ちブルジョア的農民の利益を代表するところの急進的ブルジョア民主主義に『墮落してしまつた。』この急進的な『八九十年代の小ブルジョア的なナロードニキ』は『農民を、現存社會の基礎に反對する社會主義的……まで導く』代りに『現存社會の基礎を維持しつゝ』社會改良の補綴細工を事としてゐる。これらのナロードニキは、ロシアが既に久しき以前より資本主義的發展の途を踏み出してゐることを看取しない。彼等は彼等の『主觀的社會學』を以て自らを武裝する。彼等は時にインテリゲンチヤに、時に『公衆』または、政府に訴へる。蓋し彼等は、これらのものゝたすけによつて我々（ロシヤ）の『國民的生産』をば、彼等が一つの人爲的に改良された機構と見做すところの資本主義の前に防衛せんことを希望するからである。』

　かくてロシヤのナロードニキは、ナロードニキの自身で考へる如く、工業プロレタリアートがロシヤの全勞働搾取人口の生來の代表でないといふ理論から、全く反對の結論を導き出され、

かへつて「ナロードニキの理論——それは彼等に從つてゐる農民の幻想に相應してゐる。——更にまた『勞働を基礎とする』(Arbeitsgrundlage)原則及び『均等なる土地の利用』なる原則が、遲れた、反動的な、小ブルジョア的な社會主義のある種の變種である」ことが指摘されることによつて、自己の反動性を暴露するの止むなきに到つたが、それにしても私は十月……の前ぶれがこのナロードニキの運動の中に秘かに宿され、そこに歴史上多かれ少なかれ意義ある役割の果されたことを忘れることの出來ないものだ。

ところで、今、我々が啄木の「農民思想」について語る時、いつでもそこに思ひ出されるのは、このロシヤのナロードニキ運動についてゞある。彼は歌つてゐる。

われらの且つ讀み且つ議論を鬪はすこと、
しかしてわれらの眼の輝けること、
五十年前の露西亞の青年に劣らず。
われらは何を爲すべきかを議論す
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたゝきて
'V NARÓD!' と叫び出づるものなし。

われらはわれらの求むるものの何なるかを知る
また、民衆の求むるものゝ何なるかを知る
しかして、我等は何を爲すべきかを知る
實に五十年前の露西亞の青年よりも多く知れり
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたゝきて
'V NARÓD!' と叫び出づるものなし。

――「果てしなき議論の後」より――

こゝで啄木が五十年前のロシアの青年よりもより輝ける瞳をもつて「何を爲すべきか」に就て議論し、且つその「何を爲すべきか」について知つてをつたこととは何であつたらうか？ 云ふまでもなく、すでに五十年前のロシヤ青年達が現存する封建的……の支配下で、その搾取と迫害とに抗しつゝ人民解放のために闘ひつゝあつたと同じやうに、一九一〇年の日本青年が、その反動的保守的支配の下で、――實に五十年前のロシアの青年よりもより多くを知れる任務を、闘はねばならぬと夢想してゐることとは明らかである。

啄木の夢想――實際、當時の彼はその現實から感じる諸矛盾への苦悶と、彼の思想に影響を與へたこのナロードニキ（主として農民解放を意味する）的夢想で一杯だつた。彼が「女に讀ませ

ろ週刊新聞を出したい」と、これを當時（明治四十四年十月二十八日記）の空想の題目にしたり、又、岩手縣へ歸つて「農民のための週刊新聞」を出したい夢想にふけつたのも、この頃であつたし、或る時郷里から來た友人より東北地方で酒の賣れなくなつた話を聞き、ひどく暗鬱な氣持になつたのも、この頃のことである。けだし、我々にとつては彼がその思想の進展の途上に多くの影響を與へられたこのナロードニキズムの跡よりも、社會的環境と自己との間に横はる絶望的な不調和に對する彼のやむことなき反抗の意志の方がより重要であるが、しかし私はこゝで一つの歌をとりあげることによつて、もつと具體的に彼の「農民的思想」の根柢を掘り下げてみよう。

三、啄木の農民詩（短歌）

一つの興味ある歌を啄木は歌つてゐる。

百姓の多くは酒をやめしといふ。
もつと困らば、
何をやめるらむ。

すでに述べた通り、この歌が明治四十四年の一月の貢月、友人の米内山氏が來て、東北の田舍でも酒の賣れなくなつた話をしたことから感激して歌はれたものであらうことは、略察せられるところである。――この歌の內容は極めてはつきりとしてゐる。即ち、酒好きの百姓――特に酒なしでは過ごされない東北の冬に、百姓達の多くが酒をやめたといふことは、それだけでも如何に百姓の生活が逼迫してゐるかを考慮するに十分であるし、又我々は詩人啄木がそのにがい顔付きを全くにがり切らせて、かゝる百姓の慘めな生活に思ひをはせる姿をも彷彿と想起することが出來る。

ところで、こゝで啄木はかゝる慘苦な現實（農民の實生活）にどういふ彼の意志表示をしてゐるだらうか。彼は謂ふ。

「もつと困らば、何をやめるらむ」

恐らく、これはこのまゝの情態がつゞけば百姓達が餓死するだらうといふことを考へたからに違ひない。「もつと困らば、生きることをやめるであらう」――さう云ふ彼は彼の感想を「何をやめるらむ」で餘韻をふくませ、所謂農村生活の絕望に對する彼の意志を短歌的に表現したことは明らかである。

だが、我々はかゝる意志表示の中から、何をそこに啄木のいきづきとして感じとることが出來

ろであらうか。といふより、我々はかゝる啄木の意志表示の中に、——凡そ空想的なインテリゲンチャが、普通に行きたがる出口とでもいふものを探しつゝある姿を感じないであらうか。貧乏、——絶望、——餓死、この常規的な出口を、我々は啄木がそれとして考へつゝあつた農民解放の思想であつたとは考へないとしても、この歌を歌ふ詩人啄木にとつては、最早やその話に聞きつゝある百姓の周圍に漲つてゐる窮乏はこれで十分である、百姓らは今に「この儘ではもはや生きることの出來ない」といふことを了解するに違ひないと考へ——しかもそれを考へることによつてそこから拳を握りしめて戰ひに進むかはりに、手をふり上げて激論する空想的インテリゲンチャ・啄木を感ぜずにはをられないものだ。そして、もとよりこれも亦、普通インテリゲンチャの行き詰つた心情に求める意思の出口であることは云ふまでもないが、こゝではそのことは兎も角としても、我々はその頃啄木を圍む日本の現實が、その解放戰線に於ける實際的活動家たちの位置すら明瞭に決定することを許さない客觀的情勢に置いてゐた時に、啄木も亦、この時代の情勢に制約されて、その歌に今日のプロレタリア詩人と同じやうなイデオロギー的明確性を把握し得なかつたこと、——従つて、たつた一篇のこの短歌からも、農民詩人としての啄木が（一）世界觀の明確性をもちあはさぬ點、（二）農村との密接なる關係につながつてゐぬ點、（三）知識階級的反省の痕跡の多い點、又、その歌それ自體にも明らかに（そこから、よし歌の形式の固定化に

對する反抗が感じられるとしても）われ〳〵の方法との相違を示してゐる點を注意深く、見逃すことの出來ないものだ。

――ペ・コーガン教授はその「プロレタリア文學論」のあるところで書いてゐる。

ロシヤに於て「プロレタリア詩が最初にその輝かしい光彩を放つたのは、プロレタリア……

……を得た時より餘程以前のことである。既に一八八〇年代に於いて勞働者詩人が詩を書いてゐる。當時は未だロシヤが工場や製造所で充滿してゐない時であり、プロレタリアートが未だ威力ある軍團を組織してゐなかつた時であり、又帝政に對する憎惡の熱に燃え立つた者や、壓迫された民衆の苦情を悲しんだ者が、民情（ナロドニーチエスツウオ）派の破滅にも拘らず、早くも自分たちの眼を數百萬のロシヤ農民へ向けた時であつた。

プロレタリアートは農民の海の中に姿を失つてゐた。たゞプレハーノフやレーニンの如き孤獨な天才的な頭腦の持主のみが、既にこの時代に於て、歷史的論理によつて、プロレタリアートが將來……運動の主導者となつてロシヤを解放するに至るであらうといふことを豫見してゐたのである。

現代のプロレタリア詩が爲した如く問題を明瞭に扱ふことは、當時の實社會の客觀的事情によつて初期の勞働者詩人には許されなかつたのである。彼等は自分達の苦痛からの活路を、或は農

村に對する空想のうちに求め、或は組織的鬪爭なしに自然に來なければならないところの華麗な未來を曖昧な期待の中に求め、或は壓迫者に對する呪詛となつて爆發し、或は單に厭世主義と絶望との中に浸つてゐる。然し現代のプロレタリア詩を支配してゐる思想、即ち勞働階級の威力に關し、又勞働と資本との階級的利害の衝突に關し、又資本に對する組織的鬪爭の必要に關する思想を、彼等の中に發見するのは稀である」（註一）と。

我々はこのコーガン教授の語るところに啄木の「農民思想」「農民詩」――それはいつでも日本のブルジョア社會の内部に於ける……が暴露されねばならない、その個所において中途半端にしてゐる點――をそれとして見出さずにはおれないものだ。しかも、このことが非常に危險であるといふのは、かゝる中途半端な態度こそ、全くそれを歌ふ啄木に明確な階級的立場を持たしめなかつた時代の制約性と見なければならぬし、又、それを時代の制約として見る時、われ／＼はかゝる制約性が現實に於ける日本資本主義の矛盾を打破するために役立つといふよりも、却つて資本主義の豐なる繁榮をたすけるための何等かの有利な刺戟を與へるものとなつたのでないかをあやしまずにはおられぬものである。

かくて、今やプロレタリア詩人たちは啄木のかゝる不充分さを歷史的に批判し、我々の……目標が……………………………………全被壓迫大衆の解放に在ること、そしてこ

の闘争に於ける我々の……プロレタリアートにあることを明確に認知すると共に、この……
………ための有力な同盟者としての農民との強固な結合によることなくしてはプロレタリア
………し得ないといふ觀點から、特に未だ封建的………………殘存する日本に於て
は、農民に對するプロレタリアートのヘゲモニーを確保する必要の上に立つて、あらゆる……
農民の欲求、そのイデオロギーの上に立つた詩生産に急ぎつゝあるのである。

では、今日のプロレタリア詩人たちがどんな農民詩を作つてゐるか？　それを私は啄木の歌を思ひ出し乍ら見てみよう。

註一　コーガン教授著「プロレタリア文學論」（昇曙夢譯）一二頁―一三頁參照

四、農民詩の到達點

こゝに一つの貧農の生活を歌つた農民詩がある。

粉雪がサラサラと
祝入營のノボリに降りかゝつて
行列は杉門をくゞり
凍てついた野道を

村はづれの小學校へ
一杯の村人だ、
祝砲が三發——

弟よ
私はお前の姿をじつと見てゐる
すべてを滿足げな面もちで
名譽ある戰士となる門出を
涙さへたゝへて感激してゐる樣なお前

電柱のかげから
ぢつと見る疲れ切つた母の顔
身體を大切に
人々ににくまれぬやうに、と
しはがれた父の聲——

削除
發禁
P285
〜
P288

の…………してゐることは忘れてはなるまい。

けだし、かくの如くして今日のプロレタリア詩が到達しつゝある點、それに更にやすみなくプラスしつゝある點は、それが勿論現在の必要に應じて、必然に生れ、且つ生み出さるべきものであつたとは云へ、我々はかくして我々が建設しつゝあるものそれ自體の中に、啄木の遺産をうけつゝ驀進する我々の正統性のあることに留意すべきであらう。

見きれ、今日、日本の農民詩人に負はされた任務は全く重要となつてゐる。といふよりも、今迄我々の見落してゐた文學的方向が一層明確にせられると共に、農民詩への一般的關心が高まり農民を扱ひ、農民を對象とした詩の要求が漸く活潑に行はれるやうになつて來てゐる。云ふまでもなくこれが喜ぶべき現象であることは自明であるが我々は更に今や沈滯の中にある日本の農民詩を全く成功的に旺盛化しなければならないことを思はずには居られぬものである。

特に私は今この小論を終るにあたつて、讀者諸君が（一）農民詩に對する正しい理解の上に立つこと、及び（二）何より農村に居、日本の農村を最もよく理解する農民詩人の旺盛な詩作活動を要求してやまないものぞ。（この文章はぜひとも文章と併せ讀んだ上で理解されたい。）

八、啄木と農民詩の問題（再論）

右の文章を讀みかへしてみると、私はいはゆる「黨派性」の強調乃至は「主題の積極性」の強調のために、やゝ單純に彼の歌を批判してゐる感が深い。

云ふまでもなく、農民思想家としての啄木がその政治的観點において、今日のわれ〳〵のそれと、全く雲泥の相違あること、從つて彼の詩歌のイデオロギー的批判においては、私の右に述べてゐる點も全然間違ひであるとは云へないだらうが、しかし結局詩がイデオロギー的に正しくても、それだけで人の胸をひらく藝術的形象にいたつてをらなければ、なんにもならないので、われ〳〵はこゝでもやつぱり啄木の歌がこの樣な政治的低さにもかゝはらず、廣く深く人の胸打つところに注意したければならないやうだ。もう一度彼の短歌を吟味してみよう。

田も畑も賣りて酒のみ
ほろびゆくふるさと人に
心寄する日

あはれかの我の敎へし
子等もまた
やがてふるさとを棄てて出づるらむ

その名さへ忘られし頃
飄然とふるさとに來て
咳せし男

意地悪の大工の子などもかなしかり
戰に出でしが
生きてかへらず

年ごとに肺病やみの殖えてゆく
村に迎へし

若き醫者かな

わが村に
初めてイエス・クリストの道を説きたる
若き女かな

これらは勿論農民詩といふわけではない。しかし、こゝに歌はれつゝあるものが、日本資本主義の成長期における農村の赤裸々な姿を歌つた彼の「思郷の歌」として十分注意するに足りるであらう。前にも述べた通り、こゝでも啄木の政治的低さは問題なく批判できる。從つてこの「思郷の歌」がわれ〳〵の今日それをまねて歌ふべきものでないこともいふまでもなからう。しかし、これらの歌々について人は述べてゐる「これらの歌には、農民村の農民たちが、資本主義の……下に沒落してゆく狀態や、農村の子弟たちが生活の資をもとめてちり〳〵ばら〳〵に故鄕をすてゝ散らばつてゆく有樣や、また病んで村へ歸るもの、肺病の農村への浸潤、宗敎文化の傳播の經緯など、興深く一讀して我々の胸を撲つものがある」（坪野哲久）と。まさにその通りであると私も思ふ。

では、それにしても政治的、イデオロギー的にはこんなに低調であり、實際切りきさんで批判

するには最もよい對象であり乍ら、なぜこれらの歌はわれ〱の胸を深く撲つことが出來るのであらうか。それは解り切つてゐる。現實への眞實感が、いつはりなく歌はれてゐるから――といへばもう話は終りであるが、私はかつて彼の詩の紙背にうごく精神的氣魄について、斯ういふ意味の文章をかいたことがある。

「誰でも啄木の歌をよんでそこに感じるものは、同じ方向をむいてゐる彼の『觀照主義』そのものであらう、全く彼のうたの歌ひ方は『刹那々々の感じを愛惜する』彼の觀照世界を記錄的に描寫してゐるにすぎない。從つて、彼の歌のわれ〱に對する親しみは、だからその限り極めて非積極的ですらあるにもかゝはらず、その紙背に介在する格鬪の精神は、例へば飢餓につかれた當時の東北農民の陰慘な姿と、それを觀照する彼の精神的欲求との斷層の描寫において、或に病みてもなほ……を論じる精神的氣慨と、病める已れの肉體との間の斷層の描寫において、何よりも鏡烈な逍眞力を持つ。これは何故であらうか。私はしばしば文學（詩歌）の境地が『人間の非力と暴力的た現實との間に存する間隙を縫ひ合す世界にあり、且つ之を縫ひ合す仕事こそがレアリズム文學の道であると考へる。』啄木の眞實は消極的であつた。それはたゞ已れに叫び、感傷の涙をそゝるの類に近いものでさへあつた。しかもその感情が單に月を歌ひ花をうたふに在らずして、自己と現實との間の斷層、そこを縫ひ合さうとする格鬪の精神をもつて歌ひあげてゐるとこ

ろに、彼の詩歌の紙背から衝挙する眞實性があるのではないか」と。私は今も斯う考へる。

これを要するに問題は單に農民詩に限らずわれ〳〵が人を打つ詩を欲するといふなら、藝術家の眞實感を、いつはらず表現する外に道はないであらう。たゞ注意することは一體人をうつといふことが如何やうにでも打てることだ。或ひは怪奇的に、或ひは英雄的に、或ひに涅良に……、等々、ところで例へば「涅良」について考へよう。ゴリキイは述べてゐる。

「善行と惡行との數的關係をみれば、ブルジョア社會に於ては露骨な惡行の數の方が、うたがはしい善行よりも遙かにまさつてゐることが判る。そしてこのこと一つでもブルジョア的精神文化の道德的價値をはつきりとわれ〳〵に語つてゐる。善行といふけれども、有害なものがある。まづ「涅良」について言はう。それは愚鈍の代名詞ではないか。小市民社會の善行と惡行が、やはり長い間小市民的概念の中で養はれて來た勞農大衆に或る程度まで固有なものとなつてゐることは自明である。だからプロレタリア自身が腐敗しきつた、しかも粘着性をもつた小市民的イデオロギーの網の中から自分を解放する力を持たぬとしたら、そこから自分の階級を解放する眞劍で果敢な鬪士となることは出來ない。これについてはプロレタリア文學の方面で活動する人々がはつきりと深く意識してる必要がある」と。

われ〳〵はこのゴリキイの言葉に對して何の批判する言葉も持たぬ。が、こゝでゴリキイの意

味と關聯して啄木の眞實感を想起せよ――われ〳〵は彼の感傷的、純眞さに打たれた。だが、その打ち方は極めて、消極的であつた。われ〳〵は彼のこの消極性を學んではならぬ。なぜといふに、われ〳〵は依然として今日もプロレタリア文學を建設しようとする詩人であり、しかもいつはらざる自己の內部に多くの小市民的善良性を保存する一個の良心的存在に外ならないからだ。われ〳〵の本質は消極的である。われ〳〵の欲するものは時代に對する積極的な見解及びそれの藝術創造における實踐である。「格鬪する精神」の氣魄はこゝでも激しい要求を生きざるを得ない。われ〳〵が啄木の藝術に消極的にしか見出し得ぬもの――それを積極性に轉化する仕事こそが彼の藝術を繼承する唯一の正當な方法だとすれば、われ〳〵はわれ〳〵の時代のインテリに與へられた尊いイデオロギーの實踐化に、技術――形式等における新領野の開拓にはげしく格鬪しつゞけることこそ必要であらう。若干、問題は農民詩の問題とはそれたが、前の文章をよんでこれだけのことは是非自己批判のためにも附言しておきたいものであつた。

九、啄木會に關する感想

――その組織、任務に關する考察――

一年前に書いたこの文章をそのまゝ訂正せずに君に差上げることを許して戴きたい。——

「——啄木會は昨年末以來（一九三二年末）殆んど解散の狀態になつてゐます。そのうちの二三の主な連中はそれ〲發展した形で仕事についてゐますし、殘つた連中は駄目になつてしまひました。こんなことになつたのも指導的な分子の方針がよくなかつたのでせう。いろいろ考へさせられる問題がありますネ。」

斯う云ふ君からの手紙を讀んで、今、僕は君が「いろ〲考へさせられる問題がありますネ」と云つた、その問題について考へ込んでゐる君を想像してゐる。君はどう云ふ風に考へさせられる問題を感じてゐるのか、少しもそれを明示してくれてゐない。「何故、啄木會が解散の狀態になつたか？」また「何故、二三のものだけが發展的な形で仕事につき、他のものが駄目になつたか」そして「どう云ふ風に指導的な方針がよくなかつたか？」それを考へることなしには居られない君は、しかしたゞ考へさせられるだけで、解散の狀態になつてゐる啄木會をそのまゝ放擲しておかうといふのだらうか。僕はさうであつてはならないと思ふ。といふのは、この世界でもめづらしい文學グループがなくなることを惜むからではない。その一かたまりのグループに組織された啄木愛好者の中には、たつた二三の主だつた連中をのみ發展した形で仕事につかせるばかりではなく、定めし、進步的な多くの友がそのすつかり駄目になつたと考へられる連中の中にもあつ

たであらうことを考へ、それを惜まずにはおけないからだ。

今、僕もすつかりいろ／＼のことを考へさせられてゐる。そして、僕は僕の考へさゝられつゝある點を君に書き送らうと思ふ。

×

一體、啄木會がどんな啄木の愛好者たちによつて組織され、從つてどんな活動をすることを彼等が欲しておつたかを、先づ考へてみよう。こゝに「啄木を知つた動機」について、數人の愛好者達の書いた文章がある。

「或る雜誌に『一握の砂』の我を愛する歌及び煙一の中の歌が出てゐた。それによつて啄木の一種變つた短歌の型に目をみはつたものでした。

大といふ字を百あまり砂に書き死ぬことをやめて歸り來たれり。

はたらけどはたらけど猶わが生活楽にならざりぢつと手を見る。

石をもて追はるゝごとくふるさとを出でしかなしみ消ゆる時なし。

斯うした短歌に心をひかれた私は…その生ひ立ちとか生涯などを知り、薄命だつた啄木に同情したのです。」

「先生は親切に啄木の人となりを話してくれ、その上私に『一握の砂』と『悲しき玩具』とを貸

してくれたのです。先生の話に彼が薄命の詩人であり、ソシャリストであつたと云ふことに私の若い胸は一層ひきつけられたのです。」

「熱情的な若い新任の教師はかなり熱心に啄木の不遇なる境涯を話したり、外の啄木の歌を披講きしたりして教へてくれた。……

はたらけど働けど猶わが生活楽にならざりぢつと手を見る。

いつかの新聞にこの歌を掲げて「現下の農村はかくの如くだ」と評してあつた。農村に生れて農村に生活する私であるから、これを是認すべき責任がある。……かくして若い私は一歩一歩と啄木の足もとに近づいてゐる。結局、――静かに自己を凝視しつゝ、それを歌に盛つてゆくことが現在及び將來の私の願ひの全部である。」

「……彼が薄倖の天才詩人であつたといふことを知つた。あゝ……あの歌集を初めて讀んだ時の氣持……僕はうす暗い裏長屋の中で泣きながらむさぼり讀んだ。何故に泣いたか！　僕の苦しみ、悩み、悲しみ、よろこびは皆啄木が歌つてくれてゐた。……貧しいため一家は不和だつた。こんな生活の中から生れて來る僕の感情は皆啄木が歌つてくれてゐた。」

「私は赤裸々を愛します。其故に尚更ら啄木の歌を愛します」

「餘りにさびしい現實に育つた私に、あの啄木の美しい詩と歌とはなくてはならないその日の糧

註（以上引用文はすべて雑誌「呼子と口笛」第二巻第四號から）

——何よりも、こゝで我々は啄木を愛するものゝ苦悶といふ風なものを感じとることが川柳ないであらうか。と云ふより、こゝで僕はいつだつたか君に「啄木の頭には苦悶はあつたが黨派的精神はなかつた」と話したことを思ひ出す。啄木の頭に明確な黨派的精神が宿つてゐなかつたといふことは、彼が「歌を悲しい玩具」と投げ出したと同じ悲劇であつた。が、それにしても苦悶する心、懐疑する心にどんな進歩性があるかは、君もよく知つてゐることゝ思ふ。けだし、僕が斯く云ふ意味は、かつて啄木が經驗しつゝあつた苦悶の、それと同じものを、今、如何に多くの啄木の愛好家たちが、その身に實感し、且つ實感するが故により深く啄木を愛する心に進みつゝあることを認知せずにはおれないからだ。

「赤裸々を愛するが故に啄木を愛します。」「靜かに自己を凝視したいが故に啄木を愛します。」「あまりに淋しい現實に育つた私故に啄木を愛します。」等々——なる程、謂ふ言葉の内容には黨派的なものゝ見方はないし、又、その用語の不充分さは、彼等の眞實に欲するものが何であるかといふ風には述べられてゐないとしても、僕はこれらの愛好家達のいづれも若くして淋しい現實を感じ、そこから「薄倖なる天才詩人、ソシャリスト石川啄木」に親しみ近づいて行かうとする苦悶の感情——その中に含まれた進歩性を見落すわけには行かないものだ。しかも斯うした啄木

の愛好家達が、そこに何等六ケ敷手續きや制限もなく、その愛する啄木を中心に彼等の淋しい現實生活を慰め合ひ「啄木をより深く知る」目的をもつて結成された文學的グループが、謂ふところの啄木會であることは、君からいつか説明を聞いた通りであるが、それにしても、では君は斯う云ふ有意義な啄木會を解散の狀態に導いた指導の惡るさが何處にあつたと考へるか？

×

先づ考へてみたいことは「資本主義下に於けるプロレタリアートと文化・文學組織」の問題である。

しかし、このことは僕が今更言ふまでもなく、同志藏原惟人がその著「プロレタリアートと文化の問題」の中で、極めて明快に述べてゐる。彼はレーニンが如何に過去の文化的遺産を攝取することを重視したかといふことについて述べた所で、次のやうにレーニンを引用してゐる。

「人類社會によつて創り出されたすべてのものを彼（マルクス）は批判的に取り上げ、一つの點も注意なしには殘さなかつた。人類の思想によつて、創られたすべてのものを彼は加工し、批判にかけ勞働者運動の上に於て確かめて、ブルジョア的枠によつて限定され、或はブルジョア的偏見と結びつけられてゐる人々が爲し得なかつた結論を作り上げた。」

「このことを吾々は例へばプロレタリア文化について語る時、頭に入れて置かなければならな

い。人類の全發展によつて創り出された文化の正確な知識によつてのみ、その加工によつてのみプロレタリア文化は建設するといふ、はつきりした理解なくして——この理解なくして我々はこの任務を解決することは出來ない。」

「プロレタリア文化は何處からともなく飛び出して來るものでもなく、またプロレタリア文化の專門家と自稱してゐる人々の頭の中で作りあげられるものでもない。これ等すべては完全な愚論である。プロレタリア文化は、人類が資本主義社會、地主社會、官僚社會の………作り上げた所の知識の蓄積の合法的發展でなければならない。」

「これ等すべての道や小徑は、あたかもマルクスによつて作り上げられた經濟學が、人類社會の行くべき所を示し、階級鬪爭へ、プロレタリア………の過程を指示したのと同じやうに、プロレタリア文化へと導いて來たし、導きつゝあるし、また導き續けるであらう」と。

　卽ちレーニンが謂ふところは「我々がプロレタリア文化を建設し得るためには、我々は『人類が資本主義社會、地主社會、官僚社會の………作り上げた所の知識の蓄積』を批判にかけ、その中に價値のあるものを攝取し得なければならない」といふに在り、それはまた文化の繼續性について全く重要な思想と云はねばならないところのものである。

　ところで、今僕は、啄木會の指導の失敗といふことよりも、啄木會がそれ自體として持つてゐ

なければならなかつた組識的任務について考へるとき、必然に、このレーニンの思想と結び合せて考へずには居れないものだ。

それはなぜか？

君も話してゐた通り、成程、全國的に組織された啄木會は、極めて無目的に（といふのはたゞ啄木の歌を愛し、追慕し、静かに自己を凝視しようといふだけで集つた所のグループなるが故に）組織された文學的グループであるとは云へ、それが現代に組織されたといふことの中には、必然にかゝる資本主義下に組織される文學グループが、何をなすべきかといふ客観的な任務を、（グループの成員がそれを意識してゐると否とにかゝはらず）必要として持つてゐなければならないことは自明であるからである。

では、それはどんな任務か？

云ふまでもなく彼等が愛する啄木の歌を正しく理解する任務であり、更に理解することによつて何を彼等が現代に於てなさねばならぬかを知る任務であり、且つ、それを實踐化するところの任務である。そしてこのことを已に充分に理解してゐたグループメンバーのあつた證據に、前掲「呼子と口笛」へ投書してゐる一人は書いてゐる。

「――吾々は新しき明日へのために増々努力をしなければならぬ。資本主義文化に禍ひされゆが

められ、變色されたプロレタリア藝術は吾々プロレタリアートの手によつて奪ひかへし、その本質を引きづり出すことに正しきプロレタリア藝術の認識があり、その認識を未來へ進展せしむることに、よりプロレタリア藝術の使命がある。

プロレタリア藝術の樹立へ！——この言葉が吾々の結成をよく語つてゐる。呼子と口笛の同志諸君、この正しき藝術の確立のために結成に溢れる熱情を携へ……云々」

こゝで、この投書家の謂ふところは、その言葉の未熟にもかゝはらず、全く正しい。即ち、かの啄木會こそ、全く、その組織的な意義乃至は任務が、主觀的には極めて無目的な（換言すればブルジョア的茶話會的な）啄木愛好家の自己慰安會であつたにせよ、その客觀的任務が啄木の正系を繼承するための「彼の苦悶」を批判にかけ、その中から價値あるものを攝取して、その到達した地點よりも高度なもの——いはんや來るべき全人類文化・文學の基礎となるものゝ建設に資せねばならなかつたことは自明である。然るに、君が謂ふ指導の任にあたるものゝ失敗は、彼等がこの重要な客觀的任務について考慮しなかつたところにあるのではないかと僕は考へる。否、勿論かゝる客觀的任務について考慮するところがあり乍ら、全く指導者たちが、第一にはかゝる任務について考慮し得ないものゝ多かつた大多數の啄木會に、その活動の方針を與へなかつた點で、第二にはそれを單なる文學愛好家のグループとしてプロレタリア文化運動の主體的組織と結

合させることを放棄してゐた點で、――所謂實踐的日和見主義の誤謬を犯した結果が、遂に我々の誇るべき啄木會を「殆んど解散の状態」に瀕せしめるといふ悲劇を負はしめたのではないかと考へる。これは全くプロレタリア文化の建設を信じないもの丶犯す失敗として充分に自己批判しなければならないことだ。（こ丶にはまだ新しく考へ直す問題があるね。）

×

ところで、しば／＼僕は啄木會の將來について考へる時、そこに「火を繼ぐもの」の情熱を感ぜずにはおられないものだ。

即ち、こ丶で「火を繼ぐもの」といふのは、消えかゝる火を守り、それを消しとめないところの、そしていつでも必要に應じてその火をあふり燃し立てるところの火夫のことである。云ふまでもなく、今、日本の資本主義は、内に外に、多難な状態をはらんでゐる。それは毎朝の新聞を見てもわかるとほり、いはゆる非常時の……が豫告され、仲々物々しい……限りだ。一々あげてかぞへたるまでもないだらう。不景氣、自殺者の激増、ギャング的風景等々斯う數へて行つただけでも、かつて啄木が「今に敵の存在について意識しなければならない時期である」といふ意味のことを言つた時より、より深化した情勢が感じられるし、しかも、これらの情勢の中で、自己の……うとするプロレタリア階級は、そこに未曾有の沈鬱な空氣を形成し乍ら所謂階級

對立の情勢を生んでゐる。まことにかゝる時期に於ける人間の苦惱は、必然にかつて啄木が感じたと同じ方向に向はしめられるであらうことは自明であるし、且つ、時代に對して斯くの如く「苦悶する心」「憤怒する心」が、啄木の歌をその進歩の友とし、更にそこから「發展した形で仕事につく」ことを欲するに至るであらうことも自明である

　　はたらけど働けど猶わが生活業にならざりぢつと手を見る。

――農村に生れて農村に生活する私であるから、これを是認する責任がある。」

すでに、斯う一人の投書家が叫んでゐるのを見る時、僕はこの投書家の心理を、(未だそこには啄木の歌を批判的に考察する力が缺けてゐるとは言へ)進歩の友――火を繼ぐ友として感ぜずには居られないものだ。

否、これは單に未だプロレタリア的意識を明確に持たないこの投書家たちだけの問題ではない。我々にしてからが、今、我々の前に横たはつてゐる苦悶の道は、そこで社會主義者を止めるか、更に突進んで革新の道に驀進するかの岐路に立つた晩年の啄木の道に通じてゐることを感ぜずには居られない。それは實際その通りである。「火を吐くやうに現代の社會組織を呪咀した口から、涙ぐましく一切の現實を此儘肯定しようとする血の出るやうな言葉」を吐いた啄木、或る時は「女に讀ませる週刊新聞」を、或る時は「農民に讀ませる週刊新聞」を發刊したい夢想をその

空想の題目とした啄木、更に或る時は自分を信じ切れなくなつて山に入りたいと考へた啄木、――これらの苦悶、動揺は、一ツとして今われ〳〵の題目でないものはない。我々は、プロレタリア作家としての自己の任務、節操を全うするか、或は引き下つて敗亡の中の安穏な生活に生きるかの岐路に立つてゐる。この現代のインテリゲンチャの苦悶の道とひとしい啄木の道！ けだし、我々の道は、より困難な、そして實際かつて見られぬ苦悶の道（といふことは我々が啄木の道を、そしてその道を更に實踐的にきり開いて行つた同志小林の道を蕩進するといふことが、現代に於ては必然に命をかけて進まねばならない道――……）であることは、恐らく君も君自身に及び君の周圍から日常にそれを感じつゝあることゝ思ふ。僕はかく自覺する己れを恐れる。

ところで、今や解散の狀態にある啄木會の將來は？――

明らかに、それが今日の狀態のまゝで再び以前の繁榮に返らないとしても、僕は決してそのことを殘念に考へようとは思はない。よし、靜かに啄木の生涯、その思想、その詩歌を味ふ文學的な、あまりにブルジョア文學的なグループがなくならうと、啄木の火を繼ぐものは、防ぐことなく生み出されるであらうし、又、それは我々と共にプロレタリア文化・文學の建設の中へ、燿燿と突進して行くであらう。

「我々は啄木が殘した全思想、全詩歌を攝取して、（加工し、批判にかけ、勞働運動の上に於て確

め）それによつて社會主義的文化の建設に力を致さねばならない。」

これが僕の啄木會に關する感想のすべてだ。

×

以上、僕は「いろ／＼考へさせられる所がありますネ」と云つた君の問題について考へてみたが、この僕の考へはどうだらう。是非、君の意見を聞き度いものだ。

それから、此の頃「啄木の日記」のことがいろ／＼問題になつてゐる樣だが、あれは僕には興味がないネ。一方には作家を作家として研究出來ない惡蒐集家の可憐な功名慾が見られるし、又一方には「遺言」といふことを社會的な意味で解決出來ないかたくなさ（そこには兩者の間に感情的ないろ／＼のこだわりもあるやうだが――）がどうかと思はれる。勿論そんなことは僕には係りはないが、いづれにしても啄木をあゝ云ふ風に爭はせることはよくないことだ。

もう一ツ――忘れずに言つておき度いが君のこのごろの歌には隨分云ひ分があるネ。僕もこれからもつと短歌、俳句の領分へ入つて研究度いと思つてゐる。

――一九三三、四、一三、――

一〇　啄木の小説を推す

啄木の小説については、これまであまりに人々からかへりみられなかつたことと私は記憶する。しかし、私は世に傳唱せられる彼の詩歌や、その思想と比較してみて、その小説をおとれりとして來た世評には、あまり賛成しかねる一人である。本書では最初から彼の小説については全然それにふれなかつたが、私は幼い頃から彼の小説を愛讀して來た一人でこの機會に若干彼の小説について考察し、ひとの注意をうながすことにしたい。——極めて數少い創作を、彼は次のやうな順序で描いてゐる。（年譜より）

明治三十九年（廿一歳）

「おもかげ」（七月作）……………

「雲は天才である」（七月作）…………

「葬列」（十一月作）………………「明星」發表

明治四十年（廿二歳）

「漂泊」（七月作）………………「紅苜蓿」發表

「牛乳壜」（十一、二月？）…………

明治四十一年（廿三歳）

「菊池君」（五月作）……………

「病院の窓」（五月作）……………

「母」（五月作）……………

「二筋の血」（六月作）……………

「天鵞絨」（六月作）……………

「赤痢」（十二月作）……………「スバル」發表

「鳥影」（十一、二月作）……………「東京毎日新聞」發表

明治四十二年（廿四歳）

「足跡」（二月作）……………「スバル」發表

「葉書」（五月作）……………

明治四十三年（廿五歳）

「道」（三月作）……………「新小説」發表

「我等の一團と彼」（五月作）……………

まだ外にあるかも知れない。しかし、私の讀んだものはこれらのうちでも極めて數少く、特にこゝで推賞したいと考へるものは更にその數少いうちの二三ではある。

○

一體、啄木がはじめて小說に手をふれた明治三十九年は藤村がその有名な「破戒」を公にした年であつた。自然主義の芽は、漸くこの國の一方から起りはじめ、特に敗戰國、ロシヤ文學が大きな力で流れ込みはじめてをつた。「破戒」がドストイェフスキーの影響をうけて生れたものであることはひとの一致する批評である。しかし、私の見る啄木は、當時、勿論未だ自然主義を十分に解してゐるとは考へられないやうだ。例へば「雲は天才である」とか「葬列」とかを見てみても、その寫實主義的な傾向は、當時の日本文學が自然主義へ移行する前夜の準備行程として行はれた寫實文學の影響はあるとしても、その內容は（特に「雲は天才である」は）全體としてロマンチックな、當時のいはゆる「憧憬文學」の一種である。この「憧憬」は明治四十一年に描いた「鳥影」にも大きな影を投げてゐるが、しかし、同じ年にかいた「病院の窓」「天鵞絨」「赤痢」などには全く潑剌たる自然主義文學なるものが考へられる。その後に書いた「足跡」「葉書」などは彼の野心的な姿がよく出てゐるが、どちらかといへば作全體の傾向としては初期のものに近く、「道」は「病院の窓」「天鵞絨」につゞく自然主義的な作品であらうと考へられる。單色の平明さに比較してヴォリュームやトーンが低い作品である。「我等の一團と彼」は明治四十三年における彼の論說「明日の考察」と對應するものを一端に示してゐるが、之を社會主義小說といふには、ひとの肯定し難いところであらう。

ところで、これらの作品のうち世に啄木の小説として傳唱されてゐるものは、從來、「雲は天才である」とか「鳥影」であるとか「我等の一團と彼」などであつた。しかし、私はこれらの小説がすべて野心的であり、又、私の個人的好嫌から云つても「鳥影」など昔から愛讀して來た作品ではあるが、やつぱり啄木を優れた作家として推賞し得るなら、それにふさはしい作品として「病院の窓」「天鵞絨」「二筋の血」次ぎに「赤痢」「葉書」「道」等の自然主義的作品をあげなければならないと思ふ。本來小説家としての啄木の缺點はしばしば彼の議論好きが、なまのまゝで小説中に現はれることではないだらうか。「雲は天才である」においても、「葬列」においても、又「我等の一團と彼」においてもそのことは十分いへるし、特に「我等の一團と彼」については、私はこれを小説といふよりも、たゞ小説の形をなした感想であり評論といふ可きではないかと考へてゐる。その鋭い人間の解剖にはやゝ恐ろしいものを感じるが、よみ終つて觀照するとき、描かれた人物の顏が漠然として、明確に浮んで來ない物足りなさを味はずには居れないものがあつた。

しかし「病院の窓」以下、彼のすぐれた自然主義的作品からは、全く右の缺點が救はれてゐるし、特に彼の詩歌における觀照主義が影を消して、全く、異彩あるものを考へしめる。

○

先づ「病院の窓」その他について簡單に考察してみよう。私は大方彼におけるどの小説をよん

でも、その人生における苦悶の解釋が、極めて端的であること――いひかへるなら吟味の不足にしば〳〵不滿を感じさゝれるものである。不滿はしかし乍ら彼の若さが、人生をよりいためて考量し得る年齡に到らないことから來る制約であらうが、つねづね、その詩歌における觀照の深さと比較して、小說そのものゝ味ひを稀せまくしてゐることををしまずには居られぬものである。この「病院の窓」においても僅かにさういふ缺點はあるが、しかし、こゝではめづらしくおのれをいためて一人の人間の生活的な意欲を掘り下げてゐるところに意義あるものが考へられるやうである。

扱はれた野村は、北海道における文化的發達の補狀態を背景とした一新聞記者の生活のすさび及びその失意恐怖を描いたもの、當時の自然主義文學が日常茶飯事的な愛慾生活、かゝる意味での個人的な煩悶等を描いたのに反して、啄木が早くも一個の勞働生活から取材し、或る階級觀念に依存するところの人生の煩悶を描かうとしてゐる點は注目に値するものである。この作品に對するわれ〳〵の不滿は、啄木が未だ客觀的現實の眞に到らずして、たゞ與へられたる主人公野村の焦燥や不安を描くことに終つてゐる點に在る。若し何が故にこんなにこの主人公が焦燥しなければならないのかを考へることが出來たら、作者が野村に、

「私はモウ何處へも行く所のない男です。種々な事をやつて來ました。そして方々步いて來まし

た。そして私はモウ行くところがありません。罷めさゝれると非職です。罷めさせられると死にます。死ぬ許りです。飢えて死ぬ許りです。云々」と呼ばせてゐる意味が、もつと明瞭に、具體的な實質として讀者に訴へ得たらうと考へられる。しかしこの作なんぞはその邊にころがつてゐるプロレタリア作品と比べてもずつと優れてゐるだらう。

「天鵞絨」も彼の小説としては代表的な一つではないかと考へられる。こゝにはしばしば彼が無批判に描いた「小ナポレオン」の姿が消えて、東北農村におけるとるに足りない村の一事件——二人の村娘が誘はれて上京する——が極めて生彩ある抒情詩として描かれてゐるところに、私は感服が持てるし、特に二人の女の家庭的な環境から來る性格の相違を最も巧妙に描寫してゐる點は、大いに學ぶべきところではないかと思ふ。「赤痢」「葉書」は一つの幻滅を描いた好箇の短篇であり、「道」は彼の「小學校もの」でも、「雲は天才である」「葉書」等に見られるいかつさ（肩をいからせたやうな）がなくて、極めて自然的なリリカルな作品である。

○

啄木の小説をみてみて、われ／＼が第一に氣づくことは、彼が極めて適確に、當時の農村に殘存する封建的遺制に適發し、暴露してゐる點ではないだらうか。「雲は天才である」における小學校教育の暴露、「葉書」、「道」における時代への揶揄、われ／＼は時として彼の若さに苦笑させら

れ乍ら、しかし如何なる場合にも彼が極めて正確に封建的な存在を暴露しつゝあるところでは、その面白さに引づられるものである。一體小説家としての彼は、可成り氣のいゝ作家ではないかと思ふ。つねに女性をいたはり、彼女らをいたはる限り、描くといふ事實から遠ざからうとする憾みはあるが、これも矢張り彼の若さが、それを敢てさせてゐるのではないかと考へられるし、そのことは彼が已れを主人公として描かうとした場合に「ナポレオン」を持ち出して來るのと同樣である。又、それと同じ原因からつねに野心的な作品を描かうとし、より野心的であらうとする限り、兎もすれば現實から浮足を立たせやうとするのも彼の若さにとつてせんないことであつたらう。

○

「我等の一團と彼」については、私はこの作が小説といふよりも感想乃至は批評を、小説體にして敍述してゐるものではないかと疑問をもつた。實際、その通りであると思ふ。特に彼がある成心をもつてこの作にかゝり、そのために極めて野心的ではあるが、全體としては失敗の作といふに、誰も反對は出來まいと考へる。しかし乍ら、一應、小説としては失敗の作とは考へられ乍ら、この作が比較的印象強く讀者にせまつて來るのは、描かうとしてゐる題材に、乃至は彼が主人公高橋彦太郎をかりて、時代の社會制度、家族制度に疑惑を向けさせ、當時の彼が時代の眞實

な何ものかを探してやまなかつたと同じ心理で、現實に對せしめようとしてゐる點に在るのではないかと思ふ。それも今日の發達した「社會科學」の時代にあつて、彼のもんもんと探りつゝある社會制度の缺陷、家族制度の缺陷は、退屈ですらある。しかし、我々の學ぶべき點は、彼の解決が不鮮明である點よりも、彼があらゆる場合を考量に入れて、一つの眞理を剔抉しようとする克明な態度でなければなるまい。例へば逢坂といふ一人のキザなモダーンボーイについての考量にしても、この男を頭から感情的に嫌だときめてしまはず、彼の存在をあらゆる方面から眺めて、それの存在の價値を肯定しようとする時、われ〳〵はさうして彼がその存在を肯定したことよりも、肯定せんとして煩惑する態度に、たくましいリアリストの道を感じ得るものである。

○

兎まれ、啄木の小說が當時の日本文學界に如何なる位置を占めるものであるかは、尙多く同じ時代の諸作家と比較研究してみる必要があると考へられるが、私のこゝで述べたかつたのは、單に彼の小說が世に傳唱される詩歌と比較して、決して之を劣れりとすることの出來ない點を指摘し、ひとの注目を促せば足りるのである。――私は敢て啄木の小說を過大に評價しようと欲するものではないが、それと同時に又過少に評價することの許さるべきでないことを痛感して、このそまつな一文を草したわけである。こゝからいよ〳〵彼の小說における人物の諸性格論にまで進

入つて、はじめて、この文章は活氣を持つてくる筈であるが、それはこれからの課題にのこしておくことにする。

——一九三四、四、四——

四、啄木における現段階的意義

はしがき

この文章は今まで述べて來たところから、約一ケ年後に草するものである。この一ケ年近くの期間は、日本の資本主義社會がかつてない保守に傾き、いはゆる非常事の尖鋭化した……情態をはらみつゝ國際的國內的な多忙を極めた時期であつた。そのことは文學運動の領野においても大體一致してゐて、この期間ほど日本文學が不安と動亂の闇を經驗し乍ら、作家たちがそのうつむき勝ちた生活の中で激しく自己を掘り下げようと苦悶した時期はかつてなかつた。そこにはいろ／＼な文學的提唱をみた。卽ち一方ブルジョア文學の領野からは「不安の文學」に關する提唱と討論があり、それは次第に深刻なレアリズム藝術の確立に立ち向つたのに對して、他方プロレタリア文學においても從來この運動が掲げて來た創作スローガン「唯物辨證法的創作方法」の修正が必要とされて、新たに「社會主義的レアリズム」の提唱を見、且つこの聲の中から遙かに「文藝復興」の聲さへ呼びつゝ新しい文學建設の意義が强調せらるに到つた。

しかもこのやうな現實的嵐の時代を背景として、そこに從來の文學運動の全般に關する新たな再評價が必要とされるに到つた時、私は今まで述べて來た啄木の文學的遺産の繼承の問題に關し若干再考すべき餘地の存することを認めねばならなくなつたし、特に彼が日本の自然主義文學運

動の凋落期に時代の全般的な考察に向はうとして示し得た數々の教訓「反動期における文學者と生活の問題」について、及び、この一ヶ年間における啄木傳唱の中の彼の思想的眞實性に對する過重評價、並びに、その正系を嗣がうとするわれ／＼の文學的討論の中で示されて來た彼の短歌への過少評價について、その誤認を訂正しなければならないことを痛感して止まぬものだ。

以下、それらの問題について簡單な所懐を述べてみよう。

一、反動期における作家と生活の問題

啄木が日本自然主義の凋落期に際して、どんな苦悶を經驗して來たかについては、すでに多くの人もこれを論じ、私も今迄の文章の中で充分それを見て來た。從つてこゝでは再び同じやうな彼の言葉を繰返し述べる煩らはしさを厭しないとしても、やつぱり二三彼の感想の中から引用してみよう。明治四十三年一月九日付、大島經男氏宛の手紙に彼は書いてゐる。

「函館にゐてお世話になつた頃を考へるとボーッとしてゐます。あの頃の私は實に一個の憐れなる、卑怯なる空想家でした。あらゆる事實、あらゆる正しい理（ことわり）を回避して、自家の貧弱なる空想の中にかくれてゐたにすぎません。私の半生を貫く反抗的精神、その精神は、然し乍ら、つまり

自分で自分に反抗してゐたに過ぎません。それと氣づかずに、唯反抗その事にやりどころなき自分の感情を託して、咨嗟し、慷慨し、自矜してゐた臆病な無識者は、遂に内外兩面の意味に於て『破産』を免れませんでした。自然主義は、私のこの思想上の破産に對して決して救濟者ではありませんでした。寧ろ執達吏のやうな役目を以てあらはれきました。上京後一年有餘の私の努力——その空しき努力は、要するにこの破産が一時的の恐慌から起つたのではなく、長き深き原因に基いてゐたものである事を明らかにしたに過ぎません。」

又「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」(明治四十一年十二月)の中では、

「長谷川天溪氏は、嘗て其の自然主義の立場から『國家』といふ問題を取扱つた時——一見無雜作に見える苦しい誤魔化しを試みた。(と、私は信ずる。)謂ふが如く、自然主義は何の理想も解決も要求せず、在るがまゝを在るがまゝに見るが故に、秋毫も國家の存在と牴觸する事がないならば、其所謂舊道德の虚僞に對して戰つた勇敢な戰も、遂に同じ理由から名の無い戰ひになりはしないか。從來及び現在の世界を觀察するに當つて、道德の性質及び發達を國家といふ組織から分離して考へる事は、極めて明白な誤謬である——寧ろ日本人に最も特有な卑怯である。その事あつて以來長谷川氏の言は、常に一處に立止つてゐるやうに私には見える。言ふ事、說く事凡てその時までに言つた事を繰返し、若しくは補正してゐるやうに見える。田山氏も亦、嘗て『自然主義を

單に文藝上の問題として考へて見たい」といふ意味のことを述べられた。氏の立場としては諒とすべき言葉であるが、一方から見れば、其處に『或物』を回避した態度がないと言へない。……………」

と、述べ當時の自然主義作家・理論家たちが藝術の殿堂に逃げ込もうとしてゐた事實を鋭烈に批判し乍ら、更に、その評論「一年間の回顧」(四十二年十二月)で謂ふ。

「一度解放された文學の主潮は、然し乍ら色々の理由から、まだ行くべき處まで行かずに、途中で停滯し、弛緩しようとする傾向を作つた。如何なる事件、如何なる運動にあつても、時々斯ういふ事に出會す事は免れないものである。而してそれは明治四十二年前半期に於ける我が文壇の概勢であつた。『色々の理由』のうちには、我々が大體に於て、自然主義それ自身の主張に自己及び自己の文學を全然解放するだけの力の無かつた事と、外部に有力な判斷者の無かつた事とを數へる事が出來る。今から考へて見て、丁度一年以前、自然主義は今や確實に文壇を占領したと呼號して明治四十二年を迎へた一批評家の言には、一は喜ぶべき、一は悲しき兩樣の意味があつたやうに思はれる。……譬へて言ふならば『自然主義の第一期』といふ銀行が、あの頃になつて急に營業資金の不足を告げ、新株の募集も出來ず、廻收も出來ず、遂々固定資本なり積立金なりに手を付けたといふ狀態である。つまり頭がからつぽになつたのである。而して觀照と實行に關

する問題は、何時の間にか燗冷めの酒の如く捨てられてしまつた。」と、――かくして、我がその「性急な思想」の中で、

「日本は其國家組織の根柢の堅く、且つ深い點に於て、何れの國にも優つてる國である。從つて若し此處に眞に國家と個人との關係に就いて眞面目に疑惑を懷いた人があるとするならば、其人の疑惑乃至反抗は、同じ疑惑を懷いた何れの國の人よりも深く、強く、痛切でなければならぬ筈である。そして輓近一部の日本人によつて起されたところの自然主義運動なるものは、舊道德、舊思想、舊習慣のすべてに對して反抗を試みたと同じ理由に於て、此國家といふ既定の權力に對しても、其懷疑の鋒尖きを向けねばならぬ性質のものであつた。」と述べつゝ、こゝから啄木がその疑惑をつきつめて彼の所謂明日の考察にまで及んだ時、われ／＼はその銳烈な社會主義思想の科學的確認を賞揚するよりも、（勿論そのことを大いに賞揚し乍ら）今は、もう一つ彼がその思想を突き進めるすがらに示し得た「文學者と實生活との交渉」について、「文學者も亦俗人である」といふ、その「俗人」と「文學者」との間に、當時の自然主義者たちが、一定の距離乃至は隔一線を引いて、遂にたゞ能よく自身を身ぶりの悲壯な文學者に祭り上げて來たことを痛論し、「故人長谷川二葉亭氏が、身生れて文學者でありながら、人から文學者であるといはれることを嫌つた」意義を賞揚して、自身「實社會と文學生活との間におかれた間隔を其のまゝにして笑つ

でおかうとするには私はあまりに俗人であつた」と述懐する、その「俗人」なるものと文學者との交渉についての、われ／＼の現在の見解を明らかにしておかねばならぬものを痛感せざるを得ぬものだ。

　では、しばらく現在の文壇的動向を探りながら、かゝる「俗人」なるものについての現實的意義を商量してみることにしよう。

○

　一體、今の時代が日本の作家・文學者にどういふ苦惱を負はしめてゐるか、又、この苦惱にいためられた作家たちの樣相が、如何に、明治四十二、三年代の日本自然主義の凋落期に似通ひ、且つそれをより深刻化した狀態に置いてゐるかは、ひとの知る通りである。まことに、それこそ、ブルジョア文學とプロレタリア文學との相違にかゝはらず、全くわが文學界を性急なスツールム・ウント・グラントの時代に驀進せしめつゝあるといふ以外にはないであらう。

　すなはち、先づそれらの樣相をブルジョア文學の一端からながめてみるのに、すでにわれ／＼の若干ふれて來た通り一九三三年代の前半から日本の若い文學者たちによつて眞面目に討論しはじめられた「不安の文學」に關する論題こそは、全くそれが問題とされるに到つた奥に深い、悲痛な性格の展示されてゐる點に注意すべきであつた。例へば、こゝに論者の一人、藤原定氏は昨

年（一九三三年）六月號「文學」誌上で、大體次の如き大意を述べてゐる。

――今日の文學における不安の樣相は、その不安の母胎たるものの相違によつて、三つの方面に分けることが出來る。その一つはつねに一定の社會的・政治的運動との關聯において發生するマルクス主義・無政府主義の文學であり、その二つは動搖しつゝある政治經濟組織もしくは一定の文化の下に在つてなほそれを新しき生命によつて止揚することを敢てしないものゝ文學（主として小市民的關心にのみ終始する文學）、更にその三つを生そのものが根源に有してゐる不安定を感じ、他の新しい眞の安定した生を求めるところの生意識に立脚する文學であるとし、特に、この第三のものゝ持つ根源的な不安――無より生への欲求に關する觀念的哲學的究明を、極めて剴明に討論しながら曰ふ。

「無は否定よりも根源的である。」「不安はむしろ不確かな存在が確かな存在たらんとする希望の中に生れたものであり、その希望が却つて死に出逢はしたところに不安の暗黒の側面が見られるのである。」「われ／＼は確かな存在たらんことを求める。しかし無のほかに確かなものは何ものもない。從つてわれ／＼は無の中に確かな存在を求めねばならぬ」「不安の文學が凡ゆる存在を顚倒し、凡ゆる人間を暗黑と絶望の淵に陷し入れながら、しかもなほひとを魅惑し、日常の生に感じないよろこびを與へるのは眞の不安のみがもちうる人間の根本的な希望である。」「不安の文學

がその闇闇に見出すものは自らを葬る深淵ばかりである。だからそれは凡ゆる存在の根柢を掘つて行つて無の深淵にまで達し、その中から光輝を掘り出さねばならないやうに運命づけられてゐる。だからひとがさう要求するならば、不安の文學をもつて主體的レアリズムと呼ぶことが出來やう。云々」

この議論はブルジョア作家、批評家の中でもいろ／＼に異議はあつたし、特に正宗白鳥氏の如きは「無の外に確かなものは何ものもない。從つてわれわれは無の中に確かな存在を求めなければならない」といつても、それが「求められなければ仕方があるまい」「そんな抽象的哲學的な考へは二三十年も前から考へてゐる」と突ぱねてゐるけれども、實はこの論文が如何に重要であつたかは、早く既に若い藝術家の中から「飢ゑても文學をやる」決意が述べられ、いふところの「不安の根柢を掘り下げて行く」すがらに、一方ジョイスやジイドなどの佛蘭西的な新心理主義文學の提唱と相反撥し、助成し合ひ乍ら、「自己をいためる文學」すなはちドストイェフスキーにおける彼のつとめて吟味する心理的苦惱へ（生活的理念としては新道徳の確立へ）その文學上のレアリズム精神を導入して行つた點を見ても明らかであつた。殊にわれ／＼は彼等がこの觀念的哲學的な「無明の世界」の肯定に立つて、そこで激しく自己を痛めながら、しかも遂に自身の不安をぬぐひ切れず、いふところの自己受難の境地に低廻する外は、依然として「本當に不安を突

き拔け、腹の底から不安を克服する」に到り得ないのを見る時、この「故郷を失つた文學」の永遠に救ひ切れない悲しむべき性格を、一層今の時代が負はさうとする反動期の特質として注意せずにはおかれぬものだ。

けだし、この樣にして日本文學が己れの故郷を失ひつゝある狀態は、他方プロレタリア文學の領野に於ても同樣であつた。（と私は考へる。）なぜか？——すでに知られてゐる通り、一九三三年の後半以來、日本のプロレタリア文學運動はかつてない事情のもとにその方向を失ひ、その統一的指導的精神を喪失し去つて行つた。いふまでもなく事情がそこに到るまでにはいろ〳〵な理由が伏在してゐる。すなはち、第一には日本のプロレタリア運動がその主軸に一部の崩解を來たした點、第二には時代の保守的反動的强化の加重、第三には主としてインテリゲンチャ作家を抱擁してゐた作家同盟に眞實のプロレタリア文學を育成させるだけの能力を持たなかつた點等々及び特に第四にはそれまでの日本のプロレタリア運動が、自己の作家的活動の中心的任務を「唯物辯證法のための鬪爭」の一點におき、いはゆる組織活動と創作活動との辨證法的統一を强調して來たのに對して、この問題が本來的にはとるに足りない誤謬であるといふのではないにもかゝはらず、そこで作家たちが時々刻々に變化して行く政治的課題に答へて活動して行くこと、創作活動における主題の積極性を强調すること、その他を强要されることとから次第に自己の創作における

左翼政治主義、現實圖式化、現實機械化の傾向を生み出すと共に、更に批評家の棍棒が恰も作家たちを疲勞と困憊に押しやりさへすればよいかの如き狀態で、官僚的な横行をしはじめたのを極度に作家たちが嫌ひはじめたこと等に依つてをつた。が、勿論かゝる狀態がいつまでも作家をそのまゝに放擲する筈はなく、たまたまソ同盟において、舊ラツプが犯して來た創作方法上の誤謬を再檢討することから新たに提出せられた「社會主義的レアリズム」の提唱が、當時の日本の混亂した狀態に極めて意義深い影響を持ちはじめた時、わが國のプロレタリア文學運動はにはかに新しい文學傳統の合圖を見ることが出來たと共に、こゝでも作家たちが「社會主義的レアリズム」を巡つて文學上の新たな再評價に向ひ、例へばトルストイ、ゾラ、バルザツク、ゴルキイ、ドストイエフスキー等々過去の偉大なるレアリストの研究と相俟つて、その文學に對する決意を「食えない覺悟」で、「男子一生の事業」として眞劍にとつくみはじめるや、ひとは早や「文藝復興」の聲をあげて、いふところの文學建設の新たな旗手となつたのみならず、私はこの「文藝復興」の聲の中での、プロレタリア文學者たちの浮き足立つた部分に、日本のプロレタリア文學の弛緩乃至はその文學的故郷の喪失を感じないわけには行かぬものであつた。

しかも、眞にかゝる文學運動の弛緩乃至はその文學的故郷の喪失こそが、日本の自然主義を藝術の領野に逃げ込ませたと同じ理由、「反動的壓力の強化」によるのではないかと考る時、私は

啄木がそこで「文學者と俗人との交渉」に關する誰よりも切實な意義を考慮した點を最も意味深く味はふことの出來るものである。

○

啄木がどのやうな順序で「文學者」と「俗人」との交渉について考量して行つたかを、では、具體的に見てみよう。「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」の中で彼は述べてゐる。

「田山氏の强味（偉い點）は、氏が、徹頭徹尾、何の躊躇なく、何の煩悶なく、率直に、六體に、『予は文學者なり。』といふ自信を力强く把持してゐるところに存する。――が、其作を讀んだ時に感ずる作者自身に對する私の不滿足は、氏が、――對人生の態度に『批評』といふ事を餘り輕く考へてゐはしないかといふ事である。――氏は人生を『描くべき事實』として取扱ふ事即ち氏自身『文學者なり』といふ自信にあまりに熱心なる爲に、文學者といふ職業を離れたる赤裸々な田山氏自身と人生との關係を不問に付して置くやうな傾きがないかと思ふ――否、確かにあると思ふ。文學と云ふ物が氏の場合に於て、餘りに專門的たものになつてゐはしまいか。普通「人」は實行し且つ觀照しつゝあるものであるが、氏には餘りに其觀照――隔一線の態度が多過ぎはしまいか。私は田山氏と人生との間に、常に一定の距離が保たれてゐるやうな感じを不滿足に思ふ。田山氏は文學を人生に近づかしめた。さうして遠ざからしめた。」

又、その「硝子窓」といふ感想の中では、

「文學生活に對する空虚の感は、果して文壇の劣敗者のみの問題に過ぎないのだらうか。――それは何れにしても、文學の境地と實人生との間に存する間隔は、如何に巧妙なる外科醫の手術を以てしても、遂に縫合することの出來ぬものであつた。假令我々が國と國との間の境界を地圖の上から消して了ふ時はあつても、此の間隔だけは何うする事も出來ない。それあるが爲に、蓋し文學といふものは永久に其の領土を保ち得るのであらう。それは私も認めない譯には行かない。が、又それあるが爲に、特に文學者のみの經驗せねばならぬ深い悲しみといふものがあるのではなからうか。」

更に同じ文章の中で、

「故人二葉亭氏は、身生れて文學者でありながら、人から文學者と言はれる事を嫌つた。坪内博士は嘗てそれを、現在日本に於て、男子の一生を託するに足る程の文學といふものの價値なり努力なりが認められてゐない爲ではなからうか、といふ樣に言はれた事があると記憶する。成程さうであらうと私は思つた。然し唯それだけでは、あの革命的色彩に富んだ文學者の胸中を了解するに何となく不充分に思はれて仕方がなかつた。

又或時、生前其の人に親んでゐた人の一人が、何事によらず自分の爲した事に就いて周圍から

反響を聞く時の滿足な心持といふ事によつて、彼の獨步氏が文學以外の色々の事業に野心を抱いてゐた理由を忖度しようとした事があつた。同じ樣な不滿が、それを讀んだ時にも私の心にあつた。

――實社會と文學的生活との間に置かれた間隔をその儘にして笑つて置かうとするには私はあまりに「俗人」であつた。」と聞く時、私は再び現在の問題にかへつて、かの何處からともなく荒浪のやうに來たり、且つ、今やより暗いもとの靜けさに歸らうとする「文藝復興」の嵐の跡の、日本の文學界における「作家と生活との交渉」について、それを暗鬱に考量してみることの必要を感じないわけには行かぬものだ。

○

實際、あの何處からともなく荒浪のやうに押し高まつて來た「文藝復興」の聲も、今や全く、そのおさまるべき處へ歸つて、もとよりも靜な暗黑にかへらうとしてゐる。

が、それにしても私は一度高まつたあの恐るべき波音を聞いた時、何よりも痛切に自身の思想的涸渇を痛感すると共に、又、われ／＼の作家たちが、そこに何となく氣拔けのした、敵を失つたやうな（戰鬪力の散漫した）一段落のついたやうな心持」を生みつゝ、たゞ性急な心をもつてこの浪に乘り切らうと藻掻く姿を恐れた一人であつた。幾たりともなく又目標もなく續いて馳走

する爲東馬を私は見た。このことは決して私が人の行ひを非難せんがために言ふのではなく、悩かい人もさうであつたし、私もさうであつた如く感ぜられたのだ。殊に私は當時の「文藝復興」の聲を生んだもの――すなはち「社會主義的レアリズム」の提唱を巡つて、これこそ日本のプロレタリア文學を眞に解放するものではないかを考へ、又、慥かにさうに違ひないと人にも語り自らも信じた。少なくとも、今でもこれが最近の數年における日本文學史上の一大事實であり、かつて自然主義が明治の文學史をその以前と以後とに區別したと同じく、昭和の文學史をこれ以前と以後とに劃然たる區別を與へるものではないかとも考へてゐる。

　しかし、それにしても一體「ひとは自分が從來服從して來たところのものに對して、或る反抗を起さねばならぬやうな境地に立到り、その反抗を起した場合に、その反抗が自分の反省（實際的には生活の改善）の第一歩であるといふことを忘れてゐる事が往々にしてあるものである」と啄木も當時に自然主義者達に警告してゐる通り、私は人が文學的高度によつて「文學とは救世濟國の事業だ」「男子の一生をかける事業だ」といひ出した時、にはかに「社會主義的レアリズム」提唱の眞實な主張と、この國の文學運動が開拓しつゝある眞實な世界との間隔に一つの大きな疑惑を持たずには居られなかつたものである。例へば林房雄氏は謂ふ。

「文學的精神とは求道の精神である。やはらかく言へば光をもとめる『あこがれ心』であり、強

くいへば、激烈な反俗的闘志である。更にいへば、救國濟民の事業である。日本の――特に最近の文學者はこのやうな言葉使ひをきらふ。それをきらふ精神がすでによくない。この若年寄氣分がこの上なく日本の文學を小さくした。道を求める修業者であらうとし、藝道の達者であらうとし、俗流に抗して自己と人の心を正しくひらくことを念願とする以上、それが救國濟民の事業でなくてなんであらう。世界の大作家の例をひくまでもない。明治以後の文學史についてみても、文學の名に値する作品を殘した作家たちは、この志を胸にひそめ、明らかに公言もしてゐた。

　文學とはこのやうなものであり、しかもそれが自分にあたへられた天職であると自覺した時、『男子の一生をかける』決意もわき、「食へない覺悟」もおこるのだ、と。

　こゝで林氏の述べてゐる言葉は、すべて尤もな議論であり、私も斯うでなければならないと思つた。僅かに、これほど大膽に、又、誰はゞかるところもなく、日本の文學者の狹量を痛罵し、文學者のもつべき決意に、大きな指示を與へた文章は、かつて日本語で綴られた文章の中にはない筈である。私はだから感心した。感心したといふよりも寧ろ反感に近い氣持で、大きくこれを肯定することが出來た。が、この文章をよんで、それにもかゝはらず、私が直ちにこの決意や、この覺悟に疑惑を持つたといふよりも、林氏において代表せられる、この逞しい文學建設の精神と、實際的に、われ／＼がそれを歴史的な事業として生産しつゝある創造的作業の蓄積との間

に、存する距離とに就て考量した時、一方この高邁な意志的精神にもかゝはらず、他方儼々と退嬰し、弛緩し、あるものを恐れさけようとしてゐるわれ〳〵の態度との間には、やつぱりそこに物足らぬ數々があるやうに考へられたし、寧ろ林氏の宣言を一度大きく肯定した上で、これを深く胸に秘めつゝ、たゞそれを實踐にうつすところに文學の事業の「男子の一生をかける値打」が生れて來るものではないかと考へられてならないのであつた。

實際、文學の事業においてわれ〳〵が「男子の一生をかけ得る値打」は、ひとが自己及び他人の心胸をひらくに足る作品を製作し得た時にのみ、はじめて眞實の値打としてそれが生み出されるものであり、從つてわれ〳〵がよし口では文學の事業に男子の一生をかけるといつても、そこに出來上つた作品がひとの心を開くに足りなければ、何の値打もないことは明らかだと考へられる。とは云へ、勿論だからといつて、われ〳〵が文學の事業を日常の茶飯事と同一視することの、如何に笑ふべきかは今更いふまでもないであらう。眞にこれだからこそ、一度林氏の言葉を大きく肯定し、しかも世の……的志士ともいはれる人々が、その逞しい革新の精神を深く胸に秘めつゝ、たゞ實踐において、人及び社會をひらいたと同じように、文學者も亦その高邁な救國的精神を胸に秘めつゝ、自己の創造的實踐に身と心とを打ちくだかなければならないのではないだらうか。――けだし、つね日頃私はわれ〳〵の文學の故郷――それが人間の非力と支配的現實の暴

力的な壓力との間に存する永遠に一致し得ない間隙を結び合すところに在ることを考へてゐる一人であるが、全く、ひとが眞剣にこの社會と實人生との間に存する間隙（矛盾）を縫合する外科醫の任務に立ち到ることが出來さへすれば、こゝで啄木が故人長谷川二葉亭氏を賞揚した意味、更に獨歩氏が文學者であると共に山林に存する自由にあくがれて北海道における開墾事業を眞剣に夢想した意味及び、北村透谷氏が「人生に相渉るとは何の謂ぞ」において山路愛山氏の俗人的見解を駁撃しようとした意味を理解し得ると共に、更に啄木が「實社會と文學的生活との間におかれた矛盾を笑つておこうとするには私はあまり『俗人』であつた」と述懐するその「俗人」の意味がしつくりとわれ／＼の胸にひらけて來るのを感じることが出來るものだ。

　まことに、私は文學者が「文學者も亦一個の俗人である」と、つねに己れを戒め鞭打つところにのみ、われ／＼が文學を愛するといふ熱烈な求道の道がひらけるものに外ならないと考へる。かつて、エンゲルスがその傾向文學について論じた中で「作家は自分が描いてゐる社會的葛藤の歴史的解決を讀者に押しつけてはならない」と述べてゐるのも、畢竟、われわれの文學者が、自身を「文學者」といふ特別地帶において、往々、現實の解説書を描いたり、社會的葛藤の歴史的解決を讀者に押賣りしたりする態度の見られることを戒めたに外ならないのであつて、これだからこそ啄木が田山花袋を批評し、その俗人としての自己と文學者としての自己との間に一定の距

離乃至は隔一線を引いてゐる點を指摘しつゝ、日本の自然主義文學が眞實な人生から遠ざかつた所以を明示したのも、意義あることゝ考られるのである。

○

兎まれ、われ／＼はつねにわれ／＼が文學者であるといふ、特別な人種である如く考へることを何よりも戒めなければならない。それは何時の時代の文學でも、文學者が自身を文學者なりとの、特別地帶において文學を生産する時、必ずその時代の文學が自滅すること餘儀ない事情に立到らしめられてゐることが、あまり明らかであるからだ。なぜなら、その時代の文學は、作家が「自分の描いてゐる社會的葛藤の歴史的解決を讀者に押しつけようとするか」さもなくば日本の自然主義文學における如く、文學を人生へ近づかしめ、しかも本質的にはそれを人生から遠ざからしめることに外ならないし、この二つの誤謬が同じ一つの原因――文學者が自己を「文學者」なりとする特別席に祭り上げることから起因することはいふまでもないであらう。

けだし、今ふり返つて想ひをこゝに致す時、私は確かにかつて唯物辯證法的創作方法はなやかなりし時代のわれ／＼が、あの時藝術における黨派性を說きつゝ、自身を何の躊躇、何の煩悶もなく「文學者」なる特別席に祭り上げたこととの、如何に無謀だつたかを考へ直さずにはおれないし、今また同じ理由から、（實人生及び實社會と文學的生活との交渉を不問に付するといふ）そし

て、殊に最近において二三の注目すべき作家の生れつゝあるのを見逃し得ないとしても、日本のプロレタリア文學が萎縮し、後退しつゝあるのではないかを思ふ時、如何に反動期の作家を退きしく鞭打つ作家的精神といふことが、「文學者も亦俗人なり」の思想にたち歸つて、自らを反省することに外ならないかを考へずにはゐられぬし、又これを想ふにつけても、あの明治四十二三年代の嵐の中で孜々として自己の文學的生活と俗人との考量にふけつた啄木の逞しさ、その「社會主義者」たることを宣し得るに到つた道に多くの教訓を覺えずには居られぬものだ。

三、三度啄木の短歌について

すでに啄木の短歌については、私は再度に及んでこれを對究して來たが、なほ最近におけるこの國のプロレタリア短歌運動と啄木の短歌におけるその正系の繼承といふ問題に關して、若干思辨するところの在る點を、こゝで追補しておき度い。

一、われ／＼の啄木を敬愛する所以は、その思想の眞實性よりも、その詩歌の眞實性に在るのではないか。

二、啄木の詩歌における觀照主義の吟味、その正系の所在。

二、感情の形態（形象）、矛盾の融合、詩的レアリズムといふこと。

大體、右の如き順序で記述しようと思ふ。

○

一體、これまで啄木の思想については、いろ〳〵のひとがこれを論じ、私もそれと和して來た。そしてそのいろ〳〵の人の中には、決して啄木を誤つた論者も少くはなかつたと考へられるやうに、私の議論も多かれ少なかれの機械的解明がふくまれてゐた如く考へる。特に今から考へて見て、私の最も疑問に考へるのは、われ〳〵の啄木を敬愛する所以が、やつぱり彼の思想の眞實性といふことよりも、彼の詩歌そのものゝ持つ眞實性に在るのではないか、——特に彼の思想の眞實性を賞揚するのあまり、彼の詩歌を眺める場合にも、それに對する明確な批評を持つことなくして、いはゞ思想の眞實性と、詩歌の眞實性とをおきかへて鑑賞するといふやうな傾向があつたのではないかと思ふ。確かにさういふ傾向があつた。すなはち、例へば私に最初に啄木の短歌を見た場合、そこでは彼の思想的到達點と、その詩歌における歴史的制約の關係を述べてゐるのに過ぎないし、又、次の場合は「歌は刹那々々を愛惜する人間の感情の表現」であるといふ啄木の言葉を吟味して、短歌的形式の問題を考察してゐるにすぎない。勿論、このことは決してそれが必ずしも間違ひではないし、特に藝術創造の方法や樣式について具體的に究明しようとした點、

及び、藝術が何か特別な絶對的な觀念すなはち純粹的な美意識や人間性の表現である如く說いて來たブルジョア的美學の根柢に深く食ひ込み得た點乃至は新しい詩作家に正しい實踐的な創作方法の一端を示し得た點では十分役立ち得たこととは考へるが、しかしそれにもかゝはらず前論に於ては未だ彼の短歌の正系を批判的に繼承する意味では甚だ不充分であるといふのは、そこに多分の機械的解明と、彼の詩歌への決定的な批判を下すことから遠ざかり、かへつてその短歌の眞諦をさぐるかはりに、たゞ手際よくそれを彼の思想と結びつけることによつて、歌の眞實性の全貌を探りあてることから身をさけてゐるからだ。けだし、私はこの事實が彼の思想に對する最近の盲目的な傳唱と過大評價との結果であり、且つ、同時にそれこそ彼の短歌そのものへの盲目的な肯定乃至はそれのあまりにも過少な評價から生み出される問題として、當面、重視すべき新問題ではないかと考へてゐるものである。

實際、私はひとがいか程、彼の思想を賞揚しようと、やつぱり啄木が今も我々の胸に生き、眞實彼との時代的な接近を感じさゝれる所以が、その全體としては茫漠たる社會主義思想そのものよりも、彼の詩歌の中の眞實性そのものに在り、それは彼のいふ處の「悲しき玩具」そのものゝ中なる「悲しき眞實」以外にはないと斷言したい。と同時に私は我々の敬愛する啄木が、彼の社會主義思想における明確性にあつたことよりも、實はその數々の歌に殘された眞實性そのものに

あり、從つてその歌あるが故に彼の思想をけみし、且つ彼の高邁なる社會主義思想を改めて尊敬し敬愛し、更に數々の教訓をも求むべき必要の存することを强調してやまないものだ。それは何故か？　いふまでもなくかつて中野重治氏は世のいはゆる盲目どもが彼の眞實な姿を歪曲したままで彼を敬愛して來た事實から、その正當を取り返すためにたゞ急いで彼の思想をのみ檢察したが、實はあの時中野氏が彼の思想をけみしたい欲求を持つに到つた第一の理由も、やつぱり彼の詩歌そのものへの敬愛から生れたことには違ひなからうし、從つて、その思想をけみし、そこに數々の教訓を求むべき意義を見出し得たとすれば、今、我々が彼の短歌を新たに掘返すことの、決してあの「明日の考察」に立ち到つた、彼の思想の銳烈さを拒否する理由には少しもならないばかりか、かくて彼の短歌に新なる評價を求めることとこそ、かへつて、まこと、彼が人生乃至社會の動向に全般的な考察を持ち得たと同樣、彼の思想及び藝術の全般に對する正しい見解を持ち得る所以に外ならないと考へるから――。（注意されよ。私はだからと言つて啄木の思想への評價をくつがへすものではない。）

それにしても、ではわれ〳〵は彼の詩歌から何を學び、何を正しく繼承しなければならないであらうか？

○

先づ、われ／＼は何よりも最初に彼の有名な一句「忙しい生活の間に心に浮んでは消えて行く刹那々々の感じを愛惜する心が人間にある限り、歌といふものは滅びない」と述べてゐる、彼の歌論を思ひ出しておきたい。

「――凡そすべての事は、それが我々にとつて不便を感じさせるやうになつて來た時、我々はその不便な點に對して遠慮なく改造を試みるがよい。またさうするのが本當だ。我々は他の爲に生きてゐるのではない。我々は自身のために生きてゐるのだ。たとへば歌にしてもさうである。我我は既に一種の歌を一行に書き下すことに或不便、或不自然を感じて來た。其處でこれは歌それぞ／＼の調子によつて或歌は二行に或歌は三行にかくことにすればよい。よしそれが歌の調子そのものを破るといはれるにしてからが、その在來の調子それ自身が我々の感じにしつくりそぐはなくなつて來たのであれば、何も遠慮する必要がないのだ。三十一文字といふ制限が不便な場合にはどし／＼字あまりにやるべきである。又歌ふべき内容にしても、これは歌らしくないとか歌にならないとかいふ勝手な拘束を罷めてしまつて、何に限らず歌ひたいと思つた事は自由に歌へばよい。かうしてさへ行けば……假に現在の三十一文字が四十一文字になり、五十一文字になるにしても、兎に角歌といふものは滅びない。さうして我々はそれによつて、その刹那々々の生命を愛惜する心を滿足させることが出來る」と。

けだし、こゝには前篇でも述べた通り彼の詩歌における先驅性と、それにもかゝはらず、ただ靜かな心持で、人及び現實をながめ、且つその意味を彼の人生觀と照合させつゝ、たゞ味はうとする觀照家の態度の蔵されてゐることを見逃すことが出來ないであらう。これは極めて大切である。なぜなら今、われ／＼が彼の詩歌の再吟味を欲する所以も、實はこの觀照的態度に外ならないし、私は今やこの觀照主義を揚棄することによつてのみ、彼の正系を繼承し得る唯一の道がひらけ得ると考へるからだ。

○

こゝに二つ三つ彼の有名な短歌がある。

砂山の砂に腹這ひ
初戀の
いたみを遠くおもひ出ずる日

大といふ字を百あまり
砂に書き
死ぬことをやめて歸り來れり

百姓の多くは酒をやめしといふ
もつと困らば
何をやめるらむ

友も、妻も、かなしと思ふらし――
　病みても猶
　革命のこと口に絶えねば。

やゝ遠きものに思ひし
テロリストの悲しき心も
　近づく日のあり

人がみな
同じ方角を向いて行く。

それを横より見てゐる心。

明らかなやうに、誰でもこれらの歌々をよんで、そこに必ずや同じ方角を向いてゐる啄木の「觀照主義」を見出すとともに、少しも困難をしないであらう。全くこれらの歌々は「刹那々々の感じを愛惜する」啄木の觀照世界を、たゞ記錄的に描寫したものであり、その限り最もよく彼の歌論を實踐してゐる。と同時に、從つてこれらの歌々はその內容における眞實性にも拘らず、それの我々への親しみが、自から極めて非積極的ですらあることを否めないであらう。なぜなら一つの歌を見てみても、其處には假借につかれた東北農民の陰慘な生活を、やるせなく觀照する彼が見られ、又他の歌に於ても、病みて尙病床に手をふり口角を尖らせつゝ革命を論じてゐる彼自身を觀照してゐる外は、この吐き出されたる感情をもつて、自己及び他人の心を開き、この感情を基點として更に新たなる感情を、（立ち上るべき感情を）少しも明示してないからだ。しかし乍ら、凡そ繰返すまでもなく、われ／＼の歌が人間の感情を組織し、それによつて與へられる眞たる精神をモメントとして、更に積極的な感情にまで讀者の胸をひらかねばならないことは、今日の詩作者の常識ともいはるべき問題でなければなるまい。然るに、啄木がこゝで單にその歌を禮贊する感情をもつて歌ひ下げてゐる所は、いふまでもなく時代が彼の創作活動に與へた制約に外ならないとはいへ、自からわれ／＼にとつては必ずや彼のかゝる觀照主義を批判して、何よりも人

間の心をひらく歌、感情に於ける積極面を歌ひ上げねばならないことは自明であらう。

だが、果して、今日の短歌作者において、彼の正系がその「觀照主義」への批判に存することを見極めつゝ、自己の創造的事業にプラスさせうとするひとが幾人あらうか。私は甚だ不幸にして、あまり多くはさういふ人を見ない。否、なる程多くの論者たちは彼の正系を繼ぐことが短歌における在來の形式（定型）を打破し、その內容においても、それが歌らしくないとか、歌にならないとかいふ勝手な拘束から解放して、何に限らず歌ひたいと思ふことを自由に歌へばよいと主張し、いふところの新しい題材を遠慮なくズバリ／＼と歌つてゐる。更に啄木もいふ如く「實人生とは何等の間隔なき心持をもつて歌ふ詩」——「我々に必要な詩」を要求し乍ら、彼が未完成に終つたものを新しい世界觀に於てぐん／＼と切り開らかうとしてゐる。だから勿論我々はこの限りに於て全く啄木を正しく發展せしめ得た功績の仲々に偉大なるを充分に認め乍ら、しかもそこに殘存するプロレタリア短歌の觀照的態度（これこそ短歌性といはるべきもの）については、なほ且つ鋭烈な批判を向けなければならないと考へるものである。

試みに、二三の代表的な短歌（一般的には短詩といふ風に用ひられつゝあるが、私は未だ短詩といふ意味で今日のプロレタリア短歌を理解しかねてゐる）を必要上次にかゝげてみよう。

のぞきこむ鐵門の中に

灰色の鐵合がつゞき
さむさむとぬれてゐる。
僕の目は何を求めてさまよふのか――

×

口にも云へず
文字にも書けぬ
君の心を
僕はぢかに胸へうけとらう。

――渡邊順三「灰色の壞」より――

けだし、この二章に於て今渡邊氏が歌ひつゝある世界を吟味するのに、前者に於ては、雨の日の鐵門の中の灰色の鐵合及びそこをのぞき込む渡邊氏の鐵合と共にさむざむとした姿だ、極めて短かい詩句で全くよくリアルに表現されてゐる。然るにその最後の一句で、氏が「僕の目は何を求めてさまよふのか」と詠嘆した場合、我々はたゞ渡邊氏がかゝる灰色の現實を觀、それを氏の人生觀と照合して、意味深く味つてゐる以外には何も感じられない。われ／＼の詩は「僕は何を求めてさまよふのか」と、斯ういひ切つてしまはずして、例へば渡邊氏が何ものかを求めさま

よつてゐる狀態を、紙面に彫刻しさへすれば、その時藝術は必ずや渡邊氏が意圖する以上の事實を、その紙背から讀者にうつたへて來るに違ひない。この詠嘆が短歌性でなくてはなにか！

次の歌でも、やつぱり渡邊氏は「僕はずかいに胸へうけとらう」と、その口にも云へず、文字にもかけぬ女人の心持を觀照してゐるけれども、一つの姿として、或ひは一つの紙上の彫刻として現實を浮彫し、その仕事の中で、氏が内心に燃やしてゐる火を吐くやうな精神を、讀者に打ちつけるまでに到つてゐない。私はそれを不滿に思ふ。しかもこの不滿は今日のプロレタリア短歌が全體として固持するあまりにも短歌的な缺陷ではないかとも考へてゐる。

こんな時代には
一ぱいの紅茶をのむさへ
考へなければならないといつた言葉が忘れられない。　（矢代　東村）

うまくやれと巡査の友に云はれる程何んにもしない自分をわらふ　（伊澤　信平）

わたしらの生活(くらし)のやうなこのナツパ服
油(マシン)とマステキが赤ぐろくしみこみ

肩もひざも穴だらけだ
今夜、つぎはぎしようと下した電燈の下で
日給の安さをしみじみ考へる　（山田　あき）

父が踏む
土のひびきをわれは愛す、
働きづめの父が足踏を！　（坪野　哲久）

靴あとを
たてによこに
こんどは消しながら
素早く近づく
こさねばならん高い塀へ　（淺野　純一）

凡そこのやうに拾つて行けば、どの歌も成程感慨深く、特にその印象的、スケッチ風な現實描寫にはそれ〴〵によい技術が示されてゐ乍ら、やつぱりそのいづれにも歌を味あふ観照家の態度

と、悪い客観主義的描寫との間に無理が生じ、渡邊氏の場合に見て来たと同じ不滿が、私には感じられるのである。けだし、これでは啄木の「觀照主義」をこそ繼承して居れ、未だ決して批判的に彼を正しくうけついだとはいひ難い。そこで問題は如何して新しい發展を得るかに在るが、以下若干われ〳〵の詩的創造的方法におけるレアリズムの問題に及んでみよう。

○

第一には感情について――「詩人にとつて最大の具は、やはり感情であらう」と郡山弘史氏もいはれてゐる通り、この両者についてわれ〳〵が考へておくことは極めて大切である。氏は述べてゐる。

「僕等は多少にかゝはらず、現實の生活において、おのれの感情をもてあます。もてあますといふことは、おのれの思惟と感情とが、くひ違ひ、抵抗しておのれの生活行動の根柢をゆるがす狀態である。この不安定な矛盾を統一せしめようとする欲求が生じ、あらたな生活行動に移行する。この第二の生活行動が思惟と感情に作用して、おの〳〵を變革するところに、眞への探求の過程がある。僕らはこの間斷なく繼續する交互作用の運動の中から感情がいかに成育されるかの鍵を、先づ把んでおく必要がある。

―感情が變革されてゆくといふ意味は感情なるものが非常に抽象的であるが、客観的現實の

眞に向つてより接近してゆかうとする思惟の發展過程において、その各段階に、思惟と抵抗し、あるひは一致する感情は、各段階ごとに質的にも量的にも異つて行く。これを主體の生活行動から見れば、特定の生活行動の發現には特定の感情が、思惟とゝもに先行し、生活行動によつて變革され、再びつぎの段階に至つて思惟に働きかける。そして、この感情の發展過程は螺旋形を描きながら、思惟の各段階の線と同一の行程をたどつて、漸次に上つてゆく。云々」

いはれる意味はわれ／＼の内部における感情の生成過程についてゞあるが、今私の述べやうとするところは、藝術的表現において、しばしば感情の深さといはれるものが、如何なる形で表現されねばならないかについてゞある。例へばこゝにAなる感情が存在するとする。この感情は決してそれが孤立して存在するといふことは在り得ない。つねにAなる感情はB乃至Cなる感情との相互的な營みにおいてはじめてその存在を可能ならしめるのみならず、特にこの感度の深さ、高さといはれるものが、結局は現實の事象に對する我々の觀察や比較する能力において傳達されることとを忘れてはなるまい。いひかへるなら、たゞ憎い、悲しいと吐き出すのではなく、この憎さが何に對して何より憎いか、この悲しさがどれに對してどれより悲しいかを具象的な言葉で限定される時にのみ、それが形象乃至は存在として、リアルに傳達し得るといふのだ。

しかし乍らこゝでわれ／＼の注意することは、この感情相互の間の矛盾を結び合す紐目、その

ものについてゞあつて、これを空想の緒でつなぐか、乃至は論理の緒でつなぐかによつて、感情そのものゝ傳達の仕方に、二つの樣相――ロマンティックなるとレアリスティックなるとに分れ去ることを留意しなければなるまい。ゾラはこの時、「これを綴るに空想の緒をもつてせず、論理の緒をもつてする。私は如何なる小事でもそのことより論理的に、自然的に又必然的に生ずべき結果があると信ずる」と述べてゐる。このことは全く、詩歌にリアルな感情を欲するわれ〳〵に大切といはなければなるまい。なぜなら、詩人は一つの詩をつくらうとする場合、最初からその詩の中でどんな事件を歌ひ、どんな感情を歌はうかと豫定するよりも（豫定するといふことは既定の概念をつくりあげることなので）如何に感情を具象化するかを工夫することによつて必然に歌ふべき內容も決まり、又、歌はうとする感情に生きた姿を持たしめられると共に、更に之を論理の緒で綴り合せることによつてはじめて歌はれたる詩歌が眞に生彩ある紙背の生命力をも持ち得ることになるからだ。實際このことはわれ〳〵の詩歌における焦迫（謂ふ意味はリアル）の終局である。

　これを要するに、一つの詩歌において、われ〳〵がその中に…的精神をみなぎらすといふことも、要は…的精神といふ既定の精神へ藝術を一致させようとする乃至は嵌めこませようとすることでは決してなく、われ〳〵がしば〳〵くり返して來たところの實人生と實現實との間に存

する矛盾を、如何に詩人がそのみごとな論理的必然の縫目をもつて結び合し得てゐるかによつて、ひとりでに……的精神が作品の中に漲らされてゐなければならない。必要なことは格闘する精神だ。藝術における先どといふことも、詩人がそれを既定の心理をもつて描かうとせず、われ／＼が述べて來た如く、たゞ格闘する精神をもつて感情を具象化することゝ、及び感情と感情との結び合せを、如何に必然的論理的に在らしめるかを工夫することによつてのみ、それを世にもたぐひない強烈な精神の迫力として放射し得る。

だから、私は一體詩人の仕事とは一切の既定の概念を捨て去ることによつて、おのれを白紙にし、たゞあくまでも現實の矛盾を、矛盾が生み出す白熱の感情を、あらゆる事象（感情）の相互的關係において形象化し、之をいふところの論理的必然の縫目でつなぎあはすべく工夫することの以外にはないと考へる。――この場合われ／＼の必然の論理といふことが思惟に於ける辯證法的唯物論の立場に在ることはいふ迄もないし、從つて、われ／＼が眞實リアルな詩を作らうとすればする程、かゝる唯物論的認知の高く要求されることもいふまでもない。

最後に、問題を整理するために私の述べようとすることを概説しておこう。

私の欲する詩は、何よりも具象的でなければならないといふのである。過去においてわれ／＼はあまりにたゞ詩的情操をのみ歌ふことを、恰も詩であるかの如くはき違へて來た。のみなら

すこのはき違への中に、既定の概念を轉質し、いはゆる・・・的精神なるものを押し賣りすることにのみ多くの勞力を勞費した恨みがあつた。しかし、詩が歌はるべき感情の彫刻的具象化をもとめ、しかもその感情の相互的關係を織り合すに鋭烈な論理的必然の綵目によつてなされる時、ひとりでにかゝる詩の中には・・・的精神がみなぎり、いふところの藝術的光芒なるものがその詩の紙背よりわき立つて、ひとを打たずにはおかぬだらう。だからわれ〳〵の仕事は結局、自己を鞭打つて感情を具象化することにつとめ、且つ、これを綴るべき論理的綵目の必然性を工夫することによつてわれ〳〵が詩歌において時代の眞實を歌ふ方法がこれ以外にはないであらうところをで考へることに在る。けだし、こゝに到つてはじめてわれ〳〵の短歌に久しく殘存し來たつた觀照主義を揚棄することも出來るであらうし、それに成功することこそ、まことに啄木の正系を、眞に正系として繼承し得るに外ならないと考へられる。

尙最近私はしばしばひとが「短歌的レアリズム」云々といふ言葉を用ひつゝあることには、反對の意見を持つ一人だ。なぜならこゝには現在短歌の問題を依然として短歌の範圍內で解決しようとする間違つた意圖があり、かつてプロレタリア短歌が詩への解消を目圖した當時の正しさを全く消滅させようとする危險を感じさせられるから。と同樣に、我々が啄木の短歌を繼承するといふ問題も、若し歌人たちがそれを短歌の範圍內で解決しようとする意圖を幾分でも持續するなら

決して之が可能でないことを強調し、且つ、歌人たちが、今迄に述べて來た如き現代詩の問題を考量することによつてのみ啄木そのものゝ正系を繼承し得ることを斷言したい。

こゝに稿を終るにあたつて、私はこれまで若干あたり散じた感あつたプロレタリア歌人の諸氏に、その非禮をお詫びすると共に、私の眞意が何よりもわれ〳〵の新しい詩歌建設を欲求して止まないために外ならなかつたことを附言し乍ら諒をこふ次第である。

版　所

昭和九年七月十六日印刷
昭和九年七月二十日發行

〔石川啄木の研究〕
定價一圓八十錢

著者　遠地輝武

發行者　山本三生
東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者　早坂善太郎
東京市牛込區榎町七番地

發兌　改造社
東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替口座八四〇二三番
電話芝(43)自一一二一番 至一一二四番

(長谷部製本)

(日清印刷株式會社印刷)